

# コラボストーリーシ リーズ

水岸薫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

その名の通り、私のオリジナルストーリーとのコラボ作品です（中氏はその相手に許可をもらってから書いている作品があります）。どうかご理解お願いします。

# 目次

『閃乱カグラ 忍たちの生き様』編	
『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第一	1
話	
『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第二	21
話	
『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第三	45
話	
『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第四	71
話	
『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第五	92
話	
『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第六	
話	
『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第七	114
話	
『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第七	135
話―前編	
『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第七	146
話―後編	
『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第	169
式章 第一話『転送』	
『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第	180
式章 第二話『不思議』	
『侵略！ パンツァー娘』編	
『侵略！ パンツァー娘』編 第一話	186
『何か知らないカ？』	
『侵略！ パンツァー娘』編 第二話	



『Detective group

『μs』編 第三話『犯人からの問題』

362

『Detective group

『μs』編 第四話『突然の急展開』

369

『Detective group

『μs』編 第五話『クリスマス集合』

391

『Detective group

『μs』編 第六話『1年による事件(発

生編)』

397

『Detective group

『μs』編 第六話『1年による事件(整

理編)』

403

『Detective group

『μs』編 第六話『1年による事件(解

決編)』

409

『Detective group

『μs』編 第七話『3年による事件(事

件発生編)』

413

『Detective group

『μs』編 第七話『3年による事件(整

理編)』

419

『Detective group

『μs』編 第七話『3年による事件(解

決編)』—— 424

『Detective group

μs』編 第八話 『2年による事件(事

件発生編)』—— 432

『Detective group

μs』編 第八話 『2年による事件(整

理編)』—— 438

『Detective group

μs』編 第八話 『2年による事件(解

決編)』—— 442

『Detective group

μs』編 第九話 『事件の終わり』

449

『Detective group

μs』編 第十話 『名探偵ミューズ&

奇跡VS犯罪組織『JJ』 大特別!

今回限り最強の探偵団VS最強の犯罪組

織との戦い。危険な爆弾をめぐる大バト

ル!! A』—— 452

『Detective group

μs』編 第十一話 『名探偵ミューズ

&奇跡VS犯罪組織『JJ』 大特別!

今回限り最強の探偵団VS最強の犯罪

組織との戦い。危険な爆弾をめぐる大バ

トル!! B』—— 458

『Detective group

μ×s』編 第十二話 『名探偵ミユース &奇跡VS犯罪組織『JJ』 大特別！ 今回限り最強の探偵団VS最強の犯罪 組織との戦い。危険な爆弾をめぐる大バ トル!!C』	468	『出会い、時には知り合い編』——	490
『名探偵コナン〜新一の妹〜』編		『小さくて可愛い織斑一夏』編	
『名探偵コナン〜新一の妹〜編』プロ ローグ『珍等師学園都市、驚き事件 福引 券編』	477	『小さくて可愛い織斑一夏 編』第1話	
『名探偵コナン〜新一の妹〜編』第1話		『小さくて可愛い織斑一夏 編』第2話	498
『珍等師学園都市、驚き事件 学園の探偵 編』	480	『小さくて可愛い織斑一夏 編』第3話	505
『名探偵コナン〜新一の妹〜編』第2話		『小さくて可愛い織斑一夏 編』第4話	515
		『小さくて可愛い織斑一夏 編』第5話	523
		『小さくて可愛い織斑一夏 編』第6話	543





『オリジナルクロス大ストーリー』編

第1話 バーベキュー編 前編 | 726

『オリジナルクロス大ストーリー』編

第2話 バーベキュー編 中編 | 736

『オリジナルクロス大ストーリー』編

第3話 バーベキュー編 後編 | 756



『閃乱カグラ 忍たちの生き様』編

『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第一話

2434年、地球と月の真ん中にある軌道上の建造物。国際時空管理局（通称：TWM S）のある部屋。ここは石川たちの組織『奇跡』の部屋で、今はみんな自由行動をしている。

そんな中、石川は机にある写真を見ながらポケーとしている。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

それを見た祝福音は、勇樹に向けて言う。彼は「ん、オレ？」と答える。

「そうだよ、この写真を見てポケーとしていたけど。この写真に写っている人たちって誰？」

「この写真……ああ、これか」

福音の言っている写真に石川はその写真を手にすると「話をするからみんなを呼んできてもいいかな？」と言う。

.....

「・・・て、ことがあつたんだ」

「あの時は驚いたね」

「そうだな、ブン・ボーグの巨大メカを持ち上げたからな」

「でも、飛鳥さんたちの力もすごかったわ」

石川、太田、暗山、佐々木は福音たちに話をする。彼女たちは「へえー」と、彼らの話に興味心身している。

「ボク達が知らないところで・・・結構すごいことがあったんだな」

中武は彼らの話を言うと、百合子が「そうですね、わたしも知りませんでした」と、驚いているかのように答える。

すると、福音が。

「・・・たい」

何か言ったため、みんなは「？」と頭に？マークを浮かばせながら見ていると。

「今すぐにも行きたーい!!!!!!」

突然叫んだためみんなは後ろにこけるのであった。

「何、そこに福音行きたいいきたい!!」

「そ、そうは言ったものの福音ちゃん」

「お、太田の言いたいことは分かるぜ。時空移動で行こうとしても無理なんだぜ」

「そうね、伊江の言った通り。仕事以外で行くのはだめ。もしそれしたら司令官が私たちにお仕置きされるのよ」

太田、暗山、佐々木はそう言っていると石川は「そうでもないよ」と言ってきた。

「ほら、石川も賛成しているぞ。いくらなんでもいきなり行く・・・へ?」

暗山は石川にどうしていると言っているが、「そうでもない」と言っただけのため彼女たちは目を丸くすると彼はこう答えた。

「今司令官が有給休暇を出してきたんだ。しかも一ヶ月ほどなんだ。だから今から旅行

に行こうとしても大丈夫！」

それを聞いたみんなは「よっしやあー!!!」と、特急で出かける準備をし始めた。

.....

「時空移動機異常なし、変圧器もシステムも大丈夫だな。みんな、準備はいいか！」

勇樹の声にみんなは「大丈夫！」と答えると、彼は「じゃあ行くぞ！」と言うとレバーを引く。

すると彼が乗っている専用の乗り物、奇跡バギーの前方から時空を超える特殊空間の扉が開くと同時に彼はアクセルを一気に踏み込むと穴に入り込む、やがて姿が消えたと同時に扉が閉じる。

.....

2014年地球の東京都の浅草、そこに佐介たちは光牙たちと出会っている。

「佐介、その勇樹たちっていったい誰だ？」

「うん、国際時空なんかの一人だね。飛鳥ちゃんの半蔵様を守ろうとやってきたんだよ」「でも、途中でブン・ボーグの彼女たちに出会ってやられかけたんですね」

「ほう、オレ達よりも悪忍がいたとはな」

佐介は、光牙と紫苑そして相馬と話している。飛鳥たちは焰たち、雪泉たち、そして雅緋たちと買い物をしている。

「でも、一度会ったみたいですね。その勇樹さんたちに」

「ああ、オレもだ。どんな奴かは知らないがな」

「ふっ、確かに。佐介が言っている勇樹は少し気になるな」



3人がそう言いながら飲み物を飲んだ瞬間、突然。

ドガァン  
!!!!!!

突然彼らの目の前で何かが爆発すると同時に、謎の乗り物が現れた。その音を聞いたとたん。

「ぶっ!! な、なんだこれは?!!」

「つつ・・・! の、乗り物?!!」

「にしては忍びではないなそれにしても大きいな」

「あれ・・・今の気配はもしかして・・・!」

3人は驚いてみると、ハッチが開くとそこから黒いおかつぱの青年が出てきた。

「いででで、何とかついた」

それに続くかのように2人の男女が出てくる。

「おい石川、最近この機械の調子おかしくないか？」

「ボクもだよ勇樹君、いったいどうしたんだよ」

それを聞いたに彼は「ご、ごめんな」と言いながら外に出てあたりを見渡す。

それを見た3人は「だれだこいつ？」と目を丸くしてジト目で見ている。だが、佐介はそれを見た瞬間。

「勇樹さん、もしかして勇樹さん!!？」

「この声は・・・佐介じゃないか!!」

突然の再開に二人は喜びを隠せないのか、触れ合っていると飛鳥たちがやってきた。

「お待ちせ佐介君・・あれ、勇樹君?!」

「太田さんに暗山さんも」

「佐々木もどうしてここに?!」

飛鳥、斑鳩、葛城も驚きを隠せないのか、太田たちに向けて言うとなおも「あれ?!」と驚くのであった。

.....

「へえ、じゃあここにやってきたのは旅行をしに来たんだ」

「そうです葛城さん、佐介さんたちに会いたいと福音が言っていたので。有給休暇を取ってから急いできましたんです」

佐介たちは、石川たちと一緒に近くのカフェへと行くと。そこで彼らの話をしている。

すると太田が「そうだ、紹介するよ」と中忒達に向けて説明し始めた。

「この人たちはボクたちの先輩と同級生なんだ。同じ学生んだけど同じ組織の一員なんだ」

そう言う葛城が「へえ、そうなんだ」と答えると中忒が「失礼だな」とつぶやいた。すると、斑鳩は何か気付いたのか「あら」とこんなことを言い出した。

「勇樹さん、なんでわたくしたちから眼をそらしているのですか？」

それを聞いたみんなは一齐に石川を見ると、彼の視線は何故か未来を見つめている。それを見た太田たちは「ああ、そうか」と一齐に納得する。

そして太田は「あの、斑鳩さん。実は」と何かを言おうとした瞬間、突然。

ドガアン  
!!!!!!

突然彼らの目の前で何かが爆発すると同時に、謎のメカが現れた。それを見たみんなは。

「な、なんだありや!?!」

「磁石やな・・・にしても変な姿やな」

「そういう場合じゃないぞ、なんじゃあれは!!?!」

「それよりもかつこ悪いね、そしてダサイ」

「両備も同じよそれは」

物凄い批評でメカはもう心が折れそうになっているが、石川たちは「あれは、ブン・ボーグのメカだ!!」と驚きながら答える。

すると、メカの角から4人の少女が現れる。

「おうおうおう、こいつらもここにいたのか」

「なんでお前らがいるんだ?! てか、それはこっちのセリフだけどね」

沙市音の言葉に石川は突っ込みながら言う。円が「それはですね」とこう答えた。

「わたくしの計算によると、先にあなた方より佐介さんを倒したほうが早いと計算しましたわ」

「で、あたしたちはこの巨大メカであんたたちをやっつけんのよ!!」

「か、覚悟してください!!!」

円、白井、双味の言葉に石川たちは「そうはさせるかよ!」と、武器を出すと同時に飛鳥たちも「私たちも手伝うよ!」と武器を手にするると同時に戦う構えをする。だが。

「チャンスだ、円やるんだ!!」

「はい『デンジパルス』の最大の攻撃、ブキヨセール、スイッチオン!!」

沙市音は円に向けて言うと、彼女はポケットからスイッチを出してポチッとボタンを押すと、両手頭の磁石が突然作動すると彼らの持つている武器が突然磁石に吸い寄せられていく。

「な、なんだ?!」

「あたしたちの武器が」

「あの磁石に引き寄せられていきますわ!」

突然の事態にみんなは驚いていると沙市音はこう言った。

「ははは、驚くのも当たりまえだ。このメカの磁石は、武器だと思いう物であればなんでも寄せ付ける特殊な磁石だ！」

沙市音はそう言うと言井が「円、ジャンジャン上げなさい！」と言つてくると、彼女は「了解しましたわ!!」と言いながらも一度スイッチを押すが・・・。

バキツと、何かが壊れる音が響いた。それ聞いたブン・ボーグはりモコンを見てみると、あまりモコンが真つ二つで使い物にならないほど壊れている。そして数秒後……。

チュドーン!! バゴー、バゴーン!! ドガン!!

メカはばらばらに壊れて大爆発したのであった。



ところがここでアクセシブメントが発生、今回作ったメカの設計上なのかいつもの爆発より威力が強くみんなが吹き飛ばされそうだった。飛鳥たちは急いで勇樹たちを守ろうと飛んで彼らを守ったが。

「しまっ．．うわあ!!!」

「勇樹君?!」

勇樹だけ、逃げ遅れたのか爆発の衝撃に巻き込まれてしまいどこかに飛ばされてしまった。

それと同時に、両奈に変わった形をした道具が当たったのであった。

.....

「ど、どうしよう勇樹君が．．!!」

「勇樹さんが?!」

「おい・・・佐介だっけ？ どうすればいいんだ?!」

「そう言いますが、あの手裏剣もないですしどうやって探しましょう・・・」

太田たちはどうやって探すか慌てながら話をしていくと、百合子が「そうだ!」と、背中に背負っているカバンを下すとある物を出してきた。

それはどこにでもあるカメラだが形が四角く数字みたいなのがっているのが特徴だ。

「百合子君、それは一体?」

幹子は百合子に向けて言うと彼女は「これは『メカコピー』と言う道具です! もし勇樹君がこの世界のどこかにいるとしたらこの奇跡バギーで行けるはずですよ!!」と答える。

それを聞いた太田たちは「それか!」と一斉に答えるが、飛鳥たちは「なんですかそれ?」と頭を傾げるが、百合子はさっそく「ではいきます!」とバギーをスキャンし始めた。

スキャンした機械は、スイッチを押して数字を押し他の所へと向けてスイッチを押した瞬間、色違いのバギーが4台ほど出てきた!!

「すごっ!! それどういう原理なんだ!?!」

「今は説明している時間はありません、急いで探しましょう!」

百合子がそう言っていると突然「そうだね、僕も同意する」と冷静に答える人が1名いた。

「あれ、だれか冷静に答えたね。柳生さんですか?」

「いや、オレじゃない」

「え、でもさつき柳生さんみたいに冷静に……」

太田がそう言っていると、突然両備が「ちよっと、両奈どうしたの?!」と驚くのであった。みんなもなにがあつたのか見てみると両奈がいたのであった。

「……両奈君がどうしたんだ?」

幹子は何があつたのか両備に聞いてみると、両奈は普段物凄くドMで、ドSの両奈とは性格があべこべである。だが今の両奈は……。

変態の目線ではなく真剣な目線、一人称が「両奈ちゃん」ではなく「ボク」、そして見ただけで性格おかしいのは髪型がふわふわしたシヨートヘアーではなくピシツとしたシヨートヘアーになっている。

それを聞いた幹子たちは、もしかしてと何か気付いたのかあたりを探してみると、変わった形をしたステッキを見つけた。

「あー、これか」

「それはなんだ？」

暗山が手にしている道具に相馬は聞いてみると、彼女は「これか？」と道具の説明を始めた。

「これは『あべこべ化機（新型）』と言う道具でな、この機械であべこべ濃度と言うのを設定してから何かにたたかれたものは、何かがあべこべになるんだ。例えば消せば消すほど文字が消える消しゴムが消せば消すほど黒くなるっという風なものだ」

それを聞いた相馬は「そうか、それで両奈は・・・」とハンマーを見て言うが、暗山が「だけど、これ調子がおかしいんだよな。機械が壊れているのかあべこべ濃度が故障で、あの両奈が当たったのはちょうど濃度が濃かっただろうな」と答える。

「じゃあ、改めてだけどバギーが5台ある、僕たちは飛鳥さんたちと佐介さんたちと一緒に

にバギーに乗って急いで探しましょう」

それを聞いた葛城は「じゃあだれがどのバギーに乗るんだ？」と答えると太田が「それじゃあ……」とある事を話した。

みんなは急いでバギーに乗ると石川がいるところへと移動していく、佐介たちが乗っているバギーは東へ、相馬たちが乗っているバギーは南、光牙たちが乗っているバギーは西、そして紫苑たちが乗っているバギーは北へ探すことになった。

果たして石川はどこに行ったのか……そしてブン・ボーグはいったい何の作戦でこうなったのか……?!

## 『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第二話

飛鳥たちはここから数百キロメートル先にある、アメリカ大陸へと行くと近くの森にバギーを隠した。

しかしここはアメリカ、斑鳩たちは英語は話せるが長くは話せないのが弱点、そこで彼女たちとともに行く事になった暗山とアレンと共に移動している。

「しかし、もうアメリカンだな」

「ああ、さすがアメリカだ。数分待てばもうアメリカだな」

伊江とアレンはある場所に立ちながら呟く、それもそのはず。彼女たちがいるところはなんとアメリカで一番古い遊園地と言われている『ルナ・パーク』にいたのである。

ちなみに、なんでここに2人はいると言うのかと言うと、理由は簡単。

「伊江、例の時間まではあとどれくらいだ？」

「あとは・・・2時間だな。時間は・・・」

「ここで怠け（るな）しないで（ください）  
!!!」

突然の大声に彼女たちは「うわあ!!」と驚きながらコケる。

「伊江、アレン。アタイたちは勇樹を探しにここまで来たんだ、ここで怠けている暇はないぜ」

「い、いや。もしかしたらあいつはここにいるのじゃないかなあ？　と行ってきたんだ。」

なあ、アレンさん？」

「あ、ああ。そうだな。私もそう思っていたんだ」

伊江とアレンは鵜から話をそらそうとしているが夜桜が「嘘をついたらいけません」と彼女たちに睨みつける。

すると佐介が「あ、あの人は」と声をしたためみんなは何かと見てみると、人ごみの



中に一名だけ彼らが見たことある人物がいた。それもそのはず、その人はブン・ボーグの一名摸野沙市音で会った。

「おまつ、どうしてここにいるんだ?!」

「ふん、どうせあの勇樹を探しに来たんだろ? そう来るかと思って先に来たんだ」

それを聞いた飛鳥は「じゃあ、勇樹君はどこにいるか知っているの?!」と言うと彼女は。

「いや、さすがにそこまでオレは知らないな」

と、あっさりと答えてしまったためみんなは『ズゴツ!!』とコケるのであった。

しかし沙市音は何かを待っていたのか、にやりと笑うと「しかし、ここで会うのはちようどよかった。ここでお前らをやっつけてやる!!」と、背中から体験を出してきた。

本来ならば飛鳥たちも戦いたいのが、先ほどのメカで武器はどこかに飛ばされてしまったためどうしようもなかった……だが。

「ふ、どうやらあれを使う時が来たようだな・・・伊江!!」

「おう、任しとけ! 飛鳥、佐介。みんなはちよつと待っておけ!!」

アレンと伊江はポケットからカードを取り出すと、それを右ポケットに当てる。すると服が黄色と赤色の光に包まれると二人の服装は普段着から別の服装へと変わると彼女たちの手にはある物がつけられている。

伊江はスピーカーのような機械をグローブのようにつけている。アレンは右手に手持ちサイズの大きさをした巻物を手にしている。

そして、2人は構えると『勝負(だ)!!!』と駆け出すと、沙市音も駆け出した。

キンツ!!! カンツ!!

「おらあ!!!」

「っ!! 伊江、私は下から!!!」

「おう、わかったぜ!!」

沙市音の攻撃を伊江はスピーカーで防ぐと、アレンが彼女の前を通ると巻物を出すと突然巻物が刀に変形した。

だが、沙市音は「うらあ!!」と彼女を足で蹴るが、彼女はとつさに防いだため後ろに転んだだけで済んだ。だが、伊江は勢いよく体験を跳ね返す。

そして「行くぞ、暗山伊江流・秘伝技『音弾』!!」と、スピーカーを彼女に向けて、とんでもない高音が彼女に当たると、沙市音は後ろに飛んで行った。

「つと、アレン大丈夫か?!」

彼女は技を終えると、急いでアレンのところへと駆け付けると彼女は「あ、ああ。大丈夫だ」と腕をさすりながら答える。

すると、沙市音が「いてて、なかなかやるじゃないか」と言うとき彼女はとんでもないことを言う。

「だが、お前たちはオレのとおっておきを出す、そしたらお前たちは終わりだ!!」

それを聞いたみんなは「?!」と驚くと、彼女はある物を出そうとするが・・・「あ、あ

れ？ あれは」と、何かを探している。

みんなは何だろうとジト目で見ていると、彼女は何かを見つけたのか「あつた」とりモコンを出した。

「さあ、巨大メカよ、ここに来い!!!」

そして彼女はスイッチを押した瞬間、爆発とともにいろんな武器を手にした巨大メカが彼女の後ろに現れた。そしてそれを狙っていたかのように、ロケットからマジックハンドが出てくると沙市音をつかむと同時に中に入れる。

『今回は、遊園地で有名なアトラクションの一つ。回転ゴンドラ型巨大ロボット『ウルトラハンドメカ』だ!!』

それと同時に、とげ付き鉄球が飛鳥たちに攻撃をしようとした瞬間。伊江が「させるか!!」と、スピーカーから高音を放って攻撃を避けた。

「こうなったら、アレン。バギーを呼ぶぞ!! オレ達は後からくる!」

「わかった、葛城、夜桜、佐介。急いでいくぞ!!」

3人は急いでバギーがあるところへと走っていくとC型のハンドが伸びて彼をつかもうとしたため、伊江が「これでも食らえ!!」と音波を放つとメカは後ろに倒れた。

それを見計らって、彼女は急いで「飛鳥、佐介さん、紫、日影、急いでいくぞ!!」とアレンがいるところへと走っていく。

.....

バギーがあるところへと彼らは来ると、急いで乗り込んで操縦席に佐介とアレンが乗り込んだ。

「アレンさん、どうやってメカを呼ぶんですか？　ここに来るとしても・・・」

「ふふ、心配するな佐介。この乗り物は勇樹が作った特製品でな、こんなのもあるんだ!!」

アレンはそう言いながら虫眼鏡のスイッチを押した。

2434年の『奇跡』の奥にある『メカ製作所』の中で、巨大な何かがある台に立っており。何かに受信したのか突然メカは爆発すると同時に黒い穴へと入っていく。

そして、2017年のアメリカ。奇跡バギーの目の前で大爆発が起こると同時に白い穴が出てきて巨大メカが現れた。

メカは巨大な大砲型だがカラフルなのが特徴で、4輪の車輪がついている。

「な、なんですか?!」

「おお、大きな大砲やな」

「いや、そこじゃないだろ日影?!」

佐介、日影、葛城がそう言っていると暗山が「捕まれよ!」とレバーを勢いよく引いた。すると、バギーが突然飛び上がると同時に背中からバギーが入り込んだ。

そして、バギーが定位置に留まると、操縦席についている画面が『合体完了』と表示された。

「今回のメカは、驚くべき技を持つ素晴らしい大砲型ロボット、『サーカスメカ』だ!!」

そう言うと、目の前にウルトラハンドメカが現れた。

「む、現れたか。さて佐介、私たちの力を見せてみるか!!」

「はい、ですが大丈夫ですか? 相手は手の数が多いですけど」

「ふふふ、佐介よ。これは勇樹が作ったメカだ、相手はどんな攻撃でやっているかわからないがオレ達の方が強いぜ!!!」

伊江はそう言いながらレバーを引くと、メカは前進してウルトラハンドに体当たりし

た!!

「よっしや、やるじゃん!!」

「さすがじゃ!」

「す、すごい……」

葛城、夜桜、紫は今の技にお悪露しているが、ウルトラハンドメカのスピーカーが突然強力な音波を放つと同時にメカは後ろに進んでいく。

「うわっ!! い、伊江ちゃんブレーキ!!」

「えっと、どれだ……!? あった!!」

飛鳥の指示に暗山はあわててレバーを引くと、メカは急停止してその場で止まった。



「と、止まりました・・・」

「あ、ああ。そうだな」

佐介とアレンは頭を押さえながら椅子に座ると、飛鳥が「じゃあこつちから反撃しよう！」と言いながらレバーを引くが、メカはうんともすんとも動かなくなってしまった。

「あ、あれ？ どうしたんだろう？」

飛鳥は目を丸くしながら椅子に座ると、伊江が「こ、これつてもしかして・・・故障だ!!」と、突然慌てると同時に工具箱を取り出した。

「な、なにしている？」

「工具を出して、バギーを修理するの？」

飛鳥と葛城は不思議そうに伊江に言うのと、彼女は「修理だ、このバギーは時々このように故障するから修理しないといけないんだ!!」と急いで修理をし始めた。

そうしていると、前からメカがやってきて攻撃をしようとしてきている。

「仕方ない、佐介。伊江が修理している間あのメカを」

「わかりました！」

アレンは佐介と一緒にメカから出ると、道具でメカない攻撃を始めた。佐介は武器がない事なので、バギーに積んでいるなぎなたを出して彼に渡した。

「行くぞー！ 分身の術!!!」

アレンは巻物を加えて忍法を唱えると、彼女は突然数十名に分身してメカに攻撃した。

「はあ!!!」

佐介はなぎなたでアレンの手助けをすると同時に、メカの足に攻撃する。だが相手は

佐介たちが戦っている忍者や妖怪ではなくロボットなのでメカは無傷だ。

アレンも能力で攻撃しているが、彼女の能力はメカに当たるもののメカの足から電気がばらまいたためまったく役立たない。

『ふふふ、これでオレに勝ったと思うかあ!?!』

すると、ハンドが二人をつかんだ瞬間。アレンの分身が解けてしまった。

「うぐっ!!」

「アレンさん!!」

アレンはつかまれたことに驚いたのか、顔を歪ませた。

『なはは、佐介とアレン。今回はここで終わりだ!!!』

そして彼女はそう言う。メカの胴体から巨大な光線機を出して二人に攻撃しよう

とする……だが。

「秘伝忍法・叫音波!!」

「秘伝忍法・電撃ポンポン!!!」

突然音と電気がメカに当たると、内部から『ぎやぎやぎやぎや?!!!』と沙市音の音がすると同時に、メカのハンドが開いたため2人はその場から離れて地面に着く。

「い、今のは……っ!」

「佐介! 大丈夫か?!」

アレンは佐介が腕を抑え込んだことに彼女は彼に向けて言う。佐介は「だ、大丈夫です。少し腕が痛んだだけです」と答えた。

「そうか、それにしても今のは……」

アレンは今の技に見覚えあるのか、あたりを見渡しているとある人物が現れた。それは……。

「ハイ!! YOU達始めて合うでござる!!」

「大丈夫みんな?」

金髪のロングヘアをしたチアガール少女と黒髪のアスリートをしたクール少女じよがやってきた。佐介とアレンは「は、はあ……」と目を丸くして答える。

すると、ウルトラハンドメカから『おのれえ……よくもじやなしたな!!!』と声が入ると同時に、とげ付き鉄球のハンドが伸びて彼女に当たろうとする。

「いかん、おいそこの二人。急いで逃げるんだ!!」

アレンは慌てて金髪と黒髪の方によけるように言ったが、彼女は「なんの、拙者はこれぐらい簡単によけるでござる!!」と、答える。

その瞬間、彼女の姿が消えると同時にメカの足の一部あら爆発がすると同時に、メカは後ろに倒れてしまった。その影響なのか中から『どわあ?!』と沙市音の驚く声がするのであった。

「す、すごい・・・佐介今の少女は・・・」

「はい、もしかしたら光牙くんが知っている・・・」

アレンと佐介は目を丸くしながら話していると、サーカスメカから『アレン、佐介。メカの修理はできたぞ!』と声がすると同時に、右ボウシの一部が動くと同時にハンドが出てきた。

二人はそれに捕まると、ハンドはボウシの中に入ると2人は操縦席へと付いた。

「アレン、佐介。ありがとうな。ここからはアタイたちがやるぜ!!」

「本物の・・・ロボットは、やったこと・・・ありませんが、ゲームでならやったことあると思います・・・!!」

葛城と紫は、メカの操縦席についているレバーを握ると、メカは起動したのかエンジン音が響いた。

.....

「これでも・・・喰らってください・・・!!」

紫はレバーを引くと、メカの胴体についている大砲からロープが出てきてメカに絡まろうとするが・・・。

突然ウルトラハンドメカの下半身が分離すると同時に、そこからブースターが出てきて空を飛び始めた・・・?!

「ええ!?!」

「ろ、ロボットが空を飛んだ!!？」

飛鳥と葛城は驚きながら見ていると、ウルトラハンドメカから『ははは！　こんな時にあろうかとジェットエンジンを付けたんだぜ!!』と声がある。

しかし、伊江は何か予測していたのか「ふふふ、これだったらどうだ!!!」と、レバーを引くと。突然メカの車輪がプロペラへと変わると同時に空を飛び始めた・・・?!

「ふふふ、このサーカスメカをなめるなよ!!!」

伊江はそう言いながらレバーを再び引くと、メカは再びウルトラハンドにアタックするが。相手のメカはそれをよけてとげ付き鉄球で攻撃してきた。

しかし、紫が「ひいっ!!」と怯えながらレバーを動かすと、サーカスメカの大砲から白い玉が放たれて鉄球に当たると、球から無数の粉が出てきたため、2体のメカは目の前の姿が見えなくなってしまった。

「しまった。どうしようー！」



伊江は慌てると突然外から「HEY、ちよつといいでござる?」と「私から話があるけど」と声がしたため。みんなは「?」と頭に?マークを浮かばせながら外を見てみると、先ほどの2人がメカに乗っている?!

「て、おまえたちは・・!!!」

「あの時僕たちを助けてくれた!!!」

アレンと佐介は驚いていると、彼女は中に入って「どうもでござる」「おじやまするわ」とあいさつをする。

「初めてでござるが。拙者は、私立舞扇大学付属高校の吉光でござる!」

「私はA・R・C・Angelsの椿よ」

それを聞いた瞬間、佐介は「あ、やっぱり光牙くんの言っていた子ってもしかし

て……。」と小さくつぶやいた。

すると、目の前から『ど、どこに行っただ?!』と声がするため、みんなはバツと振り向くが。画面は粉まみれなので前に何が映っているのかわからない。

「どないしよ、これじゃあ前が見えへんな」

日影は画面を見ながら無表情で言うと、吉光と椿が「Oh、それだったら拙者にいる方法があるでござる」「これならいけると思うわ」と言うと、アレンと伊江は「それはなんだ!？」と一斉に答えると、彼女はこういった。

.....

サーカスメカからアレンと伊江が出てくると、二人はメカに向けておもりがついたロープを投げる。

ロープがメカの腕に絡みつくことを確認すると、二人は首を縦に振ると同時に、アレンはメカに乗り込んで伊江は……。

「紫、急いで動かしてくれ!!」

伊江はメカに向けて言うと、紫は「は、はい・・・」と小さく答えながらレバーを引くと、メカは突然時計回りへと回転し始めた!!

「うわっ!　これは来るな・・・!」

「っ・・・やばいな!!!」

アレンと伊江は、つかめる所につかんでいるのが限界なのか。身動きが取れないほどのGが加わっている。

すると、ウルトラハンドメカはロープに絡んでいるのか回転すると同時に後ろに引つ張られていく。

それを狙っていたのか、伊江が「いまだ!!」と叫ぶと、メカが突然止まると同時にロープがちぎれて、ウルトラハンドメカは空に飛ばされた。

それを見計らっていたのか、アレンが「吉光、樁。今がチャンスだ!!」と叫ぶと、2人がメカから飛び出た。

「イエーイ!! これをくらうでござる!!」

「これをくらったら、イチコロよ!!」

そして、吉光はポンポンに電気をためて、椿はスピーカーの音量を最大にすると同時にメカに向けてこう放った。

「秘伝忍法・プラズマパンチ!!!」

「秘伝忍法・殴音波!!」

ポンポンから水色の電気が放ち、強力な音波がメカに当たった瞬間、メカから煙が出てくると同時に中から『シビレレレ〜!!!』と沙市音の音がすると同時に、メカは。

チュドーン、チュドーン!! バゴーン!! と大爆発するのであった。

すると、メカの中から飛鳥たちの武器が出てきたため、彼女たちは「ああ!! 私たちの!!」と言ってきたため、伊江が「任せとけ!」と急いで飛鳥たちの武器を手にすると、サーカスメカに戻っていく。

.....

「そうでござったか・・・その勇樹は拙者見てないぜござるな」

「私もね、この人あまり見かけないわ」

伊江たちは勇樹を見ていないか吉光と椿に聞いてみたところ、彼女はどうかやら見えないことを言ったため2人は「そうか・・・」と落ち込んだ。

しかし吉光は何か思い出したのか「そうでござる、そう言えば美母が中国にいて。そこでその勇樹を見つけたと聞いたでござる」と言ったため、伊江は「それは本当か?!」と

勢いよく近づけると、吉光は「い、イエース・・・」と引きながら答えた。

「よっしゃ!! アレン、早速誰かに電話して勇樹が中国にいると思うから近くにいるものは探してくれと、電話してくれ!!」

「わかった!!」

アレンは通信機でみんなにそれを伝えると、彼女たちも急いでバギーに乗り込んでその場所へと走っていくのであった。

だが彼女たちは気づかなかった・・・ブン・ボーグはある物を用意していたことに。

## 『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第三話

一方の太田たちは。

「うわあああ！　ここが中国、すごいおいしそう!!」

太田は料理が並んでいるお店を見ながら目を輝いているのを斑鳩たちは「はあ……」  
とため息を吐きながら彼をジト目で見ている。

しかし、太田が目を光らせるのも仕方がない。なんせここは中国の北京なのだ。ここ  
は北京料理が多くあるため、彼はどれを食べたらいいか迷っている。

「あ、あの太田さん。わたくしたちは誰を探しているかわかって行動していますか？」

「ん、確か勇樹君を探しにここに来ただよね」

「それは覚えていますか……ところで斑鳩さん。焰ちゃんと光牙くんは？」

「さあ、わたくしも見ていませんし……あれ、百合子さんは？」

斑鳩はあたりを見渡してみると、向こうから「斑鳩さん、みなさん。こっちにすごい店がありましたー!!」と声がしたため、みんなは何かと急いでいってみた。

すると百合子がいた先には、豪華な北京料理店がドドンツ!! と立っているんであった!

「ゆ、百合子さんこのお店は……?!」

「えっと、光牙さんと焰ちゃんと一緒に店を探していたら、ここを見つけたんです」

「入って見たがどうやら怪しい人はいなかったぞ」

「こ、光牙さん! 何を食べてますの?」

「これか? この店の商品だという『肉まん』があつたんだ。詠には確か『もやしまん』



があつたな」

「もやしまん!! どこにありますのそれ!!?」

もやしまんと言う言葉に詠は反応し、特急で店の中に入っていく。斑鳩達も仕方なく店の中に入っていくが、この店の看板にはどくろマークがあることに彼女たちは気づかなかった。

.....

「はああああ、幸せでしたわ」

詠はこれでもかというぐらいの大量のもやし料理（北京料理バージョン）をたくさん食べてうれしかったのか。喜びが顔から出ている。

斑鳩達も北京料理を食べていると、太田が何か気付いたのか斑鳩に「そう言えば、このお店・・・店員さん少ないね」と言うと彼女はあたりを見渡す。

確かに、いるのは自分たち以外誰もいない。これは不自然だ。斑鳩は不振だと思った

のか立ち上がろうとした瞬間。

「ニーハオですわ、斑鳩さん」

どこかで聞いたことある声に口調。彼女はまさかだと思ったのか、声がしたほうに向く。

そいつは虹色のサイドテールにチャイナドレスをした少女が現れた。そう、彼女はブ  
ン・ボーグの一人円筆子であつた!!

「円! どうしてここに!？」

「あら太田さん、わたくしはあなたたちの行動なんて、お見通しですわ」

「も、もしかして・・・わたくしたちがここに寄せるように!？」

「もちろん、わたくしが作った特製のお店ですわ」

「わたくしの好物のもやしもお見通しですの?!」

「そこまではまだ知りませんの」

「そこまで知らんかい（知りませんの）  
!!?」

物凄い突込みとみんなは一斉にボケると、円は「つ、疲れますからここでメカ戦ですわ!!」と、背中からスイッチを出すと彼女はこう言った。

「巨大メカさん、ここにお出でなさい!!!」

そして彼女はスイッチを押した瞬間、爆発とともに巨大なパンダ型のロボットが現れた!  
た!

そしてそれを狙っていたかのように、パンダのどおなかに穴が開くとそこから階段が現れる、そして円はそこからメカに入り込んだ。

『今回は、中国で有名なアニマルと運動抜群機能を搭載した巨大ロボット『エクス・パンダー』ですわ!!!』

そして、彼女はレバーを動かすとエクスパンダーの胴体から巨大な鉄アレイが出てくると焰たちはその場から離れる。

鉄アレイが落ちると同時にそれは爆発した!!

「こ、これって。爆弾か?!!」

「それだったら危険だ! 百合子さん、光牙くん。急いでこの店から出てバギーに!!」

「はい!!」「おう!!」

みんなは急いで店から出ると、バギーまで行くが。店が壊れると同時にメカは彼らの後を追うかのように走ってきている。しかも、エクスパンダーはばねを使った運動器具なので・・・。

ビヨヨン!!

ビヨヨン!!

ビヨヨン!!

バネで飛びながら彼らの後を追いかけている。

「追いかけてきましたわ！」

「はわわっ、わ、我らの走りより早く来ています!!」

「相手はメカだからこつちには差があるよ!!」

みんなは急いでいるが、メカは徐々に近づいてきて。メカから『これで終わりですわー!!!』と言うと同時に、メカの足から無数の鋭いとげが出てきて彼らを刺そうとする・・・その時。

「秘伝忍法・五月雨の鉄弾!!」

「秘伝忍法・一撃鉄弾!!」

「秘伝忍法・黒毒伐!!」

突然無数の銃弾と刃物が足の裏にある鋭いとげを壊すと、メカから『なんですの?!』と驚いた声があると同時に、バギーが現れて焰たちを乗せた。

「時間はない、光牙くん。そこにあるスイッチを押して!!」

「す、スイッチ?! これか!!」

突然の指示に光牙は慌てながらスイッチを押した瞬間、突然大爆発が起これると同時に白い穴が出てきて巨大メカが現れた。

メカは中国の昔の服・清の姿をした服装で、メカなのに赤髪の三つ編みパーツが付いている。

「な、なんだあれ?!」

「ちゆ、中国人・・・だな」

「で、でもなんで中国人ですか?!」

光牙、忌夢、叢がそう言っていると太田が「捕まってください!」とレバーを勢いよく引いた。すると、バギーが突然飛び上がると同時にメカの頭が開くと、そこから入り込んだ。

そして、バギーが定位置に留まると、操縦席についている画面が『合体完了』と表示された。

「今回はおいしい料理を作る鉄人口ロボット『ペキンリョーリメカ』です!!」

それを狙っていたのか、突然エキス・パンダーの手から大きな竹刀が出てくるとメカに攻撃する。だが太田は。

「そう来ましたか、こちらも行きますよ!!」

そして彼はレバーを動かすと、メカの袖が離れると同時に中から中華包丁が出てきて、戦闘開始となった。

竹刀は竹でできていて包丁は鉄でできている、これは行けるのではとみんなは思っていた……だが。

ガキンツ!!

「「ええ?!」」

「し、竹刀と包丁が!!」

「どうして!?!」

「竹なのに丈夫なのが不思議……じゃなくて!!」

突然の事態に、叢、斑鳩、忌夢が驚いていると、エキスパンダーが『これでどうですの!!』と、胴体から無数の球が出てきて、メカに当たると同時に、爆発してペキンリョー



リメカは後ろに倒れてしまった。

「いてて、みなさん。大丈夫ですか？」

「は、はいわたくしたちは大丈夫です」

太田は斑鳩達に向けていると彼女たちは大丈夫だと返事する。そして忌夢が「じゃあこつちから反撃だ！」と言いながらレバーを引くが、メカはうんともすんとも動かなくなってしまうた。

「あ、あれ。ど、どうしたんですか？」

叢は目を丸くしながらコックピットを見ていると、百合子が「まさか・・・これは故障ですよ!!」と、突然慌てると同時に工具箱を取り出した。

「な、なにしていますの？」

「メカを修理するのかわ？」

詠と忌夢は不思議そうに百合子に言うと、彼女は「修理です、このバギーは時々このように故障するから修理しないといけません!!」と急いで修理をし始めた。そうしていると、前からメカがやってきて攻撃をしようとしてきている。

「仕方ないね、光牙君。百合子さんが修理している間あのメカを」

「ああ、わかった！」

太田と光牙は一緒にメカから出ると、道具でメカを攻撃し始めた。光牙は武器がない事なので、バギーに積んでいる六尺棒を出して彼に渡した。

「これでも食らえ!!!」

太田はモーニングスター型の道具を使ってメカに投げると、エキスパンダーの腕は別方向へと飛ばされるが、バネの原理で再び元の位置に戻される。

「ふっ!!」

光牙は六尺棒で太田の攻撃をふさぎながらメカの武器をに攻撃する。だが相手は光牙たちが戦っている忍者や妖怪ではなくロボットなのでメカは無傷だ。

太田はこれでもかと、がれきを投げるが。エキスパンダーはパンチでがれきを壊してしまうので、無害である。

『うっふ、わたくしには無害ですわよ!!』

すると、エキスパンダーから無数の縄が出てくると、彼らを捕まえてしまった!

「うわっ!!」

「太田!!」

太田と光牙はつかまったことに驚いたのか、顔を歪ませた。

『ふふふ、太田さんに光牙さん。今回はここで終わりですわ!!!』

そして彼女はそう言う。メカの胴体から無数のドリルを出して二人に攻撃しようとする……だが。

「秘伝忍法・朱里拳!!」

『秘伝忍法・ツイン・ガンナー!!』

「秘伝忍法・毒炉!!!」

突然無数の球と紫色の刃物、そしてこぶしがメカに当たると、内部から『きやあ!!』と

円の音がすると同時に、縄がほどけたため2人はその場から離れて地面に着く。

「い、今のは一体……」

「まさか……あいつ等か!?!」

光牙は今の技に見覚えあるのか、あたりを見渡しているとある人物が現れた。それは……。

「教官、大丈夫アル!?!」

「美母!!」

「へえ、美母が言っていた通り。教官がいたんだね」

「と、隣にいるのは誰かな……?」

「おや、これは驚きました」

中国風の黒髪少女と黒髪がだ赤色をしてギターを背負っている少女に黒髪がだ青色をしてギターを背負っている少女、そしてメカと同じ服装をしているが赤色をしていて茶髪のショートヘアー少女やってきた。

「え、光牙君。これは・・・それに教官って?」

太田は光牙に質問すると、彼は「ああ、それはだな・・・」と答えようとしたが。突然エキスパンダーから、『おのれ・・・よくもわたくしの邪魔を!!!』と声がすると同時に、無数の武器が出てきて彼女たちに当たろうとする。

「しまった。皆さん急いで逃げてください!!」

「美苺、こいつはオレ達には勝てないから逃げるんだ!!」

太田と光牙は慌てて4人によけるように言ったが、彼女は「大丈夫(です)アル

「(よ)(!!)」と、答える。

その瞬間、彼女の姿が消えると同時にメカの武器が全て壊れて使い物にならなくなつてしまった。その影響なのか中から『へっ?!』と円の驚く声があるのであった。

「す、すごい・・・今の少女は・・・」

「ああ、あいつオレが知らないところで成長したな・・・」

2人は目を丸くしながら話していると、ペキンリョーリメカから『陽君、光牙さん。メカの修理はできたよ!』と声があると同時に、胴体が開くと同時にハンドが出てきた。

二人はそれに捕まると、ハンドはボウシの中に入ると2人は操縦席へと付いた。

「太田、光牙。ありがとう。ここからは僕たちがやる!!」

「メカニックはわたくしわかりませんが、何とかやってみますわ!!」

忌夢と詠、メカの操縦席についているレバーを握ると。メカは起動したのかエンジン

音が響いた。

「これでどうですか!!!」

詠はレバーを引くと、メカの腕が動くと同時に中から錘が付いた鎖が出てきてメカの胴体に当たって後ろに倒れる。

みんなはやった! と確信したが、突然エキスパンダーの手足・顔が胴体にしまわれるとメカが突然転がり始めた!!

「ええ!?!」

「どうなっているんだ!?!」

叢と太田は驚きながら見ていると、エキスパンダーは『おー、ほっほっほ! このメカはジャイロ機能を搭載した特殊メカですわ!!』と声がする。



しかし、百合子は何か予測していたのか「これでどうです!!!」と、レバーを引くと。突然メカの足から車輪が出てくると同時に地面を滑り始めた・・・?!

「ふふふ、このペキンリョーリメカをなめないでください!!!」

百合子はそう言いながらレバーを再び引くと、メカは再びエキスパンダーにアタックするが。相手のメカはそれをよけて体当たりで攻撃してきた。

しかし、斑鳩が「させません!!」と言いながらレバーを動かすと、ペキンリョーリメカの袖から粘着玉を放ってメカに当たる、それと同時に2体はその場で動かなくなってしまう。

「あわわ。ど、どうしましょう!!」

叢はその場で慌てると突然外から。

「ねえ、ちよつといいかしら?」

「ワタシもいいアル」

「こっちもよ」

「わ、私も・・・」

と、4人の声がしたため。みんなは「？」と頭に？マークを浮かばせながら外を見てみると、先ほどの少女たちがメカに乗っている?!

「美苺、お前どうやって・・・!!!」

「いや、それよりもみんなどこに乗っているか気にならない!!!??」

と光牙と太田は驚いていると、みんなは中に入って「シャンシエ」「どうも」「おじやまします」とあいさつをする。

「初めてネ。ワタシは、私立舞扇大学付属高校の美苺ヨ！」

「同じく私は、ゾディアック星導会の黒母衣です・・・」

「私はA. R. C. Angelsの右京だ!! よろしく!!」

「わ、私はA. R. C. Angelsの左京です・・・よろしくお願いします」

それを聞いた瞬間、太田は「あれ、私立舞扇大学付属高校って伊江が確か・・・?」  
と小さくつぶやいた。

すると、目の前から『ひゃく、止まりませんわー!!!』と声がるため、みんなはバツと振り向くと。エキスパンダーが突然暴走するかのようになり続けている。

「あわわっ!! どうしましょう」

百合子は画面を見ながら慌てて言うと、右京と美母が「なによ、それだったらあれを使えばいいじゃない」「ワタシもそう思うネ」と言うと、太田と百合子は「それはなんですか!」と一斉に答えると、彼女はこういった。

.....

エキスパンダーを追いかけるペキンリヨリメカから太田と百合子が出てくると、二人はメカに向けて吸盤がついた長い鎖を投げる。

吸盤がメカの付いたことを確認すると、二人は首を縦に振ると同時に、太田はメカに乗り込んで百合子は.....。

「斑鳩さん、引っ張ってください!!」

百合子はメカに向けて言うと、彼女は「分かりました」と答えると同時にレバーを引くと、メカはに付いている鎖が引っ張るとエキスパンダーの吸盤につながっているのか、最後まで引っ張るとエキスパンダーは突然止まった!!

「やった!! 止まったね陽君!」

「そうだね、でもまだ喜ぶのはまだ早い!!」

百合子は喜ぶが太田は真剣な表情をする。彼の言う通り、エキスパンダーの手足・顔が出てくると戦闘隊形へと変形した。

『よくもやりましたわね、これで食らいなさい!!!』

そしてメカはペキンリヨーリメカに向けてパンチをくらおうとするが、太田はそれを狙っていたのか「今です!!!」と叫ぶ突然鎖が分解する!

その瞬間、百合子は「右京さん、左京さん、美苺さんに黒母衣さん今がチャンスですよ!!」と叫ぶと、4人がメカから飛び出た。

「左京、今私たちの技をくらってやるぞ!!」

「う、うんわかったよ右京・・・!!」

「これを食らうネ!!」

「私の真技、食らいなさい・!!」

そして、右京と左京は銃をメカに構えて、美苺は巨大な肉まんを出し、黒母衣は服から大量の刃物を取り出すと同時にメカに向けてこう放った。

「秘伝忍法・紅き五月雨の弾!!!」

「秘伝忍法・青き稲妻の弾!!!」

「秘伝忍法・蒸マン爆弾!!」

「秘伝忍法・亡斬!!」

赤色の弾と青色の弾、巨大な肉まんに無数の刃物がメカに瞬間、メカから煙が出てくると同時に中から『え、えええ?!』と円の声がすると同時に、メカは。

チュドーン、チュドーン!! バゴーン!! と大爆発するのであった。

すると、メカの中から焰たちの武器が出てきたため、彼女たちは「ああ!! 私たちの!!」と言ってきたため、百合子が「任せてください!」と急いで焰たちの武器を手にする。ペキンリョーリメカに戻っていく。

.....

「そうネ、ワタシ勇樹の姿見てないネ」

「私もね、この姿見たことないよ」

「わ、私も同じです・・・」

「そうですね、少年はまだ見かけていません」

太田たちは勇樹を見ていないか美苺、右京、左京、黒母衣に聞いてみたところ、彼女たちはどうやら見ていないと言ったため2人は「そうか・・・」と落ち込んだ。

しかし右京は何か思い出したのか「そうだ、そう言えば鴉確かイギリスに行くつて言っていたから。もしかしたらそこで見たかもしれない」と言ったため、百合子は「それは本当ですか?!」と勢いよく近づけると、右京は「あ、ああそうだ」と引きながら答えた。

「やった!! 陽くん、早速誰かに電話して勇樹君がイギリスにいると思うから近くにいるものは探してくださいと、電話してください!!」

「わかりました!!」

太田は通信機でみんなにそれを伝えると、彼女たちも急いでバギーに乗り込んでその場所へと走っていくのであった。



## 『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』 第四話

紫苑たちはイギリスの都市・ロンドンへというが、彼がどこにいるかわからずみんなは今近くの喫茶店で休憩している。

「これだけ探してもいないって、どこにいますのしょうか？」

「そうですね、特徴があるとはいえ。探すのは大変です」

紫苑と雪泉は紅茶を飲みながら言うが、福音たちは・・・。

「おお、これは今限定のゲームじゃん!! どこにあつたんだ?！」

「小森ちゃん、ここはさっき通った駅の近くに売っていたんだよ。今度行く」

「おお、それはいいな美野里。ボクとってもほしかったんだ！」

「うわあ、福音ちゃんかわいい。美野里ちゃんより肌柔らかそうだね」

「そうかなあ？ ふくね、自分の肌触っていないからわからないよ？」

「それでもないよ。雲雀ちゃんに春香ちゃんの肌は柔らかいけど、福音ちゃんの肌はとっても柔らかいよ」

「そうだね、ひばりも柳生ちゃんからほっぺが柔らかいと聞いているけど福音ちゃんはとっても柔らかいよ。ねえ春香さん」

「そうね、どうしたらその柔らかい肌ができるのか不思議ね」

「なんと言うほど、ものすごく暇な奴らが怠けているのであった。」

「はあ、頭が痛そうになります。なんでわたくしたちがこの二人と一緒に・・・」

「ははは、でもにぎやかでいいと思うよ」

悩む雪泉に紫苑は苦笑いで話していると、突然どこからか「あ、あのう。ちよつといですか?」と声が出たため。2人は何かと振り向くと、双味がなぜか涙目で2人を見ていた。しかも近くにいたため。

「きゃあ（うわあ）!!」

驚くのも当たり前である（そりゃ誰だって驚くよ）。

「いつの間に……あなたは確か。飛鳥さんの道具を奪った!!」

「は、はい……僕です。返しますよちゃんと」

「え? そ、そうですね?（雪泉、これは一体）」

「なぜですか?（ええ、何か嫌な予感がします）」

双味の言葉に紫苑は不信感が出てきたのは、彼女は雪泉にアイコンタクトすると彼女はそれを返した。その瞬間。

バギイツ!!! と突然地面が割れると同時に大きな穴ができ始めた!!

「な、これは?!」

「あなた、一体何をする気ですか!!」

「うう・・・あ、あんたたちの武器を返してほしかったら、ぼ。僕と戦えっ!!」

双味がそう言った瞬間、C型のハンドが出てきて彼女をつかむと同時に穴の中へと入って行った。

それを見た雪泉は「急いで追いましょー!」と福音たちに言おうとすると、ある人物と出会った。それは・・・

.....

「双味、これでいいのか!? あたしなんか違うような気がするけど」

「う、うーん。筆子ちゃんがこういう風にしてって言ったから一応やっているよ」

双味は、白井と一緒に穴掘り機メカ『モグロコモーション』で逃げているが、白井はその逃げる通路が書かれている紙と通信機を手をしている。

「でも、これは行けると思うな。今回こそは勝つてやる!!」

「う、うん……僕もだよ!」

二人はそう言いながらレバーを動かして穴を掘っている。だが。  
バキツ!!

「へ?」

「え?」

二人は何の音かあたりを見渡しているとある物を見かけた。それはごく単純。

水であつた。



言ってきたため、彼女はレバーを引いて急ブレーキをした。

みんなは何があつたのか前を見てみると、穴の先には川が流れていた。発進が移っている画面を見ると、確かに双味たちはこの川の中にいることがわかる。

みんなはもしかして思つたのか、佐々木に聞いてみると。彼女は「もちろん」と言いつつながらレバーを動かすと。ホルホル・ロコモーションは、川の中に入っていく。

「うわっ!!」

「すごい振動ね……!」

雲雀、未来は驚きながらも椅子にしっかりと座っていると佐々木が「もちろんよ、勇樹君作つたメカだから壊れないわ」と言いながら動かしている。

すると、突然メカの前に巨大なハンドが現れて……!?

「ちよつと何よあれ」

「しまった。みんな、捕まって!!」

未来が驚くと、佐々木は急いでレバーとボタンを動かした。するとメカは突然上昇すると、ハンドはそれを追うかのように伸びていく。

「桜さん。あのハンドはいつたい何ですか?!

「あたしたちも説明して!!」

「話すと長いわ、とにかく今は逃げるが優先!!」

雪泉と四季は桜に言うが、彼女は急いでレバーを動かしているのに精いっぱいのようなのだ。

そして、メカが川から出て地上に着くと同時に。双味と白井が乗っている彼女たちのメカ・モグロコモーションも出てきた。

「ああ!! あのメカは」

「やつぱりそうね、こつちの番よ!!」

佐々木はそう言いながらレバーを動かすが、ホリホリ・ロコモーションはうんともすんとも言わない。

「な、なあ・・・これってもしかして・・・」

「・・・こ、故障だね」

中式と美樹がそう言った瞬間、画面が『故障』と出てきたため、美樹が「修理するしかない!」と言いながら工具を出すと、早速修理をした。すると。

「・・・雪泉さん。紫苑さん借りますよ!」

「ええ?!」

「ちよ、桜さん?!」

突然、桜は突然紫苑を連れてメカから出る。それを見た福音は。

「あ、桜ちゃん待って! 相馬君、急いでいこう!」



「はえ?! なんておれなんだ。てか気軽に言うのは初めてかもしれない!」

「そ、相馬!」

相馬と雅緋も驚きながらも、彼女と一緒にメカから出る。

どうやら桜は紫苑と、福音は相馬と一緒にあのメカが修理し終わる間に、ブン・ボーグのメカを足止めしようとしているようだ。

相馬と紫音は武器がない事なので、バギーに積んでいる鎖鎌とやりを出して彼に渡した。

.....

「紫苑さん、相手はどのように攻撃してくるかわからないため。身長に行きましょう!」

「はい、わかりました!」

「相馬君。福音たちはあのメカを壊すことにしよう!」

「ておい、さつき桜言ったこと忘れたのかよ!」

4人は武器を手にすると、突然メカが煙突から無数の爆弾が出てくると同時に、彼ら

に向けて攻撃を仕掛けて来た。

「来たわ、行くわよ!! 桜流忍法・『秋ノ紅葉』!!」

桜は刀を銅切りするかのようになると、爆弾は紅葉のように真つ二つに切れると爆発するのであった。

「おお! 今のは・・・?!」

「桜ちゃんが作った業だよ! 福音も負けないぞー!!」

福音は突然走ると、相馬は「おい!!」と言うが、彼女はそれを聞かずにどんどん走っていく。

そして、ドリルから無数のミサイルが放たれていく!! それを狙っていたのか、彼女は。

「よーし、いづくぞう! 福音流忍法・『ホイップビーム』!!」

福音が小さなごてを出すと、突然ごて先がホース上に変わりと同時にそこから穂一日クリームが出てきてドリルを別方向へと飛ばして爆発した。

それを見た相馬は「ウソだろ・・・?!」と目を丸くするのであった。福音は「わーい! 成功だー!」と喜んでいる。

しかし突然メカから無数のC型のマジックハンドが出てきて彼女たちをつかんだ!!?

「な、なに?!」

「うわっ!!」

「ひゃあ!」

「しまった!!」

彼らは突然なのか、驚いているとメカから『ふふん!』と声がしてきた。

『これで、あたしたちの勝利ね。双味、やるわよ!!』

『う、うん・・・わかったよ!』

双味はそう言うと同時にスイッチを押そうとした。だが・・・

「秘伝忍法・黒返し!!」

「秘伝忍法・急発進、235系!!」

「秘伝忍法・爆裂突込み!!!」

「秘伝忍法・飛隼パンチ!!」

黒い刀の筋、235系の電車、銀色の何かと強烈なパンチにより、メカにぶつかると彼らをつかんでいたハンドは壊れたのであった。

「っ！」

「よつと」

「ふぎやっ！」

「ふっ」

桜たちは無事に着陸すると、彼らは何かとあたりを見渡しているとホリホリ・ロコモーションから『桜君、みんな。メカの修理ができたよ！』と言ってきたため、彼らは急いでメカに乗り込んだ。

メカに乗り込むと、コックピットには。

「桜さん、紫苑。大丈夫ですか？ この機械の操縦はわたくしがやっておきます！」

「相馬、福音。あんたたちやるじゃない！ ここから先は両備に任してよ!!」

雪泉と両備は、メカの操縦席についているレバーを握ると。メカは起動したのかエンジン音が響いた。

.....

モグロコモーションがホリホリ・ロコモーションに向くと同時に、両備が「これでも食らいなさい！」とボタンを押した、するとドリルが開くと同時にそこから無数のミカンが出てきた。

「え、これが攻撃なの?」

ミカンを見た両備は目を丸くしてみると、福音が説明書を見ながら「ううん、これは冷凍ミカン攻撃って書いてあるよ」と言ったとたん、ミカンがメカに当たると同時に爆発するのであった。

「うわっ、すごいじゃない・・・だったらこれでどうかしたら!!」

両備はさらにボタンを押そうとするが、巨大なドリルが出てきて両備達に体当たりしてきた! ガギンツ!! と音がすると同時に内部は大きく揺れた。

「きゃっ、なにすんのよこのバカ!!」

両備は椅子から落ちるものすぐ座ろうとするが、突然外から。

「あ、あの・・・すみませんが中に入れてくれませんか・・・??」

「私も私も〜!」

「何があつたかわからへんけど、わしもや」

「そうつすよ!」

と、4人の声がしたため。みんなは「?」と頭に?マークを浮かばせながら急いで扉を明かせると、4人の少女が中に入ると「あ、ありがとうございます!!」「ふい、滑り込みセーフかな・・・?」「すまへんな」「どうもつす!」とあいさつをする。

突然なため、みんなは何かと思いなぐら目を丸くするのであった。

.....

「は、初めて。私は、遠野天狗ノ忍衆のゆ、夕焼です!」

「私は、県立志野塚工業高校の元親だよ〜！」

「わしはA・R・C・Angelsの鴉や!! よろしゅうな!!!」

「オレは元親と同じく県立志野塚工業高校の飛隼っす! よろしくっす!!」

それを聞いた瞬間、桜は「あらあら」と小さくつぶやくが、みんなは何が何だかわからず目を丸くしている。

すると、目の前から『おらおらいくよー!!!』と声がするため、みんなはバツと振り向くと。モグロコモーションがこちらに向かってきている!

「しまった! こうなったらこっちも」

両備は画面を見ながら慌てるが操縦席に座ってコントロールしようとすると、元親が「おお、新型の自動車ですか!? それだったら私にお任せください!!」と言うと、中弐と桜は「それはなんだ!」「ワタシにも聞かせてもいいかしら?」と答えると、彼女はこう言っ

た。

.....

モグロコモーションのドリルが回ると同時に、ホリホリ・ロコモーションは180度右に回ると同時に逃げていく。それを見た白井は『待ちなさいよ!!』と声がすると同時に、メカは彼らの後を追いかけ始めた。

するとホリホリ・ロコモーションの後方から四角い穴が開くと同時に、そこから線路が出てきた。白井と双味は何かと思いいながら彼らを追っているが・・・。

『今よ、元親さん!!』

桜は突然叫ぶと、元親は「分かりました〜!」と答えると同時に笛を吹いた、すると。

『えー、間もなくクラス390、クラス390が突撃しまーす!!』

すると、突然クラス390が出てくると同時にメカ大突撃!! そして、モグロコモー



シヨンはそのまま回転して壁に大激突!!

「やったあ!!」

『よっしゃー！ これであいつらも動かないはずだぞ!!』

『ええそうね、でも油断大敵よ!!』

元親と中式は喜ぶが桜は真剣な表情をする。彼女の言う通り、モグロコモーションが立ち上がると同時にこちらに向かって再び体当たりをしてきた！

『よくもやったわね、これでも食らいなさい!!』

『は、反撃ですう!!』

そしてメカはホリホリ・ロコモーションに向けてドリル攻撃をくらおうとするが、桜はそれを狙っていたのか「今よ!!!」と叫ぶと突然メカから3人の少女が出てきた！

その瞬間、百合子は「右京さん、左京さん、美苺さんに黒母衣さん今がチャンスですよ!!」と叫ぶと、4人がメカから飛び出た。

「よっしゃ、わしの根性みせたるで!!」

「元親、いくつすよ!!」

「うん、わかったよ!!」

「オレたちをなめんなよツ!!」

そして、鴉は変わった形をしたギターを構え、飛隼は背中に付いている手裏剣を持ち、元親は笛を吹くとサラ・ジドンス号が出てきて、夕焼は刀を構えると同時にメカに向けてこう放った。

「秘伝忍法・浪速の黄金叩き!!!」

「秘伝忍法・第手裏劍投げ!!!」

「秘伝忍法・特急蒸気機関車アタック!!」

「秘伝忍法・闇を切る黒き大鳥!!」

強力なギターによる打撃と巨大な手裏劍、さら・ジドンドズの体当たりにより二刀流によるクロスカッターがメカに瞬間、メカから煙が出てくると同時に中から『ちよ、ちよつと何よ今の!!?』『ど、どうなっている?!』と白井と双味の声がすると同時に、メカは。

チュドーン、チュドーン!! バゴーン!! と大爆発するのであった。

すると、メカの中から雪泉たちの武器が出てきたため、彼女たちは「ああ!! 私たちの!!」と言ってきたため、百合子が「任せてください!」と急いで焰たちの武器を手

すると。ペキンリョーリメカに戻っていく。

.....

「うーん、このガキンちよ見てへんな」

「私もです、この子見たことないよ」

「わ、私も同じです・・・」

「オレも元親と同館っす」

桜たちは勇樹を見ていないか鴉、元親、夕焼、飛隼に聞いてみたところ、彼女たちはどうやら見ていないと言ったため4人は「そうですか・・・」と落ち込んだ。

しかし鴉は何か思い出したのか「せや、確かあのメカやけど。わし出てきた島なら見たことあるで」と言ったため、幹子は「それは本当か?!」と勢いよく近づけると、鴉は引きつりながらも「せ、せや。わしちゃんと見たで」と答えた。

「やった!! 桜くん、早速みんなに電話してブン・ボーグがいるところは鴉が見たって!!!」

「ええ、わかったわ!!」

桜は通信機でみんなにそれを伝えると、彼女たちも急いでバギーに乗り込んでその場所へと飛んでいくのであった。

そして物語は終盤へと迎えようとしているのであった。

## 『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第五話

通信機を聞いた飛鳥たちは、鴉が言ったと言われている場所。東京都の八丈島へと来た。

「ここが、その目撃した場所なの？」

「ああ、紫苑さんからはそう言っていたが・・・あ、ここ壊れている」

飛鳥は辺りを見まわしながらつぶやくと、伊江が答えてを言いながらバギーを修理している。佐介が「明日香ちゃん、あれは!!」と言ってきたため、みんなは何かと見てみるた。

そこにあつたのはドクロの形をした穴で、いかにも敵がいますよと表現している。

「な、なんだあれは？」

「大きな穴ですね．．．しかしどうして？」

アレンと夜桜はそれを見て呟いていると伊江が「修理できた、早速だがその穴に行くぞ！」と言ったため、みんなは急いでバギーに乗ると、その穴のへと意気入っていくのであった（佐介は苦笑い）。

・・

「これは一体．．．なんだ」

「外とは違つて中は結構豪華やな」

アレンと日影の言う通り、外観は穴だけであつたが内部は豪華になつていて壁と天井、床には金の鉄になつていた。

「しかし、趣味が悪いな、夜桜どうなんだ？」

「はい、確におかしな人です、こんなにも金を使うなんて・・・常識がおかしいです」

伊江は夜桜に向けて言うと、彼女は詠の気持ちがかかるのか同意して答えると、佐介が「あれ・・・あの壁何かおかしくありませんか？」と言ってきたためみんなは佐介が言った壁を見てみた。

それは他の金の鉄とは違い、大きな一万円札がなぜかはまっていた。

「なんでここに一万円札があるんや？」

「お、大きいです・・・」

日影と紫はそれを見ながらつぶやくと、突然一万円札が前に倒れてきた!!

「い!?!」

それを見た伊江は、急いでアクセルを踏んだため何とか難を逃れた。



「な、なんだ今のは!?!」

葛城は画面を見ながら答えると、飛鳥が何かに気づいたのか「あ!」と答えると同時にこんなことを言い出した。

「このお札、手足が生えている!!!」

それを聞いたみんなは「えええ!?!」と驚きながらも、画面を見てみると。確かに一万円札の後ろに手足が付いている。

みんなはそれを見て驚いていると、一万円札から『ふふふ』と声があると同時に、札の中（正式には後ろ）から手足が出てくると同時に、中心から顔が出てきた!!

はて、声の主は誰かと? みんなが考えていると伊江が「あ、お前はもしかして円か!?!」と言うと札からこう答えた。

『そうですわ! ブン・ボーグのメカ制作&円製造社長のお嬢様、円筆子ですわ!!』

それを聞いた飛鳥たちは「「ええ、お嬢様!」」と驚くのであった(日影は「へー、そうなんや」とあっさりと答える)。

そして円は、聞いてもいないのに『このメカの説明をしますわ!』と、突然メカの説明を始めた。

『このメカは、時は金なり時間は大切お金も大切にすることをアイデアとして作り上げたメカ。『大金持ちメカ』ですわ!!! って、あら?』

円がメカの説明をし終わると同時に、佐介たちが乗っているバギーが見当たらなかった。

.....

佐介たちは現在、通路から出て森林が生えているドームへと着いた。

「おー、すごいもんやな。ここの森林本物の木でできとる」

「マジか日影?！」

日陰のつぶやきに葛城は反応し、外を見てみる。初めは偽物かと思つた彼女だが、木に触れてみると表面の凹凸が偽物とは違うところがあつた。

「どうなつてんだこれ・・・?！」

彼女は驚きながら見ていると、突然『わたくしを無視しないでくださいましー!!!!』と声が出たため、みんなはその声が出たほうに向くと、大金持ちメカがこちらに向かつて走ってきた!!

「速っ!! てか、どんだけなんだ?!」

「そんなことはいい、今は急いで乗るんだ!!」

葛城はメカを見ながら驚くと伊江が急いで彼女を連れてバギーに乗り込ませて、急速

で逃げ始めた。すると、佐介は何か気づいたのかこんなことを言い出した。

「あの、僕たち武器持っているのでは・・・??」

それを聞いたみんなは「あ・・・」と目を丸くして答えると、葛城が「伊江、ハツチは開けるか?!」と言うと彼女は「もちろんだ、気をつけろよ!!」と答えると同時にポタンを押した。

すると、ハツチが開くと同時に飛鳥たちはそこから出て大金持ちメカに攻撃し始めた。

.....

「早速だが行くぜ日影!!」

「わかったで、葛城・・・!!」

日陰と葛城は、独自の動きでメカの足に攻撃し動きを鈍らせた。

しかし、両手に付いている金塊が紫に向けて攻撃する・・・だが彼女は。

「ひ、秘伝・・・忍法・・・『もう、こないで』!!!」

紫色のオーラを放つ球をメカに向けて放つと、金塊はばらばらに壊れてしまった。

さらに追い打ちをかけるかのように、夜桜と椿が走ると同時にもう片方の金塊に攻撃仕掛けた。

「これでどうじゃ!!!」

「結構効くわよ!!!」

夜桜と椿による強力なパンチで、金塊はばらばらに砕けてしまった。これで寮では使えなくなった。

「飛鳥ちゃん!」

「わかったよ、佐介君!!」

佐介と飛鳥はそれを狙っていたのか、2人は走り出すと同時に武器を手にして攻撃をしようとする。だが。

『そこを狙っていましたわ!!!』

突然両腕からご縁が出てくると同時に彼らの胴体に引っ付き、それと同時にベルトへと変形し彼女たちの腰につながった。

飛鳥たちは何かと初めは思ったが、突然彼女たちは何らかの力により倒れる。

「な、なにこれ!? 思い・・!!!」

「ち、力が出ません・・?!」

飛鳥と佐助は必死に立とうとするが、まるで体が良しになったかのように動かない。

「なんだこれ……アレン、メカを出すぞ!!」

それを見た伊江は、アレンに向けて言うと言わぬ彼女は「わかった!」とスイッチを押そうとした。だが。

『そうはさせませんわ!!』

すると突然無数のお札がバギーに当たり、二人はその札の攻撃から逃れたが、肝心のバギーは先ほどの攻撃で故障してしまい、動かなくなってしまった。

「だあ、そんなのありか?!

「修理は難しいぞ! 急いで私たちも戦おう!!」

アレンの言葉に伊江は「そうだな、オレ達も行くぞ!」とハッチを開けようとするが、

お札が無数の回路を壊してしまっただため開かなくなってしまった。

「あ、あれ?! なんだ開かねえんだ?!」

伊江は何度もスイッチを押すが、ハッチは完全に壊れてしまっただけで何度しても開かない。アレンは能力で明かそうとするが、無理に使用したら被害が出てしまうのであまり使わないようにした。

『ほーっほほほ!! これで終わりですわ!!!』

そして、大金持ちメカがバギーまでやって来ると足で踏みつぶそうとした。ところが。

『さっせません!!!』



突然何かが通るとメカは後ろに転んでしまい中から『きやあ!!』と声がした。飛鳥たちはいったい何があつたのか見ているとある人物が現れた、それは。

「だらしないうぞ佐介、こんな相手に手こずるだなど」と

「こ、光牙くん!? どうして?」

「まったくお前を倒すのはこの私だといつも言っているだろうが、なのになんだこのざまは?」

「ほ、焰ちゃん!」

なんと、焰紅蓮竜隊の焰と光牙が彼らを助けに来た!

そしてバギーが来ると中から太田と百合子が出てきて「大丈夫ですか?!」と駆け付けてきた。

どうやってここまで来たか話を聞いたところ、バギーの反応が消えていることに太田

は気づいたため、最後に反応したところはどこか探した結果、ここだとわかったらしい。

.....

「このベルト、重力を体験する特殊なパーツが付いているね、でもこれをこうしたら」

太田は飛鳥たちのベルトを外すように一つづつやっている、ベルトの内部のヒューズを外した途端、ベルトは分解差出て彼女たちは元の重力を手に入れた。

「軽くなった、ありがとう陽君!!」

「い、いえ。これでもまだ勇樹君ほどではありません」

飛鳥は陽にお礼を言っていると突然大金持ちメカが立ち上がり、彼らに向けて『ゆるしませんわあ・・・!!』と声がしてきた。

佐介は「飛鳥ちゃん!」と言うと同時に武器を構えるが、太田が武器を構えると同時にこう言った。

「飛鳥さんたちは奥に行ってください、ここから先はボク達がやっておきます!!」

それを聞いた飛鳥と佐介は「ええ!？」と驚くが、彼の瞳は炎が映ってる。どうやら本気のようなのだ。

それを見た二人は「分かりました!」と言うと同時に、伊江と一緒に奥の通路に入っていく。途中、伊江と忌夢は百合子と紫と交代して百合子たちは飛鳥たちと一緒に移動している。

それを見た大金持ちメカは『お待ちなさい!』と手を伸ばすが、詠と斑鳩が『させません!!』と言うと同時に、刀で跳ね返した。

『何をしますの!?!』

メカは立ち上がると同時に足で踏みつぶそうとするが、太田が「させるかあ!!!」と足をつかむと、向こうの方へと投げた。

さらに、それと同時に叢が駆け出すと同時に「よくもわれのお面を奪ったな・・・!!!」と言うと刀とやりを器用に使ってメカをさらに向こうへと飛ばした。

「飛鳥さんと佐介さんたちをこのようなことをして、わたくし頭に来ました!!」

「わたくしもです斑鳩さん、陽さん巨大メカをお願いいたしますわ!!」

斑鳩と詠の指示に太田は「わかりました!!」と答えると同時にボタンをカチツ通した、その瞬間。25世紀から巨大メカが送られて、太田たちがいるところへと転送された。送られてきたメカは、パンダ型のロボットだが頭にサイレンがついていて右手には手錠左手には警棒らしきものが握られている。

バギーが飛び上がると同時にメカの胴体が開くと、そこから入り込んだ。そして、バギーが定位置に留まると、操縦席についている画面が『合体完了』と表示された。

『今回は、悪は許さぬ正義の味方『警・パンダメカ』なのです!!』

太田はそう言いながら操縦席に座ると、詠たちが「ええ……」と呆れるのであつ

た。

そうしていると、大金持ちメカから『これでも食らいなさい!!』と言うと突然 両腕から五円が出てくると形が旧型へと変わり両腕に装着する。

そして『行きますわ!!!』と言いながらパンチ攻撃してくるが、警・パンダメカは。

キンツ!!

『なっ、そんなのありですか?!』

両手に付いている金の玉で攻撃しようとしたが、警・パンダメカの警棒で防いだ。その瞬間、胴体から大砲が出てきて狙いを定めると……。

ドガアン!!

『キャッ!』

大砲から放たれた攻撃にメカは後ろに飛ばされてしまうが、警・パンダメカは体勢を立て直す。

「す、すごいですわ……どうやってあのメカを……」

詠は驚きながらつぶやくと、太田は「それは……」と説明するのであった。

「我が大手会社『サンシャイン』が苦勞して作り上げた善意装置によって、お金があつたとしても悪に染めない特殊部品です!!」

太田は自慢げに言っていると、詠がジト目で見ていることに彼は気づき「あ、あれ？」と目を丸くして言った瞬間。突然。

ガアアン!!

「うわあ!!」

突然の衝撃でみんなは驚いていると、大金持ちメカの胴体が前に傾いてプロペラ型に変形し警・パンダメカに体当たりした。どうやら先ほどの瞬間で、メカは変形して攻撃をしてきたようだ。

それを見た太田は「ひ、卑怯だ．．!!」と頭を押さえながら操縦席に座ると、詠がこんなことを言い出した。

「太田さん、あなたは怒りと言うのはありませんか？」

それを聞いた彼は「え？」と、驚くと斑鳩が「まさか」と何かを察知したのか、急いで太田に「はいと言え」と首を上下に動かす。

それを見た彼は「はい」と答えると、詠はこう言った。

「わたくしはお金持ちや贅沢は嫌いですが、あなたのように正義がある人はわたくしは信じます!!!」

そしてレバーを動かすと、警・パンダメカの右手にある手錠が大金持ちメカに向けて放った。そしてメカの手足銅などに手錠が絡まると、彼女は「そ、そんなのありですの

?!」と驚きながら落ちていく。

それを見た詠は「斑鳩さん、叢さん、紫さん。そして太田さん、行きますわよ!!」と勢いよく外に出る。斑鳩と叢はやれやれと苦笑いで答えながらも、彼女の後を追いに行く。紫は怯えながらも太田と一緒に彼女の後を追うことになった。

.....

「太田さん、大丈夫ですか。詠さんは.....」

「大丈夫です、僕もあの人と同じ体験をしたことがありますので理解します.....そして」

太田は自分の武器を手にしながら目をつぶる、すると。

「私はあの人に憤りが噴き出してきました.....!!!」

彼の目が赤く光り棘付き鉄球が燃えて、彼は憤っているのか握っている手から『ミシミシツ!!』と、何かがきしむ音がする。

「詠さん、斑鳩さん、叢さん、紫さん、焰さん、光牙さん、伊江。一斉に行きましょう!!」それを聞いた5人は「わかりました（わ）（心得た）（は・・はい）（おう）!!!」と一斉に答えると、各自秘伝忍法・秘伝技を出していく。



「秘伝忍法・ラグナロク」

「秘伝忍法・絶華凰閃・黄泉式」

「秘伝忍法・大五郎切り」

「秘伝忍法・誰か…助けて！」

「秘伝忍法・紅蓮!!」

「秘伝忍法・黒龍！」

「伊江流忍法・音光線!!!」

「太田流忍法・怒雅栗!!」

そして、大剣と長刀、巨大なオオカミと不が溜まった大きな球、紅の波動に黒き龍の覇気、そして音の波長と大きな棘付き球による一斉攻撃がメカの胴体にあたり穴が開き、そこから電気がビリビリツ!! と出てきている。

中から『ど、どうして負けますの〜!!?』と彼女の叫び声がする、その途端。

ドカアアン!!   ドカアアン!!   チュドオオン!!!!

「また負けましたわ〜!!!」

メカが爆発すると同時に円が出てきてどこかに飛ばされてしまったのであった。

.....

「太田さん、話は分かっていますか・・・」

「はい、わかっています」

メカ戦が終わった後、太田と詠は何かの約束をしているのか真剣な表情をしている。

斑鳩と伊江は、大変なことが起こるのではないかと心配している。そして二人は懐に手を入れてある物を出した。それは・・・。

「わたくしのもやしはどうかと思いますか!!」

「僕のおにぎりはどうでしょうか!!」

・・・太田はおにぎり、詠はもやしを出してそれを見せ合った。

それを見た彼女たちは「え？」と目を丸くしていると、太田と詠は「やっぱり来たか」と感じたのか、二人はこんなことを言い出した。

「それだったら・・・今は休戦にしましょう」

「そうですね、今は飛鳥ちゃんたちを助けに行きましょう!!」

そして二人は「焰さん（光牙さん）、急いでいきましょう!!」と一斉に言うのと、焰と光牙は「あ、ああ」と言いながら急いで警・パンダに乗り込むと、飛鳥たちの後を追い始めた。

途中、右京達も追いかけてきたが、円が目を回して鉄の山に積もっている光景をみんなは見かけたのであった。

## 『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第六話

「ここ、とつても深いね」

「ええ、そうですね。もしかしたら異世界に行きそうですね」

佐介たちは今、地下へ行くと思われる大きな穴へと入っていき。彼らは今その通路を通っているところ。

百合子は佐介に向けて言うと、彼は冷静に答えると同時に前方に大きな扉が現れる。

「なんやこれ、でっかい扉やな」

「ああ、つと。でもどうしてこんなものが・・・？」

日影と葛城はそれを見ながらつぶやいていると、忌夢が「もしかしたら、あれかもし

れない」と何かに気づいたのかアレンに向けてこう言ってきた。

「アレン、もしかしたらあの扉は……」

「ああ、わたしもだ。もしかしたらあれで動くかもしれない」

そして2人は首を縦に振ると、アレンは巻物を忌夢は如意棒を出すと同時に、みんなに向けてこう言った。

「みんな、わたしたちの攻撃をよけろ！ アレン流忍法・黒雷!!」

「行くぞ！ 秘伝忍法・サンダーフォックス!!」

黒い雷と強力な電気が放たれると、みんなは一瞬何かと思ったがそれを見た瞬間彼らは「うわっ!!」と驚きながらよける。

そして2人の技は扉に当たると、扉は自動で開き始めた。どうやら電気で動く特殊なドアのようだ。

「おお、開いたな」

「そうですね・・・じゃなくて、アレンさんに忌夢ちゃん。私たちを○○しかけたよ!!」

日影が真顔で扉を見て言うのと、百合子も同感するが途中で正気に戻るとアレンと忌夢に向けて起こると2人は「ごめん」と謝った。

そして彼らはその扉の中に入っていくとある光景をみんなは見た。それは・・・。

巨大な山の中にいるのか空色が灰色の雲色に覆われていてあたりには巨大な円錐が無数に生えている。

「な、なんで山にいるんですか?!」

「そ、そしてこの天空は雷が降りそうだ・・・急いでいくぞ!」

「そうだな、葛城。みんな急いでいくぞ!!」

夜桜、葛城、アレンは急いで向こうへと行こうとするが、突然どこから『ここから先にはいかせねえ!!』と声があると同時に、突然雷が落ちてきた!!

ピシヤアツ!!

「うわっ?!」

それを見たみんなは、急いでよけると雷は他の所へと落ちていく。それと同時に地面にひびが入っていく。

ギギギツ……ガラガラツ!!

そして地面が盛り上がり崩壊すると同時に何かが見えた、それは大きな雷神メカだが鋭い白黒の円錐に胴体には3つの太鼓が付いている。

『今回は、電圧2000万Vまで貯める強力魔人ロボット『雷神メカ』よ!!』

そして、メカが決めポーズをすると飛鳥たちは「ええ……」と驚くが、葛城は「なんか変なメカだな」と言うのであった。

だが、百合子は「そんなことしている暇ではありません！ 急いで行きましょう！」と言うと飛鳥たちは急いでバギーのレバーを動かすと、メカは空を飛んで移動するのであった。

それを見たメカは『待ちなさい!!』と追いかけるが、バギーの速度は以上に早く。急いで追いかけても間に合わないようだ。飛鳥たちは良かったとホッとする……だが。

『ぼ、ボクのこと忘れないでくださいいい!』



突然どこからか声がすると、強力な風が発生してバギーを強制的に地上に降下させた。その衝撃でバギーは地面に埋まってしまった。

「な、なんだ今のは!？」

忌夢は驚きながら外を見てみると、なんと目の前にあったのは雷神メカと同じ体だが背中に大きなプロペラと右手に巨大なうちわを手にしたメカが立っている。

『こ、今回は、風速5000mまで飛ばすことができるきよ、強力魔人口ボット……『風神メカ』ですう!!』

そしてまたもやメカがポーズすると、それを見た百合子は「そんなのありですか!？」と答える。そして雷神メカから『ちよどよかつたわ双味、これを使いなさい!!』と胴体から大砲が出てきて、何かが放った。そしてそれは風神メカが受け取りそれを中に入れる。数秒後…。

『ふ、ふふふ……ああそうだな、こいつは僕と白井がやりやあいだろう、さっさと殺るかア』

声を聴いた飛鳥たちは、何かが違うと思ったのか背筋から寒気がすると同時に、雷神メカからドンドンツツ!! と太鼓を鳴らし始めた。

初めは何かとみんなは思ったが、雷神メカから紫色の電気が流れてきて、太鼓の音が大きくなるにつれ紙らしりが徐々に大きくなっていき、そして最後の太鼓が叩くと同時に雲から巨大な雷が出てくると飛鳥たちが乗っているバギーに墜落した!!

「「うわあああ!!」「」

強力な電撃に当たったみんなは大ダメージを受けてしまった。幸いバギーの中にいたためそれほど強力な電気に当たらず、みんなは痺れてしまっただけで済んだが、バギーは電圧でコントローल不能で故障してしまった。

『ほほう、これはいいやり方だな。後は僕の風で切ればいいな』

そして風神メカが着いている巨大なうちわが動き、風を起こそうとし始めた。だが。

「そりゃああああ  
!!!!!!!」

だが、何者かがうちわに持っている手に向けて体当たりすると、うちわはその衝撃により手から離れてしまい風は起こさなくなってしまった。

その攻撃を受けた彼女は『な、なんだ!?!』と驚いた。だが雷神メカは『ちよつと何よ、こうなつたらあたしがやってやる!』と足を動かしてバギーを踏もうとするが、バギーが踏まれる前に何者かが現れて飛鳥たちを救いバギーから離れた。

そしてバギーが踏まれると、爆発するのであった。さて、飛鳥たちを救った者は……。

「危ないところでしたね。…怪我はありませんか佐介くん？」

「紫苑さん!?!なぜここに!?!」

「もちろん、あなたたちを助けにですよ」

「雪泉ちゃん!」

なんと、死塾月閃女学館の紫苑と雪泉が彼らを助けた!

どうやってここまで来たか話を聞いたところ、福音がトリーヌケールと探知機を使った結果、飛鳥たちはここだとわかったらしい。

『このう……僕の邪魔をするな!!』

すると風神メカがパンチで攻撃をしようとするが、柳生が現れて番傘で攻撃を跳ね返すと同時に「じやまするな!」と威圧でにらみつける。

そして葛城が「どりゃあ!」と体当たりすると、メカは後ろに倒れた。

「飛鳥さん、この風神と雷神はわたくしたちが相手します」

「え、でも雪泉ちゃん」

「大丈夫です、飛鳥さんは佐介君の友達です。あなたがいなければ誰が助け合おうのですか？」

「紫苑さん」

雪泉と紫音の言葉に2人は「わかった！」と言いながら走っていく。だが雷神メカが『それでも食らいなさいっ！』と太鼓を鳴らすと雷が発生して飛鳥と佐助に当たろうとした。だが。

「はあ!!」

白と黒の剣が雷に当たった瞬間爆発し、飛鳥と佐介は何かと振り向いた。そこには。

「大丈夫か？ 危ない所だったな」

「えつと…誰？」

「ガタツ!? …相馬だよ! まったくせっかく助けに来てやったのになんだってんだよ!」

『相棒、一先ず押さえておけ』

「ふっ、まさか私がお前を助ける日が来ようとはな」

「雅緋ちゃん！」

なんと雷から攻撃を守ったのは、雅緋と相馬の新・秘立蛇女子学園であった。それと同時にバギーが2台やってきた。

どうしてここまで来たかと言うと、雪泉と一緒に行ったらここに来たというらしい。

「佐介、ここはオレ達が足止めをしておく。今のうちに行くんだ」

「ありがとう……飛鳥ちゃん!!」

「うん!! 雅緋ちゃん！」

「ああ、わかつている！」

佐介は飛鳥と一緒に百合子とアレンを連れて行くと、相馬と紫音たちはメカの相手をする事になった。

葛城たちは「アタイたちも足止めするぜ!!」と言いながら雅緋たちの手伝いをするよ  
うだ。

.....

『ほほう、お前たちが足止めか』

『でも無理と思うわ、あたしたちの巨大な魔人型メカはとっても強いだから!』

風神メカと雷神メカは、紫苑と雅緋たちに向けて言うが佐々木が「それだったらこれが相手よ!」とポケットからリモコンを出してボタンをポチつと押した。その瞬間。25世紀から巨大メカが送られて、太田たちがいるところへと転送された。

送られてきたメカは、人型のロボットだが肌色が赤色で右が金色で左が銀色の鎧を着ている。

紫苑と相馬たちは2台バギーに乗ると、突然バギーが半分に割れると1台のバギーに合体すると飛び上がる。それと同時にメカの胴体が開くと、そこから入り込んだ。そして、バギーが定位置に留まると、操縦席についている画面が『合体完了』と表示された。

『今回は、孫悟空の敵と言われている金閣銀閣をモデルとした巨大ロボット『キンカクギンカクーンメカ』だ!!』

そして、メカはポーズをすると同時にコックピットの真ん中が開くと紫苑と相馬たち

のコックピットが1つになった（※忘れていましたが、右が金閣側に紫苑たちが乗っていて銀閣側が相馬たちが乗っている）。

『へえ、金閣と銀閣がモデルね。でも武器は少ないわね』

『ああ、でも油断は禁物だ。一気に行くぞ!!』

そして双味の合図に白井は『分かったわ!』と答えると、太鼓をたたいて雷を発生して攻撃をし始めた。ところが。

「そうはさせないわ、未来さん雲雀ちゃん。そこのレバーを動かして!!」

佐々木の指示に2人は『分かった（わ）!!』とレバーを動かすと、突然キンカクギンカクーンメカの角が鋭くなると同時に、メカは突然走り出した!!

幸い、すぐに動いたため、雷の攻撃はよけることはできた。

『何よこれ、いくらなんでも難しいわ!』

『うろたえるな、何度もやればいつかは当たる。行くぞ!!』

双味の指示に白井は『分かったわ!』と言いながら太鼓を叩くと雷が発生して再び落雷する。それと同時に双味が乗っている風神メカのうちわが大きく扇ぐと強力な風が



発生した。

しかしキンカクギンカクーンはそれをよけながら進んでいくので相手はそれを当てるのに苦労している。すると。

「そろそろいいな、紫苑君。すまないがちよつと左に寄つてくれないかな?」

幹子の言葉に紫苑は「え、いいですけど…?」と不思議に思いながら左によると、それを見た福音は。

「相馬君、右によつてもいいかな? 福根座りたいんだけど」

福根の言葉に相馬は「ああ、別にいいがなんでこんな事するんだ?」と文句を言いながら左に座る。すると佐々木は。

「じゃあ行くわよ、キンカクギンカクーン。分離オン!!」

佐々木はスイッチをポチつと押した瞬間、突然キンカクギンカクーンが左右に割れていく!?

「え、なんですかこれ?!」

「どわあ、なんでこうなったんだ!!」

突然の事態にみんなは驚いているが、幹子と福音はそれを知っていたかのようにしっかりと椅子に捕まっている。それを見た2人は。

『ええ、何よこれ!!』

『そんなの聞いてない!』

もちろん驚きます。しかし白井は『もうヤケクソよ!! このこのこのつ!!』つと太鼓を無理やり叩くと、雲から大量の雷がキンカクギンカクーンに当てようとするが、まるでラジコンのように器用な避けている。

だが、1つの落雷がキンカクギンカクーンの銀閣に落雷した!!

『うわああああ!!』

強力な電撃にみんなは痺れていると、福音が落としたある物に電気が通るとそれは起動して両奈に当たった。そしてキンカクギンカクーンの銀閣はその場で停止した。

『おお、すごいじゃないか』

『ふふん、まぐれに当たるのはすごいわ。さあコテンパンにやるわ!!』

双味の言葉に白井は照れると同時にそう言うと、太鼓を叩き巨大な雷を起こしてそうとしている。

「しまった！」とみんなは確信した、ところが。

「秘伝忍法・美しく青きガンスリンガー!!」

突然どこかで聞いた声があると同時に、雷神メカと風神メカの上空から無数の銃弾が落ちてきた!!!

『な、なによこれ。キャツ!!』

『じゅ、銃弾がなぜ!?!』

2人は驚いていると、雷神メカが持つている太鼓とバチが壊れて風神メカのうちわと背中のプロペラが凍り付いた!!

それを見たみんなは何かと不振にみていると、両備は何かに気づいたのかあたりを見渡した。そしてそれを見た彼女は「やっと戻ったんだね」と小さくつぶやくと一筋の涙が流れると同時にある人物が舞い降りてきた。それは。

「この馬鹿犬が!! 両備を心配しないでよ!!!」

「ハウ〜ン、両備ちゃん幸せ。もっと両奈ちゃんをいじめてよう〜」

ご存知の通り、DMの両奈であった。みんなはどうして戻っているんだ?と思いがながらあたりを見渡すとメカの中に『あべこべ化機』が落ちている。

それを見た相馬は「そうか、さっきの雷でこの機械が」とつぶやいた。どうやら先ほどの落雷でこの道具が治ったようだ。

「両備、そろそろ行くぞ。あいつらに攻撃するのは今しかない」

「ぐすん、ええわかったわよ。両備たちの怒りを見せてやるわ!!」

両備の行動に、中武は「じゃあ行くぞ!!」とレバーを動かす、するとキンカクギンカクーンが飛ぶと同時に巨大な角で風神メカと雷神メカを挟むと同時に。みんなは武器を構えた。

.....

「福音…、その、さっきはアリガト……」

「え、なにが?」

両備は福音にお礼を言うが、党の彼女は何かと首をかしげている。それを見た彼女は。

「ああもう……何もないわ。じゃあ行くわよ!!」

そして、みんなは2体のメカに向けると各自秘伝忍法・秘伝技を出していく。

「秘伝忍法・デッドスクリュードラゴン!!」

「秘伝忍法・おおよろこび」

「秘伝忍法・時刻極楽万手拳!!」

「秘伝忍法・デッドフォックス!!」

「秘伝忍法・氷の足!」

「秘伝忍法・ヴァルキューレ!」

「秘伝忍法・シヨギヨウムZEX!」

「秘伝忍法・メヌエツトミサイル!!」

「秘伝忍法・お尻がドーン!」

「秘伝忍法・The World is mine!」

「秘伝忍法・パンパンケーキ!」

「秘伝忍法・美しく青きガンスリンガー!」

「秘伝忍法・黒氷!!」

「秘伝忍法・善悪のPurgatorio」

「秘伝忍法・聖火の夜想曲!!」

「秘伝忍法・蒼い紅!!」

「福音流忍法・マカロン爆弾!!」

「佐々木流忍法・舞い降りる時雨桜!!」

「幹子忍法・水大砲!!」

「中式流忍法・泥爆弾!!」

そして、強力な風と鋭い刃物に無数の拳と強力な電気将球、凍り切った触手と銃から放つ弾に帽子(?)放たれる黒い塊と無数のミサイル。雲雀のお尻(により体当たり)と無数の薬品に巨大なパンケーキと銃から放たれる無数の銃弾、巨大な氷と黒い覇気による切込みに高熱の炎と蒼い炎。そしてマカロン型の爆弾と時雨桜のように滑らかに流れる切りに強力な水圧と泥団子型の爆弾による一斉攻撃が放たれた。

そして風神メカと雷神メカの胴体にあたり穴が開き、そこから電気がビリビリツ!!と出てくると同時に中から『なんであたしたちがこうなつちやうの?!』『む、無念』と彼女の叫び声がある、その途端。

ドカアアン!! ドカアアン!! チュドオオン!!!!

メカが爆発すると同時に白井と双味が出てきてどこかに飛ばされてしまったのであった。

しかしみんなは気づかなかった、この時勇樹は大変なことになっていることは知らず

に。



## 『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第七話―前編

「えっと、佐介君ここで合っているかな？」

「わからないよ、でも彼女たちが通ったところはここだと思うよ飛鳥ちゃん」

佐介たちは、トンネルの先を進んでいっているが思った以上に長く、カバンから絨毯型の道具『空飛ぶ絨毯』に乗って移動してる。

「これは長いですね、下手したら海底…いえ、地底に着きそうです」

「ああ、百合子の言ったとおりだ。これは非常に長いな」

百合子とアレンも、あたりを見渡しながら進んでいると。彼女たちはあるところへと出た。

それは空が赤く地面が荒れていて、月か太陽か判らないが空には何かが浮かんでいる。そして中央には巨大なツボが置いてあった。初めは何かとみんなは思っている。

「ツボだね…」

「ええ、ツボですね」

「なんでツボなのかな？」

「ああ、しかし大きなツボだ」

4人がツボを見て眩いた瞬間、突然どこからか「ハハハハハッ！ よくここまで来たなあ！」と、聞き覚えがある声があった。

そして、ツボの後ろから一人の少女が出てきた。それはブン・ボーグのボスである摸野沙市音である。

「沙市音！ 貴様勇樹をどこにやったんだ！」

「勇樹君を返してください!!」

アレンと百合子の言葉にツ彼女は「勇樹？ あああいつか、返してやるよ」と言いながらスイッチを押した。

それを聞いた2人はホッとすると同時に、ツボからある少年が現れた。それを見た4人は勇樹だと確信したが、普段の彼とは何かが違っている。

それは、彼の背中に巨大なアンテナが2つ付いていて右手には棘付き鉄球左手には鋭

いサーベル、そして首には紫色をした首輪をしている。

「ゆ、勇樹君だよね……?」

「ゆ、勇樹。どうしたんだ」

2人は彼に向けて言うが、勇樹は反応せずその場で立ち止まっている。それを見た沙市音はこんなことを言い出した。

「反応しないのも当たり前だ、勇樹はちよいつとした道具を使ってこっちの支持に動くようにしたんだ。行けよ!!」

そしてどこからかりモコンを出してレバーをガチャンつと動かした、すると勇樹の目が開く。だが彼の目は光を失った目をしている。

すると勇樹が「わかりました……」と言うと同時に、右手の棘付き鉄球が離れるが中の鎖が出てきて百合子に向けて放った!!

それを見たみんなはとっさによけるが、攻撃の衝撃で百合子が「きゃっ!!」と倒れる。そして、鉄球を自分の所の戻して百合子に向けて再び放つ。だが。

「っ！ 目を覚ますんだ！」

アレンは巻物を刀に変えて彼の攻撃を跳ね返す、勇樹はそれを華麗に受け取ると棘付き鉄球を元のところへと戻す。そして左手のサーベルから電気が流れるとアレンに向けて攻撃する。

「くっ!!」

キンキンッ!! カンッ!!

アレンは攻撃から守っているが、勇樹の動きが素早すぎるのか攻撃ができない。

佐介と飛鳥は、勇樹を動かしている沙市音のコントロールが原因ではないかと思ったのか2人は『それを返して!!』と走っていくが、彼女は「そうはさせねえ!!」とボタンをポチッと押した、すると。

バギバギツ!!

地面から突然巨大な何かが現れると同時に、佐介と飛鳥をつかんだ!! 突然のことなので2人は『うわっ!!』と驚いた。

「ふふふ、驚いたか? このメカは円が作った一種だな。お前たちを倒すために作った最終兵器、『ルネサンスメカ』だ!!」

それと同時にアレンから「ああっ!!」と声があると、刀が飛ばされてどこかに突き刺さる。

そして勇樹は「これで決着がつく……」と呟くと、サーベルで彼女を切り裂こうとする……だが。

「伊江流忍法・叫音波・吹き飛ばし!!」

「福音流忍法・プリンパンチ!!」

耳がおかしくなるほどの音と巨大なプリンが彼に当たると同時に、勇樹は向こうのツボへと当たった。それと同時に斑鳩達がやってきて、みんなを見つける。

「飛鳥さん佐介さん、大丈夫ですか!？」

「一体何があつたんだ!!」

「佐介、これはなんだ!？」

斑鳩、焰、光牙は何があつてどうしてこうなったか聞いてみると飛鳥と佐助が「みんな、実は!!」と言おうとするが、地面から突然無数のマジックハンドが出てきてみんなを捕まえる。

「うわっ、なんだ!？」

「か、体が動きませんっ!!」

「迂闊だっ……!!」

みんなは突然の事態に驚いている。そして勇樹が立ち上がると同時に沙市音はこんなことを言い出した。

「ふふふ、今回こそは勝つてやる。このツボ型ブラックホールバキュームで2度と出てこないようにしてやる!!」

それを聞いたみんなは「なんですって!?!」と驚く、そして沙市音は「勇樹、あいつらの足どめをしろっ!!」と支持すると彼は「わかりました……」と言うと同時に、太田たちに向けて攻撃をする。

「うわっ!! 勇樹君どうした!?!」

「な、なんだ!?!」

突然の事態に太田たちは驚いていると、佐介が「首輪です、あの人から動かしている操縦機と首輪で勇樹さんは操られています!!」と彼らに叫ぶ。

それを聞いた佐々木は「それで勇樹君は私たちの言葉を……」と呟くと、勇樹は背中アンテナを起動して、今日ろくな電磁波を放った。太田たちはとっさによけて攻撃をかわすが、どうやって勇樹を戻すことが切れるのかみんなは考えている。そして……。

「起動オン!!」

沙市音がコントロールのスイッチを押した瞬間、突然ツボから何か音がすると同時に吸い込み始めた。どうやらブラックホールバキュームが起動したらしい。

それを見た彼女は「今だな」とレバーを引いた。するとマジックハンド動くと同時に、彼女たちはブラックホールバキュームに吸い込まれた!!

『うわあああ!!』

『きゃあああ!!』

ブラックホールに吸い込まれたみんなを見た沙市音は「ありや、ガチで勝ちました……」と、目を丸くして驚く。それと同時に上空から「さすがですわ沙市音様!!」と円たちがやってきた。

「これでは勇樹さんたちを倒せば、わたくしたちの勝ちですわ!!!」



「ん？　そう言えばそうだな…、よし勇樹さっさとあいつらを倒すんだ!!」

沙市音はそう言いながら操縦機を動かすと、勇樹は「わかりました……」と言いながら棘付き鉄球を出すと、太田たちを捕まえた!!

「うわっ、勇樹君!？」

「くそっあいつら勇樹を利用して…!!」

太田と中氏はそう言うが、勇樹は「終わりだ…」と言うと同時に彼らをブラックホールバキュームに投げ込んだ。だが。

「怒りましたツ!!!」

すると百合子が鎖から勢いよく出ると、勇樹に強烈な蹴りをくらう。それを喰らった彼は「ググツ!!」と呻くが、太田たちはツポに入ってしまった。

だが幸い彼らたちはツポのふちに捕まっているため、中に入っていない。

そして百合子は「もう怒りました、操っている勇樹君はいつもの勇樹君ではありません

ん!!」と言うとか、彼をつかんでツボのところまで走ると……その中に飛び込んだ。

「ええっ!？」

突然の行動に太田たちは驚き、ブン・ボーグのメンバーは「何!？」と目を丸くしてみている。すると、太田たちのつかんでいたツボのふちが壊れると同時に、彼らもツボの中へと落ちていく。

そして、みんなは穴の中に入っていった。

.....

「ありや、今回はあっさり勝ちましたな……」

「そうですわね」

「ああ、でもあたしたちが勝ったからいいじゃない?」

「僕もだ、さっさと行くぞ」

双味の言葉に、白井は「それいいわね」と言いながらみんなは行くこうとした。その瞬間。

ビリビリッ、バギギギギッ  
!!!!!!

突然、ツボの中から無数の雷と光が出てきたのを彼女たちは驚き、沙市音は「な、な、なんだ!」と急いで確認してみる。

すると、ツボの中にある人たちが出てきた。それは……………。

## 『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』第七話―後編

突然、ツボの中から無数の雷と光が出てきたのを彼女たちは驚き、沙市音は「な、なんだ!」と急いで確認してみると、ツボの中からある人たちが出てきた。

それは9人の少年少女の彼ら、太田たちが出てきた……いや、正しくは。

「み、奇跡の奴ら、どうしてここから出たんだ!？」

そう、先ほどツボに落ちたら勇樹たちが出てきた。

しかし、勇樹は首輪が外れていて目には光が宿っている。そして勇樹たちの服装は普段の姿とは違い、髪に動物・虫をした特殊なピンをしている。

そして彼らの背中には佐介と飛鳥たちが背負っていた。

「奇跡・スキル全開モード!!」

そしてみんなは佐介たちを近くにあったバギーに入れると、勇樹は「ごめんな、でも

今度はオレが助けてやる」と言うのと、太田たちに向けてこう言った。

「各班指令を言う、目標はブン・ボーグの巨大メカ『ルネサンスメカ』を破壊する、以上!!」

それを聞いたみんなは「了解!!」と答えると、メカに向けて走っていく。それを見たブン・ボーグのみんなは。

「な、なにがあつたんだ!？」

「勇樹があたしたちの言うことを、いえ元に戻っている!？」

「お、落ち着くんだ。円、さっさとやるんだ!!」

「了解しましたわ、ルネサンスメカ。やって下さいまし!!」

それを見たブン・ボーグは驚いたが円は操縦機をカチャカチャと動かすと、メカは『リョウカイダー!!』と叫ぶと同時に6本のアームが動くと同時に勇樹たちに向けて放った!!だが、勇樹たちは。

「そりやつー！」

「よっと」

「ふっ!!」

「ひらり」

「ふんっ!!」

ドゴンツ、バゴンツ、チュドーン!!

それらをまるでスローもしょんしたミサイル化のように、華麗によけていく。そしてそのままメカに向けて走っていく。

だが、勇樹は何かを察知したのか後ろに向けて「む？」と振り向く。すると、巨大なアームが振り向いて再び攻撃しようとしている。それを察知した彼は。

「太田、暗山。後ろのハンドに攻撃するぞ!!」

「はいっ!!」「おう!!」

勇樹はそう指示すると同時に、ショットガン型の武器を出す。太田はモーニング・ス

ター、伊江はスピーカー型のグローブを出して一斉に放った。

バンツバンツ!! バンツ!!

ギヤララララツ!!

キイイイイツ!!!

バガアツ、バゴン!! チュドーン!!

そしてハンドは彼らの放った攻撃によって粉々に壊れていく。そして3人は終えると同時にメカに向けると再び走り始める。

そして彼らは一斉に飛ぶと同時に、手持ちの武器を構える。と勇樹は。

「一同、一斉発射!! 打てえ!!!」

勇樹が言うと同時にみんなは引き金を引くと、ガガガツ!! とメカの顔に向けて攻撃する。するとメカは爆発すると同時に物凄い量の煙が出てきた。

「でえっ!! 爆発した!!」

「ど、どうすんの!?!」

「円、これはさすがに負けか…」

ブン・ボーグの3人は慌てていると、円は「ふふふふ」と不気味な声がすると同時にこんなことを言い出した。

「これは仮の姿、本当の姿はこれですわあ!!!」

そして彼女はレバーを動かすと、煙の中からメカの影が出てくると同時にメカの目つきが赤色に光り鋭く変化した!!それを見た彼らは「何だ!?!」と驚く。

煙が晴れると同時に、メカは「ギガンドオオオ!!!」と叫ぶと同時に、ある変化が起きた。

それは、手が伸びると同時に一部が変形し始めたこと。

それは、足が突然伸び始めて関節が出てきたこと。

それは、角が変形しどくろの顔が出てきたこと!!



変形し終わると同時に、ブン・ボーグはメカに向けて飛ぶとハッチが開きそのまま入り込んだ。そしてハッチが閉まるとメカから『グルルルツ』とうなり始めた。

「これが真の姿『シャドー・ルネサンスメカ』ですわ!!」

円の言葉に彼女たちは「そんなのあったか」と呟くと、円は「早速ですが『ルネサンス・三大発明攻撃開始!!』と叫ぶと同時に、コントロールのスイッチをカチツと押した。すると。

『ルネサンス・三大発明攻撃!!』

シャドー・ルネサンスが叫ぶと同時に、突然四角いアームが伸びると同時に『活版印刷!!』と叫ぶと、先がドクロのマークが2種類が出てくると勢い良く伸びていく。

勇樹たちは、一斉に放つが活版印刷はそれを跳ね返しながら伸ばしていく。

それを見た勇樹は「だめだ、逃げるぞ!!」と言うとみんなは一斉に逃げていくと同時に、アームは地面にドシンツ!! と押した。引いた時には、どくろマークができていた。

だが、メカはしつこく。何度も彼らに向けて攻撃をするが。

ドシンツ!!

「うわあ!!」

ドシンツ!!

「ヒヤツ!!」

ドシンツ!!

「ギャツ!!」

ドシンツ!!

「ふっ!!」

彼らはそれをよけながら走っていく、その影響で印鑑の後はドクロのマークがたくさ

んあった。

そうしていると、巨大なアームが彼らの前に出てきて潰そうとした!!　すると。

シュツ……ガキンツ!!

佐々木が突然、鞘を出すとそれを柄に入れると刀と鞘は弓に変形した!!　そして彼女はさくら色の矢を出すと、活版印刷に向けてとそれを放った。

矢はそのままそれに向けて行き、ぶつかると。

バゴオオオン!!

大爆発すると同時に、印刷は別のところへと当たる。それを狙っていたのか、中氏はハンマーは銃に変わると活版印刷に向けて放つと。

チュドオオン!!

再び爆発するのであった、それを見たブン・ボーグは。

「あ……」

目を丸くして驚く。それを見た沙市音は「オレに任せとけ!!」と言うと同時に、コントロールをカチャカチャと動かす。すると。

『羅針盤鳥!!』

メカが叫ぶと同時に、3羽の鳥型のメカが出てくると首が突然回転し始めた。カチカチツ!! と回転し西方面に顔が向くと、突然鳥メカはその場から発射されるとそこから勇樹の方へと変更していくと。

ビビイツ!! ビビイツ!!

口から光線銃を出して彼らに向けて放った!! だが。

「護るよみんな、シャイン・シールド!!」

幹子はみんなに向けて言うと言福音は「うん!!」と答えると、2人は道具から光の楯とホイップクリームのバリアを放って彼らを守った。そして光線は。

キンキンッ!! キンッ!!

攻撃から跳ね返して、他の所へと当たる。そして伊江は「打てえ!!」とスピーカーと出すとみんなは一斉に鳥に向けて放つ。すると。

バゴオン!!

伊江の放ったスピーカーが当たると、鳥メカは爆発した。しかし残っている鳥メカが再び放つが幹子がシールドを作って防ぐと佐々木が弓で放つ。

しかし、鳥メカが囿としているのか。彼らがそれに向けて放っていると、後ろから2羽の鳥メカが放とうとしている。しかし。

「稲妻斬り!!」

アレンが刀を出して2羽の鳥メカに向けて刀を振ると、メカは胴体が真っ二つに切れると同時に爆発した。そして太田が鳥メカに向けて放つと、メカは爆発してその場か

ら墜落した。

それを見たブン・ボーグは「あわわっ」と滝汗を出していると、双味が「僕がやってやる!!」と操縦機をいじる。すると。

『時限火薬!!』

突然メカが叫ぶと同時に、口が開いて中から何かが出てきた。それは爆弾型をしたミサイル……。

「なに!?!」

それを見た勇樹は驚くが、時すでに遅し。爆弾は飛鳥たちが乗っているバギーまで飛んでいき落ちると同時に。

バゴオオオン!! チュドオオオン!! ドガアアアン!!

その場で爆発した。

「よっしやああああ!!」

「やるじゃん双味!!」

「驚いた、簡単にやっつけたわ」

「わ、わたくしより上手い」

4人はそれを見て答えるが、突然上から何かかぶつかる音する。彼女たちは何かと  
思つて、試しに白井は梯子に上つてハッチを開けてあたりを見渡してみると。

「私たちを甘く見ないで!!」

なんと、飛鳥たちのけがが治っていていつの間にかメカの頭上に乗っている!!

それを見た彼女は「どわあ!!」と驚くが、梯子から離れると白井はコックピットへと落ちてしまった。頭にたんこぶができる程度ですんだ。

それを聞いた3人は、まさかだと思つて再び画面を見てみると、勇樹たちがその場で立っている!!

火の海の中、彼らは炎の球に閉じこもっている。それもそのはず、この業ができる者は。

「ファイアー・ボール!!」

百合子・ビューティー以外この業は出来ない。そして炎がはじかれると同時に火の海は消えていくのを見た彼は「行くぞ!!」と叫ぶとみんなは同時に勢いよく飛ぶ。

それを見たみんなは「へえ!?!」と驚いていると、双味が「攻撃してやる!!」とレバーを動かすが。メカはその場から動かなくなつた。

「あれ、おい双味!! どうなつてんだこれ、動かないぞ!!」



双味は円に向けて言うと、彼女は「まさか……」と言いながら操縦機を見てみると、彼女は顔を真っ青になると同時に、こんなことを言い出した。

「め、メカが……故障……ですわ」

それを聞いたみんなは、「うそ!？」と顔を真っ青になりながら驚いた。そして。

「そこまでだ!!」

そして勇樹は叫ぶと同時に百合子に向けて「百合子!!」と勢いよく呼ぶと、彼女は「わかりました!!」と言いながらオレンジ色のリングを出すと、彼に向けて投げた。

それを手にした彼は、リングを上投げると。リングは長い形をした剣に変形した、彼はその剣をつかむ。そして。

「ファイヤー・ソード!!」

勢いよく剣をXを書くかのように斬ると、ドクロの鼻と目から煙と電流が漏れ出し始めた。それを見た飛鳥たちは一斉に飛んだ瞬間。

『今度こそ、爆発だあ!!』

メカが叫ぶと同時にメカがばらばらに斬れると、中にいるブン・ボーグが現れると彼女たちは「あ」と目を丸くして驚いた瞬間。

ドガアアアアアン!!!

その場から大爆発するのであった。飛鳥たちは勇樹たちと一緒に来た道から急いで出て行き外に出ると、穴から爆発と煙が出てくるのであった。

その煙の中から、ブン・ボーグが出てくると「覚えとけえ!!」と叫びながら飛んで行ったのであった。

.....

「では、飛鳥さんたちと久しぶりに会えたことと同時に勇樹君が戻ってきた事、そして飛鳥さんたちの知り合いに会えたことに……乾杯!!」

「『乾杯!!』」

勇樹は飛鳥たちと再び再開すると、飛鳥たちの知り合い太田たちが知り合った忍び達のことを話すと、勇樹は「ああ、そう」と顔を赤めると別の方へと目を向ける。

そして彼はカバンからドアを出して半蔵学園の体育倉庫へと付けると、そこに入って宴会(?)をするのであった。飛鳥たちだけではなく、忍びのみんなと一緒に食べたり飲んだり、話し合うのであった。

「そう言えば、勇樹さんはなぜわたくしたちを見ず両備さんに未来さんを向けているのですか？」

斑鳩は何か思い出したのか、太田に向けて言うとは彼は「ああ」と言うと同時にこう答えた。

「勇樹君は、爆乳が苦手すぎるほどの女性恐怖症です」

それを聞いたみんなは「え？」と目を丸くするのであった。

.....

彼から女性恐怖症になったわけを斑鳩が聞いて納得すると、飛鳥はこんなことを言い

出した。

「そう言えば、勇樹君はブン・ボーグの彼女たちに操っていたのにどうしたら戻ったの？」

「そう言えばそうですね、どうしたら戻ったのですか？」

それを聞いた佐介は勇樹に向けて言うと、彼は「それは……」と百合子に向けると彼女は「えへへっ」と照れるのであった。

く回想く

勇樹たちがブラックホールバキュームに吸い込まれて、数分。

彼女は小さな声で勇樹に向けてこう言った。

「戻ってください……私の、勇樹君に……」

そして彼女は勇樹に抱き着くと、彼の口にキスをした。その瞬間。

ピシッ……ピシピシッ……ガシャン!!

首輪が割れると、勇樹の目に光が戻ってくる。彼は百合子に向けて「ごめんな」と、再び抱き着いた。それを聞いた彼女はふわっとほほ笑むと。

「それじゃあ行きましょう!!」

それを聞いた勇樹は「わかった!!」と来ている器具を外すと、みんなを救って太田たちと一緒に彼女たちを背負うと外に出た。

先ほどの姿は、彼も知らないうちに変身していたようだ。

く回想・終く

それを聞いたみんなは、顔を真っ赤にしてうつむくが。勇樹と百合子は何かと首をかしげるのであった。

.....

そして翌日、勇樹たちは飛鳥たちと一緒に街を観光し。焔たちのサバイバル生活、雪

泉の修行の付き合い、雅緋の悩みなど、みんなが初めて行くところに行くのであった。

そして、楽しい日々は過ぎていき。終日。

「さて、帰るとするか」

勇樹は、最終日になりみんなはバギーに道具などをバギーに乗せて、飛鳥さんたちからお土産などを受け取って移動しようとしている。

「また会おうね、みんな!!」

「わたくしたちはあなたたちのこと忘れません」

「今度はアタイたちが来てやるぜ!!」

「ああ、お前たちの世界に興味がある」

「ひばりもだよ!!」

「僕もです、みなさん……!!」

佐介たちはみんなに向けて言うのと伊江とアレンは「ああ、もちろんだ」「私たちが来たら、みんなを連れて行かせてやる」と答える。

「飛鳥ほどではないが、わたしはお前たちに興味がある」

「太田様、今度はもやしを持っていきますわ!!」

「また会おうな」

「むかつくところはあるけど、あんた気に入ったわ」

「お姉さんのこと、忘れないでね」

「オレもだ、今度はそっちに行くぞ」

光牙たちに太田と百合子は「もちろんです!!」「また会いましょう!!」と答える。

「あなたは只者ではありませんが、わたくしと同じく正義がありますね」

「中弉、我はお前の腕に興味がある」

「お主は美野里と同じじやが、憎めないところがありますね」

「今度アタシたちが行ってやるよ」

「みのりも、福音ちゃんにうれしいもの作ってあげる!!」

「福音さん、小森さん。あなたたちと会ってうれしかったです」

紫苑たちに祝と中弉は「福音もうれしかったよみんな!!」「今度はこっちに来てくれよー」と答える。



「佐々木、おまえは私と同じ刀の使いだがなぜ違うんだ。今度教えてくれ」

「美樹さん：今度、私も一緒に冒険：：：したい：：：ですけど、いいです、か？」

「美樹、お前は本当に変わったやつだな」

「さ、佐々木。勇樹に难道だけ……バカ姉がおかしくならないように直してと」

「はうくん、今度両奈ちゃんもその世界に行つて見たいよう!!」

「おい両奈、それやめろ。美樹、お前は変な性格だな。両奈より面白かつたな」

蒼馬たちに佐々木と美樹は「私も同じよ」「それは行けると思うよ」よ答える。

そして、勇樹は「じゃあ行くぞ」と言いながらレバーを動かすと、バギーから電気が出てくる。

すると彼らが乗っている専用の乗り物、奇跡バギーの前方から時空を超える特殊空間の扉が開くと同時に彼はアクセルを一気に踏み込むと穴に入り込む、やがて姿が消えたと同時に扉が閉じる。

それを見たみんなは、物寂しそうに空を見るのであった。

「また会えるか佐介、あいつらに」

「私もまた会いたいです……」

「オレもだ、佐介」

光牙、紫苑、蒼馬に佐介は「また会えますよ、いつか」と言いながら彼は手を見る  
彼の手には、みんなで撮った最高に記念写真が握っていた。

f i n

『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』 第貳章 第一話 『転送』

東京都にある半蔵学院の忍び部屋、そこには佐介たちがある物を広げていた。

「うわあ、これが勇樹さんの作った道具ですか」

佐介は、勇樹が元の世界に戻る前に渡した風呂敷を広げると、そこには見たこともない道具が山ほどあった。

初めて見るみんなは「うわあ……」と驚いている。

「えっと、このうちわも勇樹君が発明したものかな……？」

「ですけど、うちわはだれでもできますし。それにこのロープに双眼鏡も」

飛鳥はうちわを手に行っている。斑鳩は磁石を手にして答える。葛城は「そうか、そうとも言えないが」と藍色のゴム手袋を手にして伸ばしている。

それを見た風魔は「うちわにしては、嘘くさいっすねー」とジト目で見て答えるが、相馬は「そうか、オレは気にしないけどな」と答える。

すると、雲雀が「ねえ、これはなんだろう」とあるものを出した。

それは、スイッチが4つと電球らしきものが付いた不思議な道具。

それを見た柳生は「なんだ、それ？」と頭を傾げる。初めて見る雲雀は「なんだろう？」とスイッチをカチカチツといじっている。すると。

カコツ カコンツ カチツ

機械から何かの音がして電球がチカチカと光始めた。

「あれ、この機械から光が――」

雲雀が何かを言い続けようとした途端。

機械からあふれる光がどんどん大きくなっていき、みんなは光に包まれた。

そして光が消えると、佐介たちの姿は消えていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

キンツキンツキンツ!! ガンガンガンツ!!

ここは珍等師学園都市の中にある探偵事務所『奇跡』、その地下に勇樹が何かを作っている。

それは大きな象の姿をしたメカだが、体にはコードが付いていて象の頭には4本のアンテナと2本のレバーが付いている。

「えっと、これを取り付けてエネルギーが安定すれば」

勇樹は、画面を見ながらコントロールを操縦している。そして画面に映し出しているデジタルタイマーのカウントが『99%』になろうとしている。

「やったー、ついに完成するぞー!!」

勇樹はワイイと両手を上にあげて喜んだ。その時。

ピガアアアアッ!!!

「な、なんだ!?!」

突然象型のメカの上から光が輝きだしたため、勇樹は何かと驚いた次の瞬間。

『『『『『うわああああっ?!?!?!?!?!  
!!?!?!?!?!?!』』』』』

ドンガラガッシャアアアアンッ!!!

「ノワアアッ!! お、オレのメカがつ!!」

何者かがメカの頭に当たると、メカはばらばらに壊れてしまった。それを見た勇樹は

「真つ青になって急いでメカに向けて走っていると、ある人物が出てきた。

「ぶはあッ！ 助かりましたあ……」

「あれ、さ、佐介さん?!」

佐介が現れたことに勇樹は驚くと、扉がプシューと開くと太田たちが中に入ってきた。

「勇樹君、どうしたの」

「とんでもない音が……あり?」

「佐介君に飛鳥さん、それにあなたたちは」

太田、伊江、佐々木はそれらを見ていると、佐介が「あははははっ……はあ」とため息をするのであった。

.....

「原因はどうかやら、この発明品『タイム・ボンバー 半往復型』のようだ」

メカの山から佐介たちを助けた太田たちは、みんなを連れて多目的室へと移動してこ

こに來た原因を判明した。

その原因は、勇樹の発明品の一つ『タイム・ボンバー 半往復型』だと判明した。

「そっか、ひばりが動かしたスイッチって。もしかしてそれを？」

「うん、どうやら雲雀さんが動かした結果、偶然オレたちの世界に行くコードを入力したんだよ」

それを聞いた柳生は「それか」と納得した。ただ。

「いくら友達だとは言え、勇樹離れすぎないか？」

葛城の言う通り、彼女あつちががいる席から勇樹が座っている席までは約10メートルほど離れている。

それを聞いた百合子は「こ、こうでもしないと。勇樹君落ち着かないのです」と苦笑いで答える。

すると、太田は「あれ？」とある事に気づいた。

「人数が少ないような気がするけど……？」

それを聞いたみんなは。周りを見ると、確かに、数名少なくなっている。

すると、総司は「もしかして、ここの中を歩き回ってるのでは？」と答えた瞬間、勇樹が「それは大変っ!!」と顔を青ざめた。

そして彼は「変な所をいじつてくれないでっ!!」と言いながら部屋から出ていくので

あった。それを見た斑鳩達は「はて？」と首をかしげる。

「いったい何が、『変な所をいじつてくれないで』でしょうか？」

佐介は勇樹の行動に答えると、伊江が「まあ、ついてくれば分かるぞ」と言つて彼女たちは部屋から出ていく。それを見たみんなは「いったいどういう意味？」と思ひながら、彼女たちの後を付いて行く。

.....

「おおお……これが彼の……!!」

そう言うのは、アークエンジェルのドラムの橘。彼女がある物を見て興奮している。それは。

ガランゴロにモグドン、クラブ・マリんにキコリンメカにねじ巻きピエロメカなどと  
言つたメカが10体ほど置かれている倉庫にいる。

そして、橘は懐からカメラを出すとパシャパシャとメカを取り始めた。

「すごい、これが彼が作つた……!!」

橘はさらに興奮しカメラで撮っていると、扉が開く音がした。それを聞いた彼女は何



かと振り向くと、椿を含むアークエンジェルのメンバーが入ってきた。

「あれ、みんなどうしてここに？」

「あんたが行くところは大体は分かるわよ」

「せやせや、まず思い出させるのはここしかあらへんからな」

「そうそう、桶は機械が好きだからねー」

「そうだね右京」

それを聞いた桶は「そ、そうだね」と顔を赤くすると、その場から離れる。

そしてカメラにはメカの写真がたくさん載っているのであった。

.....

「ここが訓練室か、思った以上に広いな」

光牙は看板に書かれたとおりに進んでいると、訓練室と言う部屋に入った。しかし肝心の中は暗く奥までは見えない、ただ足音が良く響くため結構広いと言うのは分かっている。

「しかし、暗いな……電機は確かこの壁に……」

光牙は壁に手を当ててスイッチを探していると、カチツと音が響くと同時に部屋に灯

りがともされる。

そして、彼が目にしたものは。

ピラニアが泳いでいるプール、天井に鋭い針が無数に取りつけられている部屋、ランニングマシーンの後ろに大きなハンマーが付いているなどと言ったとんでもない物が揃っていた。

「な、なんだこれは!?!」

これを見た光牙は驚いている、彼は元蛇女の生徒で過酷な訓練をしているが、このような装置や生物が揃っているのは初めて知るのであった。

さらに、よく見たらわからないがノコギリに赤い液体が付いている。それを見たとき、彼はこう確信した。

「( )は……あれとか出ているのか」

そう思うと彼は恐怖以上に怖い物が浮かんできたため、この部屋から出てそつと扉を閉めるのであった。

「これがあの方の部屋……」

そう言うのは、楯薪ロールが特徴の女子生徒『胡蝶』であった。

彼女は都立薄桜女学院の生徒であり風紀委員会の風紀三皇女の桜の君、才色兼備の努力家である。

彼女が見ている先は、『勇樹の部屋』と描かれた分厚い鉄の扉に立っている。

「ふっ、どうせあの方のことですから。きつとお部屋と言うより汚部屋だと思えますわ」  
彼女はそう言いながら扉を開けると、そこで目にしたのは。

宝石のように輝ききれいになっている床と天井と壁、雪の様に鮮やかな布団、まるで太陽がそばにあるかのように明るい蛍光灯。

本棚は右肩上がりの様に並んでいて、メカの設計図があると思われる箱は宝箱に入れているが一枚だけ出かけている。

それを見た彼女は「な、なあ…!？」と驚いている。

すると廊下から「胡蝶様！」と神咲たちがやって来た。

もちろん、神咲たちは勇樹の部屋を見て驚くのであった。

.....

「だあ……まったくみんなあっちこっちに行ってもう大変だよ」

勇樹はそう言いながらみんなを集めると、福音が「そうだね」とジト目で見るのであった。

だが、百合子は「でも勇樹君」とある事を言い出す。

「皆さん学生ですから、きつとここに軟禁されると」

それを聞いた勇樹は「あー、それもそうでしたね……」と悩み始める。それを聞いた太田は「そうだ！」とある事を言い出す。

「勇樹君のが学校で一緒にするのはどうかかな？ 風紀委員もいるし要らなくなった専用の倉庫もたくさんあるかもしれません!!」

それを聞いた勇樹たちは「それだ!!」と声を合わせて同意する。

だが、佐介は「あ、でも」とこう言った。

「僕たちがこちらの世界に来たことにありますよ、もしこの生徒じゃないとわかったら」

それを聞いた途端、太田は「心配ご無用です」と、カバンを持ってきた。

そして、カバンを置くと、蓋が開いて中からカメラとキーボードと画面が3つ出てきた。

「この『即席生徒手帳製造機』で皆さんの生徒手帳を作ります！　そして名前はこつちが改良しておきます!!」

それを聞いた佐介と飛鳥は頭から？マークを浮かばせるが、光牙と焰に紫苑と雪泉に相馬と雅緋は「なるほど」と納得する。

そして太田は飛鳥たちを撮影して、全員分の生徒手帳を製作したのであった。

## 『閃乱カグラ 忍たちの生き様編』 第三章 第二話『不思議』

次の日、飛鳥たちは学校へと行き。タイムマシンが完成するまで登校するのであった。

ちなみに、勇樹のクラスには『柳生吹雪』と『白井雲雀』、『霧里風魔』の3名がいる。シノビ以外の授業を初めて習うので戸惑っているが、みんなが手伝ってくれるので何とか授業が出来ている。

.....  
 「勇樹、少しいいか?」

休み時間、柳生は勇樹に向けて言う。彼は「ん、何?」と答える。  
 すると柳生は「これはなんだ」とある用紙を見せた、そこに書かれていたのは。

『3日後、アブ引き部が結成してからもう半年!』

そこで我が珍等師学園高等部はアブ引き部の皆さんを歓迎します。

初出場して見事優勝し、廃墟都市化になりかけたのを救ってくれた奇跡の組織、これ

はもう奇跡とは言い切れません!』

それを見た彼は「ああ、これね」と言うと、柳生は「どういう意味だ?」と言ったため、勇樹はこう答える。

「3日後に、オレが考えた部活動・アブ引き部が結成してから丁度半日になってね、それを歓迎をすることになってんだ」

「ほう、それでアブ引き部とは?」

「そうだね、まあ簡単に言いますと私が考えたオリジナルの部活動です。話は長くなりませんがアブ引き部は『あなたの部活動で一つだけ共通する部活動、略して『アブ引き部』』でして、今は19組のも他校や部活動に委員会からのみんながいて……」

勇樹の話に柳生は「言わなきゃよかった」と後悔した。

.....

次の日、飛鳥基『服部飛鳥』は佐介基『服部佐介』は勇樹がメカを作っている研究所の中にあるゲストルームで泊まっている。

「そう言えば、佐介君」

「なに、飛鳥ちゃん」

飛鳥は突然佐介に向けて言う。彼は答えた、すると飛鳥はこんなことを言い出す。

「勇樹君がいつも作っているあのロボット何だけど、資金源はいつたどこからかな？」

それを聞いた佐介は「そう言えば」と考え込む、考えてみればそうだ。

先ほど佐介たちが落ちてきた部屋のあたりを少し見渡したが、そこにあつたのはいろんな装置が置かれていたり薬品がたくさん積んでいた。

それを見た飛鳥は不審に思い、佐介に相談した。

「そう言えば、勇樹さんはいろんなメカを作っていますが。その光景は一度も……」  
「だよね……もしかして」

2人は。彼は何か恐ろしいことをしているのかと思ひ、顔が青くなつていく。

次の日。勇樹が「そんじゃあ、行ってくるから」と言いながら外に言ったため、飛鳥と佐介、焰と光牙、雪泉と紫苑、雅緋と相馬は彼の後を追いかける。

「勇樹君が外に出たのは朝6時半」

「学校ではありませんね、いつもは8時ぐらいに登校しますから」

「そうだな、だが目を離さないようにするか」

「そうだな、つてそう言っているとあいつ！」



飛鳥、佐介、焰、光牙が言っていると。勇樹は突然右に曲がったためみんなは急いでその後を追う。

.....

勇樹を追って数分後、初めに彼が入っていった場所は。新聞配達であった。

「初めはここに入っていった」

「ああ、でもどうしてここにだ？」

「そうですね、古紙でも集めるのでは。ありませんね」

「確かにそうです……っ、彼が出てきます」

雅緋、相馬、雪泉、紫苑はそう言っていると勇樹が出てきたため、みんなは物陰へと隠れる。

勇樹が出てきたが、服装が新聞配達の服装になっている。そして彼は「それじゃー行つてきまーす」と言うとそのままだこかへと行く。

そして約1時間後、勇樹は新聞配達へと戻ると、何かを受け取って配達から出てどこかへと言った。

「なんだろう、結構すごい仕事をしていたね」

「もしかしたら光牙君よりもすごいことをしているのでは？」

「そうだな、しかし今度はどこに行くんだ？」

飛鳥たちも急いで後を追うと、今度は自動車を製造している工場へと付いた。

そこにこつそり入ると、勇樹は大型の自動車のエンジンを作っている。

「トラックや工乗用の乗り物のエンジンを作っていますね」

「そうですね、しかしなんでこんなにも働いているのですか……？」

「もしかして、ここで何かを作っているんじゃないか？」

「相馬、お前は どうして そんなことを」

「あ、でも何かを作っていますね」

佐介の言葉にみんなは反応してそつと覗くと、勇樹が突然カバンから大きな紙を出すと何かを書き始める。

みんなはよく見るが、窓が汚れているためよくは見えなかったが、大きな家を描いている。

「家だね、でも何でだろう？」

「この大きいですと、私たちの学館ほどでしょうか？」

紫苑と雪泉は呟いていると、勇樹はカキカキつと何かを描くと急いでカバンにしまつて仕事をするのであつた。

そして数時間後、勇樹は工場の上司から茶封筒をもらうと急いで外に出て走っていく。

飛鳥たちも急いで後を追っていくと、彼が着いた場所は、勇樹の研究所……ではなく豪華な屋敷であった。

勇樹はそこに着くと「えつと確か……」とインターホンの下についている虫眼鏡のスイツチを押した。

すると近くのマンホールが自動で開くと、そこから階段が出てきた。彼は急いでそこから入っていく。

飛鳥たちは「ナニコレ!？」と目を丸くするが、機械音がしてきたためみんなは急いでそこから入っていく。

『侵略! パンツァー娘』編

『侵略! パンツァー娘』編 第1話『何か知らないカ?』

2434年、地球と月の真ん中にある軌道上の建造物。国際時空管理局（通称：TWM S）のある部屋。ここは石川たちの組織『奇跡』の部屋で、今はみんな自由行動をしている。そんな中。

「戦車窃盗事件?」

突然聞かれた勇樹たちは、驚きながらもその事件の話聞くことになった。

「そう、ここのとこ戦車しか狙われている事件が多くてね。犯人は誰だかわからないだつて」

太田はそう言いながらコンピューターをいじっていると、百合子が「あれ……戦車つて」と何かを思い出したのか。考え始めた。

すると伊江が「そう言えば、赤城さんがこんなこと言ったな」と言ったのを彼らは反応し、彼女に向けて「こんなことってなんだ？」と質問すると、彼女はこう答えた。

「現場周辺には犯人につながるものが何もなかったけど、地面には戦車が入るほどの大きさがあつたのか一度壊して修復がされた跡があつたんだ。そして電柱には蜘蛛の糸が絡んでたんだ」

それを聞いた2人は「そうか」と同時に答えると、百合子が「あああ!!」と、突然大きな声で驚く。

それを聞いたみんなは「何!？」と反応すると、百合子は石川に向けてこう言った。

「勇樹君、前に一度由比ヶ浜に行きましたよね。そこで!!」

それを聞いた勇樹は「そうか、あの戦車ももしかしたら…!!」と、何か思い出したのか椅子から立ち上がった。

そしてみんなに向けて「総員、緊急指令だ!」と指示し始めた。

「今回の事件は戦車を狙った窃盗事件が発生している、犯人の狙いは何かわからないが過去の事件を調べてみた結果、どうやら犯人は戦車を狙っている」

そして、結城が続いて太田も「そしてその戦車は時代、場所にもかかわらず盗んでいる。今回の事件は誰が何の目的でやっているかわからないが、次に狙う戦車は、勇樹君と百合子さんに幹子さんが一度行った21世紀の由比ヶ浜にある戦車の可能性が高いようです」と答える。

それを聞いた幹子は「な、なんだって!!」と驚く。

「被害が広がらないように、オレ……じゃなくて私たちも出動するぞ。以上!!」

そして勇樹が言い終わると同時に、椅子が出てきてみんなはそれに座った。すると椅子が突然下に動くと同時に彼らは普段着から彼ら専用の特殊変身スーツへと変身した。

.....

長い通路から出て、勇樹たちが着いたところは。大きなモグラ型のメカがある倉庫へとたどり着いた。

そして彼らは椅子から降りると、モグラ型のメカへと乗り込んで、操縦席へと移動して椅子へと座った。

みんながシートベルトを装着すると同時に、百合子が「勇樹君、今回のメカの説明をお願いします!!」と言うと彼は「了解」と答えると同時に、メカの説明をし始めた。

「今回のメカは、専用のバギーで出勤しようとしたがあいにく修理中のためこのメカで行く事になった。モグラをモデルとして高速回転機と伸縮機能付きタイヤ、どんなに暗い所でもはっきり見えるサーモグラフィックレンズなどを使用したスーパークラッシャー車『モグラドン』である!!」

それを聞いたみんなは「よく嘯まずに言えたな…」と感心するのであった。

そして石川は「じゃあ行くぞ!」と、操縦席に座ると同時にみんなは「了解!」と答えると同時に、彼はレバーを引いた。

すると突然メカが謎の電磁波に包まれると同時に、彼らは21世紀へとワープしたのであった。

.....

21世紀の由比ヶ浜、そこで勇樹たちが乗っている乗り物『モグラドン』が時空から出てきて砂浜へと着陸した。

「つと、着いたぞ」

勇樹はみんなに向けて言うと、太田は外を見て「うわあ……」と驚くのであった。

そうしていると、アレンが「ここで合っているのか?」と勇樹に向けて言うと彼は「そうだと思うけど……」と言いながらあたりを見渡していると、ある物を見つけたのか「あれは……」とカバンから望遠鏡を出してある物を見みると彼は「あつた!」と言いながら百合子に渡した。

百合子は何かと思いながら望遠鏡をのぞいて勇樹が見た方に向いてみると、そこに映っていたのは『れもん』と書かれた海の家、その近くにはチャールが一台駐車している。時間帯は昼なのか、多くの人たちが海の家へと入っていく。



「ありました！ 勇樹君、急いでいきましょう！」

百合子の言葉に彼は「もちろん！ と、その前に」と言いながらカバンからある物を出した。

それは変わった形をしたカメラと紙と色鉛筆を出した。そして紙と色鉛筆をみんなに渡すと彼は「好きな服を描いて」と言うのであった。

.....

道具のおかげで彼らは着替えチャールがあるほうへと行くが、勇樹が突然は「ここだけではなく、町の方へとみんな解散だ、そして2時間後にここに集合、それまでに戦車があったら情報を提供して」と言ったため、みんなはさっそく戦車探しをするのであった。

太田と伊江は住宅街、佐々木と中式は海岸沿いの道路、幹子とアレンは江ノ島、百合



彼女たちは何かと思ひながら試しに聞いてみる。

「お、おいどうしたんだ少女。何があつたんだ？」

「何がじゃありませんわ、どうして止めてくれませんか！ あれはダーズリン様が大切にしていたものですわ！」

それを聞いた2人は「なに!？」と一瞬驚く、そして太田と伊江は彼女に向けて「待つておけ！」と言うと同時に、その男が言ったところへと走つていった。

一方の中式と佐々木は……

「海岸沿い、ここならどこに戦車があるかわかるわね」

「そーだな、でもここ電波あまりつながらないな」

佐々木と中式は海沿いに戦車があるのではない、歩きながら探している。しかしまあ広い事、戦車を見つけるのに苦労するのである。2人はそう思ひながら歩いていくと。

「ちよつと待ちなさい!! このカチューシャを置いてくつもり!!」

それを聞いた2人は何かと思いつきながら振り向くと、無数の子供たちがちっこい子供（と言うより、少女）を連れて行っている。それを見た中氏は「なんだ、子供の遊びか」と言いながら再びゲームをしだす。

その数十秒後、今度は大人びた女性がやってきて佐々木たちに向けてこう言ってきた。

「すみません、こちらに背が小さくて髪色がクリーム色の少女見かけませんでしたか?」  
それを聞いた佐々木は「ええ、さつき子供たちと一緒にきました」と言うと彼女は「やっぱりそうですか……」と言うと急いで走っていく。

それを見た二人は、何かあったのかと思ったのか彼女の後を追うことになった。

一方の幹子たちは……

「ほほう、これが幹子が言っていたソフトクリームか」

「そうだよ、僕も食べてみたけどおいしかったよ」

幹子とアレンは今、この江の島名産『しらすソフトクリーム』を食べながら戦車を探している。だがここは観光名所、このどこかに戦車があるのはどこか探すにはもう苦労する。すると。

「ん、幹子じゃないか？」

それを聞いた幹子は「ん？」とその声に気づいたのか、振り向くと。うすい茶髪をしたシヨートヘアの少女が幹子に向けていた、それを見た彼女は。

「ナオミ、ナオミさんじゃないか！ どうしてここにいるんだい？」

「それは私もだ、ちようどここのお土産に珍しいものはないかと探しているんだ」

幹子とナオミの世界にアレンは入り込めず、目を丸くして「どうしてこうなった……？」と呟く。すると。

「ちよつと、あんた何するのよ!!」

どこからか声がしたため3人はその声が出たほうに向くと、3人の女性が何かが入った袋を持って逃げているのを見かけた。初めは何かと思つた彼女たちだが、数秒後、茶

髪のツインテール少女がやってきた。

その彼女を見たナオミは突然「アリサ、いったい何があつたんだ?」と聞くと、アリサと言う彼女はこう答えた。

「何がじゃないわよ、サンダーズの戦車のカギと部品が盗まれたのよ!!」

それを聞いたナオミは「なんだと!?!」と驚く、それを聞いた幹子は「それはさつき来たお姉さんたちかい?」とアリサに聞いてみる。

「ええそうよ、私が目を離れたすきにカバンを……あんたたちだれ?」

アリサが質問しようとした瞬間、幹子は「ありがと! じゃあ行くよ!」と言いながら走っていく。

一方の百合子たちは……

「警察署……盗難届あるのかな?」

「福音もわからない、でもあると思うよ」

ちよつと変わった方法で交番に行ってみようとしていると、後ろから『キュラキュラ』と音がしたため、何かと思い振り向いてみると、大きな戦車が戦車を引っ張っている

……。

「福音ちゃん、私幻覚見ているのかな？」

「ううん、ふくねも見ているから幻覚じゃないよ」

それを見た2人は目を丸くしていると数分後『待つんだ!!』と眼鏡をした少女とロングヘアをした少女が走ってきた。それを見た2人は急いでその人のところまで行くと、質問してみた。

「ねえ、どうして戦車の後を走っている!？」

福音が質問してみると、眼鏡をした少女は「走っているじゃなくて、追いかけているのよ!!」と答える。

「あの中に隊長が入っていて、私たちが目を離れたすきに戦車が隊長と一緒にさらったの!!」

それを聞いた2人は「ええ!？」と驚くと百合子が「わたしに任してください!!」とある物を出した。

一方の勇樹は、このあたりに戦車がないかあたりを見渡している。

「にしても、結構広いな…暑いし疲れるわ」

夏の時期、浜辺で戦車を探するのは苦勞している。普段はメカを作っているしアルバイ

トをしているが、浜辺でのアルバイトは一度もやっていないので、ヒイヒイと汗をかきながらあたりを見渡しながら歩いている。

そして、彼は近くに海の家があつたので「いったんそこに避難だ」と呟くと、急いでその家へと走っていく。

「ふう、すみませんお冷を」

「あいよ、お冷をいっちょよつと……ん?」

勇樹は椅子に座ってお冷を頼むと、どこかで聞いたことがある声があったため彼は何かと振り向くと。

「あれ、おまえは確か彼女さんの彼氏じゃないか」

「ああ、そう言えばあんたはこの店の!!」

この店の店員、相沢栄子と石川勇樹は驚いていると厨房から「え、彼氏さん?」と女性性が反応する。そして。

「あ、勇樹殿!! どうしてここに!?!」

「あ、お前は確か西住と一緒にいた」

大洗の秋山たちも、この店に来たようだ。



数分後……………

「つまり、ここのところ。戦車の窃盗事件があるってことですね」

「そうです西住さん、もしかしたらあなたたちの戦車も狙っていると思います」

勇樹は西住たちと一緒に店の奥に行き話を聞き、戦車が狙われていると伝えると。西住は心配そうにしていると麻子が「ま、船の上はさすがにないな」と答える。

それを聞いた勇樹は「いや、そうでもないよ」と麻子に向けて言うと、秋山は「どう意味ですか？」と質問すると彼はこう答える。

「相手は巨大機械専門のロボットでね、いくら嚴重な金庫や孤島にある城であっても。無理やりそれを奪う者がいるんだ」

それを聞いた途端、みんなは「嘘…」と目を丸くしていると、突然彼の胸にしているテントウムシ型のバッチがチカチカツツと光ったため彼は「なんだ？」とアンテナをカチツと動かすと。

真ん中のマークからレンズが出てきて、壁に向けると4組のみんなが出てきた。

「て、どうしたんだみんな!？」

勇樹は突然の姿に驚いて聞いてみると、画面から……。

「ダージリンさんと言う人から何か盗まれたよ!!」

「子供がさらわれた!!」

「戦車の部品が盗まれたよ!! 大至急お助けお願い!!」

「乗り物と子供が誘拐になったよ!!」

それを聞いた彼は「あー、じゃあ今から調べるよ」とアンテナを動かすと、レンズから地図が出てきてみんなの蛙所が出てきた。

その地図を見たみんなは「うわっ!!」と驚くが、彼は「ふむふむ」と地図を見て分析をしている。そして何かわかったのか「そうか、そこに行けば!!」と言うとバッチのアンテナを動かし、地図をしまうと同時に急いで海の家から出て例の場所へと走っていく。

そして例の場所へと着くが……。

「嘘、メカがない!!!」

勇樹が作ったメカがないことに、彼は驚いた。

そして彼はどうやって移動すればいいか慌てていると、砂浜から『勇樹殿!!』と声が出たため何かと振り向くと、ジャーミングレイ塗装のIV号戦車D型が勇樹のいると

ころまでやってきた。

「でかつ、てか秋山さん、どうしてここに!?!」

それを見た彼は驚いていると、秋山は「それはもちろん」と答え始める。

「何があつたかわかりませんが、私たちに手伝うことはありませんか!?!」

それを聞いた彼は何か思いついたのか「それだったら、野球場に集合してほしい。超高速で!!」と言いながら戦車に乗ると、操縦席にいる麻子が「わかった」とレバー動かすと、戦車は野球場があるところへと進んでいく。

## 『侵略! パンツァー娘』編 第2話『帰れないカ?』

勇樹はみほたちと一緒にI V号戦車D型で野球場へと来ると、太田たちと出会った。

「勇樹君、例の男性はここに入っていききました。伊江と一緒に確認しました」

「こつちもよ、子供たちはこの中に入っていくのを中弐と一緒に見たわ」

「僕とアレン君もだよ、女性らはここに入っていくのを見たよ」

「わたしも。福音ちゃんと一緒に来たらここに入っていききました!」

それを聞いた彼は「なるほど」と何か思いついたのか、カバンから工具箱を出してあたりを見渡すと。近くに粗大ごみがあったことに気づく。

それを見た勇樹は「ちようどよかった」と言うと、戦車から降りると粗大ごみを使って何かを作り始めた。それを見たみほたちは何を作っているのか見ているのであった。

数分後……

「えっと、確かこの部品をここに置いて、これを付けたら……そして」

勇樹は器用に工具を手にして、粗大ごみを分解してそれをほかの部品につなげて組み

立てていく、そしてそれを何度もしていくと巨大な何かが出来上がっていく。

そして徐々に粗大ごみの数は徐々に減っていき、勇樹が「できたー!!」と叫ぶ、それと同時に何かが出来上がった時にはごみが空っぽになった。

出来上がったメカは、画面に一本のアームが付いた道具である。

「俺が開発した道具、『掴み取りマシン』で取り返してやるぞ!!」

そして勇樹は早速移動しようとする、太田が「ちよつと待って!!」と言ってきたため、彼は何かと振り向く。

太田は「作戦タイム、みほさんたちも来てください!!」と言うと、みんなは「了解!!」と答える。みほたちは「は、はい!」と答えながら作戦に参加することとなった。

.....

「これで全部か……」

「本当にお金もらえるかしら?」

野球場のある中で、男女は彼女たちからさらってきたものを見ながら言っていると、

少年が「大丈夫だと思っよ」と答える。そして男性は、それを携帯のカメラを使って写真を取ろうとするが……………。

『どりゃああああ!!!!』

突然C型のハンドが出てくると、戦車などをつかんでどこかへと連れて行った。それを見た彼らは「あ、ちよつと待った!!」と急いで追うが……………。

「させませんっ!! 突撃ですっ!!」

突然扉が開くと同時に、無数の警察官が入っていき彼らを捕まえた。彼らは「うわあ!!」と驚く。

……………

「いやあ、結構うまいな!!」

事件が解決したあと、勇樹たちはダーズリンたちからお礼のお食事をすることになった

た。

出された料理は山ほどあり、みんなはそれをパクパク食うのであった。食べているところはもちろん、海の家『れもん』である。

「このそば、私がいとも食べているそばと違っておいしい」

「そうだな、でもがば焼もおいしいな」

佐々木と中氏はプラウダのみんなが用意した青森で有名ながば焼と津軽そばをいただいている。それを聞いた少女のカチューシャは「当然よ!」と自慢するのであった。

「大山自然薯むぎとろ井とサザエのつぼ焼き、これは絶品です」

「そうだな、特にこのサザエを食うのは久しぶりだ!」

太田と暗山は、聖グロリアーナ女学院のみなさんが用意した神奈川で有名な大山自然薯むぎとろ井とサザエのつぼ焼きをいただいている。それを聞いた女性、ダーズリンは「さようでございますか」と言いながら紅茶を飲む。

「はむはむ、うんっこのだご汁おいしい!!」

「福音、この馬刺し初めて食べたよ!!」

百合子と福音は、大学選抜チームのみなさんが用意した熊本で有名なだご汁と馬刺しをいただいている。それを聞いた少女、島田愛里寿は照れるのであった。

「うん、佐世保バーガーおいしいよ」

「そうだな、ちゃんぽんもうまいな」

幹子とアレンは、サンダース大学付属高校の皆さんが用意した長崎で有名な佐世保バーガーとちゃんぽんをいただいた。それを聞いた女性、ケイは「そう? それはよかったわ」と答えるのであった。

「このあんこう鍋、良い出汁が出ていて具までしみ込んでいる。その干し芋も独特の触感があるからおいしい!!」

勇樹は大洗のみんなが用意して作った茨城で有名なあんこう鍋と干し芋をいただいている。それを聞いた背の小さい少女、角谷杏は「お、そーかい?」と返答する。さらには。

「お主、西住さんから聞いたがごみの山を機械に変えたのは本当でゲソ!? それだったらあそこの『それは頼ませるな!!』いでっ!!」

イカ娘が勇樹に何か頼ませようとしたが、栄子がげんこつして彼女は頭を押さえる。それを見た彼は「なんだ?」と首をかしげるのであった。

.....

「ふう、食った食った。もうお腹いっぱいだ」



勇樹たちはおなかいっぱいになったのか、おなかを押さえて後ろに倒れるのであった。すると。

「そうですか。では、勇樹さん!!」

すると突然声がしたため、勇樹は何かと振り向くと。メモとペンを用意した秋山優花里が座っていた。

それを見た百合子と幹子は「やれやれ」とため息をしながら、千鶴からかき氷をもらい食べている……が。

「早速ですが質問です、この前の修理はどうやってできたのですか!?　そしてどうしたらあの機械ができたのですか!?　そしてそして、私にも取得可能ですか!?」

秋山が放った「取得可能」と言う言葉に、太田たちは「ゲッ!!」と驚く、それを聞いた彼は。

「取得可能……?　それは簡単だ、少し時間はかかるがいいか?」

それを聞いたみんなは「何か?」と見ているが、太田たちは「あわわわわ」と慌てる。そしてそれを聞いた優花里は「もちろんです、私戦車を作ることもあります!!」と自信満々に答える。

そして勇樹は「よし、それだったらこっちにこい!!」と優花里と一緒にどこかに行くとしたため、太田たちは「待て待て待て!!」と彼の行動を止めるのであった。

.....

数分後……

太田たちは勇樹に絶対に言っではいけない言葉を伝えて、さて基地に戻るかと戻っていくが。

「ない、ない。やっぱり何も無い!! どこにやったんだ!?!」

勇樹は例のメカが置いてある場所からあっちこっち探したが、やはり何もなかった。太田たちも一緒に探すのが、それらしき姿は何もない、すると勇樹が。

「そうだ、みなさん。ここにモグラの姿をしたメカありませんか? 両手がドリル風でタイヤがついている」

それを聞いたみんなは「見てない」と答えるが、栄子が何か気づいたのか「もしかして、あれお前たちのか?」と返答した。

それを聞いた彼らは「それ、どこですか!」とより詰める。

「あ、あれは……あの3バカが持つて行ったぞ、何かの実験台かとあたしは思つて」

それを聞いた瞬間、太田たちは「3バカ?」と首をかしげるが、百合子と勇樹は何かに気づいたのか「もしかして!!」と何かに気づいたのか、急いでその3バカがいるところへと走っていく。

.....

「WOW! これは素晴らしい乗り物デスネ!!」

「しかし、だも乗つていなカッタから回収けど、イイでしょうか?」

「まあ、私たちがヤツタと間違えるヨリましたヨ」

3バカ基、ハリス、クラーク、マーティンは乗り物を分解しながらつぶやいている。もちろん、バーベル型の機械や電化製品などの部品などもばらばらに分解している。

ハリスは「これハ要らないモノですネ」と言いながらダストボックスに放り捨てていくのであった。すると。

ドガアアアン!!! ガランツ!!

「ドリヤアアアアア!!! そのメカ返せ!!!」

「それが無ければ私たち戻るところも済むところもありません!!!」

2人は扉を無理やり壊して中に入っていくと、3バカは「WHAT!？」と驚きながら後ろに下がっていく。

そして勇樹と百合子は、例のメカがあるところへと急いで向かっていくが、そこで見たのは、ドリルは壊れてライトは分解されてタイヤは外されて原型がわからないほど分解されたメカがたたずんでいた。

そしてそのメカを見て数秒後、2人は首をギギツと3バカの方へと向けた。不気味な笑顔を浮かばせながら。それを見た3バカは、あの怒り狂った千鶴と同じ…いやそれ以上の恐怖を感じたのか『ヒイイイツ!!』と後ろに下がるが、2人は不気味な笑顔で3バカへとより詰めていく。だが。

ポンツ　ポンツ。

「まあまあ落ち着くんだ2人とも、メカはあの3バカたちに任せよう」

突然幹子が変わった機械で2人に向けて言うと、突然2人の表情が元に戻っていき、  
気付いた時には「はて？」と首をかしげるのであった。

.....

結局、勇樹たちのメカは3バカに任せるとして。彼らはどうしようかと考え始めた。

「野宿するか？」

「そうだね、お金はあまりないし……」

「あつたとしてもオレたちが泊まるホテルはないしな」

「そうね、この近くにあるかどうかは分からないわ」

「むー、そうだなー」

「野宿ならサバイバル生活のようだね」

「道具は勇樹君でなんとかいけますね」

「そうだな、私も同感だ」

「福音もだよ！」

みんなの話し合いの結果、野宿をしようとするが。突然「待ってください!!」とある少女がやってきた。それは。

「みほさん、どうしたんですか?」

勇樹がみほに向けて答えると、彼女は彼の耳に向けて何かを話し始めた。そして数分後。

「ふむふむ……え、本当か? えええつ!!? それはうれしいです!!」

それを聞いた彼は目を光らせると、太田たちに向けてこう言った。

「みんな聞いてくれ!! 今夜は学園艦に泊まれるぞ!!」

それを聞いた彼らは、初めは「へー」と答えるが、数秒後、何かに気づいたのか『えええええつ!!』と驚くのである。

## 『侵略！ パンツァー娘』編 第3話『作った見ないか？』

聖グロリアーナ女学院艦内のある部屋

「うおおお!! これ本当に使ってもいいの!?」

伊江が驚くのも当たり前、中は豪華でお嬢様が実際に使っているベッドやいすにテーブルなどある。

「ええ、ダーズリンさんから話は聞いています」

この学園の生徒がそう言うと、太田は「ありがとうございます」と言いながら荷物を置く。

そして生徒は「では」と答えると、扉を閉めた。

「にしても、あの生徒が言っていたダーズリンって誰だ?」

「さあ、僕にもわからない。でも『さん』って言っていたからあだ名だと思うよ」

2人はそう言いながら服を着替えて、すぐに寝る用意している。そして着替え終わると。

「おやすみー」

ベッドに入って寝るのであった。

## プラウダ艦内

「どうよ、このカチューシャが用意した部屋よ!!」

カチューシャは自慢げに言いながらも、佐々木と中式は「へー」と言いながら椅子に座る。

ロシア風の部屋で、壁には『ペーチカ』と言う暖房器具がついている。

「これはすげーな、ロシアって寒いところが大きいけど結構温かいな」

「そう、ありがとう。このカチューシャを助けてくれたお礼よ!」

「Зву<sup>す</sup>чи<sup>が</sup>т<sup>で</sup>в<sup>で</sup>ер<sup>す</sup>но<sup>ね</sup>, Г<sup>カ</sup>ч<sup>チ</sup>у<sup>ユ</sup>ша<sup>シヤ</sup>」

「П<sup>そ</sup>р<sup>う</sup>а<sup>で</sup>в<sup>で</sup>и<sup>で</sup>л<sup>す</sup>ь<sup>す</sup>н<sup>ね</sup>о<sup>。</sup>」

「О, о чем ты говоришь? Вы также в ключи

те меня? 《あら、あなたたち何の話をしているの? 私も入れてくれないかし

ら?》」

「ちよつと、何を言っているのかわからないわ。佐々木も困ってロシア語で……え?」

2人がロシア語で話しているのをカチューシャは叱るが、佐々木はそれをすらすらと話している。もちろん彼女たちは驚くが、中式だけは「おーすげーな」とほめるのであつた。



## サンダース大学付属高校

「へえ、ナオミさんたちはここで暮らしているんだね」

幹子は部屋に入りながら言うと、ナオミは「ああ、幹子が住んでいる部屋とは違うのか」と質問する。

「まあね、でもここまで広くないよ」

「ほう、つまり私たちと同じ広さなのか?」

「んー、そうだね。じゃっかんこの部屋の方が広いかな?」

二人の話に、アリサとアレンは「どうしてこうなった……」と見つめるのであった。

## 大学選抜チーム

「わあ、このボコかわいい」

福音はそう言いながらボコと言う人形を抱き着く、それを見た愛里寿は「あ、ありがとう」と言いながらボコを抱き着く。

それを見た百合子と眼鏡の少女ルミは「何やってんだか」と思いながら見つめている。

「えっと、百合子さんでしたよね。百合子さんの歳いくつですか? 私たちと同じ大学の

生ですか……?」

「え、いえ私はこう見えて高校3年生ですけど……?」

「ええっ、そうなんですか!? 私たちよりも若いですね」

年齢計の話をするのであった。

### 大洗学園艦

「おお、これはすっごい広い!! さすが倉庫だ!!」

勇樹がいるのは、みほの部屋ではなく、自動車部が使っている倉庫の隣にある空き倉庫である。

「にしてもいいののか? 西住さんの部屋ではなく倉庫内で」

「いいんですよ。私も部屋に泊まりたいですが、狭いのはちょっと苦手で、ここの倉庫だと何故か心が落ち着くのです」

自動車部の部長のナカジマは、勇樹に言うが彼はカバンからハンモックを出して寝る用意をしている。

スズキたちは「変わった人だな」と思いながら見ていると、勇樹が「あ、そうだなナカジマさんたちに少しお願ひがあります」と言うと、カバンからいろんな形をしたバッチチを出して彼女たちに渡した。

「このバッチチをみなさんの戦車につけてください、余ったら自由に使ってください」

そう言うとは彼は「ではおやすみなさい」と言いながら寝るのであった。

.....

次の日、勇樹たちは海の家『れもん』に集合している、理由は簡単。

「勇樹君、例の道具なんだけど。ちゃんとした？」

「おう、ナカジマさん達に例のあれを渡したから戦車は大丈夫だと思うぞ」

「それだったらよかったわ、後は例の怪物さんたちが現れたら……ね」

奥の部屋で彼らが何かを話しているため、栄子は「何の話をしているんだ？」と思いつながら料理を運んでいく。

すると、勇樹は「じゃあしまうか」と言うのと道具をカバンの中にしまうのであった。

「それじゃあ注文するわ、すみません。ラーメンとチャーハンを9人ほどお願いします」

佐々木は栄子に向けて注文すると彼女は「はい、わかりました」と言いながらメモをして調理場へと行く。

みんなは「さて、休憩だ」と道具をしまつて食べる用意をするが、突然。

「お、勇樹ちゃんに太田君たちじゃないか」

「会長さん、そして桃さんと柚子さん」

「む、勇樹か」

「こんにちはわ、勇樹君」

現れたのは、大洗のカメさんチーム基生徒会組の角谷杏と河島桃、そして小山迪子の3組で会った。

「どうしたんですか? 普段ここに来ることあるのですか?」

「お、実はね西住ちゃんが勇樹ちゃんたちが戦車の窃盗事件の話を聞いたからあたしたちもちよつとね」

「正式には、お前たちがなぜ戦車の窃盗事件にかかわっているかだ」

「え……そ、それはですね……」

河島桃の質問に、彼は目をそらしていると。イカ娘が「おまたせしたゲソ」と手と触手に乗っている料理を勇樹たちに配ろうとした瞬間。

つるっ

「え、おわっ?!」

「え?」

イカ娘が何かボール状の物を踏んづけてしまったのか、突然転んでしまった。もちろん。

ドンガラガツシャーン!!!!

勇樹たちがいる方へと落としてしまったのであった。

.....

「だ、大丈夫勇樹君？」

「お、おう。オレは大丈夫だ」

太田が心配していると、勇樹は千鶴からタオルを借りて頭を吹いている。彼は大丈夫だというが、百合子たちはある方向に目を向けている。それは。

「肝心の道具が、濡れてしまった結果故障品があったよ」

先ほどのラーメンの汁が、勇樹の道具が入っているカバンにかかってしまい、使えなくなってしまうた。だが。

「この『透明マント』は大丈夫ね、『水銃』も『秘伝一刀丸』も」

「あー、この『タマシウム風呂敷』は無理だな。湿った結果壊れている。でも乾燥したら行けるかな？」

「これもこれも、あーこれもだめだな。てかこれら全部故障だ」

使える物は多少あるようだ、イカ娘たちは謝っているが勇樹は「いいよ別に」と遠慮をするのであった。

ちなみにボールの正体は、この店に来た野球部が使っている野球ボールであった。

「しかし代わりの服はどうする? 『スーツチェンジカメラ』はレンズが汚れているから、うまくいかないし…」

「直したいのはやまやまだが、今は代用の部品が少ないからな。せめてゴミみたいなのがあればいいが……」

佐々木と勇樹はそう言いながら悩んでいると、千鶴が何か思い付いたのか、こんなことを言い出した。

「そうだわ。それだったらイカ娘ちゃんと一緒にゴミ拾いをしたらどうかしら?」

それを聞いたみんなは「え?」と目を丸くして答える。

「イカ娘ちゃん、いつも海に散らばっているごみを拾っているから、私たちも手伝いたいけど海の家の仕事があるから手が離せないの」

それを聞いた勇樹は「ほーほー」と彼女の話の話を聞いている。

そして千鶴は「そこで、勇樹君たちがイカ娘ちゃんが集めたごみを使って壊れた道具を直すことできるかしら?」と説明をした。すると勇樹は。

「もちろん行けます!! たとえガラクタ品であろうと貴重品であろうとしても、このユ

ウキイシカワが直して作って改造してやります!!」

それを聞いた彼女は「それだったらうれしいわ」と喜ぶ、どうやら同意したらしい。

数分後……

「これが、私が集めたごみゲソ」

イカ娘がごみが集まった袋を勇樹に渡すと、彼は「サンキユ、イカ娘」と言いながらそれらを学園艦の倉庫へと行くのであった。

.....

その夜……

キンツキンツキンツ!! カンツカンツカンツ!! ジジジジツ………ジジジジツ!!

夜遅く、倉庫の中で何かを作る音が響いている。何かをたたいて削ったり引つ付けたりする音がする。

「えっと、これをこうして……そしたらここをこうしたら……」

勇樹は、設計士を見ながら何かを作っている。その何かとは……。

.....

次の日、時刻は午後12時。

「で、私たちに見せたいものは何だ?」

そう言ったのは、生徒会の河島桃である。彼女を含む戦車道のみんなは、勇樹に呼ばれて倉庫にやってきている。

勇樹は巨大な何かが含まれた白い風呂敷の前に立っている。

みんなが集まったのを見た彼は「ふふふ」と不気味な笑い声を出すと同時に、こういった。

「実は、みんなにある戦車メカを見せたいために呼んだんだ!!」

「あーそうか、戦車を店に集めた……って、戦車!?!」

勇樹が言った『戦車』に、桃は驚くと、みほと沙織、優花里に自動車部のみんなは「「え



え?!」と驚く。それもそのはず、戦車を一人で一晩かけて作るのは非常に困難で不可  
能の技術である。

しかし、そんなことを彼は立った一晩かけて作り上げた。

「え、ええつ。勇樹さんそれ本当ですか!？」

「が、ガラクタ品つて。まさか機能持つてきたあれらのこと!？」

「そ、それでしたら前人未踏であります!!」

「へえ、これはすごいな」

「そうだね」

「私たちよりもすごいかも……」

すると彼は何か気づいたのか、小山に向けて「小山さん、少しいいですか？」と言  
うと彼女は何ですかと答えると、彼はこう言ってきた。

「あの白い制服をした彼女たちは、いったい誰ですか？ 初めて見ますが……」

それを聞いた彼女は、彼が見ていると目線の先を見て数秒後「ああ」と言うとなん  
こう言った。

「あの人たちはサメさんチームだね。桃ちゃんの指示以外動かない変わった人たちなん  
だよ」

それを聞いた彼は「なるほど、それでか」と顔を上下に動かして数秒後「ちようどよ

かったかも」と言うと、彼は風呂敷を手にした。

「では、このオレが作った巨大メカは……これだあ!!」

そして、勇樹は風呂敷を勢いよく後ろに動かした瞬間。風呂敷が後ろにはらりと落ちると同時に、その何かが現れた。

それは、巨大な船でタイヤが付いている。

それは、帆が張られていてまるで海賊船のように大きなトレードマークが描かれている。

それは、巨大なプロペラがついていて空を飛ぶことができるように設置している。

それは、巨大なハンドと無数の大砲がついていて、戦車を合体したようだ…!?

「海賊船と戦車を合体して、空を飛ぶことができる新型の戦車メカ。巨大な帆はエネルギーを吸収して充電し、最高速度270キロ以上もの速度で進むことができる!!! 名付けて『海賊車メカ』であります!!!」

勇樹はそう言うと、サメさんチームの一名。お銀が「ほう」と、彼のメカを見つめて言葉を漏らす。すると。

ブーツ、ブーツ、ブーツ、ブーツ、ブーツ、ブーツ  
「ん、電話か？」

勇樹は電話がすることに気づき、電話を取って「ごめん、ちよつと待つて」と言い電話に出る。

「お、太田？ どうしたんだ……え、本当か!？」

突然表情が変わったことにみんなは気づき、彼は太田の話を聞いている。

「んで、どうだ？ うんうん……うんうん……なるほど……え、逃げた!? どこに行った？ 西方向……その先は確か江ノ島があるな」

そして聞き終えた彼は「わかった、今すぐ行くよ」と言いながら電話を切ると、カバンからボード板型の道具を取り出すと急いでそれに乗った。

「じゃあ行くぞ……て、おわっ!？」

スイッチを押して発射しようとしたが、突然後ろから重さがしたため何かと振り向くと。西住みほと角谷杏と秋山優花里の3人が乗っている。

「みほさん、杏さん、優花里さん!？」 どうして、お、降りてください!!」

「だめです、事件は私たちも一緒に解決します!!」

「私は西住殿と一しよ……いえ、同じ考えです!!」

「あたしはどちらかと言うと、気になることがあつたら今すぐ解決しちゃう派かな?」

それを聞いた彼は「やれやれ」とため息をしながらも「じゃあ捕まつて下さい!」と言いながら足元にあるスイッチを押し、すると。

ビュツ!!!

突然彼らが乗っているボード後と消えると、外から「うわああ!!!」と声がする。どうやら外に出れたようだ。

.....

太田たちは江の島の近くにある橋で待ち合わせしている。彼らも勇樹と同様、伊江と太田はダーズリンとローズビップ、佐々木と中氏はカチューシャとノンナ、幹子とアレンはケイとナオミ、福音と百合子は愛里寿とルミと一緒にいる。

そこにみほと杏、そして優花里を乗せた勇樹たちがやってきた。

「勇樹君、みほさんたちを乗せてどうしたんだ……?」

「そう言う太田たちもどうしてこうなった?」

太田が質問した言葉に勇樹は返すと、太田たちは「自分が出動するのを見つかったし  
まった」と言ったため、彼は頭に手を当てた。

しかし今から返すのも時間がないため、結局「じゃあみんなで行くか」と言うことにな  
った。すると佐々木が。

「でも、ダーズリンさんたちと一緒にいくと敵から欺くことができるわね」

「作用、サクラの言ったとおりだ。私たちと一緒にいると目立つが敵から欺くことがで  
きる」

彼女の言った言葉にアレンは答える。確かに考えてみると、有名人であるが敵から欺  
くとしたらいいと思う。

「でも、ここに太田様が見た動く金塊は本当にありますの？」

ローズヒップはそう言いながらあたりを見渡していると、太田は「疑わないでほしい  
よ」とジト目で彼女を見つめている。

それを聞いた伊江は「おい、太田を疑うな」と言わんばかりのオーラが体から出てい  
る。

「じゃあみんなを探すか。見つけたらテントウムシ型バッチシーバーで通信してくださ  
い」

勇樹はみんなに向けてそう言うと、早速探そうと歩き始めた、すると。

ガギンツ!! ガギンツ!!

何か動き重い音が響いた、それを聞いたみんなは「なんだ?」とみんなはあたりを見渡している。すると。

ガゴンツ!!!

突然端から大きな音がしたため、みんなはサツと振り向いた。そこにいたのは、巨大な金塊型のメカで右手はドリルで左手は大砲がついている。

それを見た太田は「いた、あれだよ!!」とメカに向けて言うと、勇樹は「そうか、わかったぞ!!」では巨大メカよ来い!!」とリモコンを出してスイッチを押した。

2434年の『奇跡』の奥にある『メカ製作所』の中で、巨大な何かがある台に立っており。何かに受信したのか突然メカは爆発すると同時に黒い穴へと入っていく。

そして、2017年の日本の江ノ島。彼らの目の前で大爆発が起こると同時に白い穴が出てきて巨大メカが現れた。

そのメカはイカがモデルとなった巨大なメカであった。

「今回は、深海生物のダイオウイカをモデルとした巨大メカ『ダイオウイカメカ』なのだ!!」

そして勇樹はそう言うと、メカの頭から階段が出てきたためみんなはそこからメカに乗り込んだ。コックピットに座ったみんなはさて操縦するかと、レバーを動かすが。

「こ、これが勇樹さんが作ったメカですか……とつても広くて素晴らしいです!!」

突然優花里の声があったためみんなは「でえ!？」と驚いて振り向くと、優花里たちがメカの内部にいる。

「まったく……しかたねえ、勇樹みんなが乗っているから、気を付けてメカ戦をするんだ」

それを聞いた彼は「お、おう分かった」と言いながらレバーを引いた、するとダイオウイカメカが突然空を飛び始めた。

飛ぶ瞬間を見たローズヒップは「ど、どうやってたら空を飛ぶことができますの!?!」と質問すると勇樹は「それは、極秘事情です!!」と言いながらレバーを倒した。

するとダイオウイカメカは金塊メカに体当たりした、金塊メカは後ろにふらつくが左腕の大砲が動く、と勇樹たちが乗っているダイオウイカメカに向けて放った!!

「な、なんだ!?!」

勇樹は驚きながらも、レバーを動かして攻撃をよけている。

しかし乗っているのは戦車道の生徒、いくら何でもこの動きに払えるのは難しい。それを考えたのか、彼は「どこかに捕まっとけ!!」と言うとレバーを一気に上げる

すると、メカは突然急降下すると、金塊メカに体当たりすると同時に触手でメカを絡めて再び飛ばし始める。

「おー、すごいじゃん勇樹ちゃん。これ以外にある?」

「あつたりまえです会長!! このメカはこの技術があるのです!!」

杏の言葉に彼は反応し、再びレバーを動かしてスイッチをカチカチと押した。するとダイオウイカメカは触手を器用に動かして勢いよく回転させる。

そして数十回転していくと遠心力が強くなっていき、コックピットについているメー



ターが左の方へと傾いた瞬間。彼は「いまだ!!」とレバーを引いた。

すると触手が突然外れると同時に、金塊メカは海の方へと飛ばされていき、気付いた時には『バゴォー……』と爆発する音がするのであった。

「やったあ!! 成功です!」

「うっし、そうだな。よかったなあ勇樹」

百合子と伊江は喜んで勇樹を見るが、彼は目を回しながら『ぐええええ……』と目を回すのであった。

.....

「うげえええ……あの人数で動かすのは結構難しかったな、少し休憩だ」

大洗艦内で、勇樹は倉庫内にセットしているハンモックに彼は乗ると睡眠をするのであった。すると。

「じゃまするぞ、勇樹はいるか?」

突然の声に彼は「な、なんだ?」と起き上がると、河島桃が珍しく一人でやってきた。それを見た彼は「河島さん、どうしたんですか?」と言うと、彼女は「石川勇樹、貴様に少し話したい相手がいるがいいか?」それを聞いた彼は「え?」と、目を丸くして答えるのであった。

## 『侵略！ パンツアー娘』編 第4話 『対決しないカ？』

カンコン、カンコン、カンコン

勇樹は今、河嶋から『お前に合わせたい相手がいる』と言うところへと移動しているが。そこは艦内の奥底にある所へと向かっている。

「えっと、河島さんが言うところの先に確か……あつた」

そして彼が着いたところはBAR『どん底』と変わった店であつた、勇樹は紙を見て確認すると「ここか」と言いながら扉を上げた。

「お、おじゃまします……」

店の中は、喫茶店のような雰囲気を出しているがバーテンダー風の少女が飲み物を作っているのを見て彼は「どうなつてんだ？」と呟いた。

「えっと、メイドさん。ここにお銀さんとラムさん、ムラカミさんにプリントさん、そしてカトラスさんがいると思いますけどどこにいますか？」

勇樹はメイドに向けて質問すると、彼女は右に向けて指をさしたため彼は「え?」と思いながらその方向に見てみる。

そこにいたのは、片目で髪を隠している少女に赤毛のチリチリパーマーと体格ががっちりとした少女と銀色の髪をしたものが4名いた。

それを見た彼は「え?」と目を丸くしたが、何かに気づいたのか「もしかして」と思うと同時に、彼女たちに向けてこう質問した。

「もしかしてあなたたちは……河嶋さんが言っていたサメさんチームですか?」

そう言った瞬間、片目を髪で隠している少女が立ち上がると「そうだ」と言ってきた。「おまえが石川か、話には聞いていたがよわっちいな。つとあたしたちの名前がまだだったな」

そして彼女は勇樹に向けると、パイプ……もとい飴を彼に向けてこう言った。

「あたしはお銀だ、みんなは親分とか言っている。んであの赤髪がラムで背が高いのがムラカミ、マイクを持っているのはプリントでバーテンダーにいるのはカトラスだ」

それを聞いた彼は「は、はあ」と言いながら目を丸くして近くにあった椅子に座る。すると彼は何か思い出したのか「そう言えば」とこんなことを言い出した。

「そう言えば河島さんから私に頼まれごとがありました。心当たりはありませんか。聞いてみましたが『行けば分かる』と言ったので……」

勇樹がそう言ったとたん、突然ムラカミが「なに？」と小さく呟くと突然立ち上がり、彼をにらみつけた。

それを見た彼は「ひいつ!!」と顔を青くして悲鳴を上げる。

「おまえ、それは本当か？」

「え、は、はい本当です」

ムラカミの質問に彼は答えると、お銀は「そうか、こいつももしかしたら……」と何かを考えたとたん「よし」と勇樹に向けてこう言った。

「石川勇樹、今からお前との勝負を挑む!!」

それを聞いた勇樹は「え？ えええ!!」と驚く、訳を聞いてみた結果。

「以前、みほさんたちと対戦したが負けてしまつてな。お前とならば男と女、力の差がわかるはずだ」

それを聞いた途端彼は「そういう意味か」と言いながらジト目で見ることになった。

半分いやな気分になるものの結局、勝負を受け入れることになった。ただし、勇樹は一人で戦うと不便なので道具の使用は許可することになった。

.....

突然対戦するため、勇樹は出来るだけ船に関する本を読んでいると。お銀が「おっと、あたしたちの紹介がまだだったな」と言うと、彼に向けてこう言った。

「改めてだが、あたしは竜巻のお銀!」

「爆弾低気圧のラム!」

「サルガツソーのムラカミ!」

「大波のフリント!」

「生しらす丼のカトラス」

威勢のある紹介に彼は驚いている、ただ、あのバーテンダーが生徒だとわかった時は「あんたもか」と心の中で思うのであった。

.....

V S お銀

「さて勇樹、突然だがおまえはノンアルコールを飲んだことあるか?」

「え、まあありますけど? どうして?」

お銀の質問に勇樹は目を丸くしながら答えると、彼女は「じゃあこれで勝負だ!!」とある物を取り出した。

それは、『ザ・ソース』と描かれた不気味な入れ物（※とっても辛く、一滴だけでも激辛。目に入れたら失明するので危険）。

「て、これを使うんですか!?!」

「ああ、だがこれはソースだから、ここにあるカクテルを使って飲むことに使用。もちろん、カクテルはノンアルコールだ」

彼女の話聞いた彼は「ま、まあそれならいいですが……」と言いながらバーテンダーへと移動する。

勇樹はバーテンダーの棚から牛乳とカボス、そして『日の出ビール ノンアルコール』を手にし、それらをカクテルシェイカーに入れて、シヤカシヤカと振り始めた。一度バイトしたことがあったため、シェイカーのやり方は覚えている。

それを見たお銀とカトラスは「なかなかの手つきだ」と呟いた。

数十秒後…

シヤカシヤカを終えた勇樹は、ふたを開けてグラスに注いでみると。そこにはオレンジ色になった液体が出てきた。においはやや刺激的。

「では、これを………」

そして、勇樹はグラスを手にして言う。それを一気に口に含んだ。それらを見た彼女たちは驚くが、彼は無表情のままそれをごくくと飲む。

「……………そんなに辛くなかったですよ」

「なに、それは本当か!？」

お銀が驚いて質問すると、彼は「まあ、辛かったです。そんなにっというほどではありません」と言いながらカクテルシェイカーを彼女に渡す。

そして、お銀はパーテンダーの棚から炭酸水とオレンジ、そして『エビズ ノンアルコール』を手にし、それらをカクテルシェイカーに入れて、シャカシャカと振り始めた。

数十秒後…

シャカシャカを終えたお銀は、ふたを開けてグラスに注いでみると。そこには赤色に輝く液体が出てきた。においはやや刺激的。

「では、これを……………」

そして、お銀はグラスを手にして言う。それを一気に口に含んだ。その数秒後。

「なるがぼんりあぼえいおなえねついえりおぎおあおん!？」



顔を真っ赤にしながら口を押ええると、そばにあつた水を一気に飲み干した。どうやら相当辛かつたようだ。

※よい子も悪い子も動画投稿をしようとしている人も絶対マネしないでね（本当に危険です）。

お銀VS勇樹

LOSE—WIN

.....  
VSラム

「続いてはアタシの番だ、アタシは旗信号と言いたいところだけど、あんたにはわかんないだから。このモールス信号で勝負するよ」

お銀の次はラムと言う少女が勝負する、彼女の手には赤色の旗と白色の旗を手にして  
いるが、机には電鍵とヘッドフォンが置いてあつた。

「今からアタシがこれを使って信号を送る、あんたはそれを解読してやるつという簡単な方法。それだつたらどう？」



ラムVS勇樹

LOSE | WIN

VSムラカミ

「続いては私だ、手加減はしないで」

続いている相手は、サメさんチームの中で力持ちのムラカミと勝負とすることになった。しかし、体格の差があったため勇樹はメカを作ることになった。

そしてあまりにもスペースが狭かったため、勇樹と彼女たちは砂間はへと移動する（戦闘中で、ケガしないようにです）。

ルールの内容は、相手（ムラカミ）が参ったというまでまで、なんども挑戦を挑んでもよいということになっている（ムラカミ許可）。

「なるほど、ムラカミさんは力が強いか……だったらあのメカができるな」  
そう言うと、彼はごみの山へと行くと何かを作り始めた。

トンテンカンテントンテンカンテン、ガギギギギツ、ギユイイイイン!!!

ガギゴギギツ、ジジ………ジジジツ、ガゴンツ!!

何かを組み立て始めてから数分後、その姿は少しずつであるが人の形をした何かがあ

きああつてきている。

「これをこうしたら、ここをつなげて……そしたら……できた!!」

そして、出来上がったメカは巨大な富士山がモデルとなったメカで頭には太陽がついている。

「今回作ったメカは、富士山がモデルとなったメカで力は相撲並。エネルギーは太陽光力は約105キログラム。名付けて『富士山メカ』である!!」

勇樹はそう言いながら説明すると、ムラカミは「ほほう、それで来たか」と答える。本来は勇樹たちは操縦席に乗るが、今回は人間サイズになっているため彼の手にはラジコンが握られている。

「今回は武器はありませんが、メカなので一定の装置を取り付けました」

彼がそう言うとうムラカミは「わかった、では開始とするか」と相撲の準備をし始めた。今回の勝負は相撲なので審判の代わりとしてお銀がすることになった。

それを聞いた勇樹も「ではいきます」とコントロールを動かすと、メカは相撲の準備をし始める。そして。

「はっけよい……残った!!」

お銀の合図と同時に、ムラカミは動き勇樹はコントロールをカチャカチャといじつた。するとメカはムラカミにはつけいをしていくが、彼女はそれをよける。

勇樹は「なんの!!」と言いながらレバーを動かすと、メカはその場で停止して彼女の腰をつかもうとする。しかし彼女はそれをつかんで背負い投げをした。

メカは砂浜に埋まると関節から煙が出てきたため、勇樹は「あわわ」と慌てるとすぐに修理をして、再び勝負をする。※これを5回ほど繰り返す。

すると、彼は何かいい方法が思いついたのか「待てよ……もしかしたらあの技を使えば……」と言うと、コントロールを動かす。

そして、お銀が「はつけよい……残った!!」と合図をする。それと同時に勇樹はコントロールを動かした。

「そりゃあ!!」

勇樹のメカが近づいてきたのを確認した彼女は「また同じ手口で来たか」と言いながら構える。しかし勇樹は「そこだあ!!」とコントロールを動かした。すると。

パァン!!!

「なっ?!」

目の前までできて両手を顔まで近づき勢いよく手を合わせた、突然の行動を見た彼女は驚く。

そしてそれを狙っていた勇樹は「いまだ!!」とレバーを動かした、するとメカは急に動き彼女の背負うと同時に勢いよく投げた。

「な、なんっ。うわあ!!」

そして彼女はそのまま砂浜へと投げ飛ばされてしまった。それを見たお銀たちは「そ、そんな」と驚くのであった。

「ふふ、ふふふ」

すると、ムラカミは立ち上がると同時に勇樹に向けて歩いた。そして彼のところまで歩くと、彼女はこう言った。

「気に入った、おまえは本当に素晴らしいやつだ!! また私と挑むときはいつでもこい!!」

彼女の言葉に彼は「は、はい」と驚きながら答える。それを見たお銀らは「あ、あのムラカミが…」と驚く。

ムラカミVS勇樹

## LOSE—WIN

.....  
VSフリント

「続いてはあたいの番だよ、あたいの勝負はこの縄だよ」

そう言つてフリントは縄を出すと、それを勇樹に渡した。

「その縄を使つて何か面白いこととしてみて。あたいは縄を使った結び術を使うけどあんな場合はどうするんだい？」

フリントの言葉を聞いた彼は数分悩んだ末、何か思いついたのか「そうだ」と何かを取り出した。

そのある物は、タオルだけでそれ以外はなにも出さない。フリントは「何をするんだ？」と疑問に思いながら見ていると、彼はタオルを自分で結び、相手に見えないように縄をいじる。

そして準備ができたのか彼は「では、フリントさん。引いてみてください」と言う。彼女は「ん、いいだろう」と言いながら縄を引いた。すると。

するるっ

「いっしょに」

縄がタオルの間を通つたのか、するりと抜けた。

「道具は使っていません、同じことはできませんがフロントさんもやってみますか?」  
勇樹の言葉にカチンときたのか、彼女は「言われなくてもやるよ!」と言いながら勇樹と同じタオルで縄をやるが、引つかかってしまうのに彼女はイライラしている。そして。

「む、無理だ………完敗だ」

そう彼女は言うその後ろに倒れるのであった。

フロントVS勇樹

LOSE—WIN

.....

VSカトラス

「私との勝負は操縦です。戦車を使って海の家『れもん』に着くことです。先に着いた人が勝ちです」

それを聞いた彼は「なるほど、競争ですか」と言うと、彼女の挑戦を受ける。

戦車は何もないことに彼は思い出したため、百合子と呼ぶとそこらにあったゴミの山を使って戦車を作り始めた。

そして出来上がった戦車は、FCM36歩兵戦車であった。



「さすが勇樹君、あのガラクタ品メカがで来ましたね!!」

「ま、まあ。今回は砲台をチョイつと改造してオリジナルパーツを付けたんだからな」

そう彼は言うのと、百合子と一緒にさっさと戦車に乗り込んだ。そして勇樹は操縦席に座り百合子はキューポラから上半身を出した。

「今回はエンジンをガソリンではなく電気で動くように改造しました」

勇樹は彼女たちに向けて言うのと、マーク IV 戦車の雄型に乗っているお銀は「いいだろう」と答える。そして……。

「よーい………どん!!」

そして百合子の合図と同時に、2台の戦車は一気に学園艦から海の家『レモン』のところへと走っていた。

しかし、勇樹が作った特殊戦車・FCM36歩兵戦車は電気で動いているのか。いつもより素早い動きで走っている。

砂浜なので勇樹は戦車のキャタピラをちよちよいつと改造したため、普通の戦車より早く進んでいる。

「おお、これは勝てるかもしれないませよ勇樹君!」

「だろいな、しかしこれじゃ俺たちが圧倒的にかつっというのは……」  
百合子の言葉に勇樹は答えるが、サメさんチームが可哀そうに思ったのか、そう眩いた瞬間。

ドガアアアン!

「な、なんだ!?!」

突然の爆発音に、彼はブレーキをして急停止した。その衝撃で百合子は「ヒヤッ!!」と驚く声にする。

「ゆ、勇樹君。どうしたんですか!?!」

「爆発だ! 今の爆発音が住宅街から音がしたんだ。お銀さん、挑戦は一時中断です、今は海の家に行ってきます!!」

勇樹はお銀に向けてそう言うと、急いでその場者まで走っていく。お銀たちは何があつたのかわからず、その場で立ち止まることしかできなかつた。

.....

勇樹と百合子が着いたところは、相沢家の家でその近くには巨大なお相撲型のメカがイカ娘（基相沢家）のチャールを盗もうとしている。

「勇樹君!!」

「もちろんだ! 百合子さん、そこにコントロールがあると思いますですがそのコントロールはこの戦車の弾があらかじめ入っていますので、打ってください!!」

それを聞いた彼女は「わかりました!!」と言いながらコントロールを出すと、カチツとボタンを押した。

すると、砲台はお相撲メカに向けるとバゴンツ!! と何かを放った。その弾はメカに当たると当たった部分から火が出てきて燃えたため、メカは戦車を手放した。

それを狙っていたのか、勇樹は「いまだ!!」とスイッチを押すと、戦車からクツシヨン付きのマジックハンドが出てきて、チャールを受け止めた。

「やった!! 取り戻せましたよ勇樹君!」

「よっしゃそうだな!!」

百合子と勇樹はそう言うのと、メカは突然2人が乗っているメカにらみつけた。それを見た2人は「あら」と汗をかいてきた。

「ゆ、勇樹君……きよ、巨大メカはありませんか?」

「い、いや……実は巨大メカは今回作った戦車で資金は空っぽなんだ……」

それを聞いた百合子は「そ、そうですねか……」と冷静に答えて数秒後、彼女は勇樹に向けて。

「すぐに逃げてええええええ!!」

それを聞いた彼は「は、はい!!」と急いでレバーを動かすと、戦車は突然バックして逃げ始めた。相撲メカは彼らの後を追うかのように、突然追いかけ始めた。

「あわわわっ!! これじゃあ追いつかれます!!」

「最大限に行こう、できるだけいいから離させるぞ!!」

勇樹は百合子に向けて言うと同時にブレーキとアクセルのペダルを動かした。するとFCM36歩兵戦車はとんでもない速度で逃げていき、捕まえないようにしていく。

だが、相手のメカは徐々に素早さを上げていき、勇樹と百合子が乗っている戦車をつかめようと手を伸ばした。だが。

ドガアアツ!!!

突然メカの手が何かに爆発したため、2人は「なんだ（なに）?!」と驚いている。辺りを見渡してみると、右側の道路からキヤタピラの音がしたため、振り向いてみると。

「勇樹さん!! 助けに来ましたー!!」

「勇樹、私たちも来たぞー!」

「み、みほさん! と、だれですかあの人……?」

みほとお銀を見た彼女はすぐに反応するが、お銀が初めて見るため勇樹に向けて言う  
と彼は「後で説明する」と言いながらカバンから何かないかと探している。

「あった! アンコウチームのみんな、サメさんチームのみんな。突然だがこの鎖を渡す! オレたちが囷になるからその間に!!」

勇樹はそう言いながら鎖をみほとお銀に渡すとは「わかった!」と言うと、勇樹は「それじゃあ」と言いながら百合子に向けてこう言った。

「百合子さん、砲台を用意したので放ってください!」

「よーし、わかりました! 発射っ!!」

勇樹の言葉に百合子はスイッチを押すと、砲台からバゴツ!! と弾を放つ。すると弾はメカに当たり後ろによろめく、そして、みほとお銀が乗っている戦車は片足に鎖を巻き付ける。すると。

「そおれええ!!!」

一気に戦車は全身に進むと鎖は足に引っかかりメカは後ろに倒れていく、そしてその瞬間を狙ったのか勇樹は。

「今です、百合子さん。第二の弾の発射用意はもう終わりましたから、放ってください!!!」

彼の言葉に彼女は「わかりました!!」とレバーとスイッチをカチャカチャと動かすと、画面に例のメカが映りだして標準をそのメカの胴体に合わせる。そして。

「それえっ!!!」

ガキツ!!

百合子は勢いよくレバーを引くと、砲台から弾が放たれるとそれは胴体に当たる。そして弾は背中から出てくるとメカの体から黒い煙や電気があふれてくる。そして頭か

ら白い蒸気が出てくると。

ドガアアツ!! バガアアアツ!! チユドオオオオン!!

例の通り大爆発するのであった、幸いみほとお銀たちは無傷で街には被害はないが戦車の一部が壊れていたため、イカ娘たちが帰ってくる前に修理するのであった。

.....

「勇樹、お前は私たちよりも素晴らしいやつだな、気に入ったぞ!!」

お銀の言葉に彼は「そ、そうですか」と答えると彼女は手を出して握手をする。

「桃さんの友人として、お前はすごいやつだ」

「親分の言う通りだよ」

「あたいらはあんたが好きになりそうだ」

「そうだな」

「また、ここにきてもいいよ」

彼女たちの言葉に勇樹は「か、考えておきます」と答える。

そして、勇樹は海の家『れもん』に行くのと太田たちがいたため栄子に「メロンソーダーを」と頼んで彼らのいるところまで行く。

「勇樹君、話は聞いたけど例のメカから何か情報は?」

「なかった、だが。あの爆発の時部品がいっぱい飛んであつちこつちばら撒いた時にこれを」

勇樹はそう言いながらポケットから何かを取り出して、みんなの前に出した。

それは、ドクロマークが入った歯車だがそのどくろは右は赤色だが左に行くにつれ、オレンジ、黄色、緑、青に変色している。

「ん、初めて見るな」

「そうですねアレンさん、勇樹君。これは?」

「オレも初めて見るよ、ただあのメカは相沢家基イカ娘が所持しているチャールを狙っていたんだ」

アレンと百合子は歯車を見て彼に言うのと、勇樹は「初めて見る」と真剣に答えていく。「だけど、栄子から聞いたが相沢家は今安齋さん。基アンチョビとペパロニにカルパッチョの3人が分け合って居候しているから彼女たちに戦車のことを出来るだけ話してチャール監視するように言うよ」

それを聞いた伊江と中氏は「(あいつら、相沢家に居候しているんだ)」と思ったの



であつた。

『侵略! パンツァー娘』編 第5話『試してみなイカ?』

「うーん、どうやってもこれはなかなか出来上がらないなあ……」

倉庫の中、基（仮）勇樹研究所内では勇樹が何かを開発しているのかFCM36歩兵戦車を見ながら設計用紙を見ながら何かを書いているが、なかなかいい物が出来上がらないのか「うーん」と悩みながら描いている。

「資金はあるものの何かを作らないと落ち着かないな……どうしよう」

勇樹はそう言いながらアイスココアを飲んで落ち着こうとしている。すると。

ドガアツ!!      ドガアツ!!

「な、なんだ!?!」

突然何かがぶつかっている音がしたため、彼は急いで扉を開いて外を見てみる、その瞬間。

シュツ!      バガツ!!!

「ぶがあッ!!」

突然ボールが顔に当たったため、勇樹はそれを顔から外す、どうやら顔に当たったのはバレーボールだ。

「いてて、なんでボールが……てかバレーボールから連想するチームって」

勇樹は何か心当たりがあるのか、あたりを見渡すと、一年生のうさぎさんチームが「すみませーん」と言いながらやって来る。

「まったく、バレーをするのはいいけど。風紀委員にこれやられたら怒られるよ」

怒られはしなかったが注意されたうさぎさんチームは「わかりました」と言いながら答えると、うさぎさんチームの中からツインテールの大野あやが「あれ?」と何かに気づいたのかあたりを見渡している。

「ん、あやさん。どうしたんですか?」

「あ、実はなんですけど紗希がいないのでどこに行った、の、か……」

途中から何かを見て驚いたため勇樹は「ん?」と後ろを振り向いてみると、なんと紗希が勇樹の設計しかけているメカの設計図をいじっている!!!

「ああああああっ!!! さ、ささささ紗希!! オレが作りかけているメカの図を!!」

それを見た勇樹は急いで先を抱えて他の所に移して用紙を見ると、メカの外観は問題なかったが、内部であるエンジンや操縦席がばらばらになっている。

それを見て彼は「あゝあ、やつちやたな」と答える、だが何かに気づいたのか「ん?」と用紙を再び見る。そして何かに気づいたのか「そうか、それがあつたんだ!!」と言うと紗希に向けてこう言う。

「紗希さん、あんたはとんでもない才能があるよ!! ありがとう!!」

紗希にそう言った彼は「早速、再び設計紙に描くぞー!!」と言いながら書き始めた。それを見た紗希は「何のこと?」と首をかしげるのである。

.....  
午前2時ごろ、倉庫の中ではギンゴンガンゴツ!! と、金属の響く音がして何かを組み立てている。

その音の正体は、勇樹が何かの乗り物を作っている音であった。その乗り物は円筒状に近い形で色は紫色をしており、手足は巨大なシャベルの形に近い形をした手足が付けられている。

勇樹は何かの部品をみて「これをこうしたらもう少しで」と言いながらカチャカチャと作っていく。

そして、彼が作った何かを乗り物につけると「やった、ついに完成だあつ!!!」と、喜ぶのであった。

そして、勇樹が完成したメカを次の日になると同時に、『れもん』にいるイカ娘に栄子と千鶴、バイトの渚と『侵略部』の清美達。大洗のアンコウチームとうさぎさんチームにカメさんチームとアリクイチーム、そしてレオポンチームに『昼に面白いのを見せるよ』とメールで通信するのであった。

太田たちにもそれを知らせると『なんだろう』と思いながら『れもん』へと集合するのであった。

.....

「で、皆さんもですか？」

太田の言葉にみんなは「そうだよ」と一斉に答えるのであった。

「まったく、昼は休憩があるからかまわないけど。何を作ったんだ？」

「もしかして、イカ娘ちゃんが集めたごみで何かすごいのを作ったと思うわ」

「でも、私も見たことない物だから。全然知らないゲソ」

栄子、千鶴、イカ娘はそう言う渚が「もしかして」とある物を浮かばせる。それは。

「(イカ娘さんの侵略を押さえることが出来る機械でしょうか、もしそれが出来たら私は…!!)」

と、頭の中で浮かばせるのであった。一方の大洗は。

「うーん、わたくしたちに見せたいのはいったい何でしょうか?」

「昨日の夜遅く作っていたから、きつと大きな何かだろう」

「でも麻子、その何かってなに?」

「もしかしたら、勇樹殿は私たちが見たこともない大きな乗り物でありますね。前見た時には戦車を再現していましたが」

「ええ!?」　そ、それは驚きました」

華は何を作っているか考えて、麻子は彼が見せるのを予想し、それを逆に質問する沙織。乗り物ではないかと秋山が言ったところ、それを聞いたみほは驚く。

カメさんチームの角谷杏は「それだったらおもしろいねー」と言いながら干し芋を食べ、河嶋桃は「まったく、あいつの脳はどうなっているんだ?」と頭を抱えると、小山柚子は「なんだろう?」と不思議に思うのであった。

うさぎさんチームは、この前言った勇樹の言葉に疑問を持っているのか、みんなが考えており。アークイチームはゲームをしながら「「きつと最高な物だろう」」と一斉にそう確信する。

レオポンチームは「最速の乗り物?」「それとも見たところもない乗り物なのか?」と、車の話をするのであった。

太田たちは「きつと、また新しいメカだろうな」と思いながらみんなを見るのであった。すると、中武が「ん、あれはなんだ?」と砂浜を見て言ったためみんなは「何が」と思いながら砂浜を見る。

そこで見たのは、何かが地面の中にいるのか何かがこつちに向かつて掘って進んでいる。

「む、なんだあれ?」

「何かが潜んでいる……モグラでしょうか?」

「いや、あれは絶対にモグラじゃねえだろ。明らかに大きいよ!!」

麻子がその光景を見て言うところ華は「モグラ」と言うが、栄子は非常に大きいのを見て「モグラではない」と全力で答える。

だが、その何かは徐々にスピードを増してきたのか太田たちはいるところへと移動してきている。それを見たイカ娘は「させないゲソ!」と、彼女の触手が突然地面に潜ると、その掘っている物に向けて伸ばしていく。

「そうか、相手が生き物だったらイカ娘の触手で捕まえて」

「正体を見ればわかるのね、さすがイカちゃん」

「ふふふ、私の脅威を思い知るがいいゲソ！」

栄子と千鶴はイカ娘をほめていると彼女はそのまま触手を伸ばしていくと「捕まえたゲソ！」と触手を地面から出すとその正体が現れた。

それは、円筒状に近い形で色は紫色をしている。

手足は巨大なシャベルの形に近い形をした手足が付けられている

そして目と口が付いていて鼻だと思われるところにはドリルが付いている。

それを見たみんなは「ええ!」と目を丸くして驚くと、その何かは地面に勢いよく落ちると口が開くとそこから煙を吐き出すと同時に、胴体の一部がバカツと何かが開くと意外な人物が現れた。

「いででで、まったく何があつたんだ?」

ゴーグルをして誰かわからなかったが、特徴ある声を聴いた華が「あら?」とこう答



える。

「勇樹さん、いったい何をしているんですか？」

それを聞いたみんなは「えええっ!？」とさらに驚く、そして勇樹は「ん、なに？」とすつとぼけに答える。

.....

「ええ、これが勇樹君が作ったメカ!？」

それを聞いたみほは驚くと、勇樹が「え、そうだけど？」と目を丸くして答える。

「今回作ったメカは戦車のように頑丈でモグラの様に穴を掘ることが出来るのを合わせて作ったんだ」

それを聞いたうさぎさんチームは「もしかして!？」とこの前のことを思い出す。

それは紗希が設計図に落書き(?)をした時に勇樹が何か閃いて作ったこと。

「勇樹さん、もしかして紗希が書いたあれで?」

「ん、おうそうだ。今回はうさぎさんチームのおかげでこのメカが出来上がったんだ。お礼として今回はみんなに中を見せることにしたんだ」

突然の言葉に太田たちは「マジで!？」と驚く、彼が一般の人をメカの中を見せるのは一度もない。

それを聞いた秋山は「マジでありますか!？」と驚き、レオポンチームは「おお、それ

「はいいいね」とナカジマが言い、うさぎさんチームの梓は「本当ですか!？」と答えると勇樹は「もちろん」と答える。

イカ娘に関しては「非常に危険なので千鶴と一緒に」と栄子に言うと、千鶴はOKと答えると同時にイカ娘と一緒に行動する。清美を含む『侵略部』と渚は「逆に安心する」と答えるのであった。

.....  
 「おおつ、ここが操縦する所でありますか!!」

秋山は目をキラキラと光らせながらあたりを見渡している、それを聞いた勇樹は「いやあ、そんなことはねえぞ」と言いながら照れるのであった。

彼らがいるところは、ちょうどドリルが取り付けている操縦席で、ここに入れるのは限度があつたため清美と栄子と秋山、そしてみほと案内をすることになった勇樹が入っている。

「へえー、あいつが集めた物や粗大ごみに放り出されている物でこんなものを作ったのは驚いたぜ」

「そうですね、どのように動いているのじゃ気になってきました」

栄子と清美は操縦席を見ながら言うと、勇樹が「オレが開発したメカだからな、これぐらい簡単だ」と答える。

「メインエンジンは2本のレバーと操縦ハンドルと専用スイッチと言った3種類の操縦機で動かしている」

それを聞いた秋山は「さすがです、素晴らしいです勇樹殿!!」と感動する。

みほは操縦席を見て「すごい数の操縦機がある」と、目を丸くしてつぶやく。

.....

「ここがエンジンとなるかまどか、結構丈夫そうだね」

続いて移動したところは、このメカの動力源となる後部辺り、その真ん中にはかまどがあり左右には石炭や薪に燃料となるガソリンが積んでいる。

ここも人数制限があるため、ナカジマとももがーにびよたん、麻子と華に千鶴とイカ娘と一緒に来ている。ただ、ほかのとは違って内部が熱いためイカ娘は「熱いゲソ……」と言いながら倒れる。

「かまどだとエネルギーが通常の数倍も力が増して、内部に取り付けられている耐熱性の特殊な風車で動かすようになってるんだ。さらに冷蔵庫の様に熱を放てばのちに様めることが出来るんだ」

「へえ、じゃああの時の動きはこのかまどで動いていたんだね」

「でもこれじゃあ熱は溜まってかまどが壊れるんじゃないか?」

勇樹の開設にナカジマは感心するが、麻子は壊れるのではないかと言うと勇樹は「そ

「これはない」と解説をし始める。

「このかまどは一定の熱さが溜まると上から煙突が下りてきてかまどと合体して熱が放つようになってる、そして熱が放った後は自動で閉まるようになってるんだ」

それを聞いた華は「まあ、凄い機能ですね」とほめる。すると千鶴は何か思いついたのか、勇樹に向けてこう質問する。

「それじゃあこのかまどで料理は出来ないかしら?」

「できないとは言えないけど、かまどの熱を調節さえすれば料理は出来ますけど……なんでそれを?」

彼女の言葉に勇樹は答えると、千鶴は「確認よ確認」と言いながらイカ娘と一緒に動いていく。

ももがーとびよたんは「それじゃあ電気は出来るもも?」「気になるぴよ」と言うと彼はこう答える。

「もちろん、これは火力発電の様にかまどで発電することもできるんだよ」

そう彼が答えると2人は「充電できるかな?」と考えるのであった、もちろん勇樹は何のことも分からない。

.....

「おおーここが関節なんだ、狭いけど結構すごい数だね」

杏が答えた場所は、勇樹たちが通ってきた床の真下にある空洞内、ここはメカの大切な関節やコードにエンジンを通す専用のパイプなどが付けられている。

ここは非常に狭いため、ねこにやーに杏にうさぎさんチームの紗希と優季と梓と一緒に来ている。本当はレオポンさんチームも入る予定だが、コードや関節などが多かつたため「壊れたら大変な事になる」とスズキたちがそう言うのであった。

「関節って言っても、これはメカの一部でそんなに素早くは動けないんです」

「いやいや、こんなにもいろんな関節があつて動かすことが出来るのはすごいよ」

杏は勇樹をほめていてと優季が「あ、これは何ですか？」と言うので彼は振り向くと、前に四角い何かがあつたため彼は「ああ、これ？」と答える。

「ここは魚雷発射装置で、普段はあまりしないけどサメや逃走している者を捕まえたり追っ払うために設置したんだ」

勇樹はそう言いながらスイッチを押すと、壁が突然開く。そこは海の家『れもん』が映っていた。

「万が一のことを考えてここから脱出するように設計したんだ」

「へえ、すごい所に着けましたね」

梓はそう言うのと勇樹は「まあ、万が一のことだからな。万が一のこと」と言いながら床から出ると杏たちを移動させる。

すると、ねこにやーが「ん、なんか涼しい」と言っただけのため勇樹は「え?」とあたりを見渡す。そして何か気付いたのか、こう答える。

「ああ、このメカに設置した中古のエアコンを改造して最新型のエアコンにしたんだ。きつとそれで涼しいだろ」

それを聞いた猫にやーは「にやるほど」と言いながら、眼鏡のブリッジを上げるのであった。

紗希は操縦席においてある本を手にして持つていくのであった。

.....

「にしてもすげーなー、こんなもので作ったのは驚いたよ」

栄子はそう言いながらモグドンを見ていると、勇樹は「まあ、これぐらいオレにかかりや簡単だ」と自慢するのであった。

すると千鶴が「それじゃあ勇樹君、相談があるけどいいかしら?」と言っただけ彼は「なんですか?」と話をするのであった。

「明後日、れもんとのコラボを作るんだけど。あなたのかまどで料理は作れないのかしら?」

それを聞いた勇樹は「なるほど、それだったら」と話していると、突然メカからギギギツ、と音がしたためみんなは何かと振り向く。

するとモグドンの体が左右に少し揺れるかと思いきや、突然ドリルが回転し始めると同時に手足が動き始めて地面を掘り始める。

初めは勇樹の何かの演技かと思つて見てみるが、彼は何かあつたのか目を丸くして見ている。すると華が「あら、これは……」と紙を拾う、そこに書いていたのは。

『メカはいただいた、返してほしければ3日後、3式中戦車（チヌ）を持ってこい』

それを見たみんなは「どうしよう……」と考え始める、3式中戦車（チヌ）はアリクイチーム、つまり猫にやーとももがにびよたんが搭乗しているのであつた。

解決法は何かないかとみんなは考えるのであつた（ただし栄子と千鶴、イカ娘に渚はれもんの仕事があり。清美を含む『侵略部』のみんなは学校の部活があるため、途中から参加することになった）。

何かないかとみんなは作戦を考えているが、これでもないあれでもないという状況であつた。

.....

「うーん、なかなかいい方法が浮かばないね」

「これと言った方法が無いねー」

あやと優季を含むうさぎさんチームは何かないかと考えていると、紗希が分厚い本を讀んでいたため梓は「紗希、何呼んでいる?」と言うと、彼女は本を見せる。

その本には『モグドンの取扱説明書&戦車用遠隔コントロールの作り方』と書いている。

それを見たたん、梓は「そうだ、これを使おう!」とある計画を出した。

次の日、梓は大洗のみんなとれもん、そして勇樹たちを集めて作戦の内容を話す。「と言うことです、勇樹さんの発明品とレオポンさんの自動車技術、そしてアライクイチームの操縦テクを使えばうまく行けると思います!」

それを聞いた勇樹は「それはいいですね!」と賛成しホシノは「面白そうじゃん」と興味を湧き、ねこにゃーは「ゲームだったらボク行けるかも」と答えるのであった。

「よーし、そうだとしたら早速部品を集めるぞ!!」



勇樹はそう言うのと、太田たちは「おー!!!」と叫ぶと、早速作戦を実行するのであった。  
.....  
そして当日、手紙が来たためみんなはそれを見ると『由比ヶ浜に來い、ただし戦車を移動してくるときは西住みほ、武部沙織、冷泉麻子を連れてきて、交換すると同時に下  
がれ』と書かれている。

それを聞いたみほは、麻子と沙織と一緒に戦車を例のところまで移動する。

そこにいたのは、赤色と白色そして黒色のコートでだれか分からなかったが右ポケット  
ト辺りに虹色をしたドクロマーク型のバッチをしている。

「約束通り、この乗り物は返す。その代わり」

「わかりました、麻子さん沙織さん」

彼女の言葉に沙織と麻子は縦に振ると、戦車から降りてモグドンへと乗る。そして  
.....

ガチャンツ!!

「「!?」」

「へへーんだ、無料で返すと思うなよー!」

黒色のフードをかぶった人が言うと、そのまま3式中戦車を奪おうと「行くぞー!!」と走っていく。だが。

ギ…ギギツ……ギギギギギツ!!

「…え、動いた?」

砲台が、右に動き始めたため赤フードを人は何かと目を丸くしている、そして。

ドガアアツ!!!

ズウウウンツ!!

砲台から何かが鼻垂れて数秒後、砂浜に大きな爆発音がすると同時に大きな砂粒が空を舞った。

それを見た3人は「え」と呆然と立ち尽くして数十秒後、戦車の中から弾を詰めつ音がすると同時に戦車はフードをかぶった者たちを向いた。そしてそれを見た彼らは。

「「ゆ、幽霊だあああああああああつ」」

と変なことを言いながら去って行くのと同時に戦車はそのまま彼らを追い始めた。

そして数分後、戦車の砲台から網が放たれると同時に3人はそれに捕まってしまう、警察に御用よなったのであった。

それと同時に勇樹たちはモグドンに閉じ込められたみほたちを救うのであった。

.....

「さすが勇樹君、この道具を作るなんて！」

「いやいや、紗希さんが持っていたその本のおかげで解決できましたよ」

その夜、勇樹はうさぎさんチームに誘われて今夜は冷やしししゃぶパーティーをするこ

とになった。

この戦車が自動で動いたトリックは、勇樹が作り上げた『遠隔コントロールセット』を作ってそれを3式中戦車に取り付けて、猫にやーたちが使っているゲーム機を使って戦車を操縦するようにした。

使用範囲はそんなに離れても使用できるので、彼女たちと一緒にフードの人たちにはばれないように隠れるのであった。

「それにしても、紗希やるね」

「あの説明書と設計図を持ってくるなんて、きつすがっ!」

優季とあやは紗希をほめると彼女はコクツと首を縦に動かすと同時にジュースを飲む。

すると、それを見た勇樹は。

「ああ、紗希は『役になってうれしいよ』だな」

それを聞いた途端、あやに優季に梓に桂里奈にあゆみは「わかったの!」と驚く。紗希はポカーンと、目を丸くしている。

「まー、今までいろんな人たちにあったから。彼女の動きやわずかな唇の動きで話は分かるよ」

それを聞いたあゆみとあやと桂里奈は「すごい!!」と感動し優季は「驚いた」と後

ろに引き梓は「私たち以外に紗希の話を読める人いたんだ」と目を丸くするであつた。その後、彼女たちは冷やししゃぶを食べながらもみんなと話して、楽しい日を過ごすのであつた。

## 『侵略! パンツァー娘』編 第6話『大変じゃないか?』

「今のところ変化なかったよ、聖グロの戦車は紛失に侵入者はなし」

「僕もだよ、サンダースはリツチな学校であり戦車道をしている生徒は体を鍛えているから相手が侵入したとしてもすぐにやられるよ」

「こっちは警備が厳重って言った方が良いわ、カチューシャが指示しているから安心したわ」

「福音も大丈夫! 愛里寿ちゃんも福音と同じだけど高とび飛び級だからメグミ、アズミ、ルミちゃんの大学生たちが戦車の管理しているよ」

「オレもだ、最近アンチヨビのところも戦車に異常はないし、大洗の方もレオポンさんと一緒に戦車管理しているよ」

勇樹たちは、『れもん』で、各校やと相沢家に戦車が盗まれていないか話をしている。今のところそう変化はないが佐々木が「気を引き締めましょ、いつ盗まれるか分からないわ」と言うのと彼らは「わかりました」と答える。

佐々木たちは「用事があるからお先に」と言いながら言ったが、勇樹は「さて財布財布」とカバンから財布を出そうとしている。すると「やつほー」と声がしたため振り向

くと、沙織と麻子が『れもん』の中に入っている。

「沙織さんに麻子さん、どうしたんですか？」

「それはこつちのセリフだ勇樹」

「そうだよ、こつそりと学園艦から出て行こうとするから後を追ったら『れもん』にいらなんて、どうしたの？」

勇樹が質問すると麻子と沙織の逆質問に彼は「やれやれ」と頭を押さえた瞬間、外から「なんだなんだ!？」と、声が出たため勇樹と沙織と麻子は、外に出てあたりを見渡してみる。

すると海から巨大なタコ型の潜水艦が現れて、近くの岩場に着陸した。

「なにあれ!？」

「タコ……にしては変な姿だな。なんだ？」

2人は何かと見ているが、勇樹は「敵か!？」と武器を出そうとするが、突然頭のハッチが開くと10人千歌人数が出てきた。

麻子と沙織は一体誰だ？ と頭を傾げるが、勇樹は「ウソだろ!？」とそれを見て驚いた。

「ふひい……やつと着いたつすう……」

「や、やつと熱い潜水艦から出られたな」

「そうですか? まだ涼しいですわよ?」

「奈々様、体感温度の違いは人によって違いますよ」

「そ、そうだな……この暑さには私はギブアップだ……」

「それでもありません、これも修行の一種です!!」

「だー!! もう限界だ、おめえら熱すぎだっ!!」

「そうですわ、このレディーを殺す気ですの!?!」

「てか、暑い暑いというなっつての!!」

「うみゆ……」

「わしは暑さはあまり感じないが、大変なのは理解するぞ」

「そうですね、私も同意します」

それを見た勇樹は「だあ、こいつらは」と頭を抱える。

.....

「まあ、それじゃあこの子たちは勇樹君の友達?」

「友達つというか、正式にはオレの知り合いなんです」

勇樹はとりあえずみんなをメカから出して海の家へと行き千鶴から大量のお冷とお



しほりを用意していったの彼女たちを休ませる。

彼女たちは暑さから解放されたのか、お冷を一気に飲むと同時に「ふう」と、ため息をするのであった。

「しつかしなんだあのへんてこな乗り物は？」

「む、へんてこは余計つすよ！ これは先輩が作ったタコ型の潜水メカ『オクトパスメカ』つす！」

栄子が変わなことを言うと、180センチ以上はある茶色のシヨートヘアーの少女が彼女に向けてにらみつける。

あまりの身長差に栄子は「うおっ!」と驚く。

「このメカは先輩が作った中で潜水可能で陸でも歩行が可能、であり空を飛ぶことがだつてできるつすよ!!」

「ほえー、それでこんなにもすごいメカなんすね」

彼女がそう言っているとペパロニはメカを見てほめると、170センチ以上はある銀色のポニーテールの少女は「ああそうだ」と答える。

「嫁が作ったメカは他のとは違って素晴らしい物だ！」

「そうつすね……あれ？」

すると、ペパロニはあることに気づいたのかあたりを見渡している。

「む、どうしたんだあたりを見渡して」

「あいや、実は栄子さんの姿が見かけないんでどこに行ったのかなー?」 と思つて」  
 ペパロニの言葉に彼女はあたりを見渡すと、確かに栄子の姿が見かけられない。

それどころが、あの4人と奈々がその場から消えたのを見て彼女は「あいつらどこに行つた!？」と驚くのであつた。

みんなは急いで、彼女たちを探し始めた(栄子、千鶴は店があるため不可)

.....

「にしてもあちーなー、円何とかしてくれいか?」

「わたくしも同じですけど、それが出来れば問題なしですわあ……」

「しゃべればしゃべるほど、暑さが増す……それ以上喋るの止めることできるか?」

「お、お星さま……お星さまが見える〜」

そう言つたのは、ブン・ボーグの彼女たちであつた。彼女たちは現在砂浜で休んでいる。円は現在、何かのメカを作っているのか巨大メカ作っている。

沙市音が円に向けて言うが、彼女はそれに答えながら機械をちやつちやと作る、それを聞いたイレイザーはムカムカツとしながら本を読んでいる。双葉は目を回しながら、

頭から蒸気を出している。

すると、ちびっ娘……ではなく、神条は何かを見つけたのは「おい、あそこにいる生徒はいつたいたえれじゃ？」と言ってきた。

それを見た沙市音は「ん、見たこともねえ姿だな」と答える。その生徒とは、黒峰高校の生徒・逸見エリカであった。

「ん、あんたたち」

彼女たちを見たエリカはジト目で見ると、「またあのイカ娘のような奴が来たわね」と言う。それを聞いた神条は「だれが不審者じゃ！」と怒るが、円が「まあまあ、落ち着いてくださいまし」と落ち着かせる。

「これはすまなかつたな。神条は棘がある言葉が苦手なんだ」

「そう、あんたの保護者ってことね。まったくちゃんとしているの」

保護者と言う言葉に彼女は「へ？」と頭を傾ける、どうやら保護者は分かっているが、どういう事なのか、理解していないようだ。

「どういう意味だ、まあ保護者みたいなものだが神条はオレたちの先輩で最年長だぞ」

彼女の言葉にエリカは「はあ!？」と驚くと「そんなのウソに決まっているわよ!」と答える。

「だいたいね、そんな子供が最年長っておかしいわよ。みほなんか隊長と同じだけど双

子じゃなくてしまいだからね!」

それを聞いたみんなは「へ?」と目を丸くして答える。すると。

「エリカ、一体どうしたんだ?」

突然声がしたため、エリカは「隊長」と答える。黒峰高の戦車道隊長、西住流の姉・西住まほが歩いてきている。

「あまり見かけない人たちと話するのは初めて見るからな、何かあったのか?」

「は、はあ。なんかおかしな人たちに注意したら、変なことを言うので」

すると、エリカの言葉に不満を持ったのか。円が「お待ちなさい」と口答えをする。

「わたくしたちのどこがおかしな人たちですか? こう見えてわたくしたちはエレガントですよ」

それを聞いたエリカは「ふっ、どこがエレガントやら」と笑う。すると円は「ああ?」と頭に血筋が浮かび上がる。

それを見た沙市音たちは「あ、やばい」と引き下がる。

「あなたの言葉使いは、わたくしたちにとつてはあんたらの言葉遣いが非常におかしいと思いますわ」

「ふつ、そう？ でもあんたのやっていることは、お嬢様じゃなくて素人に見えるわよ」  
 「聞き捨てなりませんわね、それでしたらわたくしのメカと勝負しませんか、もちろん速  
 度で！」

「いいじゃない、今から準備するから待つておきなさい！」

それを聞いたまほと沙市音は「ああ、やらかしたな」と頭を抱えるのであった。

そしてエリカは黒峰高の船へと行き、沙市音はテントに入つて特大メカを作り始める。  
 .....

一方、連華と靈華は。辺りを見渡しながら砂浜を歩いていた。

「ふむ、ここは結構熱い所だがそんなにひどくはないな」

「そうっすねー、海未があるかわ涼しいっすかね？」

2人はそう言いながら歩いていけると、向こうからドシンツ!! と音と振動が響いた。

「なんだ？ 地震ではないな……」

「何かあったかもしれないっす、急いでいくっすよ！」

靈華の言葉に連華は「ああ」と答えると、急いで走っていく。

2人が付いた先は、なんと大きな穴が出来ていて。近くには蜘蛛の巣の破片があった。

「なんだこれは!？」

「蜘蛛の巣があるっすけど、この穴は……」

2人は状況を見て驚いていると、連華は「そうだ」とある物を出す。それはどこにもあるリモコンだが、画面には『YUKI・ISHIKAWA』と映し出されている。

「これをできるだけ撮っておいて、あとで解析するようにするぞ」

「ほへー、先輩のことになるとこうっすね……まあ、うちもやるっすけど」

2人はそう言いながらも、携帯のカメラでパシャパシャと写真を撮るのであった。

.....

一方の奈々と天女は、聖グロリアーナ女学院付近にいる。

大きな門に2人は立ち止まっている。

「まあ、大きい艦隊ですわね。素晴らしいです」

「大きさは私たちの屋敷の方が大きいと思いますが……」

2人はそう言いながらあたりを見渡していると「あら、あなたたちは」とダーズリン

がやって来た。

それを見た羽衣は、こう答え始める。

「申し遅れました、私は奈々様の付き人兼護衛の羽衣天女です。そして」

「わたくしは、七星奈々です。よろしくお願ひします」

「まあこれは、私はダーズリンと言います。以後お見知りおきを」

天女と奈々、そしてダーズリンの3人がそう言うと、門が自動で開きはじめた。

それを見た奈々は「まあ」と目を光らせる。

「この門自動で開くのですね。素晴らしいです」

「そうですね……そう言えばダーズリン様は、どうして外に」

「はい、先ほどケイさんと出会いましたが。この後勇樹さんにある企画を話そうかと」

「ダーズリンのある企画と言う言葉に、2人は「ある企画?」と首をかしげる。ダーズ

リンは「ここで話すよりも中に」と2人を艦内にご入場する。

.....

一方、モスキートは。レオポンさんチーム基自動車部の戦車の日陰で横になっている。

「ふう、やっと日陰に避難できた……」

彼女はそう言いながら白衣からトマトジュースの缶を出して飲み始める。

「むきゅ、むきゅ……あー、生き返る」

彼女はそう言ったとたん、突然戦車が「ガガガガッ」と前に進み始めた、それを感じた彼女は「お?」とあたりを見渡して、それを見つけると歩いていく。

実は、自動車部の戦車はポルシェティーガー VK4501(P)は、砲台は強く威力は強いが、速度はいまいちである(坂道を上るのも苦勞する)。

「お、お〜い、私を忘れるな〜」

彼女は早歩きで追っていると、ハッチが開くとスズキが出てきて「あれ?」と辺りを見渡す。そして彼女を見つけると「ナカジマ、ストップストップ」と言うと、戦車は停止する。

「ほひい、ほひい、何とかついた……」

「うわー、お姉さんここまで歩いてきたんですか? それだったら驚いたよ」

モスキートの行動にスズキは驚くと、彼女は「あ、当たり前だ」と答える。

「あぢい、それにしてもこの戦車はでっかいな……改造しているところがあるから元はもしかして」

「お、わかる? 前の戦車を改造したけどね」



「おおつ、マジか!!」

ナカジマが出てきて、モスキーと話をするのであった。ちなみに、夏の暑さは話をしたため忘れてしまった。

.....

「あなたたちが風紀委員ですか」

京子は今、風紀委員のカモさんチームのリーダー、園みどり子に関心があるのか目を光らせている。

「そ、そうだけど。あなたは一体誰よ?」

「わたくしですか、わたくしは、風紀委員兼奇跡の部員であり父・圭造と母・桂華の娘の薩摩京子であります!」

京子の話を聞いたみもヨ子は「あなたも風紀委員?」と質問すると彼女は「もちろんであります!」と答える。

「わたくしは曲がったことが大つ嫌いであり、このような曲がった人をまつすぐにするのが目標ですが、なぜかわかってもらう人がいません……ですが!!」

すると京子は、みどり子たちに向くと。彼女の背中から『真の正義』と文字が浮かび

上がるほどの熱意が出てきた。

「あなたたちの行動は、生徒を見張って悪いことをしていないか探し。小さなながらもみんなの力を合わせて共に行動するのが素晴らしいであります!! ぜひ、わたくしも入らせてくれませんか!？」

それを聞いたモヨ子と希美はそれは無理だろうと苦笑いをするが、みどり子は「もちろんよ!」と答える。

「そうでありますか、では今から」

「ええ、早速風紀委員の腕章を持ってくるわ!!」

みどり子はそう言うと同時に学園艦へと戻って、腕章を持ってくるのであった。それを見た京子は「光栄でありますう!!!」と感激する。

ただ、モヨ子と希美は「大変なことになりそう」と思ったのであった。

.....

「だあ、どこにあいつらがいるか分からないな……沙織さんに麻子さん、イカ娘さんに渚さん。見つかりましたか?」

勇樹は4人に向けて言うと、沙織たちは首を左右に振る。どうやらいなかいうようだ。

それを見た勇樹は「そうですか、それにしてもどこにいるのかな？」と頭を抱える、すると。

「あ、ここにいましたか！　みなさーん!!」

声が出たため、みんなは何かと声が出たほうが向くと黒峰高の生徒がやって来た。

「あれ、赤星じゃなイカ。どうしたんでゲソ？」

「じ、実は。エリカさんとお嬢様らしき人が銭湯をしますよ！　どうすればいいか……!!」

イカ娘たちは赤星の話を聞いていると、『お嬢様』と言う言葉に勇樹は「あれ？」とある疑問を持ち、試しに聞いてみる。

「赤星さん、その人ですが。他に誰かいませんでしたか、例えば少女か男勝りの女性か」「そう言えば、そのような人がいました。あと本を読んでいたり目を回している人、そして青年も！」

それを聞いた彼は「あー、あいつらか」と確信したのか、再び彼女に「その人たちどこにいますか」と聞くと彼女は「あちらです」と砂浜の方に指をさす。

そして勇樹は「ありがと」と急いで走っていく。それを見たイカ娘は「おい、どうするゲソ!？」と慌てていくのであった。

.....

そして、勇樹たちが着いた浜にはMBT3000戦車とパンターG型が駐車していて、そこからMBTには円、パンターにはエリカが乗っている。

「いい、必ずあの世間知らずのお嬢様をコテンパンにするのよ!!」

「なにが世間知らずのお嬢様ですの!?! そちらこそネジが抜いている女をやっつけてやりますわ!!」

これは非常に危険な状態になっており、2人の間には電気がバチバチと出ている。

すると勇樹は何かないかとあたりを見渡していると、沙市音たちがいるシートに液体があることに気づき、急いでそこに行き何かを作り始める。

「確か、N-29とR-81を混ぜてチタンと融合し沸騰したお湯を混ぜれば……完成だ!!」

勇樹はフラスコに緑色の液体を完成させると、それをイカ娘に向けて「イカ娘さん、これをあの2人にかけてくれ!」と言いながら投げる。

それを受け取った彼女は「わかったゲソ!」とそれを勢いよくエリカと円に向けて液体を投げる、その液体は2人の頭にかかった瞬間、何かあったのか目をぱちくりするのであった。

「……………私たち、何をしていたの?」

「……………さあ、わかりませんわ?」

2人はそう言うと同時に、エリカは戦車を学園艦に円は分解して戻すのであった。イカ娘は何があつたのか「一体あの2人に何をしたのでゲソ?」と言うと、彼はこう答える。

「この液体は『オワスレ液体』と言ってな、この液体にかかった人はわずかな間だが記憶を忘れてしまう特殊な液体、ただし忘れるのは30分ほどだから。その間にほかの記憶を入れてくれれば大丈夫だよ」

それを聞いた赤星は「わかりました!」と急いでエリカの後を追い、沙市音たちは「よし、早速やるぞー!」と円のところへと行く。

「まったく、幸い道具があつたからいいけど本当に戦争になつたらどうなるのやら」

勇樹はそう言いながらジト目で見ていると、突然「勇樹様あああつ!!!」と声が出たため振り向くと、勇樹に向けてローズヒップが走ってきた。

「あれ、ローズヒップさん。一体どうぶびぼっ!?!」

勇樹が彼女を見ると同時に、突然タツクルしてきたため。赤星たちは驚いた。

「いだだだだっ……………な、なんでオレがこんな目に」

勇樹を頭を押さえて言うのと、ローズヒップは「ああっ、ごめんなさい!」と立ち上がった

て謝る。

「それどころではありませんわ、勇樹様!　だ、ダーズリン様がお嬢様とメイドを呼んできて話していますわ!!」

「なんだ、それだけで……待てよ、お嬢様とメイド?」

ローズヒップの言葉に勇樹は何かに気づいたのか、『お嬢様とメイド』に反応する。

「なあローズヒップ、もしかしてそのお嬢様は金色で巻き髪ロールでメイドは灰色のサイドテールをしていなかった?」

「そうですね!　そのような髪形をしていました!!」

それを聞いた彼は「やっぱり」と頭を抱える。だが「まあいいだろう」とジト目でローズヒップを見る。

あの人たちはほかの人たちとは違って真面目な一面があるからだ。

.....

「まったく、被害はあまりないが大変になってきたよ」

勇樹はそう言いながら歩いている、それを聞いたイカ娘は「お主の気持ち、何かわかるゲソ」と答える。

すると、麻子が「おーい勇樹」と言ってきたため、何だと振り向く。

「なんかお団子の女がそど子のところにいるが、そど子がいつも以上にやる気を出している」

それを聞いた勇樹は「まてよ、確か園みどり子さんは風紀委員だから……」呟くと、何かに気づいたのかある事を思い出す。

「もしかして、みどり子さん「京子」と言っていないかった?」

それを聞いた麻子は「おお、そう言っていたな」と答える。勇樹はまた頭を抱えそうになるが「まあ京子さんのことだから、そのままにしていくな」と言いながら移動する。すると麻子は「おお、それと」とこんなことを言い出す。

「なんか白衣を着た女性がいたが、もしかしてそれも——」

麻子が言いかけたところで勇樹は「まて、それってクマをしていなかったか?!」と一気に麻子に質問する。それを見た彼女は「お、おう」と答える。

「た、確かにその人は白衣をしてクマがあるけど……それとどういう関係が?」

それを聞いた彼は「至急、その2人に『無理はしないように』と伝えてほしい」と言うと同時に、れもんへと行く。

沙織と麻子は「ほへえ……」と目を丸くして答える。イカ娘は「渚、そろそろ店に戻らないイカ?」と言うと彼女は「あ、そうですね」と答えて、れもんへと帰るのであった。

その後、連華と靈華の報告で勇樹たちは戦車を嚴重に監視することになった。

ちなみに、新ブン・ボーグは黒森峰、連華と靈華はサンダースで奈々と天女はグロリアーナ、京子は大洗でモスキートはプラウダに泊まることになった。

.....

そして次の日、勇樹はいつも通り（仮）研究所でモグドンの修理&改造をしている。

「この部品をこうして、ここを外して……もう少しだな」

彼はインパクトドライバーで壊れた部品を外して、何かを取り付けていると入り口から「やつほー」と声がした。

勇樹は何かと思い、モグドンから出て声がしたほうに見てみると、角谷杏が中に入ってきた。

「あら、会長さん。どうしたんですか？ 何か用事でも」

「あー実はね。今度みんなでこれをやろうとを考えて呼んでみたんだ」

会長はそう言いながら紙を渡す、それを見た彼は「え？」と目を丸くする。

「来週からやるからね、勇樹ちゃんたちも来るようにしているから、じゃーね」

会長はそう言うのと、研究所から出て扉を閉める。



すると、勇樹は「あれ、確かこれって」と何かに気づいたのか、電卓を出して計算し始める。

「生徒合計の重さに戦車の重さ、1人当たりの平均の重さに必要な車両の数……」  
カタカタと電卓で計算し、何かがわかってきたのか時々メモをしている。

そして「できたあ」と計算を終えると同時に、電卓の画面を見た。その瞬間。  
「げげっ!!?」

あまりの合計に彼は驚き目を丸くした、そして何かいい方法はないか……? と考える。  
すると、勇樹は何か思いついたのか「そうだ!」とある事を思いだす。

『侵略! パンツァー娘』編 第7話『怪しくないイカ?』

「さて、今回もやるか!」

そう言うのは、相沢家に居候兼戦車を教えているアインツイオのリーダーである、彼女は今日は千鶴と一緒に一足先に海の家へと行き開店準備をすることにする。

「あそれじゃあアンチヨビちゃん、無理はしないで頑張りましょ」

「わかりました、千鶴さん!」

そして、扉を開けようとした……その前に、千鶴は「あら?」とある物を見つけた。それは、長方形型の封筒で中には紙が入っている。

「千鶴さん、その封筒は?」

「さあ、わからないわ?」

アンチヨビの質問に彼女は首を傾けている、中身が気になってきたのか封筒を開けるとある物が入っている。それは。

「履歴書?」

「そうですね……ん?」

履歴書を見たアンチヨビは、写真を見て彼女はどこかで見たことあるのか上下左右から写真を見た瞬間「あれ!」とこんなことを言い出す。

「これ、勇樹じゃないか!」

それを聞いた地筒は「ええっ!」と履歴書の写真を見てみる、確かによく見ると。瞳の色は青色になっているが目つきや髪型は変わらず、本人だとわかる。

「ええっ、それじゃあ千鶴さんのところに履歴書が来たのですか?」

午後、あんこうチームとカメさんチームのみんなはイカ娘からの電話でやってきて、千鶴から話を聞いている。

「ええ、私は構わないけどいきなりだから驚いたわ」

それを聞いた杏は「いやあ、なんだか怖い話だねえ」と笑いながら芋けんぴを食べる。アンチヨビも「ああ、そうだろ」と答える。ちなみに彼女は今、休憩中である。

「それにしても、いきなりここにバイトをするのはなぜだ? お金や働く前ぶりならともかく、内緒にしているかのような行動だ」

麻子はそう言いながらクリームソーダを飲んでみると、秋山は何か気づいたのか

「そう言えば」とこんなことを言い出す。

「ケイ殿から聞いた話ですけど、同様の事件があると聞きましたけど。もしかしてこれは連続封筒事件ではありませんか!？」

それを聞いた沙織は「そ、それはないと思うけど」と苦笑いで答える。

だが、華は何か思い出したのか「そう言えば……」とこう言ってきた。

「勇樹さんがいると思われる倉庫からですが、何かの瓶がこすれる音と甘い匂いがしました」

それを聞いたみほは「甘い匂い?」と呟いた途端、突然。

「あ、千鶴さん! 千鶴さん!!」

外から声がしたため何かと彼女は外を見ると、ニルギルが慌てながら海の家へとやって来た。

「ニルギルちゃん、どうしたの慌てて?」

千鶴の言う通り、彼女は今汗だくで怖い夢を見たのか気を切らしている。

すると彼女は「じ、実は」と慌てながらこう言った。

「ゆ、勇樹さんが聖グロリアーナ女学院にアルバイトをしてきたのです!!」

それを聞いた途端、みんなは「なんだと!!?」と驚く、ただ杏は「なんだかやばいことになってきなね」と言う。

夜、みほは何が原因かと思ったのか。ある人に電話をしてきた。

「あ、お母さん。私だけどちよつといいかな?」

『みほ……構わないわ、何かしら?』

みほの母であり西住流の家元、西住しほ。彼女は今実の母親に電話している。

「うん、実はね勇樹君のことで話があるんだ」

『勇樹? ……誰かしらその人』

しほは『勇樹』と言う言葉に疑問があるのか聞いてみると、彼女は「私たちの友達だ

よ」と答える。

『そう、それでその勇樹君に何?』

「うん、実は勇樹君、お母さんのところに行ったのかなと思って」

『……来ていないわ、それに私は今仕事で倉鎌にいるけど彼は見かけていないわ』

それを聞いたみほは「そう、ありがとうお母さん」と言っつて「それじゃあお姉ちゃん  
 によろしくね」と言うとう電話を切る。

.....

次の日、海の家『れもん』は現在お休みだが、その中にはみほと姉のまほ、ダージリンにケイにカチューシャ、ミカと西絹代と島田愛里寿とイカ娘のメンバーがそろつている。

「それじゃあ本日の会議はこうだ『勇樹のアルバイト』についてだが、イカ娘はどうだ?」  
「うみ、黒峰高の西住さんの言う通り。勇樹は私が集めたごみでメカと言う物を作っているでゲソ」

まほの言葉にイカ娘は淡々と答える。

「カチューシャの所も来たわ、『悩み・アルバイトはありませんか?』と書かれていたから少し怖かったけど、おかしなところはなかったわ」

「そうですね、わたくしの所も来ましたが何か恐れていたのか『無理やりでごめんなさい』と書かれていたわ」

カチューシャとダージリンの言葉にみほは「そうですね」と答える。すると西は何か気付いたのかこんなことを言い出す。

「その前になんで我々にアルバイトを? それに法則があるような気がします」

『法則』と言う言葉にみんなは「え?」と反応する。その言葉にミカは「そう言えばそうだね」と言い出す。

「はじめに置かれていたところは海の家れもん、次はプラウダ、その次は黒森峰、サン

ダースにグロリアーナに大学選抜。何か共通はないかな？」

それを聞いたみんなは何かと考えると、イカ娘は「もしかして」とある事を言い出す。それは。

.....  
「で、メカの資金を？」

そう言うのは大洗の生徒会長である角谷杏本人、彼女は今みほから話を聞いて「そうです」と答える。

「勇樹さん、この頃おかしなところがありますし。金遣いが荒いとは言えませんがバイトに通うことを考えていますから心配で」

「そうですね、河島先輩と小山先輩はどうですか」

華の言葉に河嶋と柚子は「うーん」と頷く。

「そうだな、最近あいつの姿を見ないとおかしなところがあるし」

「そうだね桃ちゃん、会長」

2人の言葉に杏は「そうだねー、そんなじゃあ行くか」と彼がいるところへと移動する。

「もしもしー、勇樹ちゃん今いるー？」

角谷はそう言いながら扉をたたくが、反応はなく無音だけ響いている。

「どうしたんだ、少しは出る」

河嶋はそう言いながら扉を開けると、目の前にあったのは。

ガラガラガラガラッ  
!!!

「おわあああつ!?!」

大量の瓶に彼女は埋もれてしまった、西住たちはあまりの量に引き下がった。

そして便がすべて崩れ終えると、河嶋は「ぶはっ」と瓶の中から出るのであった。何かと麻子は瓶を持ち上げてみる。

「これは、今大洗で売られている栄養ドリンクだ」

それを聞いたみんなは「えっ!?!」と驚く、いや誰だつて驚く、なんで麻子がそれを知っているのか。

沙織は試しに「麻子なんでそれを知っているの!?!」と言うと彼女はこう答える。

「低血圧で遅刻しないように買ったが、思った以上に甘くて1度しか飲まなかった」

それを聞いたみんなは「ああ、なるほど」と理解した。すると優花里は「もしかして」と華に向けてこんな質問した。

「五十鈴殿、もしかしてこの前言っていた甘い匂いって。このドリンクからですか?」

「そう言えば、わたくしが言っていた匂いは、この瓶から匂います」

華は思い出したかのように言う、後ろから「ちよつとどうしたの!?!」と園みどり子



がやって来る。

それを見た麻子は「どうしたんだ、そど子？」と言うと彼女は「園みどり子！」と訂正する。

「あれ、風紀委員長。どうしたんですか？」

「頼み事よ、この前から勇樹さんからお願ひしていた例のごみがあつたから……つて、何よこれ!？」

沙織の質問に答えていると、大量の瓶に驚き。それを見た柚子が「話が長くなるけど」と説明する。

「そう言えば、この中から何かが見えるけど気になるな」

麻子の言葉にみほたちは「え？」と答えてみると、奥に何かがあるのはあるが何かわからない。

よく見ると、煙突が付いている何かで、汽車の様に見える。

それを見た瞬間、優花里は「もしかして、あれは汽車ではありませんか？」と言うと、みんなは「え、汽車」と目を丸くして驚く。

「いや、ゆかりん。いくら勇樹でもこんなのは作るわけ」

「いや、石川さんだったら作れるかもしれない。考えてみるとこの前の大型の船の姿をしたメカだつて作ったからな、下手したら汽車を作ることもできるかもしれない」

「そうね、でも何で汽車なのかしら、車両は作りかけだけど汽車だけで……」

「あの、何をしていますか?」

沙織と麻子とみどり子が話をしていると、後から勇樹がやってきて彼女たちに質問している。

彼の両手には袋をしていて、その中を見てみると、栄養ドリンクとリサイクルの袋が入っている。

「あ、あの勇樹君。何を作っているのかなと思ってきたんだよ。それにアルバイトの……」

「作っている、アルバイト?」

みほは勇樹に質問すると、彼は「なんだろう?」と頭を傾けていると、何か思い出したのか「ああ、あれね」と袋を近くに置いた。

そしてカバンからガサゴソと何かを探して数秒後、「あつたあつた」とあるチラシを出してみんなに見せる。

「実は、会長からこれをね」

「会長がですか?」

みんなは何かと見てみると、そこにはこう書かれている。

『来週の水曜日、大洗・サンダース・グロリアーナ・プラウダ・黒森峰・知単・継続・大  
学と海の家『れもん』と一緒に、勇樹たちを誘ってピクニック作戦』

それを見た杏は「え、これ本当に信じたの？」と目を丸くして言うと、勇樹は「はい、  
信じましたが？」と答える。

それを見たみどり子は「この人、案外信じやすいね」と呟いた。

本当のことを会長が言った途端、勇樹は「え、ウソ……？」と言うと同時に体から魂  
が抜けたかのようにその場で倒れるのであった。

そして後日、『勇樹には絶対嘘を言わないように』と大洗のみんな（特に戦車道をして  
いる者たちに）言うのであった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「で、どうしますか勇樹君？」

百合子は勇樹に向けて言うと彼は「元も子もない、あのメカはそのままにして何か考  
えないと」と答える

すると、太田が「そう言えば、敵の変化がないけど大丈夫かな」と言うと中氏が「言われてみればそうだな」と答える。

「最近変な動きがないし、安全と言うか変化がないのが怖いんだ」

「……確かにそうだな」

彼女のいう事に勇樹は同意すると、続けて言い始める。

「このままだとさすがに危険だな、いざと言う時に役に立たないとかピンチ到来になるからな」

「でも勇樹君、僕たちは何を鍛えればいいんだい? 訓練は大体は学園艦で鍛えているし、それ以外は」

勇樹の言葉に幹子は言うと、彼は「そうだな……」と悩む。

すると、伊江が「そうだ、これはどうだ?」とある事を言い出す。それは。

「戦車道はどうだ?」

## 『侵略！ パンツアー娘』編 第8話『戦車道しないカ？』

## 前編』

『『ええつ、戦車道をする?!』』

そう言つて驚いたのは、海の家『れもん』で作業をしている、相沢栄子と相沢千鶴、アルバイトの斎藤渚とアンツイオ高校から来て帰宅用の資金を稼いでいるアンチヨビ・ペパロニ・カルパッチョの3人組。

それを聞いた勇樹は「そうだよ？ 何か変なの？」と言いながら焼きそばを食つていると、アンチヨビが「そりやおかしいぞ！」と答える。

「おまえはまだ初心者で、戦車を動かしたことはないしメンバーはまだいないからな！」  
「戦車は前来た時にちよつと動かしたことあるし、メンバーは今から決めれば大丈夫。それに初心者とはいえちよつと戦つたことあるしね」

「いやそれはいいすけど、問題は戦車つすよ！」

アンチヨビの言葉に勇樹は答えていると、ペパロニが「戦車」と言う言葉に彼は「え、戦車？」と目を丸くして驚く。

「そうっすよ、戦車道をするには3名が必要っすよ! うちの場合は2名が多いっすけど、大洗のメンバーは4、5名が多いっすよ!」

「ちなみに、貴ちゃんは4名で操縦しているそうよ?」

「そう言えばイカ娘が使っているチャールも、アタシを入れて渚ちゃんとシンディーさんとあいつを入れて4名でやっているな」

ペパロニ、カルパッチョ、そして栄子の話を聞いた勇樹は「そ、そうなんだ」と青ざめる。すると。

「邪魔する」

声が出たため勇樹は何かと振り向くと、そこにいたのは西住流の娘であり黒森峰女学校の戦車道の隊長、そして西住みほの姉である西住まほであった。

「あら、まほちゃんいらっしやい」

千鶴はまほに向けて言うとな彼女は「すまないがカレーをお願いします」と言うとな千鶴は「わかったわ」とカレーを作る。

するとまほは勇樹を見て何かに気づいたのか「む?」とある物を見る、それは。

「(あれは、確か戦車の本だな? しかもその本はイタリア・ロシア・イギリスの特集だな)」

彼の手にしている本『戦車の本』を見て彼女は何か気付いたのか、携帯を出してある人物に話す。それは。

.....  
「あら、勇樹さんが戦車道をしる？」

電話の相手は、聖グロリアーナ女学院の戦車道をしている隊長、ダーズリンであった。

彼女は今、西住まほからの電話に話している。原因はもちろん、戦車道であった。

「戦車道をするとしても結構かかりますわね、時間はどうにかできますが」

『そうなんだ、そちらで不審な動きはないか？』

「不審な動き……オレンジペコ？」

まほの言葉に彼女阿h疑問を抱き、試しにオレンジペコを呼び聞いてみることにした。

すると扉が開き、そこにオレンジペコが入ってくる。

「お呼びでしょうか、ダーズリン様？」

オレンジペコの言葉に彼女は「あなたに話したいことがあるけどいいかしら？」と言うとオレンジペコは「はあ、かまいませんが」と答える。

そしてダーズリンは「それじゃあ言うけど」と言い始める。

「陽さんと伊江さんに戦車で聞かれたことあるかしら?」

「はあ、ありましたけど?」

.....

次の日、勇樹たちはダーズリンから『大至急プラウダ学園艦のイベントホールに来てください』と言われたため、勇樹たちはそこに集まっている。

「さすがプラウダ学園艦だな、大洗よりも広い寒さに対抗できるようになっているな」  
勇樹は辺りを見渡しながら歩いていると、太田が「そうだね、でも」と中忒と佐々木を見ると、彼女たちは「何があつてここに集まっているんだ?」と頭を傾げている。

イベントホールにやって来た勇樹たちは、入つていくと同時に扉が閉まりホール内に明かりがついた。

「な、なんだ!?!」

突然の動きに伊江は驚くと、みんなはざわざわと驚く。だが「落ち着いてください」と声がすると同時にある人物が見えた。それは。

「あれ、ダーズリンさん? それにケイさんにカチューシャさんとまほさんまで」

「アンチヨビに千鶴さん、西さんに愛里寿にみほさんも」

太田と勇樹はそう言うのと、千鶴は「どうも」と言いながら絵手を振る。福音は「どうも」と言いながら手を振り返す。



勇樹は「あの、なんで千鶴さんが？」とカチューシャに向けて質問すると、千鶴が「それはこつちから説明するわ」と言い出した。

「今回勇樹君がここに集まった理由、それは『戦車道のコーチを決めると同時に担当を決めてもらう』ためよ」

千鶴の言葉に勇樹たちは「ほえ〜……」と答えたが「え、なにそれ!？」と驚いた反応をする。

「ちよ、ちよつと待てよ!? 要するに千鶴さん、オレたちが戦車道をする事になったてことですか!？」

「ああそうだ、ただお前たち全員だといから誰が戦車に乗るか担当することにした」

伊江の言葉にまほは答えると、アンチヨビは「そうだな」と答える。

百合子は「え、誰が決めるって難しくありませんか？」と言うと、ケイが「どうしてそう言える？」と質問すると、彼女はこう答える。

「私たちはちよつとした能力……じゃなくて、個性がありますけど、それが本当に戦車道に役立つかどうか……」

「それは大丈夫よ! ここから決めてもらうから!」

カチューシャの言葉に勇樹たちは「え、それ本当!？」と目を丸くして驚くと、ダージリンが「そうですね、そちらの方が早く済みます」と答える。

「それじゃあまずは戦車を用意しましょう、カチューシャさん」

「わかったわ、まずは戦車だけどあなたたちはまだ持っていないから、このカチューシャからこれをあげるわ。ノンナ!!」

カチューシャノンナに向けて言うと彼女は「わかりました」と答えてスイッチを押す、するとホールの天井から大型の画面が出てきてある戦車が映し出される、それは。

「ちよ、その戦車って確かT-34-76じゃないか?!」

それを聞いた中氏は「なに!?!」と驚きの反応を見せる。

それを聞いたカチューシャは「あらそうよ」と答える。

「今回はこの戦車で戦車道をすることにするわ! 1台だけ使われていない戦車だから改造しても構わないわよ!」

それを聞いた勇樹は「マジか!?!」と驚きの反応をすると、クララが「もちろんです」と答える。

「でも戦車を動かす担当に発射担当、弾を詰め込む担当などはどうしますか? 私と勇樹君だけでしたら難しいですが」

「それなら心配ないです! 我々があらかじめ勇樹殿たちを調べておきましたので心配ご無用であります!」

そう言ったのは、知単短の戦車道のリーダーである西絹代であった。

彼女の手には『勇樹たちの資料』と書かれた資料を手にしており、それを見た百合子は「いつの間に!？」と驚く。

「内容はこちらが決めていきますので心配はありません!」

「ちよつと待った、今内容と言ったよな。どういう意味だ?」

「それは後から説明します、では」

伊江の質問にダージリンは無視して話を続けると、画面には『通信手』と映し出される。

「ツーシンシユ? なにそれ」

それを見た福音は桜に質問すると、彼女は「簡単に言うとう電話の役割よ」と答える。

するとダージリンは「通信種はこの人に決めました」と言うと同時に画面にある人物が映し出される。

『通信手担当：百合子・ビューティー コーチ：武部沙織』

「ええっ! わ、私が通信手、それにコーチがき、沙織ちゃん!？」

それを見た彼女は驚くと、まほは「そうだな」と百合子にした理由を答え始める。

「愛里寿から聞いた話だが、彼女は当たりの良さや周囲との打ち解け具合が他の人とは

違うところがある、それで通信手にしたんだ」

まほの言葉を聞いた百合子は「あれ、そうでしょうか?」と照れる。

すると、「では続いては」とダージリンが言う画面に『装填手』と映し出される。

そして西が「装填手はこの方にしました!」と言うと同時に、画面にある人物が映し出される。

『通信手担当：暗山伊江　コーチ：オレンジ・ペコ』

「はあつ、オレが装填手でコーチがああちびつ子お嬢様なのか!」

伊江が放った「ちびつ子お嬢様」が、グロリアーナの一室でオレンジ・ペコが「くしゅん」とくしゅみをするのであった。

すると、ダージリンが「わたくしが説明します」と伊江にした理由を答え始める。

「ローズヒップから聞いた話によると、あなたは紅茶の葉が入った樽を軽々と持ち上げていくのを見たか聞いており、アッサムからは生徒が入った馬車を持ち上げて目的の場所まで移動したと聞きました」

それを聞いた伊江は「ああ、それでか」と何か納得したのか、首を上下に動かす。

すると、「では続いては」とまほが言うと同時に画面に『砲撃手』と映し出される。

そして愛里寿が「砲撃手はこの方にした」と言うと同時に、画面にある人物が映し出される。

『砲撃手担当：美樹幹子　コーチ：ナオミ』

「おや、僕がまさかの砲撃手かい。どうしてなのか説明してくれないかい？」

幹子の言葉を聞いたケイは「OK！ それじゃあ説明するわ！」と言い始める。

「アリサから聞いたけど、あなたは射撃をしている時、弾を外さずすべて当てたと言っていたわ。それにナオミとはちよつとした関係があるつて聞いたから、コーチはナオミが有効だと思つて決めたわ」

それを聞いた幹子は「おお、それは面白そうだね」とほほ笑むと同時に答える。

すると、「では続いては」とまほが言うと同時に画面に『操縦手』と映し出される。

そしてケイが「操縦手はちよつと悩んだけど、この人にしたわ！」と言うと同時に、画面にある人物が映し出される。

『操縦手担当：中弐小森　コーチ：冷泉麻子』

「おー、まさかボクかー。でもなんでボクなんだ?」

中式の言葉にアンチョビが「それは私が言おう!」と自信満々に言い始める。

「麻子から聞いた話だと、お前は非常に操縦がうまい。特にゲームセンターのレースを一目見ただけで覚えるほど旨いとな! さらにドローンで何度が高い飛行を軽々と覚えて一度もミスをしなないほどの腕前を持っているからだ」

それを聞いた小森は「ほほー」と言うと、アンチョビは「そこで学年主席と言える麻子をコーチにすれば出来るではないかと考えたんだ!」と言うと、中式は「まー、やつて見るのも悪くないか」と答える。

そして「それでは、最後は」とアンチョビが言うと同時に画面に『戦車長』と映し出される。

そしてみほが「車長は、みんなで話し合った結果、この人にしました」と言うと同時に、画面にある人物が映し出される。

『戦車長：石川勇樹　コーチ：西住しほ』

「西住しほ? はてその人どこかで聞いたことあるような?」

勇樹の言葉を聞いたエリカは「はあ、あんた家元のこと知らないの?!」と言い始める。

「家元は私たち黒森峰の隊長と大洗の戦車道の元ふ……じゃなくて、隊長の親元で、西住流の生みの親よ！」

それを聞いた勇樹は「はい、なるへそ」と納得した。

そしてダーズリンが「それでは、各自コーチのところへと移動して訓練してください」と言つて、明はその場で解散する。

.....

百合子

「それじゃあお願いします沙織さん！」

「もっちらん！ それじゃあ訓練するよ？」

百合子は、愛里寿の学園艦から大洗の学園艦へと移動して武部沙織の部屋に来た。

彼女の手には『ハムになる帳』を手にかけている。

「えっと、それじゃあ通信の九品だけ覚えてるかな？」

「はい、大体ではありませんが旗信号とモールス信号の２種類なら大体。後通信機の使い方基本だけで」

「そうなんだ、それじゃあ今度は応用、つまり少し難しいのに挑戦してみよう！」

沙織の言葉に百合子は「おー！」と張り切るのであった。

伊江

「その戦車専用の弾って結構重いっていうけど、本当に重いのか?」

「そこまで重くはありませんので安心してください、ただ油断しないでください」

オレンジペコは伊江に向けて言うと、彼女は「おう、わかった」試しに砲弾を持ち上げてみる。すると。

ガクツ!!

「重つ!! 入れるのも大変だが持ち上げるのも大変だな……!」

「はい、でもコツを付ければ簡単に持ち上げることもできるし、入れることもできます」

「ほう、なるほど」

オレンジペコの言葉に伊江はいそいそとメモをする。

そして彼女は「それじゃあ持ち上げる時には何か道具はないか?」と言うと彼女はニコツと笑いながら「ありません」と答える。

幹子

「なるほど、これらで鍛えているんだね」

「ああ、だがそれ以外に腹筋や腕立てなどしているんだ」

幹子は現在、ナオミと一緒に体育館内に移動しながら話している。



ここでだれもが思うが、戦車をしていない人にとって、砲撃手は意外に簡単だと思われるが実は砲弾を放つと同時に非常に強い衝撃が加わるので、身構え次第で椅子から転げ落ちてしまう。

そのため、サンダースの砲撃手のメンバーは砲撃を何度も放てるように鍛えているのだ。

「それじゃあ、まずはこの校舎の周囲を軽くだが走っていくか？」

「そうだね、それじゃあナオミさんよろしくね」

小森

「ほー、大体で覚えたのか」

「おう、マニュアル通りであれば行けるぞ」

小森は現在麻子と一緒に戦車があるところにいるが、小森はメモを出して麻子に話しているが。麻子は低血圧なのか眠そうな目つきで話をしている。

だが、最近血の気が多くなってきたため眠気は少なく眠る時間は少なくなってきた。る。

「あとはどうすればいいんだ？」

「そうだな、まずはマニュアルを見る必要だが今はコントロールできる限り」

このように何度も2人は話をしながらメモをする小森である。

勇樹

「あ、あにやたが西住しほさんでしゆか……」

「ええ、私が西住流の家元の西住しほです」

勇樹は現在、黒森峰の一室にいるが。しほとは初対面であり女性なので彼は顔を真っ赤にしながら彼女を見ている。

「そ、しよれで! せ、しえんしや道をするんですが、その時に重要にやのは!?」

「そうね、戦車道をするのに重要なのは困難から逃げず正面から立ち向かうことね。私たち西住流は……あら?」

しほは質問に答えていると、彼は目を回して口から煙を出しながら気絶している。

それを見た彼女は「彼で大丈夫かしら?」とため息をするのであった。

.....

一方、由比ヶ浜のから200キロ沖にある場所に、謎の潜水艦がある。

その潜水艦には、黒色の薔薇の紋章が描かれている。

『侵略！ パンツアール娘』編 第8話『戦車道しないカ？  
中編』

戦車道を初めて1週間、時刻は10:00。

今勇樹たちは、由比ヶ浜の真ん中にある戦車『T-34-76』に乗っている。

戦車に乗っている理由、それは実践と言う物だ（簡単に言うと、見て学ぶより少しは実際に学ぶこと）。

『それじゃあ実践します。くれぐれもケガをしないようにしてください』

「わかりました、それじゃあお願いします、みほさんイカ娘さん、アンチヨビさん」

勇樹たちは実践指導員として西住みほとイカ娘、そしてアンチヨビ（本名は安齋千代美）から学んでいる。

勇樹たちはいつもの夏服ではなく、誰見えないように戦闘兼学生服へと変身して戦車に乗っている。

『それじゃあまずは砲撃です、的はあちらに当ててください』

みほは海に浮いている木の的に向けて言う、的は沈まないように浮きが付いている。

それを見た勇樹は「わかりました、やってみます」と言い百合子たちに指示する。

「幹子、的は海にあるから砲台を右に動かせるかな?」

「わかった、できる範囲だけどやって見るよ」

勇樹の言葉に幹子はそう言うのと、引き金のすぐ近くについているハンドルを動かすと、砲台は海の方へ向く。

「よし、的は……あつた。」

「おお、ここからだ結構遠いな。美樹さん距離は?」

幹子と中式的的を見ていると中式の質問に彼女は「そうだね。ここからのまでの距離は確か1500mほどだから、確か1割る2積1500だから」と計算している。

「750mだね」

「よしっ、装填完了だ!」

幹子が言うと同時に伊江が装填完了の言葉を言うと、勇樹は「それじゃあ、周囲には以内か確認した後」と言うと同時に、彼はこう叫んだ。

「撃てっ!!」

その言葉を聞いた幹子は引き金を引くと、砲台から弾が放たれて弾はそのまま的に命中する。

「やった！ 命中だ！」

「うっし！」

幹子の言葉に伊江は喜び、百合子は「無事、的に命中しました」と通信する。

『流石幹子さんだ、ナオミさんから学んだとはいえ一発で成功するのは初めてだ』

『そうですね、私たちは西住殿からですし』

『そうだな、私も一度で当てたのは初めてかもしれん』

「え、そうですか？」

栄子、優花里、アンチヨビの言葉に伊江は聞いていると。みほが『それでは次は移動です』と言い出す。

『戦車は大砲とは違って移動が必要です、小森さんできますか？』

「移動手段は麻子から聞いたから大体は分かる、やってみる」

みほの言葉に小森はそう言うと、レバーをガチャンツ！ と動かした。すると戦車がガガガガッと動き始める。

砲台は海に向いていたため幹子が「おっと戻さない」と元の位置に動かした。

「小森すごいな、普段は勉強が苦手なのに」

「勉強自体が苦手じゃなくて正しくは教えられるのが嫌なんだ」

勇樹の言葉に小森はジト目で答えると、伊江が「ところで移動はどこまでなんだ？」と

百合子に言うとな彼女は「ちよつと待つてね」と言い通信機で沙織に質問してみる。

そう言っていると、みほから『ここで止めてください』と言つたため中氏はレバーを動かして戦車を停止した。

「つと、停止するのに結構疲れるな」

「そうだな砲弾を装填するだけでも苦労はしたが、そんなに大変じゃなかった」

「放つのも同じだね、ちよつと衝撃はしたもののナオミさんに教わつたから大丈夫だよ」  
停止と同時に小森、伊江、幹子はそう言っていると。突然アンチヨビが『それじゃあ次だ』と言い始める。

『次は私たちを追うことだ、先ほどの操縦を見て問題はな安定だが砲台を放つたところを見たら停止しした時にはなつたから』

「今度は動きながら攻撃。ですね?」

百合子がそう言うとなアンチヨビは『ああ、そうだな』と答える。

すると中氏は「あれ、それじゃあ無理じゃないか?」と言つてきた。

『無理つてどういう意味でゲソ?』

「カエサルから聞いた話だと、戦車を移動して目標がいた時。発射するときには動いて停止すると同時に放つではなく、停止して数秒後放つと当たる確率が高いと聞いたぞ」

『そうですね、でも今回は動いている戦車に向けて放つ訓練をします』

みほは続けて『今回は敵としてアヒルさんチームとレオポンさん、そしてグロリアーナのローズヒップさんが的役としてきました』と答えると同時に3台の戦車がやって来る。

「なるほど、速度が遅い・普通・速いの三拍子が揃っているってことか」

中次の言葉にみんなは「ああ、なるほど」と一斉に揃えて答える。

……………そして数分後……………

「打てえっ!!!」

バガツ!!

ドシンツ!!

ヒユパツ!

勇樹たちが放たれた弾は、そのままアヒルチームに当たると激しく爆発し、白旗が出てきた。

それを見た勇樹は『げげっ!』と青ざめると、アヒルチームのリーダーの磯部典子に通話する。

「もしもし、磯部さん。大丈夫ですか!？」

『はい大丈夫です! けがはありませんので気にしないでください! それにしてもすごいアタックでした!』

安全だとわかった勇樹は安心するが、小森は「なんだそれ?」と呟く。

するとアンチョビが『む、こんな時間か』と声が出てきた。

時間と言う言葉に勇樹は何かと思い、腕時計で確認すると、時間は11:50。もうすぐ昼になるところだ。

「そろそろ昼ですか、そう言えば……みんなは?」

「おなかすいたー」

「そうだね、今の時間だと小腹だね」

「オレもそうだな」

「私は……同じです」

勇樹の言葉にみんなは答えるとみほが『それじゃあ今回はここまでにしましょう』と通信したため、勇樹たちは「おー!」と反応する。

.....

昼食として、勇樹たちは海の家『れもん』へと行きそこで焼きそばとカレーを頼んだ。「相変わらずカレー食うな、好きなのか伊江?」

「まあ、そうだな。カレーは香辛料が入っているから体を燃やしてくれると言うしな」

「そう言えばそれ聞いたことがありますよ? 香辛料はいろんな種類がありますから隠し味として入れていますよ」



「おお、それは本当か百合子ー?」

「おい、少しは上下関係を入れるよ中式」

「むー、それは無理」

5人の話にみほたちは見ていると、千鶴が「できたわ」と焼きそばとカレーをイカ娘に「イカ娘ちゃん」と言うと言っていると彼女は「わかったゲソ」とそれを勇樹たちに渡す。すると。

「大変だつ!!!」

突然アンチヨビが店に入ってきたためイカ娘たちは「なんだ」と彼女を見る、アンチヨビは何かを見て焦っているのか、「ぜえぜえ」と息を切らしている。

千鶴は「アンチヨビちゃん、どうしたの」と言いながら水が入ったコップを渡す。すると彼女はこう言った。

「チャーチルが盗まれた! しかも地面に吸い込まれた!」

それを聞いた瞬間、勇樹たちは「なんだって!?!」と反応する。

「アンチヨビさん、それは本当でゲソ!?!」

「ああ、それにチャーチルだけではなく。西住の戦車にダージリンの戦車も同じ方法で盗まれたんだ!」

それを聞いたみほは「そ、それは本当ですか!」と反応すると、幹子は「勇樹君!」と言うと彼は「わかった!」とカバンから画面を出した。

そしてカチカチツとスイッチを押すと、画面には『アンコウ、ローズヒップ、レオパ、ダージリン』の文字が一直線である場所に向けている。

それを見た勇樹たちは、急いでT-34-76に乗ると中式がエンジンをかける。

バルルルツ!!

「中式、エンジンは!」

「問題ないぞ、百合子は?」

「通信機、大丈夫です。幹子ちゃんは?」

「問題ない、伊江君もどうだい?」

「弾の数はさつき補充した、今から行けるぞ」

「よし、じゃあ行くぞ!」

勇樹はそう言いながら戦車に乗り込む……が。

シュルルツ グワシツ!!

「え、ええっ?」

腕に何かつかまれたのを感じた彼は、何かと思ひ腕を見ると。青い触手が彼の腕をつかんでいる。そして。

「おい、石川さんたちは何をしているか分からないが。戦車を取り戻すなら、私たちも手伝いでゲソ!」

「私たちもです、戦車を取り戻すなら私たちも!」

外からイカ娘と西住みほの声がしたため、勇樹は数分考える。そして彼は「しかたない」と言うと同時に、彼は戦車から出るとみほたちに向けてこう言った。

「時間はないが、みほさんの学園艦に行き。至急メカを作るしかない、操縦とかは大体覚えてたから大丈夫だ」

彼はそう言うのと、急いで大洗の学園艦へと行く。それを聞いたイカ娘は「よくわからないが、とにかく急ぐしかないゲソ!」と言いながら、急いでいくのであった。

みほたちも、勇樹が言っていたメカが気になると同時に。代わりの乗り物を用意して

くれると思い、学園艦へ行くのであった。

『Detective group μs』編

『Detective group μs』編 プロ

ローグ 『闇から現れた友達』

「ううくん、もう食べれないよ……」

夢で何を食べているのか、穂乃果はよだれを垂らしながら夢を見ている。

され、時は丑三つ時に近い深夜。彼女は自室でぐっすりと夢を見ながら寝ている。そんな時……。

すっ

「すびー……むみゅ？」

突然彼女の頭に何か硬い物が載せられたため、ふと目を覚ましそれを受け取ったみた。そこに書かれたていたのは。

『今夜、音ノ木神社に來い』

「……ううん？」

それを見た彼女は、頭に浮かばせて再び寝ようとしたが。宛先の人物を見た瞬間。穂乃果はパジャマから私服へと着替えて家族にばれないようにこっそりと出ていき、例の神社へと行くのであった。

彼女が見たその宛先の人物とは……『石川勇樹』と書かれていた。

……

「えっと確かこの先に……」

穂乃果は夜道の町から出ると、道を通っていくと。途中から二人の人物が現れてやってきた。その人物とは。

「あれ、海未ちゃんにことりちゃん?!」

「穂乃果! もしかしてあなたも」

「あの手紙見たの!?!」

彼女の友達であり同級生の園田海未と南ことり。2人も普段着に着替えていて穂乃果と同じ神社へと向かっている。

「海未ちゃんところりちゃんがそう言っているのつてもしかして。これ？」  
すると、穂乃果は懐から例の手紙を出すと2人は「そうだよ」と答える。

いったい誰が出したのか分からないが、海には『シャーロック・アレン』そしてことに『祝福音』と書かれている。

初め2人は悪質ないたずらの一種ではないかと考えたが、この宛先の人物の名前を見たとたん、本気ではないかと確信した。

そして3人は神社へとたどり着くと、ある人物が6人いた。それは穂乃果の後輩と先輩で同じ探偵のメンバーがいた。

「絵里ちゃん、花陽ちゃん！もしかして」

「穂乃果、そうよ私も」

「穂乃果ちゃんと同じだと思っけど」

「凜、希。あなたたちもですか？」

「うん、凜の部屋にこれが」

「海未ちゃんもそう言うってことは」

「真姫ちゃんにこちゃんも」

「ええ、そうよ。パパにはばれないように急いできたけど」

「何にもないんじゃない、もう眠いのには……」

穂乃果の先輩の絢瀬絵里に東條希、そして矢澤にこ。後輩の西木野真姫に星空凜、小泉花陽が普段着で来ていた。彼女たち同様、例の人物から差し出されたようだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

だが、いつまでたってもその人物はやってこなかった。それどころか、時刻はもう午前3時を迎えようとしている。

「いつになつたら現れるのかな……ふわあ」

こことはそう言いながあくびをしたとたん、突然。

『お待たせいたしました、では参りましょう』

神社から声がしたため、彼女たちは何かと振り向くと。神社の屋根に6人の少女が建っている。

「あ、あなたたちはいったい誰ですか?！」

「と言うかいったい何者なの！」



海未と真姫は彼女たちに向けて言うと、その中から一人から「ガキどもは大人しくしろ」と彼女たちにならみつけた。それを見た花陽は「ひっ」と怯える。

「ご心配はなく、わたくしたちはあなたたちに紹介をしに来ただけです」

お嬢様のような姿をした彼女がそう言うと、希が「紹介？　なんでや」と言う。

そして6人が屋根から飛ぶと、地面にスツと着陸すると、一人の女性が「はじめに私から紹介する」と前が出る。

その女性は、いくつもの海の生物や人間をも脅かし、容赦なく獲物を捕らえるサメのような冷徹で鋭い瞳と神秘的な雰囲気を漂わせる銀色のポニーテールランプの髪型が特徴的で、右目にはどこぞのアクションハイスピードラブコメのドイツの軍人を連想させるような眼帯をしていた。

170センチ以上と女性にしては高めの身長に加え、学ランを着ているため睨みつけるだけで相手を威圧させてしまうような『陸上のサメ』のような人だ。

「初めまして、というべきだな。私の名前は極道連華<sup>ごくどうれんか</sup>だ、珍等師学園高等部3年の座頭組に所属している」

それを聞いた海未は「あ、そう言えば」と小さくつぶやく。勇樹たちも珍等師学園高等部から来た生徒だ。

「石川勇樹という奴と同じで身体がお前達とは少し違うちよつとした人間が作り出した

もの： いわば人口生命体と呼ばれるものだ。そのため、自分で言うのもなんだが身体能力の高さには自信がある」

初めは怯えていた花陽だが「そ、そうなんだ。勇樹君と同じ人工生命体なんだね」と答える。

「そして、勇樹たちの部『何でも探偵部』のメンバーだ。とある事件の後に双子の妹と共に入部したのだがそれはまた今度にしよう」

真姫は「へえ、妹と一緒にその部活に入っているのね」と答える。

「ちなみにだ」

すると、彼女はここのリーダーの穂乃果の胸ぐらを突然つかむ、穂乃果は「ええ!?!」と、驚いている。そして彼女はこう言う。

「勇樹は私の嫁だ！ 他の奴には絶対に渡さない！ これだけは絶対覚えておけ！」

そして連華は穂乃果に威勢のいい声で言うと同時に彼女を下すと、彼女は「ほえく……」と目を丸くしている。

すると今度は隣にいた女性が前に出ると凜は「にやにや!?!」と驚く、それもそのはず。「れ、連華さんと同じ顔だにや！」

それを聞いたみんなは「ええ!?!」と驚くとその女性を見てみる。その女性は、先程の連華と顔が所々似ているが視線に冷淡さはなく朗らかな雰囲気をもっている。

連華より高い180センチというバレー選手並みの長身が特徴的で茶色のショートヘアの髪型をしており、連華とは違い制服の上に学ランを着ているやや奇妙な服装だ。

彼女は花陽に近づいたため、花陽は「ひゃっ」と驚くと突然ニッコリ微笑んで口を開く。

「初めまして！　ウチの名前は極道靈華れいかつす！　連華と同じ珍等師学園高等部3年座頭組所属つす！」

そう言うとき靈華は花陽を抱き着いたため、花陽は「びゃっ！」と驚く、希は「元氣なこやね」と答え真姫は「姉で勇樹と同じ学校に通っているのね」と2人は冷静に答える。

「連華や勇樹先輩と同じ人造人間で力が1番の自慢つす！」

靈華はそう言うとき花陽を降ろした、それを聞いたには「ええ、にこと同じ先輩なのになんで後輩なの?!」と言うとき彼女は「それは内緒つす」と答える。

「他にも巨大メカを作るのが得意技つすが…　なにぶん頭が悪いつすから組み立て部品やら整備が出来なくて皆さんには迷惑をかけてるのが悩みなんす」

頭が悪いと聞いたみんなは「ええ……」と一斉にそう思いなが汗をキチヨンと汗をか

く。  
「連華とは双子の姉妹で石川先輩たちの部活の『何でも探偵部』のメンバーつす！　姉

共々よろしくつす！」

そして彼女は穂乃果に握手すると彼女は「こ、こちらこそ」と引きながら答える。

終始笑顔で高いテンションの霊華の自己紹介が終わると今度は別の女性が前に出てくる。

その女性は、特徴的な綺麗な金髪の縦巻きロールヘアの髪型で、頭には御伽の国のお姫様のような金色のティアラをつけており、高価そうな扇子をもっていることからいかにもお嬢様という印象を与える容姿をしていた。

それを見た真姫は「ずいぶん高そうなものね」と小さくつぶやく。

そして金髪の縦巻きロールのお嬢様が優雅に微笑み、扇子を胸にあてて自己紹介を始める。

「初めまして、わたくしの名前は七星<sup>ななつほし</sup>奈々<sup>なな</sup>といます。珍等師学園高等部2年扇子組に所属しております」

挨拶をしたため、穂乃果は「あ、こ、こちらこそ」と頭を下げる。

「七星ホテルの社長の一人娘で勇樹さんたちの『何でも探偵部』メンバーです。とある事件がきっかけで珍等師学園に転校することとなったのですがそれはまた今度にいたしましょう」

真姫は「へえ、私と同じ一人娘でお嬢様なのね。驚いたわ」と、彼女に向けて言う。奈々は「恐縮です」と答える。

「趣味はテニスと庶民の行動を観察することです。特技は勉強と趣味と同じテニスです。……ん?」

すると彼女はにこを見たために「な、なによ!?」と驚く。そして彼女は「まあまああ!」と目を光らせると同時にこう答える。

「あなたの行動にも興味があります、これからよろしくお願いします」

それを聞いた彼女は「そ、そう。ありがと」と答える。

そして彼女はお嬢様らしく綺麗な姿勢で優雅に一礼すると穂乃果にれを差し出したため彼女は「あ、こちらこそ」と握手をすると、今度は別の女性が前に出てくる。

その女性はアニメなどでよく見かける遠目でも分かる綺麗なメイド服に身を包み、灰色のサイドテールの髪型と切れ長のクールビューティな雰囲気は漂わせる。

その女性はメイドらしく腹部に両手を添えて綺麗な姿勢で一礼すると笑顔で挨拶する。

「初めまして、私の名前は羽衣はしろもあまめ天女と申します」

それを見たことりは「本物のメイドさん!」と驚くと羽衣は「はい、正真正銘のメイ

ドです」と答える。

「私は七星奈々様の付き人及び教育係、その他諸々のお世話と護衛をつとめております」  
それを聞いた絵里は「す、凄いことしているのね」と目を丸くして答える。

「主人共々よろしくお願ひします…」

そして彼女は穂乃果に礼をすると、彼女は「は、はいこちらこそ」と礼をする。

天女は自己紹介を終えると後ろに下がり七星奈々の後ろにメイドらしく下がった。  
そして、1人の女性が前に出る。

その女性は、寝不足をしているのかボサボサとした紫色のロングヘアで、頭には複眼機能が付いたゴーグルと十字架をしたペンダントをしている、目の下は遠くから見てもわかるほどのクマができている。両手はポケットに入れている。

それを見た希は「すごいクマが出来てるやん」と驚く。

そして彼女はポケットから手を出すと口を開く。

「初めまして、私は文・モスキート<sup>ふみ</sup>。みんなからは私のことをモスキートと言われている」

それを聞いた絵里は「な、名前の通りね」とジト目で見る。

「ある事件がきっかけで『何でも探偵部』に入ったぞ、そして私は勇樹を結婚することと

中式を恋人にするのが目標」

それを聞いたみんなは「なんだかどこかで似ているような気が……」と思ったのであった。

「そして私はあまり人と触れたくないんだ、私は極度の血液恐怖症だ、血を見るだけでも苦手だ」

彼女の話を聞いた真姫は「あら、それは驚いたわ」と驚く。

「私はある人物とその友人は話すがそれ以外は話さない。だが、お前たちは古森と勇樹の友人だから友達とする」

それを見た絵里は「それどういう意味!？」とツツコミを入れて起こるが、ことりが「お、落ち着いて」と落ち着かせる。

すると文は「そしてだ」と白衣から注射器を出すと突然、希と穂乃果のところまで走ると彼女の額には注射器が現れた。それを見た2人は「うわあっ!？」と驚く。そして彼女はこういう。

「……てめえらは本当の友達をして認めるが、もし私の結婚相手と恋人にケガをしたり何かしたら、私はお前たちを○○○○<sup>ヒ</sup>やるからな」

それを聞いた穂乃果は「はわわわ」と青ざめるが希は「まあ、落ち着いて文ちゃん」となだめると、彼女は「……わかった」と注射器をしまう。

そして彼女の自己紹介を終えると後ろに下がり七星奈々の隣に移動した。そして最後の女性が前に出た。

その女性は悪を見逃さないかのように鋭い目つきをしていて黒髪のショートヘアをしているが前髪の一部だけが白色をしている、そして服の背中には『正義』と描かれた桜模様をしている。

それを見た絵里は「あなたはもしかして、風紀委員？」と言うと彼女は「後でわかると思います」と答えると同時に自己紹介をし始める。

「初めまして、わたくしの名前は薩摩京子さつまけいこです！ 珍等師学園高等部の風紀委員をしており勇樹のメンバーです！」

真面目な自己紹介を見た絵里と海未は「真面目な人で助かった」と心の中でそう思った。

「珍等師学園内にある署長と武道の師範である母から生まれており、今は風紀委員の潜入捜査をしております！ また、ある事件がきっかけで『何でも探偵部』に入ることになりました！」

それを聞いた花陽は「す、凄い風紀委員をしているんだね」と驚いて答えると彼女は「それでもありません！」と答える。



「そしてですが、わたくしは太田師匠センセイからの話を聞きました、あなたたちμ、sは素晴らしい推理力に圧倒しました！ なにとぞ、よろしく願います!!」

そして彼女は穂乃果の手をつかんで握手すると穂乃果は「こちらこそです!」と元気に答える。このような真面目な子は絵里と海未にとつては安心するのである。

そして、彼女は後ろに下がり文の隣に移動した、その時。

「ではみなさん、さよなら」

全員の自己紹介が終わると同時に彼女はポケットからスイッチを出して押す、すると突然あたりから白い霧が出てきてみんなはそれに飲まれてしまった。

それと同時に穂乃果たちはその場で倒れるのであった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

次の日、穂乃果たちはいつの間にか自室のベットに寝ていることに驚き、その日はみんなは穂乃果の家に集まり昨日の話をする。

みんなは確かに神社にいたが、気付いた時にはなぜか自室のベットにいた。そして彼女たちは机にカードが置いてあり、そこにはこう書かれていた。

『高校生探偵『μ、s』のみな様、またどこかで会いましょう』

初めはみんなは不気味な手紙ではないかと思ったが、またどこかで会いましょうと言  
う言葉を見た穂乃果は「きつとまた会うんだね」と思うのであった。

## 『Detective group μs』編 第一話

## 『同時多発他県事件』

μsがいる、東京都音ノ木坂で彼女たちは商店街を通っている。

「また会えるかな、勇樹君」

「また会えると思いますよ穂乃果、勇樹はどこかで出会うと思います」

「そうだね海未ちゃん」

穂乃果のつぶやきに海未は同意するかのようになると、ことりは彼女の言葉に答える。

彼女だけではなく、絵里や希や花陽たちも同じ気持ちをしている。なんせ初めて会った探偵だ。

みんなはそう思いながら歩いていると、突然。

ギュギュギュツ!! ガアアアア!!

車の音がしたため、穂乃果たちは何の音かわからなかったが、突然車が出てきたため

みんなは「うわっ!」と急いで左右に分かれた。

車はそのまま速度を上げながらどこかへと去って行った。

「何よあれ、危ないじゃない!!」

真姫は車に向けて文句を言っていると、パトカーのサイレン音がするため穂乃果は「何だろう」と思い左右を見まわしてみると。パトカーがある通りへと通っていくのを見かけた。

それを見た彼女は「まさかあの車って……」と何かに気づいたのか、急いでそのあとを追いかけ始めた。穂乃果の行動に海未は「穂乃果、どうしたんですか!」とみんなは急いで彼女の後を追いかけ始めた。

音ノ木坂銀行、その前には警察のパトカーが多く止まっている。どうやら何か事件があったようだ。

その銀行には、森警部と岩田刑事も銀行員の話をしている。すると。

「あれ、森警部?」

どこかで聞いたことがある声が出たため、彼は何かと思い外を見てみると。

「おお、高坂さん」

警部はそれを見て言うとな彼女は「何かあったのですか?」と言うと森警部は事件の話

をし始めた。

「銀行強盗!?!」

銀行強盗を聞いた彼女は驚くと、森警部は「ああ、そうだ」と答え始める。

「犯人は2人組の男女で、盗まれたのは500万円だ。凶器の銃はあったがその銃はモデルガンだ」

それを聞いたみんなは「なるほど」と思いながら聞いていると、岩田刑事がやってきて「警部、車の特定ができました」とやってきた。

「おお、岩田君。その車はこの車だ?」

森警部は岩田刑事に向けて言うと、彼は「それが、驚くことにこの車……」とある言葉を言い出した。それは。

新人探偵Aqoursがいる、静岡県沼津市。そこに彼女たちは商店街を通っている。

「穂乃果ちゃんが言っていたその奇跡って、いったい誰だろう?」

「神奈川県にある珍等師学園都市と言うところから来た、変わった探偵らしいよ」

「その珍等師学園都市って、結構すごい都会すら？」

千歌のつぶやきに果南は『μsと奇跡の大手柄！ 犯人確保』と書かれた新聞を見ながら言う、花丸は疑問形で答える。

彼女だけではなく、ルビイや梨子やダイヤたちも同じその人たちって誰だろう？ と思っている。

みんなはそう思いながら歩いていると、突然。

ギュギュギュツ!! ガアアアア!!

車の音がしたため、千歌たちは何の音かわからなかったが、突然車が出てきたためみんなは「うわっ!？」と急いで左右に分かれた。

車はそのまま速度を上げながらどこかへと去って行った。

「なんですの一体!!」

ダイヤは車に向けて文句を言っていると、パトカーのサイレン音がするため千歌は「何だろう」と思い左右を見まわしてみると、パトカーがある通りへと通っていくのを見かけた。

それを見た彼女は「まさかあの車って……」と何かに気づいたのか、急いでそのあとを追いかけて始めた。千歌の行動に梨子は「千歌ちゃん、どうしたの!？」とみんなは急いで彼女の後を追いかけて始めた。

沼津宝石店、その前には警察のパトカーが多く止まっている。どうやら何か事件があったようだ。

その銀行には、纏警部と言う女性と船井刑事と言う男性の刑事が定員の話聞いている。すると。

「あれ、纏警部?」

どこかで聞いたことがある声があったため、彼女は何かと思い外を見てみると。

「あら、高海ちゃん」

警部はそれを見て言うと言わぬ彼女は「何かあったのですか?」と言うと纏警部は事件の話をし始めた。

「宝石強盗?!」

宝石強盗を聞いた彼女は驚くと、森警部は「ええ、そうよ」と答え始める。

「犯人は2人組の男女で、盗まれたのはネックレスやイヤリングなど複数盗まれたのよ。」

凶器のナイフは途中で捨てられていたわ」

それを聞いたみんなは「なるほど」と思いながら聞いていると、船井刑事がやってきて「警部、現場周辺にいた人と定員から聞いた人から聞いたところ。どうやら犯人像が出てきました」とやってきた。

「船井刑事。その犯人はいったい誰なの？」

纏警部は船井刑事に向けて言うと、彼は「それが、顔は覚えていませんがおそらく犯人は……」とある言葉を言い出した。それは。

奇跡がいる、神奈川県珍等師学園都市で彼らは商店街を通っている。

「また会えるかな、穂乃果さんと」

「また会えると思いいえるよ勇樹君」

「そうだな、オレもここに会いたいぜ」

勇樹のつぶやきに太田は同意するかのように言うと、太田は彼の言葉に答える。

彼女だけではなく、福音や古森やアレンたちも同じ気持ちをしている。なんせ初めて会った探偵だ。



みんなはそう思いながら歩いていると、突然。

パトカーのサイレン音がするため、みんなは「何だろう」と思い左右を見まわしてみると。パトカーがある通りへと通っていくのを見かけた。

それを見た彼は「まさか……」と何かに気づいたのか、急いでそのあとを追いかけて始めた。彼の行動に太田は「ゆ、勇樹君。どうした!？」とみんなは急いで彼女の後を追いかけて始めた。

珍等師学園都市内にある高層建築地現場、その前には警察のパトカーが多く止まっている。どうやら何か事件があったようだ。

その現場には、都警部と言う男性と鹿目刑事と言う女性刑事が作業員の話をしている。すると。

「あれ、都警部?」

どこかで聞いたことがある声があったため、彼は何かと思いい外を見てみると。

「ああ、君は確か。勇樹君じゃないか」

警部はそれを見て言うのと彼は「ここで何かあったのですか?」と言うと彼は事件の話をし始めた。

「建設車盗難!？」

それを聞いたみんなは驚くと、都警部は「ああ、そうだ」と答え始める。

「犯人は複数人で、盗まれたのはパワーショベルにブルドーザークレーン車などと言った車両が15台ほど盗まれている。侵入口は穴が開いた壁から入っていき出るときは無理やり作業口から出たらしい」

それを聞いたみんなは「なるほど」と思いながら聞いていると、鹿目刑事がやってきて「警部、現場付近にカードが落ちていたので調べてみたらある場所がわかりました」とやってきた。

「おお、鹿目君。そのカードはどこでだ？」

都警部は鹿目刑事に向けて言うと、彼は「はい、カードを調べてみたらそのカードは……」とある言葉を言い出した。それは。

「難波と書かれていたので、どうやら大阪です」

「口調が関西弁で、その一人の女性がトラ柄をした服装をしていました」  
「大阪にあるUSJだとわかりました」

岩田刑事に船井刑事、そして鹿目刑事が言った言葉にみんなは「えええええっ  
!!???」と、  
一斉に驚くのであった。

『Detective group μ☒s』編 第二話  
『突然の再開』

side：東京都

次の日、穂乃果たちは東京都にある東京駅に集合している。

穂乃果たちは大阪に行き犯人を捜すことになった。すると後ろからある人物がやって来た、それは。

「あなたがたがμsね、私たちはUTX学院の『A—RISE』の綺羅ツバサよ」

「私は綺羅ツバサと同じ学院の統堂英玲奈だ、よろしく」

「私はツバサと英玲奈と同じ学院の優木あんじゅだよ、よろしくね」

それを聞いたみんなは「よろしくお願ひします」と答える。ツバサは「じゃあ行きましょ、大阪行きはもうすぐ発射するわ」と言いながらチケットを彼女たちに渡す。

side：静岡県

次の日、千歌たちは静岡県にある静岡駅に集合している。

千歌たちは大阪に行き犯人を捜すことになった。すると後ろからある人物がやって来た、それは。

「あなたたちがAqoursね、私たちは北海道の函館聖泉女子高等学院からきた『Saint Snow』の鹿角聖良よ」

「私はお姉……じゃなくて、聖良さんと同じ学院からきた鹿角理亞だ、よろしく」  
それを聞いたみんなは「よろしくお願いします」と答える。聖良は「じゃあ行きましょ、大阪行きはもうすぐ発射するわ」と言いながらチケットを彼女たちに渡す。

side：奇跡

次の日、勇樹たちは神奈川県にある横浜駅に集合している。

勇樹たちは大阪に行き犯人を捜すことになった。すると後ろからある人物がやって来た。

それは一人は背が高くピンク色のポニーテールした女性、一人は背は低くツインテールをした水色の女性が、彼らの目の前にいた。

「あなたが奇跡か、私は珍等師学園署の特殊刑事の時岡麗奈だ」

「同じく、麗奈さんと同じ特殊刑事のルーク・エレキッド、よろしく」

それを聞いたみんなは「よろしくお願いします」と答える。時岡は「じゃあ行くか、大阪行きはもうすぐ発射するぞ」と言いながらチケットを彼らに渡す。

新幹線内にて。

side: μs

穂乃果たちは東海道新幹線のN700系の7号車に乗っている。

「でも何で東京にしたのかな？ それに襲ったのは私たちが住んでいる音ノ木坂銀行を？」

花陽は不思議そうに考えていると、英玲奈が「確かに、なぜ大阪ではなく東京にしたんだ」と疑問に思っている。

それを聞いたには「それは分かんないわ」と言いながら、『牛肉どまん中』を食べて

いる。

「しかし、大阪って遠いところから狙っているのは驚いたわ」

「そやね絵里ち、その犯人は誰やろな」

絵里と希は写真を見ながら呟いていると、突然「ああ、ちよつと失礼」とどこかで聞いた声があった。

声は男性だが幼さが残っていて優しい口調をしている。それを聞いた真姫は「この声って……」と何か気付いたのかパッと通路を見てみると。顔なじみで一度会った少年と再会した。

「ひ、陽君……?」

「ま、真つちゃん……?」

それを聞いた穂乃果は「え、陽君!」と驚くと、みんなは通路側を見ているが。そこには誰もいなく、真姫は目を丸くして固まっているだけだった。

真姫はどうやら突然のことで戸惑うどころか、体がまるで人形のように固まってしまったようだ。すぐに目を覚ましたけど。しかし穂乃果は……。

「真姫ちゃんが言っていた『陽君』って、もしかして……!!」

すると穂乃果はツバサに『少し外します!』と言うと同時にある場所へと向かっている。

それを見た凜は「穂乃果ちゃん!」と、目を丸くして言うが、彼女はそれが聞こえていないのかドンドン策へと行くのであった。

side: 奇跡

「ええ、μsにあつたんか!」

太田の言葉に伊江は驚き、勇樹は「でもなんでだ?」と疑問に思いながらかつ丼を食べている。

「うん、真つちや……じゃなくて、真姫さん以外に穂乃果さんたちが乗っていたよ。それに……」

太田が話をしていると、突然どこから「あれ、陽君!」と聞き覚えの声がしてきた。勇樹はそれに反応し通路側を見てみる。

「ほ、穂乃果さん!? なんでここに!」

「ゆ、勇樹君。それは私も聞きたいよ!!」

突然の再開に勇樹は驚いていると、再び「あれ穂乃果ちゃん!」と初めて聞いた声が



する。

穂乃果と勇樹は声がしたほうに向くと、穂乃果と同じ色をした少女がいたが髪型が違っていた。それを見た彼女は「え、千歌ちゃん!？」と反応するが、彼は「え、ええ!？」とどういう意味か分からず混乱してしまう。

「みんな、大阪に向けて移動しているの?」

穂乃果たちと千歌たちは、勇樹がいるところへと移動して訳を話していると、彼らもどうやら大阪に移動するようだ。

「そうなんだ、まあ俺たちは建設用車が盗まれてしまったんだ。現場周辺に落ちていたカードを調べてみた結果、大阪のUSJだとわかったんだ。千歌さんはどうして大阪に?」

「私たちは宝石が盗まれて、現場周辺に不審な人がいたんだ。そしたら関西の人だとわかったよ」

それを聞いたみんなは「なるほどなるほど」と理解したのか、顔を上下に動かした。

そして約2時間後、勇樹たちは新大阪駅に着くと彼らはある場所へと言った、それは

2010年代に完成したあべのハルカス前にいたある刑事が3人いた。

1人は20代の青年風男子で、もう1人は50代の中年男性、最後の1人は30代の若い女性。

「お待ちしました、わしは大阪県警の増田隆一刑事です。こちらは私の同僚の狐色九尾刑事です」

増田刑事と狐色刑事にあったみんなは「よろしくお願いします」と挨拶すると、彼らも「こちらこそ」と挨拶をする。

「では早速大阪府警察本部に向かいたいところですが……今はみなさんの荷物をどこかに置きましょう」

葛城警部は彼らを見て言う、みんなは初め何かと思ったがよく見るとみんなはボストンバックを背負っていることに気づき「そ、そうだね」と一斉に頷いた。

みんなはいったん、阿部野橋へと移動しそこにあるあべのハルカス内にあるホテル『大阪マリオネット都ホテル』へと移動した。

みんなはここで一旦ホテルの客室を取って荷物を置き、必要最低限のものを手にし、葛城警部がいるところへと移動して目的の大阪府警察本部へと移動した。

大阪府警察本部に着いたみんなは、葛城警部にある話をしたところ。彼は「なるほど、こちらと同じだな」とある事件を話し始めた。

「実はその事件ですがわしらと同じ事件がありました、上本町では銀行で阿倍野では建設用の車、そして難波では宝石店が狙われたんだ」

それを聞いた太田は「あれ、この事件……」と何かに気付いたのか、メモ帳を出して東京静岡、そして珍等師学園で起きた事件と比べ始めた。

どうやら、大阪で起きた事件は、東京静岡、そして珍等師学園で起きた事件似ている。幸い、大阪で起きた事件の犯人は逮捕したが、車やお金、そして宝石が無かったため犯人にどこにやったが聞いたが、犯人は黙秘していることが分かった。

「もしかして、私たちのところと大阪で起きたこの事件って」  
「とんでもない大事件の前触れ!？」

「ああ、そうだな穂乃果、千歌」

そう言う穂乃果と千歌、そして勇樹はみんなに向けて「それじゃあ、μ, s & A q O u r s & 奇跡の捜査開始だ!」と言うと、みんなは。

『『『『『おおおおおお————!!!!』』』』』

声を揃えて反応するのであった。

『Detective group μ☒s』編 第三話  
『犯人からの問題』

数時間後……勇樹たちは、大阪市内にあるホテルを探したが。不審な人物だと思われる人や団体がいなかった。

みんなは一旦大阪マリオネット都ホテルへと戻り、数十分の休憩と同時に作戦会議＆犯人の正体を放し始めた。

「どこに行ったのでしょうか？ 不審な人はいなかったのに」

海未はそう言いながら地図に赤いバツを付ける、鞠莉は「そうね、でもどこに隠れているか分からないね」と答える。

すると、ツバサの携帯が鳴ったため「何かしら？」と携帯を見てみると『増田警部』と映っていたため電話に出る。

「はい、ツバサです……なんですって!?!」

突然の声にみんなは「何だ!?!」と驚き彼女を見てみると、「はい、わかりました。今からそつちに向かいます」と真剣に答えると彼女は「大阪府警察本部に行くわよ!」と言ったためみんなは急いでいくのであった。



なぞなぞ3：亡くなった動物たちがあるとどこはどこ？

なぞなぞ4：その動物の毛深い姿をした動物は？」

それを見たみんなは「なんだろう？」と首をかしげている。

しかし、それを見た希は「あ、一つ分かったかもしれない」と言つたため、みんなは「ええ?!」と驚く。

「お、おいどういう意味だ?!」

勇樹は希美に向けて言うと、彼女は「それじゃあ説明したるで」と言い始める。

「まず、この町中にある電気車と言うのは電車のことや。丸道を通っていることは環状線のことです」

「そうか、そしてこの食べ物物の名前がある駅は梅田しか無いな、てことは梅田駅のどこかに絞れるってことだな」

「せやで曜君、そして亡くなった動物たちと言うのは化石になつていている可能性が高いから。ここにある化石と言えは『大阪市立自然史博物館』がある」

「それじゃあ、希が言っていたこの毛深い姿をした動物って。そいつは何もんか分からないってことか」

それらを聞いたみんなは「ほへえ……」と目を丸くするが、穂乃果と千歌と勇樹は「フフ」とほほ笑む。

それを見た百合子は「あ、穂乃果ちゃんたち何かわかったかもしれない」と言うと、みんなは「ええ?!」と驚く。

「希たちが言っていた毛深い姿をした動物って、もしかしたら古代の動物の可能性が高い、だが何の動物かわからない」

「でも博物館のサイトである動物で見たんだ、それはマンモス」

「マンモスがいるのは自然史博物館本館の1階にある有料ゾーン、そこにあるんだよ」

「以上、千歌と穂乃果とオレの推理結果、狙われるのはどうやらそのマンモスだと思いません」

それを聞いたみんなは「そうか」と目を丸くして答える。

「す、凄い! 勇樹君と千歌ちゃんに穂乃果ちゃんはすごい推理ずら!!」

「そうですね、彼女たちの推理は驚くほどの推理力ですわね」

花丸とダイヤは彼女たちを見てキラキラと輝いていると、絵里は「それじゃあ急いでいきましょう!」と言うと彼らは「了解!」と答える。

そして、近くにあるバスに乗ると、急いでその博物館へと行くのであった。

.....

大阪市立自然史博物館は、人間の取り巻く自然について、その成り立ちやしくみ、その変遷や歴史について、研究、資料収集、展示、普及教育活動を行う博物館施設。

彼はそこから入り、ツバサたちと聖良たちの増田刑事の手帳を見たところ艦内にいる係の人は「わかりました」と言いながら彼らをマンモスがあるところへと案内する。

「おお、大きいマンモスだ」

「ほんとう、凄いな」

伊江とルビイはマンモスの骨格を見ると目を丸くして答えるが、佐々木とダイヤは。

「まあ素晴らしい姿ね」

「まことに大きいですわね」

と、マンモスの骨格を見て素晴らしいと答えるのであった。

すると、太田は何かに気づいたのか博物館の係の人に向けてこう言った。

「ところで、このマンモスはいつ頃入ってきましたか？」

係の人は「さあ、私は入ってきたばかりでしたからわかりませんわ」と頭を傾けて答える。それを聞いた彼は「そうですね、ありがとうございます」と答えた。

増田刑事は「ここは私たちに任せて、μsとAqours、奇跡胃の皆さんはホテルで十分な睡眠をとってください」と言うと佐々木は「わかったわ」と答えると、みんなに向けてそう言う・

そしてみんなはホテルに帰って、例の犯人を捕まえるため、十分な睡眠をとるのであった。



その帰っている途中、彼らは阿倍野にあるキューズモールへと行き、弁当を買い始めた。

「それにしても大阪って、結構安いものあるわね」

「ああ、しかしどれを買えばいいか迷うな」

にこと幹子は、キューズモール内にあるイトーヨーカ堂にいるが、値段は安い種類が多いためどれにするか迷っている。

「ここは何か決まったのか」「これにしようかしら?」とある弁当を手にすると幹子も「それじゃあ僕はこれだな」とお弁当を手にする。

.....

夜のホテルの部屋中、ぐっすりと寝ている穂乃果と千歌の隣で勇樹はパソコンである物を調べている。

「えっと、この事件の共通するのは……」

彼はパソコンのキーボードをカタカタカタツと押して調べていると、ある事件が出てきた。

「ん、『博物館で麻薬消失事件』？」

それを見つけた勇樹は「おい、千歌、穂乃果起きろ」と起こした。2人は「なにい？」と寝ぼけているが勇樹が「この事件の共通点はこれかもしれないぞ」とある物を見せる。

## 『Detective group μs』編 第四話

## 『突然の急展開』

ところ変わってここは天王寺駅、そこに2人の少女と1人の女性が地図を見ながら何かを探している。

「つたく、千歌の奴「友達のところに行くてくる！」と言ったが梨子ちゃんはいないし耀ちゃんはいない、それにこの町にある宝石店が襲われたって来たらここしかないか」

「お姉ちゃんどこにいるのかな？」

「雪穂と同じってことは、お姉ちゃんはここ近くにいる可能性がある……かな？」

そう言うのは、千歌の姉の『高海美渡』と穂乃果の妹の『高坂雪穂』、そして絵里の妹の『絢瀬亜里沙』であった。

どうやら、彼女たちは姉と妹に事件にかかわったことに気づき、新幹線に乗って急速で大阪の天王寺に着いたのであった。すると。

「ちよつとそのねーちゃん、少しええか？」

ナンパをしようとしているのか、男が4名ほど彼女たちに近づく。

「なに、あんたたちあたしたちに用？」

「ああ、ちよつと暇そうにしていたからな」

男は彼女の手をつかむが、美渡は「そんなことはない、それよりも邪魔」と振りほどくが。

「まあ、ちつとでええから付いて来てや」

再び彼女の手をつかむが、今度は両手をつかんだため振りほどくことが出来ない、すると。

「彼女の手を放せ」

それを聞いた彼らは、何かと思ひ振り向くと。5人の少女たちが建っていた。その中から目つきの鋭い彼女が近づくと、男の手を握った。

彼の手が美渡離れると同時に、彼女は後ろに下がった。

「いでででっ!!」

「さあ、彼女たちのナンパをやめる気は終わったか?」

彼女はそう言うが男は「この小娘っ、なめんなよ!」と、ポケットからバタフライナイフを出して斬りつけようとした。

しかし彼女は男の手を放すとすぐによけたため切られなかった。

すると、彼女のそっくりさんであろうかと思う者が「このっ!」とナイフをつかんでいる手に蹴りを入れる、手からナイフを離すと再び「でりやあ!!」とおなかに蹴りを入れた。それをくらった男は「ぐうっ!!」とお腹をお抑えると同時にその場に倒れた。「てめえっ!!」

それを見た男は彼女にパンチを加えるがメイドの女性が「ふっ!」とパンチを受け止めると一本投げをする。

男は「おらあっ!!」とパンチをするが、目つきの鋭い女性と同じ顔立ちをした彼女が「させないっす!!」と男の体をつかむとそれを持ち上げた。

それを見た雪穂と亜里沙は「えええ!?!」と驚く。

「それいじよーやったら、うちらが容赦しないっすよ」

それを聞いた男たちは顔を青ざめると滝の様に汗が噴き出すと「す、すんまへんでしたあああ!!!」と逃げていくのであった。

もちろん、男を想上げている彼女たちは、その場から降ろすと、ふらふらと逃げていくのであった。

「ふひい、これでよかったすか?」

「ああ、小娘に女は無事だから無傷でよかったな」

2人の言葉に美渡は「なんだあんたたちは?」と疑問に思い、メイドの人に「あんた

「私たちはいったい何者？」と言うと、メイドの人はこう答える。

「申し遅れました、私は羽衣天女です。そして」

「わたくしは七星奈々で、こちらの人は勇樹さんの知り合いの極道連華と彼女の妹の靈華です」

「極道連華だ、さっきの例はいいぞ」

「極道靈華つす、お礼は構いませんつす！」

「私もいる……文・モスキート」

それらを見た彼女たちは、顔を引きつるが。雪穂は何か気づいたのか「あれ、もしかして靈華さんと連華さんつて」と二人を見る。

「あの、もしかして勇樹さんの知り合いですか？」

それを聞いた靈華と連華は「え？ なぜそれを」と目を丸くする。

「そ、そうだが。その小娘は勇樹がどこにいるか知っているのか？」

それを聞いた雪穂は「あ、いえまだ知りません」と慌てて答えると、彼女は「そ、そっか」と答える。

「あ、でもお姉ちゃんからの連絡がありました。どうやらこここの近くにあるホテルに止まっているつて言っていましたよ」

「そうっすか?! それだったらちようどよかったっす!」

靈華の言葉に雪穂は「ええ、靈華さんもですか!」と驚く。

そして靈華たちは雪穂たちと一緒に穂乃果たちがいるところへと行くのであった。

.....

一方の勇樹たちは、このホテルにあるライブキッチン『COOK』で朝食をとっている。

「にしても、気になるな今回の犯人」

伊江の言葉に勇樹たちは「え?」と目を丸くすると穂乃果が「どういう意味なの?」と答える。

「いや、犯人が盗むものと言ったら宝石やお金などを盗むのは分かるが、今回狙っているのはマンモスの骨。何の価値があるんだ?」

それを言ったとたん、ダイヤが「わかっていませんね」と説明し始める。

「いいですか伊江さん、今回狙っているのはマンモスの牙。それはハンコの一部に使われていて海外に売ったら漢方などになって儲かるのですわ!!」

「お姉ちゃんの言う通りだよ伊江さん、もしそれが盗まれたらマンモスさんは大変なことになるよ!」

ダイヤとルビイの言葉に伊江は「お、おう」と目を丸くして言うと、桜が「圧勝ね」と

答える。

それを聞いていた勇樹は何か引っかかっているのか、博物館のパンフレットを見ている、どうやらこの地図はこの建物の見取り図の様だ。

「勇樹、何見ているんだ？ この建物の見取り図を見て」

伊江は勇樹に向けて言うと言は「ああ、実はな」と説明し始める。

「もし犯人が1人だったら逃げる道筋を考えているが、それは無理。だったら今まで聞いた犯人は全部で6人ぐらい、いったい誰かわからないがどうやってあのマンモスを……」

「そうですね、ですがどうやってマンモスを？」

勇樹と海未はそう言いながら見ていると、穂乃果が「そうだね、どうやって守ればいいかな？」と呟いた途端、突然。

「それでしたら、わたくしに良い方法がありますわ」

入り口から声がしたためみんなは「ん？」と振り向くと8人の少女が建っていた。それを見た勇樹は。

「連華に靈華、それに奈々さんに羽衣さんに文さん!？」



「げげっ、美渡ねえ!」

「あれ、雪穂!」

「亜里沙まで、どうしてここに!」

4人の反応に霊華は「それはこつちが聞きたいすよ」と答える。

そして花丸は「えっと、どなたずら?」と、目を丸くして答えると奈々たちは先ほどの様に自己紹介をする。穂乃果たちはどこかで会ったことがあるのか「ああ、もしかして!」と驚く。

「それですが……奈々さん、その作戦って?」

「ええ、まずは……」

絵里は奈々の話質問すると、彼女はみんなに向けてある作戦を話始めた。

.....

そして夜、博物館の周りには多くの警備員に警察官が集まっていた。

「にしても、警部。こんなにも警備を厳重にする必要があるんですか?」

狐色刑事は増田警部に向けて言うと彼は「そうだ」とこう答える。

「私も初めは数十名であれば大丈夫かと思っただが、館長が『相手はどんな人かわからないから厳重に』と一旦や」

「まあ、相手はどんな手口で来るかわからないしな」と真剣に答えると、狐色刑事は「そうだな、うちも警部に同意する」と答える。

「にしても、勇樹くんたちはどこに行ったんやろ？」

「そう言えば、電話で話してましたら『こつちにはこちらのやり方があります』と言っていました」

2人がそう言ったとたん、突然。

ガチンツ!!

「な、なんや!？」

「て、停電!？」

突然の停電に2人は驚く、警部たちだけではなく他の刑事や警部も停電に驚きざわざわと慌て始める。

すると突然、マンモスの骨の方から『バコツバコバコツ』と音がすると同時に、『ガチャツ』と扉が開く音がした。

「扉を開ける音!？」もしかして。警部!!」

「わかった、総員に次ぐ!」

狐色刑事は警部に向けて言うとな彼は無線機を使って「扉を嚴重に見いや、どこかにおかしな人が出てくると思うで!!」と大声でいう。

警察は急いで周りを見るが、ビルから通ってきたのは『宅配業者『フルビタ』』だけ出てきただけで、警察はそれだと思わせる者とマンモスの牙は現れなかった。

.....

「つと、作戦成功だ。今回は一発で行けたな」

トラックに乗っている白髪の名は、鳥尾・コレクタ。今回の計画を立てた黒幕であり張本人。

彼の目の前には、マンモスの骨.....ではなく、古びた木製の宝箱が5つほど置いてあった。

「鳥尾、落ち着きや。今回の事件はあんさんが考えた計画や」

そう言うのは、紫色の髪をしたジト目の少女の名は、城戸東美。背中には釣り竿とナイフなどが入ったリュックを背負っている。

「そうじゃ、わしはこの牙だけを盗んだだけじゃ、この牙はわしらにとっては貴重な物じゃ」

古びた言葉を使って言った藍色のツインテールをした女性の名前は、藍野窈子。彼女はトラックの操縦をしている。

「まあ落ち着け、この牙があればオレたちはいいんだ」

コレクタはそう言いながら木製でできた宝箱を手にすると何かに気づいたのか「ん？」と牙をよく見る、そこには何か文字が書かれていた。

彼は何かかと思いいく見ると、小さな文字でこう書かれている。

『アホアホアーホ、今回の計画はオレたちが考えた作戦により引つかかったな』

それを見た彼は「なんだと？」と顔を歪めるとたん、宝箱は突然バラバラと壊れたのであった。そしてそれを見たコレクタは。

『あのガキどもっ!!』

頭に来たのか、2人に「あのガキどもを探せ!!」と彼らを探し始めた。

.....

「にしてもよくいけたな」

「そうですわね、さすが奈々さんですわ」

連華とダイヤはそう言いながらバスの操縦をしている、バスの中には先ほどの宝箱が5つほど積まれている。

「すごいぞ、勇樹さんってこんな発明品があるんだね!!」

花丸は勇樹が開発した『レントゲンカメラ』を見て言うと言うと百合子が「勇樹君が開発したものですから当たり前なのです!」と自慢する。

「でも、大丈夫かな? 館長には警察に届けるって言っただけ」

「心配するな、これはちゃんと警察に届けばあいつらは手に出せないぞ」

花陽は箱を見ながら言うと、太田は答える。それを聞いた勇樹は「そうだな」と返事を返すと再びバスの操縦をしていると突然後ろから『ブツブツ』と低いクラクションが響いた。

それを聞いた絵里は「何かしらと後ろを見てみると、一台のダンプカーが出てきた。『ダンプカーね、工事かしら?』」

絵里はそう言うと、鞠莉が「what's? このあたりの工事はないわよ?」と言ったため羽衣が「それじゃああのダンプカーは?」と再び見るとある事に気づいた。それは。

「あの人が乗っているダンプカー、もしかしたら盗まれた土木工事ののでは？」

それを聞いたみんなは「ええっ!？」と驚くと、ダンプカーから巨大なスピーカーが出てくると声かしてきた。

『その君たち、宝箱をすぐに返しなさい』

それを聞いた途端、穂乃果と千歌は顔をしかめると同時にスピーカーから『待ちなさい』と声かする。そして『止まれっ!!!』と言うと同時に、荷台から無数のマシンガンを出してきた。

それを見た霊華は顔を青ざめると操縦をしている勇樹に向けてこう言った。

「逃げてくれっすっ!!」

それを聞いた勇樹は「分かった!!」と答えると同時に一気にアクセルを踏む、するとメーターの針は一気に赤いところまで行くと、バスは急速度でダンプカーから一気に離れた。

だが、ダンプカーも彼らが乗っているバスの後を追い始めた。  
「もつと早く進めませんか!？」

海未は勇樹に向けて言うが奈々は「これ以上は走ることはできません!」と答えると、銃はダンプカーの中にしまわれる。

奈々は再びダンプカーを見ると「あのダンプカー、もしかして盗んだ宝石とお金で部品を改造したようですよ!!」と答えたとたん、突然荷台から巨大なクレーンが出てくると同時に、ハンドが出てきた。

そのアームを見た百合子は「よけてください勇樹君、陽君!!」と言うと2人は「げげ?!」と踊時、急いで操縦をしてクレーンのアームをよける。

「右によけて、後ろに当たるとよ!!」

「もう少し左に、わー!! 前よ前見てよ!!」

耀とにこは、窓から出てハンドが当たらないように2人に向けて言う。陽と勇樹は「言われなくてもわかってる!!」と、操縦をしている。

ダンプカーを操縦をしている者は「もう少し左だ、いや前だ!」と言いながら何者かに指示を出している。

「勇樹君つ!! こ、これってもしかして!!」

「ああ、オレも思ったよ!」

2人はそう言いながら操縦をしながら話した途端、ハンドの一部がバスの天井をガシツ!! とつかんだ、すると天井に大きな日々とガラスが割れると同時にバリント!! と天井が接がれてしまった!!

『『『『うわあっ!!』』』』

突然外れたことに、みんなは驚き。太田は「しまった!!」と驚くと、天井から2人の少女が下りてきた、そして2人はマンモスの牙に向けて走るが。

「させないっ!!」

「近づけないよっ!!」

突然6人が2人の前に現れる、その6人とは、佐々木と中弉に希とことりに梨子と善子の6人。

すると彼女たちは懐に手を入れると、ナイフと銃を取り出した。しかし、それを見た佐々木と中弉は「そんなのにビビらないっ!」と言うと、バスの座席から刀と変わった形をした手袋を出し希たちはさす又を手にした途端、戦闘が始まった。

被害はそんなにひどくはないが、彼女たちの戦いは主に佐々木と中弉と戦っている。それを見た太田は「今のうちに警察まで!!」と彼に向けて言うと言樹は「わかった!!」とアクセルを踏んだ、その瞬間。

クレーンが再びアームがバスの座席をつかんだため彼らは「わわっ!!」と驚いた。そ



してアームはマンモスの牙をつかもうとしたため、それを見た千歌と穂乃果は「させないっ!!」と急いでそれをもってアームから離す。すると。

『緊急事態発生、緊急事態発生。この先に工事中の橋がありました。このまま進みますと落ちます。危険危険』

それを聞いた彼らは「な、なんだって!？」と顔を青ざめると、太田は「い、急いでブレーキを!!」とブレーキを踏み込むが、後ろのダンプカーが突然加速してバスにぶつかった!!

「うわっなんだ!？」

「あいつ、箱を奪ったらオレたちをこの橋から突き落とす気か!？」

太田と勇樹はここまでして箱を奪おうとしていたのかと思ったが……実は。

「わわっ! ど、どうすれば原則できるんだ!？」 ブレーキが壊れてしまったあ!!」

突然ブレーキが壊れたと同時に、徐々にダンプカーの速度が加速していった。コレクタどう対処すればいいか分からず顔を青ざめてしまっている。

そして彼は何か思いついたのか「しかたない」というと。そしてダンプカーから出て地面に転がるかのように飛び降りると、仲間を見捨てているかのように立ち上がるとその場から逃げるのであった。

「勇樹君、こうなったら……あれを使おう!!」

太田の言葉を聞いた勇樹は「わかった！」と言うと2人は胸ポケットから虫眼鏡を出した。

「佐々木さん、希さん、善子さん!! よけて下さい!!」

「中武、ことりさん、梨子さん。よけるんだ!!」

太田と勇樹の言葉に6人は突然しやがんだため、藍野と城戸は突然しやがんだため「なんだ!?!」と驚いた。

その瞬間、2人の持っている虫眼鏡から『プシュツ』と音がすると同時に2人の首に何かが刺さる音がした。すると。

「ふみやっ……」

「うみゆっ……」

2人は何かにとりつかれたかのように、突然その場から倒れた。

それを見た真姫は「な、なに、どうなっているの!?!」と驚いていると、勇樹はこう答える。

「この道具のおかげだ、この道具はオレが発明した一種の居眠り性の道具でな。この虫眼鏡から出る液体ばりに刺された人は必ず3時間は寝てしまう特殊な睡眠エキスが配合しているんだ」

それを聞いたみんなは「なるほど」と答えると、絵里は「ちよつと待つて、今運転し

ているのはだれ？」と答えると、みんなは「あれ？」と操縦を見たとき。

そこには誰も操縦しておらず、無人のまま運転している。それを見たみんなは「げっ!!」と青ざめる。そして穂乃果と千歌に勇樹はみんなに向けてこう言った。

「みんな、急いで外に出てっ!!」

「もう少ししたら川に落ちてしまうよ!!」

「宝の箱とその2人を連れて行くんだ!!」

それを聞いたみんなは急いで宝の箱を持ち藍野と城戸を急いで背負うと扉を開ける。

そしてみんなはそこから急いで出て、その場から離れる。

μ, sとA q o u r sはクツションを急いで手にしたため軽傷で済んだ。そして勇樹は穂乃果と千歌を背負うとその場から飛んでバスから離れる。

そして、バスとダンプカーはそのまま走っていき橋から出ると川に落ちて数秒後。

ドガアアツ!!!

突然、バスとダンプカーが爆発したため、それを勇樹は驚くのであった。

.....

そして宝の箱は警察に届けて、2人の女性は九尾刑事たちに渡す。その間、増田警部

と共に宝の箱を検査した。

「調べて見た結果だけど、箱には何も仕組みがないよ」

「せやな、うちも何か変な材質でも使っているのかと思いい調べたんやけどただの木箱やで」

太田と希は、いろいろと調べたな何も変化がないため絵里たちは「そう」と小さく答える。

しかし勇樹は「それでもないな」と言うと、カバンからカメラと2重の板を出した。そしてそれを凜に「これ持っていて」と言つたため「わかつたにや」と受け取る。

それをカメラとは反対方向に置き勇樹は写真を撮る、するとカメラから中身を取つたかのように箱写真が出てきた。

そこに映っていたのは、周りとは違う変色した何かが映っている。

「これって、なにかかな? 箱の木と木の間黒い何かが映っている」

「そうだね、何かなこれは……?」

曜とルビイはそれを見ようと言つと、勇樹は「そうだな」と穂乃果と千歌は何か気付いたのかこう答える。

「この時、この博物館に隠したつてことはみんな。特に見られて行けない人には絶対見せてはいけないものを隠した」

「まず考えるのは拳銃だね、拳銃だったらすぐに海外に売ることが出来るからね、でもこの写真に写っているのは白いもの。だったら」

「うん、千歌ちゃんと勇樹君の言った通り。これに映っている画像から計算したら」

穂乃果がそう言うと同時に、勇樹はカバンから工具箱を出し、そこからトンカチを出して「おりやつ！」と勢いよく木箱を叩いた、すると。

ピシッピシッピシッ!! バキッ!!

箱の表面にひびが入っていきそれが真つ二つに割れて中身の正体が現れた。

その中から出てきたのは。ビニールに包まれた謎の白い粉で。それは一つだけではなく大量に出てきた。

それを見た絵里は「これってもしかして!?!」と言うと増田警部はこう答えた。

「せやな、これはもしやハロウィンやな」



もちろんだ」と答えた。

そしてこの事件は無事(?)に解決するのだった。

主犯の鳥尾は、事故現場から数百mのところでは他の警官に捕まっている。

.....

後日、奇跡と<sup>々</sup>sにAqoursのみんなから大阪府警から賞状を手にしたみんなは大喜び。

「にしてもどうしてわかったの? 博物館のパンフレットで犯人の行動は分からないのに」

理亜は勇樹に向けて言うと言は「犯人の行動はよくわからないが、狙っていたのは箱だ」と答え始める。

「犯人が本当にマンモスの骨を狙っていたとしたら、骨ごと奪う。でも奪ったのは宝の箱、それは隠しやすく持ち運びが楽で分かりにくい。それに展示品となつていると本物と分かりにくいからな」

「そつか、その箱を奪つて逃げるとしたら普通乗用車だとわかつてしまう。でもトラックだったら荷物の中に紛れ込ませればばれないんだね」

話を聞いたことりは答えると、勇樹は「その通り」と答えた。

「まあ今回の事件はみんなのおかげとすればいいや、オレも安心するっと」

勇樹はそう言うと同時にお茶を一杯飲む。だが。

「アチチチツ!!」

暖かいお茶なので彼は慌ててそれを置いて、太田から冷たいジュースを飲む。それを見たみんなは「ああ、間抜けな部分はあるんだね」と、小さくつぶやいた。

だが、理亞と聖良は「変わった青年だね」と思ったのであった。そして、彼女たちは地元の町へと戻って行きみんなは無事に帰るのであった。

## 第1部 FIN



『Detective group μs』編 第五話  
『クリスマス集合』

「クリスマス??」

勇樹は、穂乃果と千歌からの電話に反応すると彼女たちは『『そうだよ』』と答える。

「勇樹君はそっちじゃクリスマスはやらないの?」

「そうだね、私は穂乃果ちゃんはやるところはあったけど、勇樹君がクリスマスをしていくことはないね」

二人の言葉を聞いた彼は「あ、それはだな……」と突然言葉を詰まらせる。それを見た彼女たちは「なんだろう?」と思いつつ彼の言葉を聞いている。

「……あーそうだな、うちは忙しいからクリスマスとかはあまりやらないんだ。あとオレ探偵の仕事があるからちよつと切るよ、じゃあな!」

勇樹はそう言うのと電話を突然切つたため、それを見た二人はある計画を立てた。

.....

一方勇樹は、ある一軒家の研究所兼探偵事務所の『奇跡』もとい学校の部活の『なんでも探偵部』にいるのであった。

「さて、今回はなんとしてもあの用意しないとな」

勇樹はそう言いながら見た物は、今開発中であるクリスマスセットを作っている、だがまだ完成しておらず開発途中である。

時間はそんなにかからないと思つた彼だが、穂乃果たちのところへ行くとしたらまたあの事件に巻き込まれると思つている。そして彼にはある行事を忘れている、それは。

.....

12月23日、珍等師学園内の出入口にあるバス停に15名弱のメンバーがやつてきている。そのメンバーとは、勇樹を含む奇跡のメンバーであつた。

「穂乃果ちゃんたちに呼ばれて東京に？」

百合子の言葉に勇樹は「ああ、そうなんだ」と答える。

「その話はちやうど昨日なんだけど、穂乃果と千歌がオレに向けて『秋葉原でクリスマスをしよう』と言つたからね」

それを聞いた中氏は「う、またあのもみもみをする羽目に遭うのか……」と、顔を青ざめながら答える。

「それじゃあ行きましよう、ちやうど秋葉原のバスが来たわ」

桜の言葉にみんなは振り向くと、秋葉原行きのバスがやつて来た。それにみんなは乗り込むとバスはそのまま東京に向けて発信した。

.....  
 東京都秋葉原駅前、そこにμ sとA q u o r sのメンバー、A | R I S EとS a i  
 n t S n o wの高校生探偵がバス停社前にやって来た。

「勇樹君、久しぶりに合うけど。ここに来るのかな?」

ことりの言葉に海未は「ことり、心配しなくても大丈夫です」と冷静に答える。

「そうね、それにその勇樹と言う少年は一体だれか気になるからね」

S a i n t S n o wの理亜はそう言いながら答えると、鞠莉は「そうね、私も気にな  
 るわ」と同意する。すると。

「あ、勇樹さんたちが乗っているバスがやってきましたわ」

ダイヤの言葉にみんなはバスを見てみる、そこには『秋葉原行き』と表示された高速  
 バスがやって来た。

バスが停車すると同時に、バスの扉が開くと同時に乗客がぞろぞろと降りてきた。そ  
 の中に勇樹たちが下りてきた。

「つと、おーい。穂乃果ー。千歌ー」

勇樹は穂乃果と千歌を見つけるため、近くにあった台に乗り辺りを見渡しながら声を

出している。すると。

「あ、勇樹君いたよ！」

「本当だ！ おーい勇樹君！」

穂乃果と千歌は、それを見つけると勇樹は「おーい」と手を振るが。途中で何かにつまずいたのか「によわっ!？」と台から落ちるのであった。

それを見た2人は「あらら」と苦笑いで答えるのであった。

.....

「いてて、足の傷がちよつと痛む」

勇樹は足に手を当てて言うのと海未が「あんなところに乗るからです」と叱るのであった。

なぜ足に手を当てているのか、それは勇樹が初めてμsのメンバーが初めて探偵の出会いであり勇樹が誘拐した事件であった。

その時、足にけがをしたため台から時にケガをしたため走ったりジャンプをした時には何も問題がないが、何かでつまづいた時には痛みが走る。

「それで海未、どこに行けばいいんだ？」

アレンの質問に海未は「そうですね」と反応するところ言う。

「この先にヨドバシカメラ秋葉原がありまして、その中にレストランがあります」



「ちよつと、早いわよ！」

「単独での行動はいけませんわ！」

と言いながら、急いで彼女の後を追いつめる。

それを見た勇樹たちは苦笑いで「あははは……」と答えながら、但馬屋へと行くのであった。

この日、とんでもない事件になるとは知らずに。

## 『Detective group μ⊠s』編 第六話

## 『1年による事件（発生編）』

例のレストランに付いたみんなだが、現在の時刻は午前11時。予定の時間より早く着いたようだ。

「どうするんだ穂乃果、まだ時間はあるけど……」

勇樹は穂乃果に向けて言うと、彼女は「それじゃあこうはどうか？」とある事を言い始める。

「勇樹君たちは始めてくるところだから、私たちが勇樹君の行きたいところに案内する。花陽ちゃんたちと善子ちゃんたちは陽君たちと一緒に私たちと千歌ちゃんたちは勇樹君たちと一緒に、そして絵里ちゃんとダイヤちゃんは佐々木さんたちと一緒にどうか？」

それを聞いたみんなは「それはいいね」と賛成した。時間は1時間ほどあるため、その間どこかに行くのは構わないだろうと穂乃果はそう思った。

.....

※ここからは、1年・2年・3年のメンバー別による話になりますので、ご理解してください。

### 1年Side

穂乃果たちと離れた花陽たちは、百合子が「勇樹君に新しい眼鏡を買いきたいけどいいかな?」と言ってきたため、みんなは眼鏡が売っている『JINS』へと移動して買い物をする。

「うーん、このメガネはどうかかな……」

百合子はどれにしようかなと探していると、凜は「すごい種類だね、凜も選ぶのかな」と珍しくメガネを選んでいる。

真姫は陽とルビィと一緒に仲良く話していると善子は「悪いけど、ちよつと買いたいCDあったから外す」と移動する。花丸は「未来ずらー!」と目を光らせている。

幹子と花陽は「買いたい眼鏡、決まった(かい)?」と言うと彼女は「それが、まだ決まらなくて」と苦笑いで答える。

「そうだ。花陽ちゃんだったら、どんな眼鏡がいいの?」

「え、ええ!? わ、私はその……」



百合子の突然の質問に花陽は顔を真っ赤にしてうつむいた、その時。

「さ、強盗がそっちに行つたぞ!!」

店の外から声がしたため百合子たちは何があつたのか外に出ると、ヘルメットとコートを着て彼女たちの前を通り過ぎた。

それを見た真姫は何が起きたのか理解したのか「もしかして、あの人が!」と言つたため、百合子と花陽とルビィは「ええっ!？」と驚く。すると幹子と凜は。

「凜君、追いかけるよ!」

「わかつたにゃ!」

2人は店から出て、コートを着た人の後を追い始める。

コートを着た人が走って駆け込んだ先は、メンズ・レディースファッションを売つてゐる洋服店『THE SUIT COMPANY』の後ろにあるトイレに入つていった。

2人はその付近に着くと、後ろから花陽たちがやって来る。

「り、凜ちゃん。待つてよう……」

「そ、そうだよ。私たちを置いていかないでえええ」

花陽と百合子は、幹子たちの後を追ってきたが、早かったため追いかけるのに精いっぱい、途中でくたびれかけている。

すると、凜は「かよちゃん、警察を呼んできて」と言ってきた。

「ええつ、け、警察!?!」

「凜、もしかして犯人はあそこに?」

凜の言葉に花陽は驚いていると、真姫は質問すると彼女は「そうだよ真姫ちゃん」と答える。

幹子も「百合子君、君は善子君たちと一緒に強盗があつた例の腕時計に行こう。ここは僕たちが」と言う。

百合子は「は、はひ。わかりました」と言いながら、例の腕時計が売っている店に行く。

.....

数分後、ヨドバシカメラ秋葉原の前に無数のパトカーがやってきて、複数の警官がやって来た。

「それじゃあ、その手洗いに犯人は隠れているのか?」

警官の一人は凜に確認すると彼女は「うん、ちゃんと凜と幹子ちゃんがちゃんと見て

いたから誰も出ていないよ」と答える。

そして警官は「よし、それじゃあ」と何かを言おうとしたその時。

カチチャンツ……………キイイイイ

突然扉が開いて凜と幹子は「何っ!？」と驚く。

扉から出てきたのは、2名の男と1名の女性。どれももう出てきましたと言う風にはハンカチを持っている。

「ん、どうしたんだ?」

警官は2人の様子に違和感があったのか、質問すると凜は「じ、実は」と驚愕なことを言い出す。

「ふ、服装に靴、ヘルメットに手袋が同じなの……………!!!」

それを聞いた途端、警官は「なにつ!？」と彼らを再び確認する。

確かに、彼らが片方の手にしているヘルメットにポケットからはみ出している手袋、

来ているコートと吐いている靴は。まったくもって同じ柄。  
どれが犯人か分からない。

## 『1年による事件（整理編）』

一方、百合子と花陽は太田たちと一緒に強盗があつたと思われるお店へと行く。

その店は、財布に腕時計にカバンを取り扱っている『NAUGHTIAM』で、ガラスは割られているがけがをしている人はいなかった。

「な、なによこれ」

それを見た真姫は、驚いていると太田が「もしかして、先ほどの人による強盗かも」と真剣に考えている。

すると善子が「それよりもまずは聞き込みが重要じゃない？」と言ってきたためみんなは「そうだね」と一齐にそう言うのと、メモとペンを出して目撃者に事件があつたことを聞き込み始めた。

.....数分後.....

警官がやって来たため太田たちは「邪魔になるからどこう」と移動すると、凜と幹子がやって来た。

「あ、凜ちゃんに幹子ちゃん」

それを見た花陽は手を振ると凜と幹子は花陽のところへと移動する。

「どうだったの幹子ちゃん、犯人は一体」

「それが問題があつてね、手袋にヘルメットに靴に服装が同じだから誰が犯人か分からないよ」

それを聞いた百合子は「そ、そう」とシユンと答えた。

だが、真姫は「じゃあここでだけでも少し整理してみる？　もしかしたら何かわかるかもしれないわ」と言ったため、みんなは「そうだね」と言いながら整理し始める。

「事件が起きたのは11:20頃、コートとヘルメットをした人がバットでガラスのケースを突然割った」

「その人は用意したスケッチブックで『このケースに入っている物をカバンに入れる』と指示したため声をしなかつたわ、声だつたらばれると思つたためスケッチにしたと思うわ」

「それで、その人はバットをその場においてトイレに行ったことになつたずら」

百合子、真姫、花丸は事件のことを言い終えると、幹子たちは「それじゃあ僕たちも」と言い始めた。

「トイレに入ってきた人たちは合わせて3名、右から順でいうと短髪の男は『緑川隆二』みどりかわりゆうじさんでぼつちやりとした男性は『福寺正人』ふくでらまさひと、そして背の低い女性は『市川麗奈』いちかわれいなだよ」  
 「緑川さんはお腹の調子が悪いためトイレに入っけいき、福寺さんはトイレットパーがないから出るのに時間が掛かり、市川さんは友達が来なかつたため帰るときにこのトイレに入ったと言っていたにや」

「盗んだものはリュックに入れていてね、それは掃除入れに入っていたため、誰が犯人は分からない。指紋は出なかつたよ」

それを聞いた真姫は「そう、みんな微妙な証言ね」と言いながら彼らを見る。

「それじゃあまずはその人たちの話を聞いてみる？ 凜さんと幹子さんは犯人の特徴をよく覚えているから何かわかると思うわ」

陽の言葉にみんなは「それはいいね」と同意し、警官に話をして容疑者3名に話をすることにした。

.....

「いてて、だからオレはお腹がいてえからトイレに行つたんだ！」

男、緑川隆二はそう言いながら右手でお腹を押さえて答える。それを聞いた警官は

「本当にそうか？ 汗は掻いているが薬はないけど？」と答えると緑川はこう答える。

「い、いつも買っている薬が切れてな。今日ここで買おうかと行つてたら急に腹が痛くなつてここに行つたんだ」

そう答えると、幹子は「お兄さん、その腕時計どうしたの？」と言つてきたため、緑川は「あ、これか？」と答える。

「オレの親父が亡くなる前に大切に使つている腕時計でな、なんせ50万以上する大切な品でな。オレが就職祝いに買つてくれたものなんだ」

それを聞いた幹子は「そうなんだ」とにつこりとほほ笑む。

だが、それを見た花丸は「幹子ちゃん、何か考えているぞら」とジト目で言つたため善子は「そう、普通だと思ふけど？」と答えた。

.....

「は、はい。私はここで発売する限定のケーキを買つて帰ろうとしたら、ちようどトイレに行きたくなつたので、トイレに行きました」

男、福寺正人は紙でできた四角い箱を両手で持ちながら答える。それを聞いた警官は「ほう、ケーキか」と箱を見ながら疑う。

「しかし、その箱はともかく、中身はその辺で買ったケーキじゃないか？」

警官の質問に福寺は「そ、そんなことありませんよ。この季節限定の『スーパースト



ロベリーケーキ』です！」と慌てる。

「そ、それに。今日は私の妹の誕生日で、ここにしかないケーキを買いに来たんです」  
福寺はそう言うと、幹子は「それじゃあ、あなたが腕にしている腕時計は？」と言う  
と彼は「あ、これ？」と答える。

「これは妹が私にプレゼントとしてくれた腕時計でね、今までもらった中で大切な思い出でね。腕時計もここで買おうかときたんだよ」

それを聞いた幹子は「それだったら妹さんは喜ぶと思うよ」とほほ笑む。

するとルビイは「幹子ちゃん、もしかしてあのケーキに隠していると思って？」と呟くと真姫は「いくら何でもそれはないと思うわ」とジト目で言う。

.....

「私は、ここにあるカフェで珈琲を飲んで友達と待ち合わせをしていたけど、友達が用事があったため帰る前にトイレに行きましたが今の様になりました」

女、市川麗奈は器用に左手でカバンから予定帳を出して、事件があつたことを確認しながら答える。それを聞いた警官は「なるほど、友達とか」と彼女を見ながら答える。「だがあんたは『その友達は用事があつた』と言っていただけ、その用事ってどんなのか具体的には聞いていないのか？」

警官の質問に彼女は「それは聞いていません、彼女は急いでいたためわかりませんで

した」と答える。

「それに彼女は、男性恐怖症なのであなたたちが聞いても怖がるだけです」

市川の言葉に警官は「ううっ」と後ろに引くと、凜は「お姉さん、その腕時計動いていないけど、どうしたの?」と言うと彼女は「これ?」と答える。

「電池切れでね、さっきは動いていたけどもう限界ですね。まあ、友達と待ち合わせをする理由も新しい腕時計を買おうかと考えていたのです」

それを聞いた凜は「そうなんだ」と答える。

それを見た陽は「ああ、もしかしてあの2人、犯人が分かったかもね」と言うと百合子は「ええっ、本当!」と驚く。

「ねえ陽君、もしかしてあの犯人の中の誰が犯人なの?」

「そうですよ、私は全然わかりませんでした!」

真姫と百合子は周りの人に聞こえないように陽に向けて言うと、彼は「あくまで推測だけど、ヒントは腕時計よ」と言うとみんなは「へ?」と目を丸くする。

## 『Detective group μs』編 第六話

## 『1年による事件（解決編）』

陽たちは再び見ると、凜と幹子は3人と警官に向けてこう言い始める。

「それじゃあみんな、突然だけど腕を胸の前まで出して」

「犯人はとんでもないミスを犯しているにや」

それを聞いた緑川は「あ、ああ。わかった」と時計を見えるように出すと、2人もそれに誘導するかのように時計を見えるように出す。

「……あの。これでいいですか？」

「どれも同じですが……」

それを見た凜は「あ、違うにや」とある部分を見て反応する。

「違うって何が違うのよ？」

善子は何かと思つて幹子に向けて言うと、彼女は「利き手だよ」と反応する。

「入れたかばんはリュックでね、よく見たらリュックの肩ベルトだけど左側だけの穴が大きいよ」

それを聞いたみんなは「ええっ!？」とリュックをよく見ると、左側だけ穴が大きいこ

とが分かる。

「もしかして、それをしている人が左肩からしている。つまり左利きってことがわかるんだね」

凜の言葉に幹子は「正解」と答えると、ルビイは「ああつ、左利きの人がいる！」とある人に指をさす。その人は、

「あのお姉さん、よく見たら左利きだよ！」

それを聞いた市川は「え？」と反応するが、彼女は冷静にこう答える。

「ええ、ですがこれはカバンをする時やノートに料理をする時だけで。これは偶然です」と幹子は「いや、予定帳もおかしいよ」と答える。

「予定帳は相手に確認したり自分の行動を書くためにしているが、今から変更することはできるよ」

それを聞いた真姫は「え、それは無理じゃない？ ペンは黒や赤などと言った色があるけど消すことは無理と思うわ」と答える。

すると、百合子は「あ、無理とは言えませんが消えることはできると思いますよ！」と何か思い出したのか反応する。それを聞いた警官は「それはどういう意味だ？」と言うと百合子はこう答える。

「熱に反応すると消えるペンです！ 最近のペンは熱に反応すると色付きから無色に変

色しますから、書き直すことはできません！」

それを聞いた警官は「そうか、それだったらアリバイは崩れるな」と言いながら市川を見る。

だが彼女は「待つてください」とこんなことを言い出す。

「もし私が犯人だったら証拠はありますか？ 仮に犯人だとしても私のどこに証拠が

……」

すると凜が「あるにや」と彼女の右腕の腕時計に向けて言う。

「腕時計の針が10:10になったまま動いていないにや」

それを聞いた彼女は「だから、これは偶然電池が切れて」と言う。幹子は「おやおや知らないかい？」とこう言いだす。

「時計を飾っている店は、作った店の名前をわかりやすくするためにわざと10:10にしているってことを？」

それを聞いた彼女は「っ!!」と驚くと、真姫は「そう言えばパパから聞いたことあるわ」と反応する。

「もしそれが店の物だったら、シリアルナンバーがあるから、調べてみたらわかると思う

よ」

幹子がそう言った瞬間、彼女は「ふふつ」とその場で崩れる。

「まさか、この腕時計と利き手があだになったとはね」

「そ、それじゃあ、この犯行を認めるのか？」

警官はそう言うのと彼女は「ええ、犯行を認めます」と答える。

.....

パトカーに市川が乗る前、彼女は幹子たちに向けてこう言った。

「ねえ、私からの質問だけど。少しいいかしら？」

彼女の言葉に幹子は「ん、いいけど何だい？」と言うと市川はこう言う。

「あなたたちは一体何者？」

すると、幹子と凜は「ふふつ」とほほ笑むとこう言った。

「名探偵μ、sとAqurs、そして私立探偵・奇跡だよ」

『Detective group μs』編 第七話  
『3年による事件（事件発生編）』

3年SIDE

穂乃果たちと離れた希たちは、中式が「なあ、回転寿司があるけど面白いのか？」と言ってきたため、希たちはこざわり回転ずしの『まぐろ人』へと行く。

「おお、これが回転寿司か」

中式が見たのは、お寿司がレーンの上に乗って回転する光景。それを見て感動したのか、目を光らせている。

「せっかくだから、少し食べる？ この後予定はあるけど大丈夫のようだし」

佐々木の言葉に中式は「本当か？」と反応する。

.....

「えっと、中式は回転ずし初めてだから大体のマナーは知っている？」

席に座ったみんなはさっそく注文すると、絵里は中式に向けてマナーを言うと彼女は「大体は知っているぞー」と言いながらレーンの上にある寿司を皿ごと取って自分のところまで移動して食べる。

「しかし、結構開いているな。開店して10分なのに」

伊江はあたりを見ながら言うのと、寿司の店員は「閑古鳥が鳴くようなことを言わないでくださいよ」と苦笑いで答える。

すると鞠莉は「でも、これだと貸し切り状態に見えるね」と笑いながらトロサーモンを食べる。

「貸し切りか……それもいいわね」

佐々木はそう言いながら食べていると、ガラガラつと扉が開いて「いらつしやいませ」と声がする。

入っていきしたのは緑色のパーカーをした青年で、近くの席に座った。丁度希からみて店の奥で斜め側に座った。

「店員さん、ちよつといいか?」

青年は店員に向けて言うのと店員は「はいなんでしよう?」と答える。

「揚げ餃子とコーラはあるか?」

それを聞いたダイヤは「こ、コーラ!」と驚いて反応する。すると青年は「んだよ、おかしいのか?」と言うと彼女は「いい、いえ」と言いながらお茶を一杯飲む。

それを見た青年は「ふん」と反応し、店員に「あとガリをくれ」と言うのと店員は「わかりました」と答える。



「お寿司にコーラって愛称良いのですの？」

「うーん、コーラと寿司って相性抜群って聞いたな」

中式の言葉を聞いたダイヤは「そ、そうですね」と答える。

すると青年は「ねえ、店員さん。トイレはどこだ？」と言うと店員は「トイレなら奥にありますけど」と言う。青年は「そっか、あんがと」と言いながらトイレに入っていく。

.....

数分後、次に入ってきたのはサラリーマンで、青年の前、ちょうど希の隣に座った。

「店員さん、すみませんがこのタコポン酢とだし巻きオムレツは今日もありますか？」

サラリーマンの質問に店員は「ええ、ありますよ」と言う。サラリーマンは「それじゃあそれを」と言う。

「あ、ここってオムレツなのね」

「あら、ここってオムレツなのね」

佐々木がそう言う。こは「ええ、しかも普通のと納豆が入っているのがあるわよ」と言いながら鉄火薪を食べる。

メニューを見たダイヤは「あら、このお店抹茶パフェがありますわ」と言う。伊江が「マジか。オレも食ってみようかな」と言うのであった。

すると次に入ってきたのは、OLでその人は「ここにするか」と言いながら入ってきた。

彼女が座つたのは希のちようど後ろで、彼女はカバンを隣に置くとスマホをいじり始め「店員さんいつものをお願い」と言う。

だが店員は「え、いつものって？」戸惑うと、彼女は苛立ちを表すかのよう「いつも乗つたらいつものよ！」と怒鳴る。だが、店員を見て「あら？」と何かに気づいたようだ。

「ねえ、いつもの店員は？」

彼女の言葉に店員は「ああ、それが事故でここにいないのです」と言うと彼女は「そう、だったら仕方ないわね」と理解した。

「じゃあ本日の刺身とビールに粗汁をお願い」

彼女はそう言うと店員は「わかりました」と言いながら調理場へと戻っていく。

.....

「おお、あと30分もしたらそろそろ予約した時間になるな」

「それじゃあ会計を済ませるわ」

中式は時計を見て言う「と佐々木は財布を出して会計に行こうとした瞬間。

ガララララッ！ と、扉を乱暴に開ける音がしたためみんなは「なんだ？」と一斉に

向くと、若い女性が「ぜえ、ぜえ、ぜえ」と意気をすると同時にこう叫んだ。

「だれよ、私の財布を盗んだのは。ここにいるのは分かっているわよ！」

それを聞いた途端、ダイヤは「ちよつと、あなた。何を言っていますの?!」と言い出す。

すると女性はスマホを出してピピピッと何かを入力している。それを見た中氏は「もしかして」とある場所を見ると女性は店員に向けて「トイレはどこ?!」と言いだす。

店員は「と、トイレならあちらに」と言う。女性はトイレに向けて走っていき扉を開けて入る。

ダイヤたちは一体何が起きたのか分からず、じつと見ていると『あつた!』と声が出た。だが数秒後『ない!』と声があると同時に扉を開けてこう言いだした。

「いったい誰よ、私の財布をトイレのゴミ箱に入れたのは?!」

それを聞いた絵里は「ど、どういう意味?」と言うと女性は「あら、あなたたちは?」と言ってきたため希は「うちらは探偵の、sとA q u r sに奇跡なんやで」と答える。

女性は「あら、ちよどよよかったわ」とこう言い始める。

「さっきこのデパートでスリにあつてね、バックに入れていたこの財布を！」

そう言つて彼女は長い財布を希に見せる。柄は豹柄でだれが見ても目立つ模様だ。

「ここは「ちよつと待つて、なんでここにあるつてわかつたの？」と言つと中式は「G P S、その財布に仕込んであるんだろ？」と言つと彼女は「あら、よくわかつたね」と答える。

「先ほど、あなたのスマホを見た時にいじつているから。あの指の行動を見るとどう見ても探し物、画面を見ているつてことはどこにあるか探しているつて証拠だよ」

すると女性は「え、ええそうよ」と答えると、ダイヤは「それにしてもどうしてここに捨てたのですの？」と小声で伊江に言うが、彼女は「オレが知るかよ」とジト目で答える。

『Detective group μs』編 第七話  
『3年による事件（整理編）』

「でも、誰が擦ったのか分かるの？　この店にいるのは分かるけど？」

果南は女性に向けて言うと言女は「それは大丈夫よ！」と言女の目に親指を見せる。そこには絆創膏をしているがガーゼをしている部分を見るとわずかに赤いしみが出来ている。

「ば、絆創膏……？」

伊江は目を丸くして言うと言女は「林檎を切っていたらちよつと指を切つてね。この絆創膏をしてもにじむほど」と言い始める。

「だから、もしかしたらこの中の誰かの袖にその後が付いていると思うわ！」

そう言うと言女は「仕方ねえな」と袖を見せる、それに続いてサラリーマンにOLも袖を見せると、血の跡が無かった。代わりに水の湿った跡が付いている。

「どういう意味だ!？」

それを見た中氏は驚くと絵里が「血を消したのね」と冷静に言う。女性も「ど、どう

いう意味!」と驚愕している。

すると伊江は「あーこれはちよつとやばいかも」と呟くと、ダイヤが「もしかして」と何かを考え始めると、こんなことを言い出す。

「みなさん、突然ですがこのお店を出ることを禁じます。もちろん不審な行動をしていけません!」

それを聞いた青年は「はあ、ふざけんなよ!」と席から立ち上げるが、伊江が「お兄さん」と青年に向けてこう言いだす。

「ここで暴れたら暴行罪。物を破壊したら器物損壊罪。また警官が来て暴行したら公務執行妨害となるぞ。それでもいいのか?」

伊江の言葉に青年は一瞬ひるむが「ま、まあ。少しぐらいなら付き合っつてやるよ」と席に着く。

すると、今度はサラリーマンが「あ、あのすみませんが電話はいいですか?」と携帯を出して言うのでダイヤが「あら、どうしてですか?」と言うとサラリーマンはこう言いだす。

「実はこの後妻との話がありますが、時間に厳しい人で」

それを聞いた途端、鞠莉は「その妻の名前はいつたい誰？」と言うとサラリーマンは「か、香理ですが」と言う。鞠莉は携帯を奪って電話をし始める、もちろんサラリーマンは「ちよ！」と反応するが、彼女は無反応のまま電話をする。

「あ、香理ですーか？　ワターシはこの店の小原もいまして、この電話の持ち主なんです。どうやら忘れてしまいました。今そちらの会社に向かっているおもーいまして、今店員が急いで持ち主を探し始めたのです。もしかしたら電話なしだと大変なことになるのデハ？」

鞠莉はそう言う。電話のスピーカーから『そ、それは仕方ないわね、すまないが主人がいたらすぐに電話を下さい』と香理の声がある。

「ハイ！　見つけたらすぐにそちらに電話しまーす！」

彼女はそう言う。と電源を切って「これで安心ですよ」と電話をサラリーマン、源に返す。彼は「は、はぁありがとうございます」と答える。

そしてOLは「私はこの茶番に付き合わせてもいいけど、13時までには終わらせて

ね」とスマホを再びいじり始める。

すると佐々木は「あら、あなたそう言えば会社の人だけど、どうしたの？」と質問すると彼女はこう答える。

「ああ、実はちよつと残業があつてね、時間を気にしないでやっていたら朝になつてね。部長に出したら『今日は帰つてもいいぞ』と言つたからここで食べてから家で寝ようとしたの」

それを聞いた佐々木は「あら、でもどうしてここに」と言うと彼女は「御気に入りの店で、いつもこれを食べているの」と答える。

すると中氏は「ところでなんだが、お前の名前と頼んだもの言つてくれないか？」と言つたため、3人は何かと思ひながらも、彼女の質問に答える。

.....

「オレは笹倉一、友達と近くの映画に行く前に少し寿司でも食うかとここに來たんだ。頼んだのは、揚げ餃子とコーラに赤エビにエンガワにイカとタコを頼んだな」

「わ、私は原辰雄です、午後出勤なので昼ご飯はここに。頼んだのはタコポソ酢と出し巻きオムレツに中トロに赤身に帆立にアナゴです」

「私は襟咲真央よ、さつき言つた通り帰る前にここで食べてから家に行く予定なのよ。頼んだのは本日の刺身とビールと粗汁にメサバにアジにカニミソよ」



それを聞いた中武はメモをしながら「ん、ありがとう」と答える。

するとダイヤは「中武さん、申し訳ありませんがお先に失礼」突然の言葉に彼女は「え？」と頭にはてなマークを浮かばせると同時に、彼女はこう言いだした。

「この事件の犯人、わたくしは分かりましたわ!!」

それを聞いた途端、みんなは「ええっ!?!」と驚く。

## 『Detective group μ☒s』編 第七話

## 『3年による事件（解決編）』

「は、犯人が解つたつて。ダイヤちゃん、いったい誰や?」

希はダイヤに向けて言うど彼女は「まあまあ、落ち着いてくださいまし」と言いながら解説をし始める。

「この事件のカギですが、袖に付いたはずの血が消えたこと。持ち物は見てませんが消えるような薬品はありませんし予備の服が入っているのはありません。でしたらこの回転寿司にある物を使って血を消しましたの!」

そう言うど鞠莉は「whita、それは何?」と言うどダイヤはこういった。

「シヨウガですわ! シヨウガは血の匂いとシミを消す作用がありますから生姜焼きに使う豚肉も使われていますわ!」

そう言うど絵里は「それでシヨウガを使っているのね」と言うど伊江は「ちよつと待

てよ、そいつって確か！」と何かに気づいたのかダイヤに言う。彼女は「ええ、そうですわ」とこう答える。

「回転寿司でシヨウガを使っているのはガリ、そしてガリを多めに頼んだ人が犯人。それはガリを多めに頼んだ笠倉さん。あなたが犯人ですわ!!!」

ダイヤはそう言いながら笠倉に指をさすと、彼は「はあっ!?!」と驚く。

そしてダイヤは「財布を盗んだのは良かったものの、模様がばれやすいことに気づいたあなたは、トイレに捨てて言ったので。その人はあなたしかいませんわよ!!」と言う。

だが、佐々木は何かに気づいたのか「あら、でもおかしいわよ」とこんなことを言い出す。

「もしそれが本当だとしたら、シヨウガって確か色があるから袖に色が付くのではない?」

それを言うときみんなは笠倉の袖を見ると、色はついていない。それを見たダイヤは「あ、あら?」と体から汗を拭きだし始めて顔を青ざめ始める。

だが、中氏は「ん、待てよ……」と何かに気づいたのか注文した品の内容を再び見たとたん。「そうかそうか」と言い始める。

「悪いけどダイヤ、この事件の真犯人が分かったぞ」

それを聞いたダイヤは「ど、どういう意味ですの!？」と言うと彼女はこう答え始める。

「ダイヤが言った血を消すのは間違っていない。だけどな、シヨウガ以外にある物があんだよ」

それを聞いた絵里は「なに、そのなる物って？」と言うと彼女はこう答える。

「大根だ、大根は血を消すタンパク質を分解するプロテアーゼという酵素があるんだ」

するとこは「ちよつと待って、寿司にそんなのはないけど」と言いながらメニューを見るが中氏は「ああ、ここにはな」と答える。

「だが、備え付けだったらどうするんだ？ 例えば、出し巻きオムレツについている大根おろしとか」

すると伊江は「も、もしかして犯人って!! とある人物を見た。それは。

「そう、犯人は源辰雄。あんただよ!!」

すると果南は「でも、ここに来たのはたまたまじゃない？ それにメニューを見て思うからそれにしたのだと思うけど」と言う。

だが中氏は「いや、その人は注文の時、『今日もありますか？』って言ったんだ。あれは前に店に来て出し巻きオムレツを頼んだ時に卸が付いているとわかっている証拠だ」と解説すると、鞠莉は「そう言えば」とこんなことを言い出す。

「ここに財布を持つてきてトイレに捨てるのは、素人がやることね。財布の中にGPSが入っていることも知らずにここまでやって来るのは予想外ね」

それを聞いたみんなは「そ、そうなんだ」と反応する。

「なのに、なんでここまできて袖に付いた血をふき取ったのか、分かるか？」

中氏の言葉にみんなは考える。

「ん、急なことが発生したから？」

「もしくは、急いでやらないと行かへんから?」

絵里と希は予想すると、佐々木は「なるほどね」と何か理解したのかこう言いだす。

「この後、そこに血が付いたらまずい用事があるからね」

それを聞いたダイヤは「ど、どういう意味ですの!」と反応すると、佐々木は解説し始める。

「笹倉さんは友達と映画を見に行く、襟咲さんは家に帰って寝る。これは袖口に血がついてもなんも支障がない。でも源さんはどうかしら?」

佐々木さんの言葉に果南は「別に、支障はないと思うけど?」と言うとにこは何かに気づいたのか「そうか、仕事ね!」と言い出す。

「源さんはこの後大事な仕事があるかもしれないから、その時袖口を見た時に疑問に思うからね!」

そう言うのと佐々木は「その通り」とニコツとほほ笑む。

.....

「でも、証拠はどこに……?」

果南は源さんを見て言うのも当たり前前、袖口に着いた血はふき取ってしまい。財布は

トイレのごみ箱に捨てられている。

すると、伊江は「それならあるぜ」とこんなことを言い出す。

「源のお兄さん。ここで質問だがこの財布には何が入っているのか知っているか？」

彼女の質問に源は「い、いや。初めてだから知らないが」と言う。彼女は質問し続ける。

「財布の中にある小銭は何があるか知っているか？」

「中を見るのは失礼だぞ！」

「そっか、それじゃあこの財布はどこで買ったか知っているか？」

「知っているも何も、それは蛇の皮で出来た財布だろ！」

「何の蛇か知っているのか？」

「私をなめないでくれ、それはニシキヘビの皮だ!!」

すると、笹倉は何かに気づいたのか「ちよっとおっさん」とこんなことを言い出す。

「なんでその皮が蛇の皮からできているって知っているんだ？ それに種類まで」

それを聞いた源は「え、あの……」と焦り始めると、伊江はこう言った。

「それは簡単だ、あんたが財布が外国から作ったことが分かり、その中に入っていたのはまだ日本円にしていけないお金だつてな」

それを聞いた途端、店員は「ほ、本当ですか?!」と女性に言うとな彼女は「え、ええ。ちょうど日本に帰って少し寄つたらこうなつたのよ」と答える。

それを聞いた鞠莉は「でもどうしてあれが外国産なの? アプリで買ったとしか言えないけど」というと、中式は「皮の品質さ」と言い始める。

「あの皮はまだ未使用で指紋はついていない、しかもよく見ると『american』と小さな文字が書かれている。あれは外国で買った証拠だ」

それを聞いた鞠莉は「なるほどね」と納得する。

.....  
すると、源は椅子に座るかのように倒れる。

「やけど、動機はなんやろ? 現金を変えんとしてもおかしいし」

希は財布を見ながら言うとな、彼は「借金返済」と言い始める。

「今私は今お金に困っていて、それを知りながらも私の妻は浪費癖が悪く。それで私は



……あああ」

それを聞いた伊江は「なるほどね」と納得する。

数分後、中武からの通報により警察がやってきて源は連れて行かれた。ただ、彼の表情は半分安心した表情で連れていかれた。

## 『Detective group μ☒s』編 第八話

## 『2年による事件（事件発生編）』

## 2年SIDE

「おお、これが東京のたこ焼きか！」

勇樹たちは現在、1階にあるたこ焼き・たい焼きを売っているお店『築地銀だこ』でたこ焼きを買って食べている。

それを見た海未は「それを食べて大丈夫ですか」と心配していると、アレンは「心配するな」と答える。

「勇樹はタコ焼きを最近食べたことが無くてな、久しぶりに食べて非常にうれしいんだ」「そうそう、それにお兄ちゃんはどこで食べるタコ焼きはあまりないんだよ」

それを聞いたことりは「そうなんだ」と答えると同時にたい焼きを食べるのであった。すると、アレンは「そうだ」と立ち上がった。それを見た海未は「どうしたのですか」と質問すると、彼女はこう答える。

「実はこの階にあるパン屋で、私が一度食べてみたいのがあつてな。ちようど今しか買えない物だから今のうちに買っておこうかと」

それを聞いた海未は「そうですか、それでしたら構いませんよ」と答えると、彼女は「では」と急いでパン屋へと行くのであった。

.....

勇樹たちはアレンが戻ってくる間に、何かやることはないかと考えていると。福音が「そう言えば」とこんなことを言い出す。

「ふくね、7階の洋服店で買いたい服があったけど、建てか一緒について来てくれない？」

それを聞いた曜は「それだったら、私が一緒に行くよ」と言うと福音は「いいよ」と答える。

福音と曜は上の家電製品売り場へと行き、その間勇樹たちはアレンが戻ってくるまで待つのであった。

数分後、アレンが袋を持って戻ってきて「福音と曜はどこに行ったんだ？」と言うと、海未が答えたため、パンをカバンに入れて上に行くのであった。

上の階では、凄い種類の家電製品があり、冷蔵庫やテレビに掃除機など売っている。

「おお、さすが家電製品だな」

勇樹はあたりを見渡しながら言うと、ことりは「そうだよ、ここは結構すごい種類があるんだよ」とにっこりと答える。

アレンは「それじゃあ福音と曜を探しに」と言おうとした瞬間。

「おい、7階で大変なことになっているぞ」

男性の声がしたため、勇樹と穂乃果と千歌は何だろうと声を聴く。

「え、何その大変なことって?」

「殺人事件なんだ! まあ、幸い近くにいた女の子が警察と救急車を呼んだから、助かると思うけど……」

それを聞いた勇樹と穂乃果と千歌は、もしかしてと思いきいで上の階へと走っていく。それを見た海未は「穂乃果、どうしましたか!」と急いで後を追いかける。

.....

上の階に行く途中、エスカレーターの入り口にはガムテープが張られている。勇樹たちは近くの人に言ってもらい何とか通らせると後ろから刑事たちや救急隊員たちがやって来た。

そしてやじ馬たちがたくさんいて店の中に入っていないのが一店、その店はメンズ・レディースファッションの洋服店『i k k a L O U N G E』。

そこに入ると、福音と曜が女性のお腹にナイフが刺されている、毛布で下半身をか

けて足はクッションで上げている。女性の隣にはビニール袋が置いてある。

「救急隊です、被害に遭ったのは」

「この人です！　まだ脈はありますが危険です！」

救急隊の質問に福音は答えていると、曜は「千歌ちゃん、こっち」と言うと千歌は近くの刑事に「この子の関係者ですと」答えると急いで用のところまで行く。

「曜ちゃん、どうしたの」ここでいったい何が

「千歌ちゃん、実は……」

……内容はこうだった……

曜と福音は、勇樹たちがいる上にいるところで福音が買いたい服を探している時であつた。

「どう福音ちゃん、その探しているのはあつたのかな？」

曜の質問に福音は「うーん、どこにあるのかなあ？」と探していると、突然店員が「きゃあああつ!!」と声が出た。

2人は何かと思ひ急いでいくと、試着室に女性がたたずんでいるのを見た曜は「失礼します！」とカーテンを動かした。

そこにいたのは。女性がおなかにナイフが刺さっていて鏡の壁に倒れている。

それを見た曜は「福音ちゃん」と言うのと福音は「わかったよ!」と店員に向けてこういった。

「店員さん、毛布とクッション、そして救急車と警察に電話を。早く!!」

福音の言葉に店員は「え、ええ分かったわ!」と急いで電話をする。その間他の店員にクッションと毛布を持ってきてもらうことに。

その間、曜は近くの人に「この階から逃げようとしている人がいたら、私たちに」と伝えた。

そしてクッションが来ると曜は「足の下に置くように」と、女性の足をそつと持ち上げてその間にクッションを置く。

店員は「でもどうして足にクッションを?」と言うと曜はこう答える。

「こうすることで、心臓に血を送りやすくするためであります」

それと同時にもう一人の店員が「毛布、持ってきたわ」と言うのと福音が「それじゃあナイフ刺されているところから下にかぶせてください」と言うのと店員は女性の下半身、いわゆる体の半分に毛布をかぶせる。

それを見た店員は「これって意味あるの?」と言うと福音はこう答える。

「ショック状態による体温低下を防ぐためだよ」

それを聞いた店員は「く、詳しいわね」と答える。

……そして、数分間の間。曜は店員に怪しい人はいないか聞いて。福音は、先ほどの様に女性に異常がないか見続けるのであった。

.....

「それで、私と福音ちゃんが女性をできるだけ治療している間に、周りの人に怪しい人は以内か探しているの」

「なるほど、それでか」

アレンはそう言ってあたりを見渡すと、店員やお客が何かをsがしているかのように電話を使ったり話している。

すると店員が「お客様」と言いながら駆け寄って来るとこう言ってきた。

「この店で不審な行動をしている人が3名いました!」

それを聞いた曜と福音は「やった!」と反応する。だが。

「それで、犯人は?」

「それですが……すこし癖が強い人たちで……」

それを聞いたみんなは「はあ?」と目を丸くするのであった。

『Detective group μ☒s』編 第八話  
『2年による事件（整理編）』

店員は、勇樹たちを連れて容疑者だと思われる人がいるところへと行き、中に入る。初めの1人は老人の男性で、サングラスをしていて杖は白色、どうやら目に障害がある人だ。

続いている1人はどこにでもいる美人の女性で、両手に手袋をしている。よく見ると服装が執事が斬る燕尾服だ。

最後の1人はクリーム色のツインテールをした少女で、首にはカメラをぶら下げている。かわいらしいシヨルダーバックをしている。

それを見た穂乃果と千歌は「これは……」とジト目で見るようにつぶやく。

するとアレンは「なるほどな、これは確かにややこしいかも」と言うと同時に、「突然ですが私たちの質問に答えてください」と3人に質問することにした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「わしの名は湊島木史みおしまもくしです。ここに来たのは昔の同級生がここで同窓会があると聞いたので来ました。まさか事件に巻き込まれるとは知りませんでした」



老人の言葉にアレンは「そうか、同窓会……」とメモを見ると、海未が「ところで、あなたは本当に目に障害があるのですか」と言うのと木史はこう答える。

「と、当然です！ わしは3年前に突然見えなくなつて、今では杖がないとわからないんだ」

それを聞いた曜と海未は「そうですか」と思つたのであつた。

するとアレンは「それでしたら、何か音は聞いてませんか？」と言うと、彼は「さあ、その時は騒がしかつたので」と答える。

「新井総司あらいそうじよ、この家電製品に新しい掃除機があるつて聞いたから来たの」

女性の言葉にことりは「そうなんですか」とメモをしていると、梨子が「もしかして、ごみが嫌いですか」と質問すると、彼女は答える。

「ええ、私ゴミアレルギーだから肌がかゆくなるの。だからここで買おうかと思つてきたのよ」

それを聞いたことりと梨子は「そうですか」と思つたのであつた。

すると福音は「それじゃあ、お姉さんは何か目撃はないの？ 例えば服装とか」と言うのと、彼女は「そうね、そう言えば目出し帽子をしていたから覚えてるわ」と答える。

.....

「あれ？ お前は確か月子つきしじゃないか？」

勇樹は少女、に向けていると少女は「あら、勇樹さん!? どうしてここに！」と驚きの反応をする。

それを見た千歌と穂乃果は「え、知り合い!？」と驚きの反応をすると同時に勇樹に質問すると彼は「そうだよ」と答える。

「彼女は青生あおい月子でオレたちの同級生だ」

「初めまして、わたくしは青生月子ですわ、皆さんよろしくお願いしますわ」

それを見た2人は「もしかして、お嬢様!？」と驚きの反応をする。それを見た月子は後ろに引き下がる。

すると勇樹は「そうだ月子、お前ここに来た理由つてもしかしてカメラか？」と言うと彼女は「そうですわ」と答える。

「お兄様の怯える姿に頑張る姿、そしてお悩み相談部でみんなとほほ笑む姿を撮ろうかとしていますのよ」

それを聞いた千歌と穂乃果は「お兄様？」と首をかしげて思うのであった。

すると勇樹は「そんじやあ月子、お前何か目撃してないか？ 特に不審物とか」と言うのと、彼女は「いいえ、そんな不審人物は見えていませんわ」と答える。

.....

勇樹たちは、容疑者だと思われる人物を聞いたが、あいまいな所やあまり見ていないところが多くあつたため正確かどうか分からない。

「これは難しいですね」

「ええ、せめて手掛かりになる情報があれば……」

海未と梨子はそう言いながらメモを見ていると、アレンは「む」と何かに気づいたのか、店員にある質問をする。

それを聞いた店員は「分かった、待っていてくれ」と答える。

「いったい何をしたのか、海未は「アレン、何をしたのですか」と言うと、彼女はこう答える。

「ツバサと聖良と京子彼、女たちをここに呼んでくれないか」と言ったんだ。

## 『Detective group μ☒s』編 第八話

## 『2年による事件（解決編）』

アレンの言葉通り、事件現場にツバサたちがやって来る。被害者の女性は救急車で運ばれて病院へと移動した。

事情は近くの刑事から聞いたためツバサたちは理解しているが、京子は「どうしてこうなった」とジト目で現場を見て呟く。

そしてツバサが「何があったか話してくれる？」と言うと福音と曜は、先ほどの事件を話す。

「なるほどね、その人が女性を刺して逃走したと思ってこうなったのね」

「それで、特徴はどうなんだ？」

ツバサと英玲奈は彼らに言うのと、穂乃果が「えっと」とメモを出して言い出す。

「犯人は、目出し帽をしていて赤色の燕尾服に青色のズボンをしていました」

「手袋を見ましたが、赤色のため血が付いているかわかりません」

「ちなみにその手袋を調べてみたが、今人気の手袋で表は白で裏は赤色の手袋です」

穂乃果、海未、ことりはそう言うのと英玲奈は「そうか」と答える。

そう言っていると福音が「アレンちゃん、調べておいたよ！」とあるメモとカメラを渡すと、彼女は「そうか、ありがとう」と頭をなでる。

それを見た理亜は「なにを調べたの？」と質問するとアレンが「被疑者だと思われる者たちの持ち物をメモと写真を撮ってきた」と答える。

メモには被疑者の名前と職業が書かれている、どうやら刑事の話聞いてメモしただろう。

カメラには被疑者が持っている物が写っている。

.....

「いったい何が写っているんだ？」

アレンはそう言いながら写真を見るとそこにはある物が写っている。

1枚目に写っているのは、障害者保健にお財布にガラパゴス系の携帯電話に同窓会のはがき、そして品川から秋葉原までの定期券が入っている。

2枚目に写っているのは、ハンカチにスマートフォン系の携帯電話に筆記用具とメモ、そして水筒が入っている。

3枚目に写っているのは、カメラに専用充電器にハンカチとティッシュにスマートフォン、そしてなぜか青髪のロングヘアをした女性の写真が入っている。

写真を見た時、アレンは「この人、どこかで」と呟いたが、梨子は「この中で怪しいものはないね」と言う、勇樹と穂乃果と千歌は「いや」と息を揃えてこう言った。

「怪しいものはないけど、凶器が入りそうなものはあつたと思うよ」

それを聞いた途端、連華は「ど、どういう意味だ!？」と驚きの反応をする。それにつられて霊華も「うちもわからないっす!」と反応をする。

すると勇樹は「ま、まあ説明はまた後で話すとして」と言うと穂乃果は「ツバサさん、お願いがありますけどいいですか?」と言うと彼女は「私たちに手伝うことがあれば、手伝うわ」と言うと、穂乃果はこう言う。

.....  
「それで、これはなんですか?」

新井が言うのも当たり前、目の前にあるのはホワイトボードがあつた。

そして穂乃果たちが入ると、勇樹は「それじゃあ」と言うと彼はこう言う。

「新井さん、先ほどの質問ですけど「事件が起きた時に何か目撃はありませんかと言いましたが、あなたは目出し帽子と答えました」でしたよね?」

勇樹の言葉に彼女は「そうだけど、それがどうしたの?」と言うと、穂乃果が出てき

たこう言った。

「おかしいんですよ、そのような目撃者は見られていません」

「それに、その人は目立つ姿をしているのでどこにいるかわかるのに、見ていないのが不振です」

穂乃果と海未がそう言うと、彼女は「き、きつと素早く移動したと思うわ」とこう耐える。

だが、澤島は「それはおかしいのう。走る音は聞こえましたが「どけ」とかの声は知らんぞ」と答える。

それを聞いた福音は「もしかして、服で顔を隠してどこかに隠れたの？」と言うと曜は「そう言えば、被害者が倒れていたのは更衣室で、その時は少し騒がしかったから声は消せるね」と曜は言う。

そしてそれを聞いていたことりは「そうか、もしかして」とアレンに向けて言うとな女は「そうだ」とこう答える。

「犯人は i k k a L O U N G E の更衣室に入ることが出来るあなた、新井総司さん。あなたが犯人だ!!」

それを言った瞬間、彼女は「ちよつと待って!」とこう言い始める。

「この店は男ものや女ものも取り扱っている店よ、私が入れたつてことはこの老人が犯

人と言う可能性は!？」

それを言った彼女だが、海未は「それは無理です」と答え始める。

「この滯島さんは盲目、つまり目に障害がありますから前が見えません。この更衣室のどれに被害者が入っているかわかりません」

それを聞いた彼女は「へ？」と目を丸くする。

それに続くかのように、千歌は「それに」と彼女はある事を言い出した。

「あなたはいつまで上着を着ていますか？　ここは暖かいですが……」

それを聞いた彼女は、突然青ざめてその場から離れようとしたのか、急いで逃げるが。

「つと、させないっすよー」

「少しだけだが、上着脱いで裏を見せてくれ」

連華と靈華が前に立ち新井の動きを止めて上着を脱がそうとする、それを見ていた勇樹を海未が「見てはいけません！」と手で目をふさぐ。

そして上着を脱がせると、ある事実が発覚した。それは。

「リバーシブル!？」



なんと黒色の燕尾服の裏には赤色の布が、それを見たことりは「もしかして、これって縫っているじゃない？」と言うと福音は「あ、本当だ！」と答える。

よく見ると、糸の色が分からない様に黒色の糸で塗っている。

それを見た曜は「もしかして……」と、彼女のズボンの裾を少しめくると。

「やっぱり!!」

ズボンの裏に青色の布が縫われている、どうやら上着同様黒色の糸で縫っている。

それを見たツバサは「もしかして、トイレで着替えたの?」と言うと千歌は「はい、そうだと思います」と答える。

「あなたはリバーシブルを使ってわざと派手な姿で襲い、逃げるときは裏返しにしたんです」

すると英玲奈は「待ってくれ、それじゃあ目指し帽は?」と言うと穂乃果が「それは簡単です」と彼女のカバンから水筒を取り出す。

「新井さんはこの水筒の中に隠したんだと思います」

そう言うのと穂乃果は水筒のふたを開けると中に目出し帽が出てきた。

それを見た彼女は「ふう……」とため息をする。

「ただ、わからないのは。被害者は東京都にあるクリーニング会社の社長なのはわかったが、あなたとの共通が分かりません」

そう言うのと、新井は「そうですね」と自白する。

「あの人は、クリーニングした後には必ずホコリがないか必ず確認するけど。本当はお金を持って逃げる悪質なんです」

「なるほど、しかしあなたはそれを目撃してしまっただが上からの圧力か何かで？」

「ええ、それで私はこの計画を立てました。ですが、まさかここでミスをするとは」

新井はそう言うのと京子は「そうですね、でもミスしたのはあなただけではありませんよ」と言う。

それを着た彼女は「え、それはどういう意味ですか」と言うのと京子は答える。

「先ほど、被害者の社長の意識が戻りました。調べていたらもしかしたら被害者の行動が明るみになると思います」

それを聞いたあんじゅは「そっか、それじゃあ社長がやっていたことはいつか明るみになるんだね」と言うのと京子は「ええ、そうだと思いますよ」と答える。

その後、彼女は警察へと引き渡されて。事件は終わった……………。

## 『事件の終わり』

勇樹たちは事件を解決し終わると、予約していたお店に集合してそこでお食事をするのであった。

「へえ、そんなことがあったんだ」

「わたくしたちもですわ、もうこりこりですわ」

「でもふくね、楽しかったと思うけど？」

「せやな、やけどこういうのはええと思うで」

事件があったことを話して食べているため、みんなの顔に拾うと言う言葉が浮かんでくる。

そう言いながら食事していると、太田が「そう言えば」とこんなことを言い出す。

「この後どうする勇樹君、せっかく東京の秋葉原に来たし」

太田の言葉を聞いた勇樹は「そうだな、ここに居るのは後3、4日ほどかな」と少し考えていると、福音が。

「みんなで観光しよう！　もちろん、ふくね達だけじゃなく。ことりちゃんたちと囉ちゃんたちと一緒に！」

と彼女は笑顔で答える。それを見た勇樹は「そうだな、オレも賛成だ。みんなは？」と微笑んで太田たちに言う。

勇樹の言葉に太田たちは「さんせーい!!」と喜んで答える。なんせ東京に来るのは初めてだからだ。

すると、小原鞠莉は何か思い出したのか、「そう言えば」と彼に向けてある事を言い出す。

「勇樹っていろんなものを作っているというけど、最近どんな物を作っているの?」

それを聞いた勇樹は「うーん、小型系を作っているけど今は少ししか持ってきていない」と答える。

だが「今あるとしたら」と言いながら、彼は持ってきたリユックを開けて中をこそごと何かを探していると、何かを見つけたのか「あ、あった」とある物をリユックから出した。

それは小型のPSPの形をしているが、ゲーム機にはついていないアンテナが付いて

いるのが特徴だ。

そして勇樹は、手にしている道具をこう解説する。

「この道具は私が作った者ですが、充電がまだです。そしてリモコンで私が作ったメカを呼ぶことが出来ます」

それを聞いた穂乃果と千歌は「おお〜！」と目を光らせて、花丸は「すごい物ずら〜!!」と喜んでいる。

だが、海未は「ですが、今回は使いません。しまってください」と言うと勇樹は「ん。わかった」と答えながら、例のリモコンをカバンにしまう。

そして彼らは楽しくお食事をして、秋葉原にあるホテルで泊まることになった。

※ちなみに、Aqoursのみんなが穂乃果たちの家で止まることになった

.....

だが、彼らは知らなかった……。

今から1週間以内に発生するある大事件が起きることに……。

その事件は、世界を滅ぼすある物が狙われているとは知らずに。

『Detective group μs』編 第十話

『名探偵ミューズ&奇跡VS犯罪組織『JJ』 大特

別! 今回限り最強の探偵団VS最強の犯罪組織との戦  
い。危険な爆弾をめぐる大バトル!! A』

東京に来て2日目、勇樹たちは行きたいところがあるためこの日は自由行動してい  
る。

この日勇樹は穂乃果と千歌と一緒に行動するはずだが、この日2人は予定の寝坊して  
いるため彼は今一人で渋谷を歩いている。

「まったく、こんな時穂乃果と千歌は寝坊かよ」

勇樹はブツブツ文句を言って歩いていると、彼のスマホから『プルルルツ』と音が  
する。

何かと思い、彼はスマホを出すと『太田 陽』と映し出された。一体何かと思い電話  
に出てみる。

「太田、どうしたんだ電話して？」

『勇樹君、実はたいしたことはないけど依頼が来たよ』

それを聞いた勇樹は「依頼？ いったい誰から？」と言うと太田はこう答える。

『なんかね、その人は新聞記者でね。ボディガードをしてほしいって』

「ボディガードか、それは構わないけど何でだ？」

『そこなんだ、聞いてもそれは離さないって。少しおかしくない？』

「そうだな……まあそれは後にして、ちよつと予定変更にするか。今行動できる人は太田のところに来てくれと伝えておくよ」

『わかった、じゃあ東京湾にある廃虚の建物でいいかな？ そこで仕事があるっていうから』

太田の言葉を聞いた勇樹は「わかったじゃあな」と言い電話を切る。

そして彼は電話でみんなに電話して、行動できる人は以内か確認した。

.....

「そっか、そんじゃあ自由行動してもいいよ。そんじゃあ」

勇樹はそう言つて電話を切り、後ろに振り向く。

ちなみに。勇樹と一緒に行動行ける者は、暗山伊江と中弍小森と祝福音と百合子・

ビューティー、七星奈々と羽衣天女と文・モスキートの7名。そして。

「なんで穂乃果たちと千歌たちまで来たんだ?」

勇樹はジト目で穂乃果たちを見てみると、千歌が「だって、私たち探偵だよ。勇樹さ  
んだけじゃあ心配だよ」と答える。

それを聞いた勇樹は「しーなし」と答えると、例の建物へと移動する。

.....

「じゃあ、私たちはあなたのボディガードをするで、かまいませんか?」

「はい、そうしてくれるとありがたいです」

勇樹は新聞記者の男性の内容確認して終わると、彼は答えた。すると新聞記者の男性  
の電話が突然なり始めた。

男性は何かと思い電話を出してみると、「ああ彼か」と答えると「すみませんが電話に  
出てもいいですか?」と言ってきた。

それを聞いた勇樹は「構いませんけど」と言うと男性はその場から離れて電話に出る。

「あれでいいの勇樹君?」

「怪しそうな気がするけど」

「オレもだ、ただなぜボディガードをしてほしいのかが疑問だ」

後ろにいた穂乃果と千歌は、勇樹に先ほどの話疑問があったのか話していると。彼  
も男性の疑問を抱いていたのか穂乃果と千歌に話している。



千歌は「念のためだけど、何か隠しているか聞いてみる？」と話したその瞬間。

タアアンツ!!

ドサアアツ!!

「な、なんだ!？」

「銃声ね、音からして距離は近いわ!」

突然の銃声と倒れる音に、伊江とにこは反応し、海未は「あちらからです!」と言い、みんなは急いでその場所へと行く。

倒れた場所にみんなは急いで行くと、そこに目にしたのは。

「いっ!？」

「ひっ!!」

記者の男性が頭から血を流して倒れている。

太田は男性の首に手を当てると「……ダメだ。手遅れの様です」と答える。それを見た百合子は「そんな……」と戸惑う。

すると、勇樹はあたりを見渡すとガラスが付いていない窓を見て、外を見渡す。

.....

「レッド、こちらオレンジ。任務完了」

白色のサイドロングをした女性は、AS50をしまいながらインカムを使って『レッド』と名乗る者に話している。

『そうですか、今こちらにイエローとグリーンが軽自動車で来ますのでそれに乗ってください』

「わかった……む?」

その場から去ろうとした彼女だが、何かに気づいたのか自慢の視力で目標がいた建物の窓を見た。そこにいたのは。

見たこともない目つきで自分を見てる青年を見つけた。

「っ!」

それを見た彼女は驚いた、その理由は簡単。ここから向こうまでは約2キロ弱、目が良い人でもここまで見るのは非常に難しい距離だ。

彼女は寒気を感じたのか、急いで武器をしまってその場から去ろうとビルの中に入っていく。

.....  
「ビルの中に入っていく、急いでいくぞ！」

勇樹の言葉に百合子たちは「おー！」と反応すると同時に、外に出る。太田は電話をして警察と病院に電話した。

「でも勇樹君、このままだと犯人は逃げられてしまいますが？」

百合子は勇樹に向けて言う。彼は「その心配はないぞ、今回はあれを用意したからな！」と自信満々に答える。

それを聞いたみんなは何かと思ひ頭に？マークを浮かばせていると、彼はリュックから例のコントロールを出した。

そしてそのスイッチをカチカチツと押したすると。

『Detective group μs』編 第十一話 『名探偵ミューズ&奇跡VS犯罪組織『JJ』』大特別! 今回限り最強の探偵団VS最強の犯罪組織との戦い。危険な爆弾をめぐる大バトル!! B』

ガアアアーーーーッ……キイイイッ!!!

「オレンジ、こつちだ!」

「早く乗れ!」

車の扉を開くと、2人の男女がオレンジを急いで乗せて。その場から去る。

「一体何があつたんだい?」

「ずいぶん息が荒いけど」

2人はオレンジを心配していると、彼女は「実は」と何かを言おうとした瞬間、突然。

ギャギャギャギャッ!!

突然、車の後ろから何かがおつてきた音がしたため、何かとオレンジが後ろを見る。するとそこにいたのは。

「なんだあれは、モグラ!?」

大型のモグラメカが出てきてオレンジが乗っている車を追いかけている！  
『やい、その女め！ 逮捕するぞ!!』

頭上からメガホンが出てくると少年の声があると、車に向けて声を放った。

しかしヘイトは「そうはしないぞ」と言いながら銃を出して、メカの足に向けて放つ。  
だが。

ガアアアアアアアアアアツ!!

キイイインツ!!

「は、跳ね返された!?!」

「はあ!?!」

「なんだ、それっ!」

彼女の言葉に2人は驚くと、メカの胴体から大型の磁石が出てきた。

そしてそれは車の頭上までくるとそこで止まり、車ごと捕まえようとしている。

「やばい、おいイエロー! 急いでライトブルーを!」

「わかったよ! レッド、急だけどライトブルーを!」

オレンジはイエローに向けて言うと、彼女は電話を使ってレッドと言う人に電話をしている。

.....

「さすが勇樹君! これを作っていたんですね!」

「最新の穴掘りメカ・モグラメカだからな。これくらい簡単だ!」

そう言ったのは、モグラメカのコックピット内にいる百合子と勇樹、そして先ほど虚にいたメンバーが乗っている。

このメカの操縦は現在太田がやっていて、勇樹はレバーを動かして磁石で例の車を捕まえようとしている。だが。

「あれ、勇樹君。あの人は?」

千歌の言葉に勇樹は「え?」と前を見ると、茶髪のボブヘアをした背が高い女性が

車の2キロ先にいる。

しかし、その女性はただの女性ではない。よく見ると顔にタトゥーをしていて筋肉が目立っている。

「ちよ、ちよつと待て。こいつオレたちに曳かれないのかこの場で立っているぞ!」  
それを見た伊江は慌てて太田に言う、彼は「す、ストップする!」と急いでレバーを動かしてブレーキをする。

車は右に動かして彼女から離れるが、モグラメカはそのまま彼女に向けて進んでいる。そしてぶつかろうとしたその時。

グワシツ!!

「……………あ、あれ?」

「ぶ、ぶつかっていない?」

ぶつかる音がしないことにみんなは何かと思っていると、福音が「あれ、お姉ちゃんが受け止めているよ?」と言ってきた。

それを聞いたみんなはどういう意味か「え???」と目を丸くして外を見てみる。すると

そこで目にしたのは。

「あ、あいつ。オレたちのメカを受け止めている!？」

伊江の言葉を聞いたみんなは驚いて外を見ると、なんと女性がメカのドリルをつかんで動きを止めていた!

そして彼女はドリルを持ち上げると、数回まわしたら海に向けて放った! そしてモグラメカは海に向けて落ちていく。

「ガボボボッ!!」

勇樹たちは、急いでメカから出て近くの下水から入って他の所から出ることにした。  
.....

「ちつ、あのメカアタシに怯えているのか? もっとやりてえなア」

茶色のボブをした女性はそう言いながら、メカが落ちてきた海に向けて歩いていくが。

『だめですよ、今ヘイトからの情報ですが。後数分で警察がここを通るって来ました』  
インカムから男性の言葉を聞いた彼女は冷静になると「……それはやつかいだな、わ



かった。今からそっちに行くよ」と珍しく答える。

『ええ、あと彼らのことで少し気になる情報がありました』

気になる情報と言うのを聞いた彼女は「なんだそれは？」と言うと、男性はこう言つた。

『珍等師学園都市というところで、何か依頼がありました。一旦本部に戻ってください』

「わかった、今からそっちに帰る」

彼女はそう言うと、走って本部へと行くのであった。

.....

『何っ?!? 彼らの情報が分かった!?!』

勇樹は中式に向けて言うと彼女は「そうだ」と答える。ちなみに彼らは今真姫の実家

に避難している。

中式はスマホを勇樹に向けると、そこには『情報・珍等師学園に行く可能性が高い』と出ている。

それを見た百合子は「急いでいきましょう、勇樹君!」と言うと勇樹は「わかった、急いでいこう!」と答える。だが突然。

「ちよつと待って!!」

突然真姫が声をしたため、勇樹たち何かと思い振り向くと。真姫はとんでもないことを言い出す。

「あんたたち、私たちをほったらかしにしておかしくない!」

それを聞いた太田は「え、ええ?」と戸惑っていると、希が「そやな」と言い始める。

「うちらも、小森ちゃんと一緒に行動しているけど。ほったらかしはおかしいで」

「そうにやそうにや! 凜も同じだよ!」

「私もよ、協力してくれるのはいいけど、これはどうかしら?」

希、凜、絵里の言葉に勇樹は「うぐぐつ」と後ろに引き下がると、桜は「そうね」と

答える。

「みんなの力を合わせれば、すぐに解決できるじゃない？ それを無視するのって、おかしくないかしら？」

そう言った瞬間、勇樹は「あー、わかりました」とうなだれて答える。

「予定変更、東京から珍等師学園都市に行く。至急みんなに伝えてく下さい」

勇樹は桜に向けて言うと言は「わかったわ」とスマホを出して電話をする。

すると穂乃果が「私たちも急いでいく準備をしよう！」と言うとみんなは「おー！」と反応して突然解散する。

それを見た百合子は「なんだか嫌な予感しかしない……」と心の中でそう確信する。

.....

数時間後。

勇樹たちは、モグラメカをクレーンで釣り上げて内部を修理していつでも動けるようにした。

「修理完了、いつでも行けるぞ」

「そう、じゃああとは穂乃果さんたちを待つだけね」

桜はそう言うと、百合子が「あ、穂乃果ちゃんたちだ」と言ったためみんなは振り向くと、穂乃果たちがキャリーケースを持ってきてモグラメカのところへ移動している。

ちなみに、千歌たちも一緒にやって来たため桜は「これは予想外」と苦笑いで答える。

「それじゃあ珍等師学園都市に行くか、シートベルトをしておいてね」

勇樹はそう言うのと穂乃果たちと千歌たちは「はい」と答える。

そして彼は「それじゃあ」と2本のレバーを動かすと、メカのドリルが回転し始めて前を進み始めた。

.....数時間後.....

モグラメカは防波堤のような城壁へと付くと、門が開いてそこへと入っていく。

そしてメカは門をくぐると地下へと移動していつているため、それを見た花丸は「未  
来ずらく!!」と目を光らせている。

それを見た勇樹は「そうか?」と言うと百合子は「都会と言うより、技術が発展して  
いるからね」と答える。

「さて、もうすぐ着くぞ。これがオレたちが住んでいる都市。『珍等師学園都市』だ!!」  
そして勇気がそう言うと同時に、メカは地下から地上へと出た。そこに目にしたの

は。

まるで東京と同じ建物がその場にあり、学園の制服を来た多く生徒たちが話ながら歩いている。

さらに驚くのは、勇樹たちが乗っているモグラメカを見て誰も驚かないこと。

「これが珍等師学園都市……!」

「すごい所です! 初めて見ます!!」

穂乃果と千歌は目を光らせているも、幹子が「そうかい? まあ初めての人にとってはその思うね」とほほ笑みながら答える。

『Detective group μs』編 第十二話 『名探偵ミューズ&奇跡VS犯罪組織『JJ』』 大特別! 今回限り最強の探偵団VS最強の犯罪組織との戦い。危険な爆弾をめぐる大バトル!!C』

「今夜はここに泊まっていつでもいいよ」

勇樹はそう言いながらメカをある場所に止める、そこ場所は。

『セブン・スター ホテル』

20階ほどある大きなホテルで、壁の色は藍色と黒色の2種類を使って星空の夜を再現している。ホテルの窓から光る明かりで星を再現している。

「あれ、セブン・スターってどこかで?」

それを見たルビィは首を傾げて言うと、奈々が「はい、わたくしのお父様とお母様が

経営しているホテルですわ」とほほ笑んで答える。

「え、まさか奈々さんってこのホテルの!？」

それを聞いた梨子は驚いて言うのと、彼女は「ええ、その通りです」と答える。

「そう言えば奈々の両親は、このホテルを経営していたな」

「なんでそれを早く言わなかったの!？」

「いや、忘れていた」

伊江の言葉にこは突っ込むと、彼女は「忘れていた」と答えるが。実は話したら絶対に行くと思ひ、黙っていた。

「それで、おひとりいったいどれくらいかかるの？」

鞠莉は奈々に向けて言うと、彼女は「そうですね」と言いながら考えて数分後……。

奈々は「ざつとですが」と値段を言った。

「7700円から77000円ほどしますわ」

それを聞いたみんなは、顔が青ざめる者がいれば白くなるものがいた。

「たっつか!! それぐらいするの!?!」

「いくらなんでも高いですわ!!」

果南とダイヤの言葉に奈々は「なんせ有名ホテルですので」と答える。

「ですが、今回は探偵が来るつと父に話しておいたので、ホテルの3室は無料です」

それを聞いたにこと穂乃果と凜は「それ本当!?!」と言うと、奈々は「はい、本当です」と答える。

.....

「あんたたちはどうするの?」

にこは勇樹たちに向けて言うと、伊江が「オレたちか?」と答えると穂乃果は「そうだよ」と即答する。

「オレたちは、まあここじゃないがあれがある…」

「あれってなんや?」

「あそこだぞー」

希の言葉に小森はある街中に指をさした。よく見ると、町中に少し立派な屋敷が建っていた。3階建てで敷地の広さが東京タワーと同じ広さで、緑色をした少ししやれた屋



敷だ。

「おや、このお屋敷って誰かの？」

「そうだよ」

「だけど無人でいいのかな？ 家主に怒られそうな気が」

「それは心配ないぞ」

「そうですか、心が広い方で安心します」

「はい、そうですね」

「え、なんで奈々が？」

果南、福音、ことり、アレン、海未、奈々、真姫の言葉に太田は「知らないの」と言い始めた。

「この屋敷は、奈々さんが用意したボクたちの探偵事務所兼組織部屋」

それを聞いたみんなは、本日2度目の驚きを放つのであった。

.....

次の日、みんなは勇樹たちがいる屋敷へと行く。

大きくてまるで博物館にきたのかと思うほど立派な建物、それを見たにこは「う、羨

ましいいわ」と苦虫を噛み潰したかのように呟いた。

「本当に大きいわね」

「ええ、そうですわね」

真姫とダイヤはそう言うのと、入り口の門から『もし』と声が聞こえた。

「な、なにこの声!?!」

「門から声がした?!」

果南と善子は驚いていると、『これオレが作ったからな』とツツコミの声がした。すると千歌は「あ、もしかして勇樹さん?」と質問すると『そうだよ』と返答した。

「そっかそれで門から声がするんだ」

「凜でも理解できるよ」

「うんうん、そうだね」

花陽、凜、ルビィはそう言うのと、再び門から『それじゃあ今から開けるから、待っててくれ』と同時に門が自動で開いた。

穂乃果たちは「ほええ……」と驚きながら屋敷の中に入っていく。

.....

屋敷の扉が開き、みんなは中に入っていくと。そこには豪華な家具類がおいであつた。

「うっわ、さすがお金持ち」

「流石ね」

果南はそう言いながら見ていると、梨子が答えると、会談から誰かが下りてきた。その人物は、奇跡のメンバーの仲間である太田陽である。

「あ、みんな来たんだ。勇樹君は少しメカの修理をしているから、少し待っててね」  
彼はそう言いながら、穂乃果たちを奥の応接室に案内させる。

応接室は、椅子や机にテレビが備え付けていたが、天井にはパイプの一部が剥き出しで他の部屋に？がっている。

「これが応接室ね……」

「落ち着かないぞら」

絵里はそう言いながら座っていると、花丸は目を点にして正座で座っていた。

.....

数分後、応接室の扉が開くと。私腹をまとった勇樹がやって来た。

「お、お待たせ！ 少し時間はかかったけど修理できたよっ！」

勇樹は慌てながら壁に付いているスイッチを押すと、壁からティーセットと急須と湯のみが出てきて、お茶の準備をした。

数分後……

穂乃果たちの前には、紅茶と緑茶が人数分用意されていた。

「話は分かっていると思いますが、先ほどの人って」

「分かっている。知り合いの刑事に頼んで調べてみたところ、どうやら靴の大きさが非常に大きくてな。外国に行かないと購入不可の物だと分かった」

海未の言葉に勇樹は答えると、絵里と真姫と鞠莉は「えええっ!?!」と驚きの反応をする。

「が、外国の人って。いくら何でもいないと思うわ!」

「絵里の言う通りよ! 私だって、海外からの人は見るけど……そんな人はいないわ!!」

「そうよ! それに、男か女かは分からないわよ!?!」

そう言っていると、太田が「それでなんだけど」と吊皮を真下に引いた。すると画面が出てきて事件現場周辺のデーターが出てきた。

「少しこの現場周辺を調べてみたら、女性の足跡と葉きようが落ちていたよ」

そう言うと同時にリモコンをカチッと押した。すると画面に足跡と葉莢の写真が映し出される。

「この葉きようってライフル用ね。もしかして」

「ごく一部の海外にしか売られていない危険な銃です、それにこの足跡はどうやら20台後半の女性だと分かったつす」

には薬莖を見て言うのと、霊華が銃と足跡を言うのと。伊江が「それだったら」と言いながらリモコンを押すと、ある画像が出てきた。

それは、あるキャンピングカーで日本ではあまり見ない車体だ。

「キャンピングカーだね、初めて見るよ」

「そうなのことりちゃん？ 私はよく見ますがこのタイプはちよつと初めてのような」

「あれ？ このキャンピングカー」

ことりと百合子がそう言っていると、真姫は何か気づいたのかキャンピングカーをよく見る。すると。

「ねえ陽君、このキャンピングカーだけど少し調べたいところがあるけどいいかしら？」

真姫の言葉に陽は「うえっ？ 別にいいけど……どうして？」と言いながらパソコンを立ち上げると、彼女はこう言った。

「この日本のどこかで、この車と同じ車種を調べてほしい。中古車かレンタルカー、そして盗難車を!!」

それを聞いた太田たちは『ええええっ!』と驚くのであった。

『名探偵コナン』新一の妹』編

『名探偵コナン』新一の妹』編 『プロローグ』珍等師学  
園都市、驚き事件 福引券編』

神奈川県学園内にある町中、その倉庫で誰かが話をしている。

「これで実行できるか？」

姿は分からないが声は男性のようで、まだ幼さが残っている。

「ああ、あいつらと呼ぶとしたらこれが有効だ」

女性はそう言うと言性「わかった、それじゃあ実行するぞ」と言うと、その場から立ち上がりある場所へと移動する。女性は男性の後を追うかのように付いて行く。

.....

次の日、蘭はコナンとクリスと一緒に近くの商店街で買い物をしている。

「えっと、これで買う物は全部だね」

蘭は買い物メモを見ながら歩いている。袋にはたくさんの買い物の品が入っている。

どうやら買い物が終わって帰ろうとしているところだ。

すると、コナンは何か見つけたのか「蘭姉ちゃん、あそこ」と言うと彼女は何かと彼が見た先を見てみる。

そこにあつたのは、『期間限定、珍等師学園都市のチケットが当たるチャンス!』と描かれたガラポンを見つける。

よく見ると、看板の下に『参加方法は、この商店街で勝ったレシートを見せるだけです』と書かれていた。

「お兄ちゃん、この商店街ってまさか」

「う、うん。もしかして蘭姉ちゃんが持っているレシートで」

クリスとコナンは蘭が持っているレシートを見ると、彼女は「当たるかどうか分からないけどやって見ようかしら」と言い、試しにやって見る。すると。

.....

「学園行きの券が当たったあ?」

夕食を食べながら蘭の夫、小五郎は驚くと彼女は「そうよ!」と答える。

「今まで当たったことがなく、レア中のレアなんだって。しかもここの学園は私が知っ



ている先輩と同級生がいるかもしれないよ！」

蘭は何か興味があるのか、興奮しているとコナンたちは「そ、そうなんだ」とち苦笑いで答える。ただし、コナンは「珍等師学園都市か、初めて聞くな」と思っている。

「でも、その券は確か1人分で、オレと蘭、コナンとクリスを含んでもまだ足りねえじゃないか？」

「そうなの、お母さんは北海道にある知人の依頼で行けないから、今園子に行けるかどうか相談しているの」

すると、クリスが「そうだお兄ちゃん！」とコナンに向けて言う。彼は「ん、なんだ？」と反応する。

「少年探偵団のみんなにも相談したらどうかかな？ 必ず行くって答えると思うよ？」

「……だろうな、まああいつらも初めて行くと思うところだし、明日聞いてみるか」

クリスの言葉にコナンは答えると、ポケットから電話を出して相談するのであった。

ただコナンたちはまだ気付いていない。この券がとんでもない事件を巻き起こすとは知らずに。

# 『名探偵コナン～新一の妹～編』第1話『珍等師学園都市、驚き事件 学園の探偵編』

プワアー……プシュー！ ガコツ

新幹線から降りて、駅から出る彼ら。そこに目にしたのは高いビルに人波があふれて歩いている人たち、そしてその人波の中には学生が混じっている。

マンモス級の学園都市、通称珍等師学園にきたコナンたち一行。

正式には、小五郎と蘭、コナンとクリス。そして小嶋元太と吉田歩美と円谷光彦の少年探偵団と元黒の組織の宮野志保……ではなく、灰原哀。

そして蘭の友達でありお嬢様の鈴木園子と、蘭とコナンの知り合い……ではなくコナンになっている新一の知り合いの阿笠博士。そして少年探偵団の顧問で帝丹小学校でコナンたちの先生の小林澄子。

「……が珍等師学園都市か、思った以上にすごい所だな」

小五郎はそう言いながらガイドブック『ぶるる』を出すと蘭は「そうね、学生が多いっていうのは聞いたけど、凄い人数だね」と答える。

「この珍等師学園都市は確かマンモス級で、ほかのとは違っていろんな設備に学校、そし

て警備兼風紀委員がいるって聞いているな」

「そう言えば、この学園から外に出るときは、許可書が必要で。ここから移動するのは徒歩以外に線路と道路、そして飛行があるって書いていたわ」

コナンと灰原はこの学園のことを言っていると、歩美が「あれ、なんで知っているの？」と答える。

すると2人は慌てながら「そ、それは……し新一兄ちゃんから聞いたんだ!」「わ、私は博士から聞いたわ」と戸惑いながらごまかすのであった。

「えっと、まずはここを観光する前に荷物を一旦ホテルに置くため、ここに移動する?」  
蘭はこの学園のパンフレットを見ながら言う。小五郎は「おう、そうだな」と言う。「それじゃあ移動するぞ」と答える。

ここから移動するにはタクシーが必要なため、レンタカーはどこにあるか探し始める。すると。

「おーいおっさん。何を探しているのか分からないが相談してやるぞ」

女性の声がしたため何かと声がしたほうに向くと、15人ほど乗れる小型のバスがある。

その女性は、バスの運転手をしており。茶色のショートボブヘアをしている。

「その様子だと、どうやらレンタカーを探している。でもどこにあるか分からない。この学園を知っている人はまずそういう行動をしない、でも転校・転勤してきた人なら猶更。だが後ろにいる複数の人数から計算した結果、どうやら刊行してきた人だな

それを聞いた途端、小五郎は「な、なんでそれを知っているんだ!？」と驚いている。「まあ、送りたいところはどこだ？ 今は初回キャンペーンでその場所まで無料で送ってやるぞ」

それを言ったとたん小五郎は「お、ちようどいいな」と言うと同時に「それじゃあこの近くにあるホテルまで！」と答える。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ホテルまで移動したコナンたちは、チェックインして荷物を置き、観光をする。

周りは見たこともない建物が多く、中には有名店が多く。100m歩くだけでも2時間以上はかかりそうだ。

「こんなにもあるんだ」

「さすが珍等師学園ね、こんなにも発展しているのは初めて」

蘭は観光本を見ながら呟いていると園子はあきれながら歩いている、一方のコナンたちは。

「おお、これがほつぺが落ちるほど旨いうな重か!」

元太が匂いに誘われて、うな重の屋台へと行くので。光彦たちが後を追いかけた結果、この屋台へときたのであった。

「もう! 元太君ったら、うな重のにおいでここまで来たんですか!」

「し、仕方ねえだろ。おいしそうなにおいだっし」

光彦は元太に叱っていると、歩美が「ねえみんな、あれはなに?」とあるものを見つめる。それは。

『お困り、お悩み、お助けがあつたら。この不思議探偵・奇跡にお任せあれ!』

「看板、ですね……」

「うん」

「見えないところにあるんだな」

光彦、歩美、元太はそれを見て答えると。コナンが「けっこう奥深い所に来たな」と言いながらあたりを見渡す。すると。

「あれ？ ボクたち、どうしたんだい？」

青年の声がしたため、コナンたちは振り向くと、灰色の短髪をした背の高い青年が買  
い物袋を手にして彼らを見ていた。

「ここは君たちが来るところではない…観光だつたらこつちのほうが良いよ？」

青年はそう言うのと光彦が「あ、ごめんささい」と謝ると彼は「いいよ別に」とほほ笑  
む。

「謝ることほど重大な事じゃないし、それに君たちはまだ小学生あたり。勇樹君だつた  
ら友達になりそうだ」

「勇樹君？」

青年の言葉に哀は反応すると、彼は「ああ、ごめん」と答える。

「僕たちのリーダー、いわゆる頭脳だね。発明家でもあるんだよ」

「頭脳…天才発明家…？」

青年の言葉にコナンは考え込む。何か気になる言葉があるようだ。

.....

「えっと、眼鏡の少年君。君はこの子供たちのお友達かな？」

青年はコナンに向て言うのと、コナンは「うん、そうだよ」と答える。

「僕たちは、蘭姉ちゃんが当てた懸賞でここに来ただけだ。僕たちは始めてくるところだから迷子になったんだ」

コナンの話を聞いた青年は「なるほど、それでなんだ」と理解する。すると。

「おーい太田、何しているんだ？」

「あ、伊江」

伊江と呼ばれた金色のショートツインテールをした少女がやってきた。それに反応した青年基太田は、彼女の方に振り向く。

「子供たち……太田、お前もしかしてお前の親戚の子か？」

「し、親戚?! 親戚じゃないよ!? ま、迷子だから!!」

伊江の言葉に太田は顔を真っ赤にして照れると、彼女は「冗談だぜ冗談だ」と笑われた。

.....

「この子たちは観光のに来た子たちだね。初めて来るところだから迷子になったんだ」

「なるほど、迷子か……ま、確かにここは慣れている人でも迷うところだから仕方ねえな」

霊性を取り戻した太田は、伊江に話をしたところ。彼女は納得してカバンから地図を出した。

「この先に近いとしたら……お、『第1学園型スクールストリート』があったな」

「第1学園型スクールストリート…あそこなら安全だね。じゃあ電話を」

太田はそう言うのと、携帯電話を出して誰かに電話を入れようとした途端。光彦が「あの」と言い始めた。

「電話でしたら僕たちも持っていますが」

「そうなんだ、小学生だからまだかと思っていたんだけど。安心したよ」

光彦の言葉に太田は安心すると、コナンが「ねえお兄さん」と言い始める。

「いったいいつから僕たちのことを小学生ってわかったの？」

コナンの言葉に太田は「そうだね」と考え込んで数秒、彼は「しいて言うならば」と答える。

「言葉使いと性格からして小学生の可能性があると、雑誌に乗っていたからね」

太田はそう言いながら形態をいじると、ニュース系のアプリには『東京都米花町、帝丹小学校。少年探偵団特集』と書かれていた。

「ある程度は乗っているかわ知っていたけど。年齢と名前しか載っていなかったからもしかしてと思っただけ」

それを聞いたコナンは「それでなんだ」と納得する。



.....  
第1学園型スクールストリート付近に、白色の四角い形をした車両がたたずんでいた。

その付近にはおかつぱの青年が例の白色の車両の修理をしていた。

「勇樹君どうですか？ まだエンジンの調子が悪そうですが」

「そうですね……あ、油が切れている。これじゃあ調子が悪いわけだ」

勇樹と呼ばれた青年は、油さしを取り出して注入する。

背が高く水色の三つ編みの女性は、タオルを出すと、勇樹はそれを手にして顔をぬぐう。

「何とか修理できました、ですが」

「あー……痛いこと分かりますよ」

勇樹の言葉に女性は苦い反応をすると、後から「すごい車」と声が出た。

彼女は何かと思つて振り向くと、毛利蘭と鈴木園子が車を見て驚いていた。

「この車、初めて見るね……園子知っている？」

「いや、アタシも初めて見る……これって」

2人の言葉に、彼女は「あの……」とそつと出てきたため、2人は声が出たほうに向くと。

「きゃあつ!!」

「ひゃつ!!」

突然現れた人物に驚き、蘭と園子は後ろに引き下がる。女性も彼女たちに連れて驚く。

「あ、ご(ご)ご(ご)。ごめんなさい!! 初めて見る人で車に興味あったのかと思ひまして!!」

「い、いえこちらこそ突然で!!」

女性と蘭はお互い謝っていると、青年が「どうしたんですか百合子さん」と車から現れる。

「あ、勇樹君」

「え、勇樹君?」

百合子と呼ばれた女性は、勇樹に向けて反応すると、蘭が彼を見ていったため、勇樹は「ん?」と反応する。

「オレに何か…?」

「あ、いえ。もしかして園子が言っていた発明家って」

「そう言えば『珍等師学園都市で、天才発明家、石川勇樹が今噂になっているが。一体誰だろう』てパパが言っていたから誰かと思っていたけど……まさか!」

園子の言葉に勇樹は「あー、そこまで有名なのか」と苦笑いする。

## 『名探偵コナン～新一の妹～編』第2話『出会い、時には知り合い編』

「なるほど、なるほど…百合子さんその鈴木財閥って」

「あ、確か鈴木次郎吉さんが…その鈴木財閥の?!」

百合子は驚くかのように園子に向けると、彼女は「今頃になって気づいたのかい」とジト目で見える。

「それにしてもいがいですね…私が知っているお嬢様は縦巻きロールやおおらかな人かと思いましたが…」

「奈々さんはその一例だけとお嬢様は個性があるから」

百合子の言葉に勇樹はツツコミを入れると、園子は「言いたいこと言って」とツツコミを入れようとするが。

『電話ありますデスマス』

「ん、電話…太田?」

勇樹は電話が鳴っていることに気づき、画面を見ると、『太田』と表示していたため彼は電話に出る。

「太田どうした…うん、うんうん…ええ、眼鏡の少年と？」

勇樹が言った『眼鏡の少年』という言葉に蘭は「え、もしかして」と彼に向けてあることを言う。

「その少年って、江戸川コナン、って言っていないですか？」

その言葉を聞いた勇樹は「え…太田、聞こえていた？ 念のためだけど」と言つて数秒後…眼鏡の少年は江戸川コナンと分かった。

.....

「こいつが江戸川コナンか…」

勇樹はそう言いながら、眼鏡の少年であるコナンを見つめる。

「少年探偵団が米花町にいるのは効いたけど、こいつらがか」

「こいつらつて、オレたちはちゃんとした探偵だからな」

元太の言葉に、勇樹は「わかったわかった」と苦笑いする。

すると歩実が「あれ」とある事に気づく。そのあることとは。

「陽さんたちがしているそのバッチ、虫眼鏡の形しているけど。何かしているの？」

太田がしているバッチに歩実が言うと、彼は「あ、これ？」と答える。

「このバッチは、僕たち探偵の証であるバッチでね。僕たちは奇跡と書いて『ミラクル』と言う探偵をしているんだよ」

「このバッチは、僕たち探偵の証であるバッチでね。僕たちは奇跡と書いて『ミラクル』と言う探偵をしているんだよ」

太田はそう言うのと、歩は「すごい！」と目を光らせている。するとクリスは。

「そうなんだ、私てつきり、子供にもらったおもちゃかと思つたよ」

あざと言葉に、彼は「お、おもちゃつて」と苦笑いする。

そして勇樹は「修理も終わったことだし。みんなのところ合流しますか」と言いながら、コナンたちと蘭と園子を例の乗り物に乗せて、例のホテルへと発進して行く。

.....

「まったくお前らは、オレたちから眼を話して一旦どこに行つたんだ!」

毛利小五郎はそう言いながらコナンたちに叱っているが、蘭が「お父さんこそさらさらしていたのに」と言うのと、小五郎は「うっ」と口を慎んだ。

例のホテルに到着し、蘭たちは彼女の父親である小五郎と合流して難を逃れたが、ここは初めて来るところなので迷うのも当たり前。京都にいきなり来て刊行するのと同じレベルだ。

「ま、まあまあ。落ち着いてくださいよ」

太田はなだめようとして言うのか小五郎と蘭の間に入っていくと、園子は彼の顔を見て何かに気づいたのか「あ、あんたは」と、こんなことを言い出す。

「あんた、もしかして太陽会社の息子さん!？」

それを聞いた太田は「あ、そうですね?？」と答えると、何かに気づいたのか「もしかして」とこんなことを言い出す。

「もしかしてあなたは鈴木財閥の鈴木園子さんですか!？」

それを聞いた園子は「そうそう、あたしは園子よ!」と答える。

どれを見たみんなは「なんだかわからないが、とんでもない人物と出会ってしまったな」と思ったのであった。すると。

「勇樹君、お待たせ」

「あ、佐々木さん」

その場に現れるようにやってきたのは、まだ暖かい季節なのにピンク色のマフラーをしている女性。背は高くスタイルもよいため、大人の姿をしている。

その姿を見たみんなは「すごい人だ」と口から洩れそうになっていた。

「紹介します、僕たちの先輩であり、女優の佐々木桜さんです」

「初めまして、私は佐々木桜よ」

桜はそう言うと、蘭が「佐々木桜…あ、もしかしてあの?!」と何か思い出したのか、彼女に向けてこう言った。

「この前、情報テレビ番組『ファッショントレディ』に出ていた!」

「ええ、覚えてくれてありがとうね」

蘭の言葉に彼女は微笑むと、伊江が「意外な人がいて安心した」と安心する。

女優とは言えども、情報テレビ番組に出るのはあまりない、覚えていると言う人は限られている。それを見た人がいると本人は嬉しい。

すると桜は何かに気づいたのか「あら、もしかして」と小五郎に向けてとこう言った。

「あなたはもしかして米花町で有名になっている眠りの小五郎かしら?」

それを聞いた小五郎は「は、はあそうですが」と答えると、佐々木たちはポケットから名刺を出した。

「私たち、この都市で探偵をしている者で。よかつたらいいかしら?」

それを聞いた彼は「それかまいませんが」と言いながら名刺の交換をする。ただ、小五郎の名刺は金色でできているのに対して勇樹たちの名刺は青色であった。

そう言っていると、勇樹の方から「ぐううう」とお腹が鳴ったため、蘭は「あら?」と彼を見るのであった。



勇樹はお腹の音に恥ずかしかったのか、顔を赤くしながら背の高い少女のところへと行くと後ろに隠れる。

「もしかして……お腹空いたの?」

蘭の言葉に勇樹は「う、うん」と言ったため、小五郎は「そうだ」とこんなことを言う。

「ここであつたのは何かの縁、ですし。ここ最近にある中華店で何か食べましようか?」

それを聞いたみんなは「さんせーい!」と答える。

.....

その後、みんなは肉まんにチャンポン、ラーメンチャーハンなど計10品ほど注文して大量に食べた。元太の食欲に驚く勇樹たちだが、太田の食欲を見た蘭たちは「どこの消化されるんだ?」と疑問に思うのであつた。

合計金額は、数十万円と目玉が出るほどの桁数に小五郎と蘭は驚いたが、太田が「こつちが払うよ」と言いながら財布からオレンジ色のカードを出して払うのであつた。

「しかし、勇樹さんたちが乗ってきた車は。ここではあまり見ない乗り物ですな」

「しかし、あまり見ない者ですな」

阿笠の言葉に勇樹は「ん、どういう意味?」と疑問を持ちながら質問すると、阿笠は

こう答える。

「ああいや、さっきの乗り物を見ましたが初めて見る乗り物ですから。珍しくて」

それを聞いた勇樹は「そ、そうですか？」と、少し照れる。それを見た園子は「そう？ どこにでもありそうな乗り物だけだ」と言いながら見つめている。

すると勇樹は「な、なんだと!？」とムカツと反応する。

「このオレが発明した奇跡専用移動者『ホワイト・ナイター』をなめるなよ。最新の部品にコンピュータ・そして機種は太田と奈々さんと一緒に作った乗り物ですよ!」

勇樹はズイズイと阿笠に向けて行ったため、本人は「す、すまんすまん」と後ろに引きながら驚いている。すると。

「おや、もしかして……発明ってことは石川勇樹ですか?」

阿笠の言葉に勇樹は「え、ええ。そうですか」と答える、すると「だれだ、その勇樹って?」と元太は阿笠に向けて言う。と彼はこう答える。

「発明って言ってもあまり知られていない者でな、彼は高校生でありながら発明とメカを作るのが得意じゃ」

それを聞いた勇樹は「おおっ!!」と目を光らせながら感動している。

「へー、こいつが高校生か」

「すごい!」

「まさか僕たちと同じ身長……え?」

元太、歩美、光彦は勇気を見て言っていると、何かに気づいたのか彼と自分たちの身長を見て疑問を抱く。それもそのはず、だって身長が。

「お前、オレたちと同じチビだが。本当に高校生か?」

それを聞いた勇樹は、顔が青くなると同時に目から涙がポロポロと落ち始めると、  
「う、うう」とこんな言葉を出した。

「うるさい、オレのことをチビと言うじゃない!!」

彼はそう言う。「うわーん!!」と言いながら街中へ走って行くのであった。

元太は「な、なんだ?」と驚いているが、百合子は「やってしまいましたかあ」と頭を抱える。数十分後、彼は迷子になって交番にいることは誰も思わなかった。

『小さくて可愛い織斑一夏』編

『小さくて可愛い織斑一夏 編』第1話

キンキンキンッ カンカンカンッ

日本のある山の深くにある道具つの中から、何かを組み立てる音が響く。

そこには何かを作っているのか、一人の少年が巨大なロボットを作っている。

その証拠に、彼の周りには大型のクレーンに変わった機械、コードなどが出ている。

「どうですか勇樹君。あと少しで完成するっていうのですが」

背の高い少女は、勇樹と名乗った少年に向けて言う。彼は「大丈夫だよ」とこう答える。

「あと少しって言っても、あとはこのパーツを付けたら……出来たッ!!」

ガチャツと音がすると同時に彼は「出来上がったぞ!」と答える。

「最新の大型鳥型メカ『メカバード』の完成だ!!」

そして次の日、太田たちは勇樹たちを誘って巨大メカ『メカバード』に集合した。

「これがメカバードですか、とつても大きいですね」

「さすが嫁だ、これをわずかな時間で作り上げたな」

背が高い少年と眼帯をした少女はメカを見ながら答えると。それを聞いた彼は「まあ、ちよつと時間が掛かったところがあつたけどね」と答える。

「それじゃあどこに行きますか？　時空を超えるかどうかわかりませんが遠くに飛ぶことができますよ」

背の高い少女はそう言うと、眼帯をした少女は「嫁と百合子が行きたいところであればどこにでもいいぞ」と答える。

すると、黄色の髪をした少女は「それじゃあ試しにだが都会に行こうぜ！」と元気に答える。

それを聞いたみんなは「それだ！」と彼女の言葉に同意する。

勇樹たちはメカに乗り込んで、操縦席まで行くと。操縦かんがあるところに勇樹が座

リスイツチがあるところには百合子が座ることになった。

「そんじゃー、出動するぞー!」

勇樹の言葉にみんなは「おー!!」と答えると同時に、彼は操縦かんをガチャツと上側に動かす。

すると、メカの胴体から羽が出て足から火を噴きだすと空を飛び始めた。

それを見た百合子は「おおつ、空を飛んでいますよ勇樹君!!」と興奮している。

「そりゃ鳥だから空を飛ぶのは当たり前だ」

勇樹はそう言いながら操縦かんを再び動かすと、メカバードは体勢を前に飛ぶように変えると、そのまま大きな穴からでて空を飛ぶ。

.....

「やったー!! ついに最新のパーツで作り上げた大型の鳥メカの離陸成功だー!!」

それを聞いた百合子たちは「わーい!」と大喜び。そして眼帯の少女は「それじゃあそこから先は嫁たちに任せるか」と言う。

それを聞いた勇樹は「かしこまり！」と言いながら前を向く。すると。

「あれ、勇樹君。なんでしようあれ」

「ん、霧だね」

突然メカの前に現れた霧に彼は驚くが、空の上だから普通かなと思つた彼は、そのままメカを霧を突つ走ろうとそのまま進んでいく。

しかしその霧は非常に大きいのか、メカは霧から時間が掛かる。初めは迷子になったのかとみんなは思いながら見ている。

すると霧が晴れてあたりは海一面のところへと出た。

.....

「な、なんだ!？」

「山から行つて海に出て、私たちは異常が、えええつゝつゝ!!!」

勇樹と百合子は突然の変化に目を回しながら混乱している。すると眼帯の少女は「お、落ち着くんだ！」と答える。

「ここはきつと迷つてしまった結果、この場所へと来たんだらう」

「いやいやいや、連華。いくら何でもそれはないぞ!？」

眼帯の少女、連華に向けて勇樹は慌てて答えると百合子は「それもそうですね」とジ

ト目で答える。すると。

ガガガガがッ　ガギツツツッ!!!

『『『『ウワアアッ!!!』』』』

突然メカが何かにつつかる衝撃がしたため、みんなは驚いた。

そして、メカは突然その場で停止した。勇樹たちは何かと思い、外へ出てみるとどこかの会場であろうか、そこにメカは突然不時着したようだ。

「勇樹君どうですか?」

「会場に落ちたようですね。一体何があったか分からないけど、メカの様子から計算すると故障の可能性が高いですね」

勇樹はそう言いながらメカの胴体へと行き修理をしようと道具を出した。すると。

「っ!　勇樹さんよけてください!!」

突然百合子は勇樹に向けて叫んだため彼は「へ?」と疑問に思いながら右によける、その瞬間。



スパツ!!!

ガコツ!!

突然何か切れると同時に胴体が真っ二つに分かれる。それを見た勇樹は「な、なんだ!？」と驚く。

『警告する、これ以上不審な動きをしたら拘束する!! 大人しく降参しなさい!!』

どこからか声がするのを聞いたみんなは、慌てていると。謎の機体に乗った女性たちが現れた。いや、少年が1名いる。

勇樹たちは、なんだなんだ?! と驚いていると勇樹がカバンから赤い球を出して地面に勢いよく投げたすると。

キイイイイイイイイイツ!!!

突然眩い光と同時に聞いたこともない高音が響いてみんなは耳を押さえて目を最小限に閉じる。その瞬間を狙っていたのか、勇樹はカバンから工具類を出してメカが壊れているところを修理して直す、急いでメカに乗り込んだ。

そしてメカバードは鈍い音を出しながら空を飛ぶと、その場から離れようとしてい

る。だが。

「え〜い〜！」

のんきな声がすると同時に、メカの両羽両足が分解されると同時に、勇樹たちは「はえっ!？」と驚く。

そしてメカはそのまま会場へ再び墜落して、今度はメカのコックピット以外バラバラになつて壊れるのであつた。

「あらら……」

それを見たみんなは目を丸くしていると、降参するのであつた。

## 『小さくて可愛い織斑一夏 編』第2話

「なに、空を飛んでいたらここに来て落ちたつてことか？」

勇樹たちは空き教室へと連れて行き千冬から、どうしてここに来たのか話をしてい  
る。もちろん、それを聞いた彼女は驚きながらも疑問を持っている。

「話しがたいが、お前たちが乗ってきたあの機械はどうやらそこにいる勇樹が作ったん  
だな」

それを聞いた彼は「はい」と答える。

ちなみに、あのメカの部品は倉庫だと思われるところへと移動して保存している。後  
で修理するようだ。

「あの、千冬さん」

「む、なんだ？」

「じ、実はですけど。そ、そのい、いいISスーツと言うのは何ですか。私たちにも話を」  
勇樹の言葉を聞いたみんなは「それだ！」と答えると千冬は「そうだな」と反応する。  
「わかった、それは話すでしょう。だが今は夜だからそれは次の日にする」

それを聞いたみんなは「わーい！」と大喜びするが、紫のロングヘアの彼女は何か氣

付いたのか「あら」とこんなことを言い出す。

「そう言えば、私たちの部屋はあるかしら？」

それを聞いた瞬間みんなは「あ……」と目を点すると同時に顔が青ざめる。だが勇樹は「心配ご無用」と言うと同時にこう答える。

「この発明家である石川勇樹をなめんなよ！ 丁度メカバードの部品があるからいいメカが出来るぞ！」

突然の言葉に千冬は「は？」と呆れて答える。

.....  
キンコンカンコンキンコンカンコン、ジジジジジジジジッ、ギューイイイイイイン!!!  
ガガガガッ！ ガガガガッ！ ウイイイイン ガコンッ!!

倉庫内だと思われるところで、勇樹は道具の部品をトンテンカンと作っていき改造し

ている。

ただ、姿は鳥であるが、部品だと思われる機械を取り付けている。

「ねえ、勇樹君。まだですか？」

「もう少しだ。しかしすごいな。壊れているところはあるがすぐに直せるな」

少年は勇樹に向けて言うと、部品だと思われるのを付けた結果。「完成だ」と答える。

そこには、いつの間にか直っているメカバードであった。

「おおっ、さすがです勇樹君!!」

「わずかな時間で直せたな!」

少年少女は喜んでいると勇樹は「そんじゃ寝るか」と言いながらスイッチを押すと、胴体から扉と梯子が出てきた。

そして勇樹たちはそこに乗り込むと、扉はしまつて梯子はしまうのであった。

.....

次の日、勇樹たちは突然千冬に呼ばれたためみんなは急いで教室へと行くと、そこには少年少女が7人いる。

「え、えっと。あなたたちは昨日の……」

「ああ、昨日会ったが名前がまだだったな。私の名前は篠ノ之箒だ」

「わたくしはセシリア・オルコットですわ」

「あたしは凰鈴音よ」

「僕はシャルロット・デュノアだよ」

「私はラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「私は更識楯無よ」

「わ、私はお姉ちゃんの妹の更識簪…そして」

「僕が織斑一夏だよ」

『『『『そうかそうか理解しました……………て、男子!?!』』』』

初めは見間違え果と思ったみんなだが、一かを見てみんなは驚く。

だが、改めて考えてみると一夏の身長は165センチほどある。それに対して勇樹の身長は…………。

「い、一夏さんより小さい…………」

彼を見て勇樹は青ざめるとそれを見ていた千冬たちは「ぷっ」と笑ってしまう、一夏

は何のことかわからず頭を傾げる。

「そ、そう言えば勇樹君。僕たちも紹介したら!？」

「お、おうそうだな」

少年の言葉に勇樹は答えると紹介するのであった。

「オレの名前は石川勇樹」

「僕は太田陽」

「オレは暗山伊江だ」

「私は佐々木桜よ」

「ボクは中二小森だ」

「僕は美樹幹子だよ」

「わ、私は百合子・ビューティーです」

「私はシャーロック・アレン」

「ふくねは祝福音!」

「私は極道連華だ、でこつちが」

「極道靈華つす!!」

「わたくしは七星奈々です」

「私は奈々様の護衛兼教育係の羽衣天女です」

「私はモスキート・文」

「そしてわたくしは薩摩京子です!!」

みんな自己紹介をすると勇樹が「それにしても」と箒たちを見ると彼は突然顔を真っ赤にすると百合子の後ろに隠れる。

「む、どうしたんだ?」

千冬は何かと思ひ、彼を見てみると太田が「あ、あの!」と慌ててこう解説する。

「勇樹君は、女性が苦手で。箒さんみたいな体系がいい人は苦手なんだよ!」

それを聞いた瞬間、箒たちは「なんだ」と体を真っ白となって崩れるが、鈴音だけは「やったー!」となぜか喜んでいる。

すると伊江は「そいやー」と何か気付いたのか、一夏を見るとこんなことを言い出す。

「一夏と勇樹が戦ったらどっちが強いんだ?」

それを聞いた箒たちは「はあ?」とにらみつけられる。それを見た太田たちは「ひいつ」と怯えるが、アレンと連華と霊華、奈々と文と福音は頭に?マークを浮かばせ



るのであった。

すると千冬が「おまえたち、落ち着け」となだめる。

「このままでとらちが明かない、特にそこに勇樹をどうにかしなければ……」

千冬はそう言いながら勇樹を見ると、彼はまだ百合子に抱きながら怯えている。すると一夏が「そうだ」とこんなことを言い出す。

「勇樹君、僕と勝負しない？」

それを聞いたみんなは「へ!？」と目を丸くして驚いている。千冬本人も「何を言い出すんだ」と目を丸くしている。

「あ、あんたそれ本気!? 相手は名前を名乗っただけの変な奴よ!!」

「うん、でも相手を見た目で判断するより実力で試したほうが早いと思うよ」

それを聞いた勇樹は「ふむふむ、なるほど」と何かを理解する。

.....

そして、みんなで話し合った結果、このような条件を出した。

条件1：織斑一夏と石川勇樹による一本勝負。

勇樹は一夏のシールドエネルギーがエンプシーするか、一夏は勇樹のメカを壊すかで勝負は決まる。

条件2：相手に危害を加えず、最低限の怪我（例えば頭にたんこぶが出来るほど）で済むように。

条件3：勇樹が作るメカの資金は、どこにでもあるガラクタ品で。

条件4：開催は明日行うこと、それまでに用意をしておく。

「それが、この戦いの条件です」

それを聞いた勇樹は「うん、わかった」と言いながらカバンから工具箱を出す。

勇樹の前には、学園のごみであろうか、壊れたテレビに動かなくなった時計やモーターが外れて動けない扇風機などがばらまかれている。

その山に勇樹はカチャカチャと何かを作り出している。

「でも勇樹君、このガラクタ品で何ができるの？」

太田は心配しているのか勇樹に向けて言うと彼は「まあ、落ち着けよ」と言いながらガキツと何かを付ける。

それと同時に、勇樹は太田たちに向けて、こう言う。

「対戦相手の織斑一夏を、うわつと驚かせるメカを作るからな」

それを聞いたみんなは「いったいなんだろう」と思いながらも、勇樹のメカを作る手  
伝いをする。

.....

そして、次の日。アリーナには多くの女子が集まっている、旗を持ってきている子を  
見るとそこには『負けるな、織斑君!』と大きな字で描かれている。

太田たちは千冬先生と一緒に専用の部屋にいる、だが勇樹はいない。どうやら対戦相  
手を倒すメカにいるかもしれない。

「それにしても、勇樹君まだかなあ?」

先にアリーナに出場した一夏は、あたりを見渡すが。まだ勇樹が作ったメカは愚か本  
人が現れていない。

女子たちは一体何があったのだろうか？ と疑問に思いながらも相手を待つこと数分後……すると突然。

ゴゴゴゴゴゴ……！！！！

突然風が吹き始め、空から何か舞い降りてきた。それは。

## 『小さくて可愛い織斑一夏 編』第3話

ガンツ!! ゴロツガンツ!!!

空から降って来た舞い降りてきた正体、それは色が付いた鉄球が5つが舞い降りてきた。

いや、舞い降りてきたというより落ちてきたと言った方が正しい。

「な、なんだこの球は…!?!」

それを見た千冬は、突然現れた球に驚いている。いや、これを見たいる生徒たちも「なんだろう」と疑問に思いながら見ている。

そして球の中で一番色が多い色から頭のハッチが開くと、そこから勇樹が現れた。

「どうですか? オレが作った最新のメカは!」

勇樹の言葉を聞いたみんなは「え、それが彼が作ったメカ!?!」と目を丸くして驚く。

それを聞いた勇樹は「うんうん、いい反応だ」と喜んでゐる。だが一夏は。

「それが勇樹君が作ったメカ、なんだかかわいい色しているね」

彼の言葉を聞いた勇樹は「え、そうなの?」と意外な反応を見せる。

「ま、まあな。このメカはオレが開発した最新のメカ&新機能が付いているんだよ」

「おおー、それは見てみたいー!」

「よっしや、それじゃあ見せてやるぞ!!」

勇樹はそう言いながらメカに乗り込んでいくが、一夏を除くみんなは「いったいどういう意味?」と思いつつながら彼が乗ってきたメカを再び見る。

.....

すると、突然球がゴトゴトツと動くときれは空中で浮き合体し始めた。だが、その合体する球はおかしな順番で、頭だと思われる物から青色、黄色と水色、黄色と水色へと合体していく。

そして、合体が終わるとそれは地面に着陸すると、頭からスピーカーが出てきて勇樹がこんなことを言う。

『どうだ、これがオレが開発した最新変身イモムシメカ・ガランゴロボである!!』

それを聞いたみんなは「それがメカ?!」と目を丸くして答える。だが太田たちは「なるほどなるほど」と何かを理解して首を上下に動かす。

「えつと、千冬さん。そろそろいいですか?」

「ん、ああそうだな」

太田の言葉に千冬は答える、そして。

『それでは、試合を開始してください』

試合開始のブザーが鳴ると同時に、勇樹の乗っているメカ『ガランゴロボ』は突然一夏に向けて体当たりをしようとする走りしてきた！

だが一夏は「それつと」よけるとガランゴロボは壁にぶつかる。幸いそこは誰にも座っていないかつたためけが人はいなかったが、ガランゴロボの顔には真つ赤に晴れていたそうだ。

『いのででつ、だけどオレはくじけないぞ！』

そう言うのとガランゴロボは向きを変えると同時に、口からピコピコハンマーを出して一夏に攻撃する、だが。

「それっ!!」

スパツ！

目にも見えない速さで動き、鶴来でハンマーの棒を真つ二つに切った。

それを見た勇樹は「嘘!？」と目を丸くして驚いている、だが。

『ふふふ、ふふふでいいだろう。このメカの最大の変身をつ!!』

突然変なことを言うためみんなは一体どういう意味？ と首を傾げる。すると。

.....  
ガゴゴツ!! ガゴゴツ!!

突然胴体が外れると同時に2色の球は顔と合体し残りの1色は顔と2色の球に合体した、すると。

ガゴゴツガゴゴツ!! ガシヨンツ!!!

足が出てきて手が出てきて、そして背中から大きな羽が出てきて姿は変形する。

それを見た太田たちはおろか、生徒たちは「あわわわっ」と驚きながら後ろへと下がっている。

そして、メカの変形が終わったのか、両手がガシヨンツと動く中から声がする。

『どうだっ!! これが変形型のガラングロボ・ロボットモードだ!!』

それを見たみんなは「それが変形した姿!？」と驚く。

太田たちは「まあ、そんなのかと思いました」とジト目で見ているが、百合子は「さすがですすごいです勇樹君!!」と大喜び。



「ではいくぞっ!!」

勇樹はそう言うのとメカは突然手を伸ばして一夏を捕まえようとするが、彼はひよいつと避けて攻撃をかわすが、メカは再び攻撃をしようとパンチをする。その時。

ゴガシヤアアッ!!!

『な、なんだ今の音!?!』

「か、雷?!」

突然何かが落ちる音がしたため勇樹と一夏は何かと音がしたほうへと向く、そこには。

.....

『フウジーン!!』

『ライジンーン!!』

なんと風神メカと雷神メカがこの世界にやって来た。太田たちは「あ、あれはブン・ボーグ!」と驚く。

だが勇樹はなにかに気づいたのか「あれ?」とこんな疑問を抱く。

「確かあのメカはブン・ボーグだけど今は……」

勇樹はどうやら今は解散しているはずだと考えていると、風神メカは『フウジーン！』と戦火のプロペラを回転させると突然大型の竜巻を起こして一夏に向けて放った！

それを見た一夏は「うわっ！」とよけて竜巻を避けるが、今度は雷神メカが『ライジーン！』と太鼓をドンドンツ!! と叩いて雷を発生する。

太田は「千冬さん、これは非常に危険です！」と呼びかけると彼女は「わかった！」と答える。だが。

.....

カチツ、カチツ。

「む、なんだ？」

千冬はスイツチを押しして警報を出そうとするが、何度押しても警報が鳴らない。

それを見たアレンは「すまない、そこ借りるぞ」と言うと、ポケットからドライバールを出してカチャカチャとふたを外す。

「あ、アレンちゃん。何している？」

「ちよつとした推測だ。もし私の推測が正しければ、ここに何か潜んでいるはずだ」アレンはそう言いながらカチャカチャと何かをいじっている。すると。

ドガアアッ!!!

突然大きな音がしたため、みんなは何だとアリーナを見ると、風神メカが一夏を捕まえようとしたため勇樹が乗っているガランゴロボがそれを守っている。

それを見た篤達は「一夏!!」と叫んでいる。だが外からの映像音声は見えたり聞こえたりするが、中から声や映像を映し出すことはできない。

一夏は勇樹と一緒にメカを押し返そうとしているのか、メカのアームをつかんで押している。だが、後ろから雷神メカが現れて一夏を捕まえようとしている。

それを見た太田は「仕方ない、千冬さん。すみません!」と言うと同時にリュックから輪っかを出して壁につけた瞬間、大きな穴が出来て彼らはそこから出て勇樹の乗っているメカまで走って、足から乗り込んだ。

.....

「お、太田?! いったいどうしたんだ?!」

突然現れた太田たちに勇樹は驚いていると、彼は「今は説明するより操縦が先、そして一夏さんを守って!」と言った来た。

それを聞いた彼は「わ、わかった!」と言いながら操縦機をカチャカチャと動かして一夏をつかんでメカの中に入れる。

「よし、それじゃあオレたちの反撃……じゃなくて一夏を守るぞ!!」

それを聞いたみんなは「おおー!!」と答える。そして勇樹は「それっ!」とレバーを引くと、風神メカを持ち上げて雷神メカにぶつける（まあ、バツクドロップと考えたらわかりやすいね）。

そして風神メカと雷神メカを放り投げると、口から大型のドリルを出してメカのおなかをついた。その瞬間。

ドガアアアアアッ!! バガアアアッ!!! チユドオオオオンッ!!!!

メカは爆発してどこかへと飛んでいくのであった。勇樹たちは「やったあああ!」と喜んでメカを着陸して一夏を降ろす。

結果、試合は中止になったが織斑一夏を助けてくれたため、仮生徒となった（勇樹たち曰く、「生徒であるがあくまでほかの世界から来た可能性があるため仮としてほしい」と言ったため）。

そして彼ら専用の寮の部屋へと案内し、例のメカバードの修理をするのであった。だが、この時勇樹たちはまだ知っていなかった。

ある組織がとんでもないことを企んでいることも知らずに。

## 『小さくて可愛い織斑一夏 編』第4話

次の日、勇樹たちは楯無から「3階にある使われていない教室に来てね」言われたためみんなはそこに行き入ると、一夏たちを含む初めて見る生徒が数名いた。

「ようこそ、つてそれほどでもないね。さてと」

楯無はそう言うのと勇樹たちに向けてこう言うと、勇樹たちは「それもそうですよね」と答える。

「さて、彼女たちはあなたたちと初めて会う子たちだけど、この子たちはちよつとした生徒なの。それじゃあ自己紹介を」

楯無が言うのと生徒は自己紹介をし始める。

「私は布仏本音く、よろしく〜」

「あたしは鳳乱音よ、鈴おねえちゃんの従姉なの!」

「ヴィシユヌ・イザ・ギャラクシーです、よろしくお願いします」

「ロランツイーネ・ローランディファイルネいだ、ほう、一夏以外にも手ごわいやつがいるのは初めて知るな」

「ファニール・コメット、妹のオニールとはアイドルで飛び級よ」

「お、オニール・コメット、姉のファニールとは双子だよ」

「ベルベツト・ヘル……あまり深入りはしないで」

「クーリエ・ルククシエファ……、このこは『ぷーちゃん』と『ルーちゃん』だよ……よ、よろしく……」

「グリフィン・レッドラム。お姉ちゃんに任せてね！」

「ダリル・ケイシーだ、オレを甘く見るなよ」

「フォルテ・サファイアッス、先輩とはちよつとしたあれっス！」

それを聞いたみんなは、なるほどとジト目で見ながら首を上下に動かした。

すると楯無は「じゃあ早速だけど、あなたたちにはあることをするわ」ととんでもない事を言い出した。それは。

.....

「えつと、僕は太田陽だよ……なんでこんなことに？」

「オレも知りたいよ、なんでこの二人となんだ？」

「それはこちらが聞きたいですわ！」

「そうよ、なんでこの人となのよ！」

太田と伊江の言葉にセシリアと鈴はムカツとした言葉を言うと太田が「ま、まあ落ち

着いてください」と苦笑いで答える。

すると伊江は「まあ、元はと言えばあの会長だからな」とジト目であの時の言葉を思い出す。それは。

・・・・・・・・・・・・・・・・数時間前・・・・・・・・

『勇樹たちと一夏たちを入れ替える?』

生徒会長、更識楯無の言葉にみんなは驚くと、彼女は「正式には、みんなと仲良くするためによ」と補足する。

「でも、それだと生徒の目があるので大変なことになるのでは? それに織斑先生が」  
箒の言葉にみんなは首を上下に動かすと、彼女は「それは大丈夫」と言うと同時にこんなことを言い出す。

「織斑先生には事情を話したため、他の生徒はあまり立ち寄らないようにしたわ」

それを聞いたみんなは「あんた、一体どんな権力をしたんだ!？」と心の中でそう思うが、本音と虚はそれを知っていたかのようにジト目で見る。

「それじゃああなたたちはこれで部屋は決めてね、違法行為をしたらお仕置きよ」  
楯無はそう言うと同時に、数十本の棒が入った缶を出した（古いけどね）。

そしてみんなは棒を一本手にすると同時に、一斉に引いた。

・・・・・・・・今に至る・・・・・・・・

太田と伊江は、セシリア・オルコットと鳳鈴音と一緒にいたのでった。

今いる部屋はもちろん、寮ですけどね。

「で、オレたちはおぜう様とチビ中国と一緒にいるってことぶぎよっ!」

伊江が何かを言っている途中で、彼女の背中に向けて鈴が飛び膝蹴りを喰らわせた。

「誰がチビよ! こう見えて高校1年生よ!! あんたみたいなボサボサよりましよ!」

「ああつ、誰がボサボサだあ!?! これはオレの地毛だつての、もともとこうだからな!」

「ふうん、それが地毛ねえ。ふっる」

「ふっるって、おめえ!!」

鈴と伊江の口喧嘩にセシリアと太田は「はあ」とジト目で見ているのでった。

すると太田は「あ、お話いいですか?」と言うと彼女は「ええ、かまいませんわ」と

答える。

「セシリア・オルコットって、確かオルコット社の令嬢ですか?」



「ええ、わたくしセシリア・オルコットはイギリスで有名な名門貴族ですわ！」

「おおつ、それはすごいですね！ 僕よりすごいかも」

「そう言えば太田さんは一体？」

「僕？ 僕は太陽会社の社長の息子でね、医療に工場に空港などと言った企業をしているんだ」

「まあ、それはすごいですわね！」

先ほどの2人とは違い、仲が良く円満な話になっている。

.....

「ほう、つまり嫁を狙っているのか連華は？」

「嫁？ そつちではないが私は違う嫁を狙っている」

ラウラ・ボーデヴィツヒと極道連華は睨んでいる……写真を出しながら。

「それにしても。同じ人工生命体なのに年齢が違うな、どうしてだ？」

「僅かな差で出来たからだ、そのため私たちが後輩だが年齢は勇樹が年下になっている」

「なるほど……で、一夏を見てどう思った？」

「ふむ、どうというより勇樹と似ているな。違いはあまりないし可愛い所は似ているな」  
「なるほど、そこが似ているのか」

もう何を言っているのか分からないが、今は一夏と勇樹の話をしている。

一方、シャルロットは美樹幹子と話をしている。

「それで、4年ほど旅をしていたの？」

「ああ、4年もの間僕はいろんなどころを旅して、日本のここに戻ったよ」

「すごいね。でも、辛くはなかった？ 僕は……」

「あー、言わなくてもいいよ。君は本当に悪くないから」

「そう言っつて僕の胸を触らないで!? 先行ったのはうそ!？」

「あはは、ごめんね。それにしてもおっぱい大きいね」

「もう、それは言わないで!」

初めは冒険の話になっていたが。途中から変な話になっている。

聞かなかったことにしよう。

まあ、あそこのサイズは幹子よりシャルロットの方がやや大きいが。

.....

「ええつ、それじゃあ簪さんは一夏君に惚れているっすか!？」

「ほっ……! 惚れているけど、す、すすすす……」

更識簪は極道靈華の言葉に顔を真っ赤にし、あたふたと慌てている。

それを見た更識楯無と佐々木桜はにやにやと笑い「面白くなって来たわ」と揃えて言うのであった。

「す、好きだけど……わ、私はまだ恋愛の、け、経験が……」

「ありやーそうっすか、それでしたらこの極道妹基靈華が恋愛の知識を教えるっす!」

靈華の言葉を聞いた楯無は「な、なんですって!？」と反応をするが、桜は「あら、それはいいわね」と反応する。

「ほ、本当靈華?!」

「ういっす、うちが嘘をつくことはありませんよ!」

「ちよつと待つて、それ本当に落ちるの?!」

「およ、そう言う楯無さんはもしかして……一夏さんのこと好きっすか?」

「そ、そんなことないわよ! ただ、私は一夏君を驚かそうとしているだけで。れ、恋愛は。その」

「あら、そう言っている割には顔が赤いわよ?」

楯無の慌てっぷりに佐々木は微笑みながら言う、簪は「お姉ちゃん……」とジト目で見るのであった。

.....

「なるほどー、つまりお前は鈴の従姉か」

「ええ、でも鈴お姉ちゃんよりあたしの方が上だけどね！」

乱音の言葉に小森は「そうか」とジト目で見てみる、彼女にはわからないが、鈴より若干あそこが上なので、鈴がややムカツとする人物。

「そいやー、お前は何か得意料理はあるか？ 従姉だから何か得意なのはあるかと思っただが」

「あるわよ、炒飯だけど食べる？」

小森の質問に乱音は答えると同時に料理器具を出すと、彼女は「おお、それはありがたい！」と目を光らせる。

……………数十分後……………

「はい、鳳乱音特製の炒飯の完成!!」

そう言つて彼女は2つの炒飯を机に置くと、横に寝ころんでいた小森は「おおっ！」と立ち上がると、机に瞬間移動した。

「お、おいしそう……………もう食べていいか?！」

「うん、こつちも終わったから食べよう」

小森は乱音に言うのと彼女は調理器具をしまつて椅子に座る。そして。

「じゃあ、いただきますきまーす!」

「いただきます」

珍しく平和な食事をするのであった。

「ほう、ロランは箸を含む100人の恋人がいるんだ」

「ああ、しかし箸だけは私を拒んでばかりでどうしてか分からないんだ」

アレンはロランと一緒に部屋にいる、どうやら恋バナ(?)をしているようだ。

「それもそうだ、放棄には一夏と言う幼馴染がいて。いくら箸に告白しても無理だ」

「ふむ、確かにそうだな。しかし箸以外愛があるのは……」

悩んでいるロランの姿に、アレンは「それだったら」とある提案を出す。それは。

「吊り橋効果をするんだ」

アレンの言葉にロランは「吊り橋効果?」と反応する。

「ああ、例えばオバケが出ているが、明るく花畑の場所と暗くて屋敷にいる場所だとしたら暗い方が怖がる、それに風が出ている吊り橋にいと近くの人と付きそう校化がある

と聞いたことがある」

それを聞いたロランは「それは素晴らしい！」と目を光らせる。

「では、その吊り橋効果はいつするんだ!？」

「まあ落ち着け、すぐやっても硬化はすぐに発動しない。そこは少し待つておくことだ」

「そうだな、それじゃあ」

「ああ、そうだな」

何か不思議な関係が出来たアレンとロランであった。

.....

「わあ、かわいいぬいぐるみ！ 名前は？」

「ぶ、ぶーちゃん……そしてこっちはルーちゃん」

「おお、ルーちゃんか。かわいいね！」

福音は、ベルベットとクーリエと一緒にいる、彼女は現在クーリエと一緒に遊んでい  
る。

「どうだ、ふくねクツキー作ってきたけど食べる？」

「く、クツキー？ だべるよ……」

「私もいいかしら？」

福音とクーリエの話にベルベットが入ってきた、それに福音は「いいよ、みんなで食

べたらおいしいよ！」と言う。途中でベルベットから鼻血が出たのは気のせいにしておこう。

「じゃーん、クマのぶーちゃんクッキー！」

「わあ……！」

「まあー！」

クッキーを見た2人は驚いた、なんとクマのぶーちゃんの顔をしたクッキーが袋に入っている。

「まだたくさんあるから遠慮しないでね！」

「ありがとう！」

福音のクッキーにクーリエは喜んでいる、ベルベットはにこにこ笑いながらベットに倒れるのであった。

.....

「なるほど、あなたは子供たちを守ることが出来るのですか、すばらしいです！」

「お、なかなかいい子と言うね」

京子は、グリフィン・レッドラムと一緒にいるが、何かの話に同意できたのか。京子の目がキラキラと輝いている。

「小さな子供たちを守って未来を作り出す、そして自分の身を犠牲するのは見たことありません！ さすがグリフィン・レッドラムさんっ!!」

それを聞いた彼女は照れながら「そ、そんなことないよもう」と答える。すると彼女は「そうだ」とこんなことを言う。

「夜ご飯は何かいい？ お姉ちゃん、何でも作ってあげるよ？」

それを聞いた京子は「そうですね、それでしたらハンバーグでいいですか？」と言うと彼女はニコツツと笑うと「OK、いいよ！」と調理し始める。

.....

「はあ、なんでこのチビっ娘たちと一緒になんだ？」

「チビっ娘たちじゃないわよ！」

「私たち。アイドルをやっているって紹介したけど.....？」

モスキートは双子のオニールとファニールと一緒にいる、彼女は何が不満なのかジト目で外を見ている。

「そもそも、私はアイドルを知らないから興味はあまりない、逆に私は勇樹は興味あるけど」

「勇樹？ ああ、さつき一緒にいたあの少年？」

「なんだか、お兄ちゃんと似ていてかわいいね」



オニールの言葉にモスキートは反応して「おおっ」とこんなことを言う。

「もしかして、お前たちつて一夏の義理の妹たちか？ お義兄ちゃんつて言うし」

それを聞いた2人は『ブツツ!!』と飲んでいた水を吐き出す。

「ちちち、違いわよ！ 私たちはあああ、あの一夏の、い、いいい、妹じゃー！」

「そ、それにお兄ちゃんは私が付けている、あ、あだ名みたいなものだよ……ゴニヨゴ

ニヨ」

それを聞いたモスキートは「そっか」と言う。「何か作るが何がいいんだ？」と言うと2人は。

「あ、あなたが好きなのを。私たちはあなたの手料理食べたことないし」

「そ、そうだね。それじゃあお願いします」

それを聞いた彼女は「わかった」と言いながら料理をする。

.....

「おお、百合子先輩は髪を編むの上手いっすね！」

「えへへ、そう言ってくれると私、うれしいな」

百合子はフォルテ・サファイアとダリル・ケイシーと一緒にいる。彼女は今フォルテ・サファイアの三つ編みを編んでいるが、思った以上に上手でサファイアは喜んでいる。

それを見たダリルはジト目でにらみつけている、背中からオーラがあふれていて『こ

いつ、私の恋人を奪う気か?』と。

「あ、そうだ! ダリルちゃん、今日は一緒にお風呂に入る? 中を深めるために」

「ほう、オレと一緒に風呂か……はあ!? 風呂に!」

それを聞いたダリルは驚いていると、サファイアは「マジすか!」と驚いている。

「だって、サファイアちゃんだけだとダメかなーと思って、それにダリルちゃんだけ仲間外れはいやだし。今日は二人と一緒に仲良くしようかなーと思って」

「いやいやいや、ちよつと待て! オレはまだ!」

「言い訳無用です! そんなことをする子はお仕置きしますよー!」

百合子はそう言いながらダリルを猫の様に持ち上げると、そのまま風呂の中に入っていく。入る前に百合子はサファイアに「あ、サファイアちゃんは後から入ってきてね?」と言うと彼女は「う、うす」と答えるのであった。

……………数分後……………

灰の様に真っ白となったダリルは、目を回しながら「お、オレの青春が……」と小さくつぶやいている。

それを見たサファイアは「先輩、大丈夫すか?」と言うと彼女は「あ、ああ」大丈夫

だと小さく答える。

「今夜はおうどんでいいかな？ 何かリクエストはない？」

「あ、ありません！ だ、大丈夫です！」

「う、うちも同じつすよ！」

百合子の質問にダリルとサファイアは慌てて答えると、彼女は「あ、そうですか。わかりましたー」と答えるとそのまま料理をするのであった。

この時、ダリルとサファイアは『何だか分からないが、絶対に怒らせてはいけないオーラが出ている』と確信した。

.....

「勇樹君って、発明家っていうけど先ほどのロボット以外に何か作れるの？」

「作れないってことはないけど、今の部品で作れるのは少し難しいよ」

勇樹は織斑一夏と篠ノ之箒と一緒にいる。一夏は勇気が作ったあの時のメカが気になったのか質問すると彼は答える。

それを聞いた勇樹は「でも何でそれを？」と言うと一夏はこう答える。

「千冬お姉ちゃんの友達だけど、ISを作ったりしている東お姉ちゃんがいて。その時勇樹君と同じメカを作ったことに気づいたんだ」

「なるほど、でも構造にレベルは違うけどいいのか？」

「うん、もしかしたら息が合うかもしれないよ」

それを聞いた勇樹は「それもそうだな」と答える。

すると箒は「ところで、献立は何にするんだ？」と勇樹に向けて言うと彼は「そうだな」とある事を言う。

「それじゃあサバの味噌煮はいいかな？ 魚料理でオレは好きだし」

「そうだな、一夏はいいか？」

「僕もそれでいいよ、箒ちゃんは？」

「私も構わない、それじゃあ作ってくる」

一夏と勇樹の答えに箒は料理をするのであった。

.....

次の日……勇樹はメカを修理にしに行くため朝からジャンボードのところへと行き、修理をしていったが。

「あれ、扉が開いている……」

扉が開いていることに気づき、彼はそつとそこから覗いてみる。

そこにいたのは、紫色のロングヘアをした女性だが後ろ姿で顔は見えない。その代わり服装は水色に近い青色と白色のワンピースをしていて頭にウサギ耳をした女性がいる。そして。

「ラウラ？ いや、何かが違うような」

銀色のロングヘアだがラウラとは違って大人しい雰囲気オーラがあふれている。

「念のためだ、これを」

勇樹は腰にしているウエストポーチの中から、閃光手榴弾を出してピンを外して倉庫に投げた。

その数秒後、倉庫内からバアツ!! とおん紀直人と同時に眩い光が放たれる。勇樹は被害の巻き添えにならないように黒色のサングラスと音を遮断するヘッドフォンをして中に入る。だが。

シュツ……ガツ!!

「おわっ!!」

後ろから誰かに倒されて、腕を押さえられてしまい身動きが取れない。あの時には確かに2人しかいなかった。

「おい、お前たちはいったい誰だ!？」

勇樹は声を出すと、彼の前から「およ?」と声があると同時にこんなことを言い出す。

「おやおや、もしかして君って箒ちゃんが例の少年君?」

「ほ、箒ちゃん?」

のんきな言葉に彼は驚くが、その前に「箒ちゃん」という名前に彼は目を丸くすると、彼女は言い続ける。

「ハロハロー、私は篠ノ之東。箒ちゃんの姉でちーちゃんとは幼馴染だよ?」

「篠ノ之……あれ、もしかして!?!」

「うんうん、わかつたらうれしいよ!」

「そ、それはいいですが……あの私は?」

「お、おーそうだったね。くーちゃん」

くーちゃんと言う人は、東の指示に「わかりました」と言うのと勇樹は解放されると、彼女以外に8名の女性と1名の男性がいる。

「あれ、お前たち!!」

「げっ、勇樹?! なんでここにいますか?!」

「いや、それはオレもさういいますけど……」

その中に、勇樹の元敵で今は仲間である新・ブンボーグがなぜかいる。

勇樹は「東さん、彼女たちは!?!」と言うと金・パルでサソリのようなISをした女性が

「こつちが説明するわ」と言い出す。

「彼女たちは数日前に知り合ってたね、行方知らずということでもないし怪しい人じゃな

いしね」

「(いや、十分怪しい者だけどね)」

「それに、オータムやMを倒すほどの力があることに驚いたわ。それでいったん仲間が見つかるまで(ここに)」

「それでですか……ん、オータムとM?」

勇樹はあたりを見渡すと、蜘蛛女のI Sをした女性がいることに気づいた。

「でも沙市音、どやって(ここ)に来たんだ? 地球は地球だけど時代が違うけど?」

「I Sと言う学校があることが本に乗っていたんだ。それでももしかしたらお前たちがいるのでは?」と、思っ(ここ)に来たんだ」

それを聞いた勇樹は納得したのか「なるほど」と理解した。

.....

「Mは留守をするようにしてね、今は(ここ)にはいないのよ」

「その間は俺たちは(ここ)にきて勇樹がいると思うところへと探していたら、(ここ)にメカがあつてな。(ここ)まで来たわけを調べていたらこうな(ここ)ったわけだ」

サソリのI Sの女性、スクールと沙市音の言葉に勇樹は「なるほど」と理解すると、倉庫の外から「勇樹くん、どうしましたか?」と声(ここ)がした。

それを聞いた新ブン・ボーグは「げっ!!?」と突然顔を青ざめた、束たちは一体何かと

頭を傾ける。

「や、やばっ！ おい円」

「わかりましたわ！ スコールさん、ちよつと失礼しますわ！」

「オータムも少し付き合ってくれ！ ちよつとだ！」

「え、えつと東ちゃんとかロエさんも！ こっちに」

突然の行動に、彼女たちは戸惑うが。メカの中に隠れることになった。それを見た勇樹は「トラウマになっているな」と呟いている。

「あ、勇樹君どうしましたか？」

「いや、実は……ちよつとした知り合いがいたがもう帰ってしまつたんだ」

勇樹の言葉に百合子は「あらーそうですか？ 仕方ありませんね」と答えて「急いできてくださいいよー？」という。

その言葉に勇樹は「わかりましたー」と部屋から出る。それと同時に沙市音たちは倉庫から出てその場から離れる。

この時、沙市音たちは危険な状況に巻き込まれることは知らずに。



## 『小さくて可愛い織斑一夏 編』第5話

現在時刻、午前5時30分。IS学園内。

「ワンツーワンツー、ワンツーワンツー……」

IS学園のアリーナの周りを走っているのは、奇跡のメンバーである極道靈華であった。

彼女たちは人口サイボーグであるが、元は人間。いくらロボットの力であろうと少しは鍛えないといけない。

「ふひい……これで26周目。本日はここまで！ これはいい運動つすね」

靈華はそう言いながらズボンのポケットから携帯を出して確認してみると、時刻は『5:30』と映っていた。

それを見た彼女は「もうこんな時間すか」と急いで学園に帰ろうとした。その時。

『タ……ス……ケ……テ』

「おっ……」

突然頭から声が出たため何かとあたりを見渡すが、その姿は見えず。

霊華はそのまま学園に戻っていった。

.....

「てことがあつたんすよ」

「へえ、それは不思議ね」

霊華の話を聞いた桜は目を丸くして答えると、鈴は「それってオバケじゃないでしょうね」と答える。

彼女たちは現在朝食を食べている途中で、その場所はIS学園にある食堂。この食堂は非常においしく太田曰く「ほっぺが落ちるほどおいしいです」と喜んでいた。

「いや鈴さん、幽霊にしてははつきりした声っす」

「そうか、それじゃあその声は一体なんだ？」

霊華の言葉にラウラは答えていると、突然彼女の電話から『ブルルルツ』と音がしたため何かと見ると、そこに映っていたのは『石川』と書かれていた。

一体何かとラウラは電話に出る。

「どうした勇樹、まさか名に何かバカな事件を」

『そうじゃなくて！ 大変だ！ マドカが、織斑マドカが!!』

普段聞かない彼の言葉を聞いた霊華たちは「なんだ!？」と反応すると、桜はこう言った。

「どうしたの、マドカっていったい誰なの!? そしてそのマドカがどうしたの!？」

『織斑マドカ、その子がけがをした！ しかも尋常じゃないほどの傷を負っている!! 急いで織斑先生と山田先生を!!』

それを聞いたラウラは「わかった、私は話しておく!」と急いで立ち上がると織斑先生がいるところまで走っていく。

そしてそれを聞いた箒は「私は太田を呼んでくる!」と走っていく。

この時、一夏にはまだ知られなかったことが事実となるとは、彼はまだ知らなかった。  
.....

「どうだ、太田」

太田は急いで勇樹がいるところへと行くと、彼の研究机には一人の少女が横たわって

いた。よく見ると体に切り傷があり頭から血が流れている。

それを見た彼は「これは……」と青ざめながらも、カバンから道具を出している。

「お、太田？ どうなんだ？」

「うん、大丈夫とは言えない。でもこの状態からだったらなんとか治せるよ」

そう言うのと包帯にガーゼに消毒液などを出して治療し始める。

すると倉庫に織斑千冬と山田真耶が入ってくる。

「どうしたんだ勇樹……!!」

マドカの姿を見た千冬は驚くと、勇樹は「織斑先生、これには事情が」と言うとなんか彼女が「あ、ああ。その事情を話せ」と答える。

そして、勇樹はどうしてこのようになったのか話し始める。

.....

この日、勇樹はメカの改造と同時に修理に取り掛かっている。勇樹が作っていたのは大型のラクダメカを作っている、

「えっと、マシンナンバーNNNOとWOCR装置は大丈夫、あとはこの機械に故障がないか確認したら……」

勇樹は故障がないか見ながら確認している。作ったメカだとは言え帰るときに故障があつたら第へんな事態になるからだ。

そうして確認していた時、突然メカのメインコンピュータ装置が起動した。彼は「なんだ」と思い画面を見てみた。

「コンピュータが起動したつてことは、もしかして何か異常があつたんか？」

彼はスイッチをカチカチツと押して異変があるのかどうか確認している、だがコンピュータから『……た……す……け……て』と声にする。

声に不信を抱いたのか、もう少し調べてみる事にしてみた、すると。

ジジジジジビビビツ!!! ガギギギギギツ!!!

「な、なんだ!？」

突然画面が光始めると同時に火花が散っていき、コンピュータのデータは無数の数字でおおわれていく。そして。

ドビギギギギツ!!!

「え、ええッ?!? おわわわわっ!!!」

画面から赤色の塊が出てきたのを彼は驚くと、急いで逃げていく。そしてその塊は彼が設計途中の研究机に落ちる。

そして赤色の光が消えると、一人の少女が出てきた。ただし、この少女はげがをして

いた。そして今現在。勇樹は太田に助けを求めたのであった。

「そうか、それで」

「はい、一応こちらも手当てはしましたが酷いケガでしたので」

千冬は勇樹の言葉を理解すると、太田が「なんとか行けたよ」と言ったため2人は「本当か!？」と反応する。

それを見た彼は「は、はい。本当です」と答える。すると何か気付いたのか「そう言えば、あのマドカさんの手にこれが」と小さなフィルムを出した。

そのフィルムは小さなどくろマークが付いたUSB。

それを見た千冬は「なんだこれ」とUSBを取り上げる。勇樹は「私にもわかりません、ですがこのマドカさんが持っていたから」と答える。

「千冬さん、勇樹。一旦そのUSBを見て何ががあるか見てみれば……」

文は二人に向けて言うと、千冬と勇樹は忘れていたのか、文に向けて「それだ」と答える。

「なになに、『織斑一夏暗殺計画』……『世界で唯一男性がISを起動することが出来る織斑一夏、なぜ彼が選ばれたか私には分からない。アイツが憎い』……これって」

勇樹は急いでコンピューターを起動し例のUSBを使って何か手掛かりはないか探していたら、『織斑一夏暗殺計画』を見つけた。

それを見ていた勇樹たちは顔を青ざめて、文章を読むのをやめた。

「おい、太田これって」

「逆恨み、理不尽すぎる……」

伊江と太田はそう言うと、鈴が「なによこれ」と怒りをこらえながら言う。

するとヴィシユヌは何か見つけたのか、「あれ、勇樹これって」と勇樹に言うと彼は「え？」と藩王すると、ある物を見つけた。

それは『秘密』と書かれたフォルダだが、パスワードがさされているため見るのは難しい。

「勇樹何かの設計図かな……今は難しいな」

「そうだな、勇樹。少し話があるがいいか？」

千冬の言葉に勇樹は「え、なんですか？」と反応すると、彼女は小さな声でこう言った。

「マドカの服にのポケットにこの設計図が入っていた、どうやら束のやつが手掛かりとして渡してきた」

彼女はそう言いながら紙を彼に渡す、勇樹は「はあ、そうですか」と言いながら広げてみると、そこに書かれていたのは……。

「ん、これって……っ!! まさか千冬さん」

「ああ、だが今は一夏を守れ。そしてお前たちは」

千冬の言葉に彼は「わかりました」と答える。そして勇気は「急いで完成させて、マドカさんが入ってきた電子空間を探していきます」と答える。

・・・・・・・・・・・・・・・・

その日の夜、太田たちは勇樹がいる（仮）研究室に行きメカを作っている。

ガガガガガッ!!! ガガガガガッ!!!

ジジジジジッ……ジジジジジッ……

カンッ!! カンッ!! カンッ!! カンッ!!

勇樹たちは必死にメカを作っていく、鉄を組わせたり接合したり部品を作っている。足りないメカの部品があつたら、作りかけのラクダメカの部品を分解してメカを作っている。

「勇樹、これでいいか？」



「もう少し、時間がないから急ごう！」

「うっす！ さっさとやるっすよー！」

「そうですね、急ぎましよう!!」

勇樹の言葉に、みんなは急いでメカを作っていくと。徐々にそのメカは出来上がってきた。

そのメカは、灰色に近い肌をして瞳がエメラルド色（に見えるがガラスを特殊な装置で加工）をしていて、黒色の首輪と鈴をしている。

「あとはこのメカを付ければ……」

勇樹はそう言いながらスイッチを押すと、胴体に黄色の虫眼鏡のマークを取り付ける。そう、今回作ったメカは。

「今回は大型の哺乳類型のネコ科型メカ、『キャットメカ』である!!」

勇樹の言葉に、太田たちは「やったー!! 完成だー!!」と喜ぶ。

この時、キャットメカにある物を詰め込んでいたが、それは後のお楽しみに。

.....

そして、次の日。勇樹はマドカが入ってきたパソコンを探していくと。ある場所が判明した。

「なに、スイスのどこかにいるってことが分かった？」

「はい、ただ調べたら電波が遮断してしまいましたので細かいところは」

「そうか、わかった」

勇樹は千冬に報告すると、彼女は「直ちに出勤できるか？」と言うと彼は「もちろんです！」と答える。

数十分後……

そして、一夏たちと太田たちは勇樹が作ったキャットメカに乗り込み。出勤準備をす  
る。

「ねえ、なんで一夏さんたちも乗せていくの？」

「そうっすね、一夏さんたちは専用機を持っていますので、それで移動すれば」

太田と靈華がそう言うのと、勇樹が「おりやつ」とデコピンをする。

「いててっ」

「あほかお前ら、一夏さんたちと一緒に行動すると。空を飛ぶときに姿を確認してしまつて危険度が高くなる。それに今回は飛ぶんじゃなくて一番近い所から行くんだ」

勇樹の言葉を聞いていると、奈々が「あら、どうやって行きますの？」と言うと、彼

は「これで」とスイッチを押す。

すると、キャットメカは体を震わせ始めると同時に、メカは例の場所・スイスへと瞬間移動するのであった。

## 『小さくて可愛い織斑一夏 編』第6話

スイスのある場所……の奥にある廃棄所内。

ドガアアツ!!

突然パソコンが爆発すると同時に大型のキャットメカが出てきた。

「いってて、いきなり移動するときは合図をしろよ!!」

「しかしそれをしてもし失敗するからな」

伊江の言葉に勇樹は言うど、彼女は「あ、そう言えばそうだな……」と答える。

しかし勇樹が作ったキャットメカはモデルが猫なので、着陸するときはいつもだらしがないのではないかと思っている人はいただろうか？

だがそれはそうとは限らない、実は猫は高い所から落ちてもちやんと着陸できるようになっている。勇樹のメカは猫を再現しているため、メカは不格好な着陸をすることなく移動できたのであった。

「さて、問題はここはスイスのどこなのか分からないな」

「そうっすね……どうんすか先輩?」

ラウラと霊華はそう言うど、勇樹は「そうだな……」とあたりを見渡していると、4

つの扉を見つけた。

その扉には、右から『ウミガメ・カメレオン・イカ・恐竜』の絵が描かれている。

「そうだ、この4つの扉に入っていけば、どこか出口につながるかもしれない」

「そうね、ここで迷うよりその扉に入っていけばいいね」

「うん！ それに、このマークは何か意味があるかもしれないし。メカはここにある物でお兄ちゃんが作るしいいね！」

福音の言葉に太田は「それはいいけど、キャットメカは？」と言うと、伊江が「それだったら、あそこから行けばどうだ？」とある場所に指をさした――。

.....

「それじゃあ、各自乗るメカを言うよ」

勇樹はそう言いながら大型のカンガルーメカに乗り込んで言う。

「ウミガメのマークは、パンダメカの鈴と乱とヴィシユヌとセシリアとシャルロットで、カメレオンマークはラクダメカのファニールとオニールと簪と楯無とラウラで、イカはウサギメカのダリルとフォルテと布仏とロランとグリフィンで、恐竜はこのカンガルーメカの箒と一夏とベルベットとクーリエです」

そう言うと太田は『あの、僕たちは？』と言うと勇樹は「あ、忘れていた！」と慌てて言い始める。

「ち、ちなみに。パンダメカは伊江と小森と太田と美樹姉、ラクダメカは文と桜さんと靈華と連華、ウサギメカは百合子さんとアレンさんと京子さん、カンガルーメカは私と福音で行きます」

そう言うのと太田は「そうです、それ忘れないでくださいよ」と答える。

すると箒は何か思い出したのか「そう言えば」と勇樹に向けて、こう言ってきた。

「勇樹、ISを起動したままでも行けるのか？」

すると勇樹は「まあ行けると思いますが」と言うのと箒は「そうか、一夏」と言うとは「うん、箒ちゃん」と答えると同時に、2人…いや専用機を持っている者は変身した。

そして一夏は「勇樹君、合図してくれない？」と言うと彼は「お、わかった」と答える。

「それじゃあ、早速だが行くか!!」

勇樹はそう言うと同時にみんなは『『おー!!!』』と答える。

そして一気にレバーを動かすと、カンガルーメカ・ウサギメカ・パンタメカ・ラクダメカは例の扉の中に入っていく。

この時、相手がとんでもない物を用意していたとは知らずに……。

そして勇樹たちに、ある物が出てくるとは勇樹以外の奇跡のメンバーは知らなかった。

『閃乱カグラ ケイオス・ブラッド』編

『閃乱カグラ ケイオス・ブラッド編』プロローグ

『超空間異常化?』

勇樹の言葉にみんなは驚くと彼は「そう」と答える。

「最近、その超空間異常化が多く見られてね。まだ原因は分からないんだ」

それを聞いた太田は「それじゃあもう超空間での移動はできないの?」と言うと彼は「いや、そうでもないよ」と答える。

「超空間と言ってもあくまで場所移動だけで、時空間には影響がないよ」

「それじゃあ、私たちが時空移動することもできるってことですか?」

百合子の言葉に勇樹は「はい、そうですねよ百合子さん」と答える。

「そう言えば、最近ブン・ボーグのおかしな行動がないね」

佐々木の言葉に太田は「言われてみればそうですね」と言う勇樹も「そうですね」と答える。

「あの敵がやることだから心配する所がありますが、おとなしいところがあるので心配ありませんよ」



「そーだな、大人しいということは暴れることがないから安心だ」  
「うんうん、そうだね！」

中武の言葉に福音は答えると、百合子は「そ、そこまで大人しくしないとと思うけど」と苦笑いで答える。

「そう言えば勇樹君、最近ダーク何とかという変わった現象があったよ？」  
「ダーク何とか……何それ？」

太田の言葉に勇樹は目を丸くして質問すると、百合子が「月の光を糧とする人型次元兵器です」と解説する。

「私が調べた話によりますと、どうやら遙か昔に、世界を浄化するために作られた。月のエネルギーを吸収して活動を行い、目の前の生命を殲滅しようとするのですよ」

「なるほど、月の力を利用した装置なんだ」

「でも、そうしてそれが超空間と関係があるんだ？」

勇樹の質問に百合子が「それはですね」と解説しようとした。その時。

『超空間に異常発生、超空間に異常発生。謎の人物が6名こちらに向かっています』

「なんですつて!! 勇樹君！」

「はい、皆さん！」

佐々木の言葉に勇樹は答えると、太田たちは武器を構えて超空間の出入り口である装

置まで行くと、装置は突然起動して超空間の一種・時空間が見え始めた。

「もしかして勇樹君、ブン・ボーグのみなさんですか?」

「まだ分からないぞ、もしかしたらタイムマシンで落ちてしまつてここにたどり着いた者かもしれないぞ」

百合子が心配そうに言うのと中式が理論を言う、そしてそれを聞いた幹子は「そうだね、慎重に見てみよう」と答える。その瞬間。

ジ…ジジジジツ

ビリビリビリツ!!!

ガンガラガツシャーン!!!

「うわああっ?!?!」

突然装置から煙と電気が出てきて爆発すると同時に、その時空間から6つの何かが勇樹に当たつて壁を突き破つた。

それを見た太田たちは「勇樹君!」と驚いて壁が抜けたところまで急いで行く。

.....

「お、重い………いつたいなんだ?」

彼がいるところは、メカの部品や資材がたくさんあるガラクタ室にいる。

しかし石川勇樹は現在、何かに押し潰されているので身動きはあまりとれない。出来るだけ手を動かしてみることにすると。

むにゆうっ

「ぶ、ぶぐっ。なんだ……?!」

勇樹の頭に乗っかる重いもの。だがそれはとつても柔らかくまるで水風船のように柔らかいかなぜか温かさが残っている。

一体何かと彼は見上げると、そこにあつたのは。

「ぼぼぶっ!」

それを見た彼は顔を真っ赤にして、瞬時にそこか出ると後ろに下がり、電柱に抱きしめた。

彼が握ったもの、それは黒髪のパニーテールをした一人の少女。彼はその少女の胸を思いつきり驚掴みをしたのだ。

「ど、どどどど、どうなっているんだ!」

突然の事態に彼は理解しようとしても混乱してしまい、あたふたしている。

すると、彼は何かに気づいたのかある想定を考える。それは。

「待てよ、これはもしかや超空間吸い込み現象じゃないか?」

それに気づいたのか、紙とペンを懐から出して何かを書き出す。

するとガラクタ品からガラガラツと崩れると同時に、5人の誰かが出てきた。

勇樹は音に気づいたのか「なんだろう」と振り向いて数秒後……。

「ヴお言えrノアp路gじゃおんぼrgじゃおん@じえおrgほsじえお!!!」

姿を見た彼は顔を青くすると同時に天井に飛んでパイプに捕まる。

それを見た者はジト目で見ている。すると。

バガアアツ!!!

「勇樹君、大丈夫ですか?!」

突然扉が内側から外れると同時に太田たちが駆け込んできた。勇樹は「だ、大丈夫だ

よお」と弱気な声で反応する。

すると黒髪の前髪がぱつっんとした者が「待つてください!」と言い出す。

「ここはいつたいたいどこですか、そしてあなたたちはいつたいたい誰ですか?」

それを聞いた勇樹たちは「え?」と目を丸くした。記憶喪失かどこから来た異人の可

能性が高い。

ここまで来るのにタイムマシンが必要だが、それが無い。タイムマシンがない!!記憶

喪失の可能性は低い、だとしたら異人……そう、つまり。

「勇樹君、これって他の世界から来た人たちじゃない?」

「ああ、オレも今そう思ったよ」

そう、この時勇樹たちは影のシノビと異能使い達と出会う。そしてこの後、とんでもない事件の幕開けだと知らずに。

## 『閃乱カグラ ケイオス・ブラッド編』第一話『みんな一旦バラバラ』

「国立半蔵学院？ 初めて聞くな」

「そちらこそ、珍等師学園高等部と言うのは初めて聞きます」

そう言うのは、奇跡の一員である石川勇樹と国立半蔵学院の生徒である斑鳩であった。

初めての女性であり巨乳と言うところがあるため、勇樹は苦手であったため彼の隣には百合子がいる。

「初めて聞く名前なので少し驚きましたが。まさかここは勇樹さんの研究所ですか？」

「研究所つと言ったら言えなくもないが、正式にはオレたちの隠れ家みたいなところだよ」

斑鳩はそう言いながらあたりを見渡して言うと、勇樹はカバンから設計紙を出しながら答える。

設計紙を見た斑鳩は「これぐらいですか!？」と目を丸くして驚くと、百合子と勇樹は「それぐらいです」と答える。

「あれ、斑鳩さんは確かシノビでしたよね？　もしかしてそちらの方も大きいのでは？」  
「いえいえいえ、わたくしたちは学校の教科でそれほど大きくはありません!!」

斑鳩は早口で言ったため2人は「そ、そうですか」と答える。

すると彼女は「そう言えば皆さんは？」とあたりを見渡しながらいったため、勇樹と百合子は「あれ？」とあたりを見渡し数秒後……。

「勝手に移動しているね」

「そうだね……急いで探すぞー!!!」

勇樹の言葉に百合子は「は、はい！」と急いでいくが、斑鳩は目を丸くしてその場で座っている。

数秒後、百合子が戻ってきて「急いでいきますよ！」と連れて行くのであった。

.....

「うひひひ、これは幸せだなあ」

変態そんなことを言っているのは、葛城であり飛鳥と雲雀と柳生の後輩であり斑鳩とは同級生である。

彼女がそう言う理由、それは単純。彼女がいるところは勇樹の学校である『珍等師学園高等部』内にある女子更衣室を見ている。

ご存知だと思うが初めての人のため説明しよう、彼女は姉御肌で脚力はすごく細かい

のは苦手だが困ったことに彼女はちよつとした変態で、女のくせに巨乳好きである。そして彼女は「よーし入るか」と言いながら扉を開けるが……………。

「ちよつと待ったあああああああああ!!!」

突然の声と同時に耳に響く音に彼女は「うおおおっ!」と驚く、それと同時に地面から大型のC型ハンドが出てきて彼女の胴体・手足を固定する。

「な、なんだ!」

突然の事態に彼女は驚いていると、桃色のツインお団子の少女がやってきて「あなた、異常よ!」と言ってくる。

それを聞いた葛城は「な、なんだそれ!」と驚く。すると彼女は「風紀を乱そうとしたからよ、そして不審者で露出度が高い服をしているから捕まえたのよ!」と答える。

葛城は「そ、そうなのか!」と言うと「そうよ!」と彼女は答える。

「とにかく、あなたは一度反省室に行く事に決めたわ。暴れたらさらに罪は重くなるから抵抗禁止よ!」



少女はそう言いながら葛城を連れていく、それを見た彼女は「ちよ、それありかあああああ?!」と叫ぶのであった。

.....  
「わあく、おいしそうだね柳生ちゃん！」

「ああ、本当においしそうだな」

柳生と雲雀の2人は現在、この学校の近くにある商店街『珍等師ストリートA』にやっ  
てきている。そこにはいろんなお店が並んでいる。

その中で『キラキラスイート店』と言う店に2人はいる。雲雀は「早速入ろう！」と  
柳生を連れて入っていく。すると。

「あれ、あなたたちは？」

声が出たため2人は何かと振り向くと、そこには男女6人組がたたずんでいる。

「初めて見るけど、お名前は？」

「オレか？ オレは柳生だ。そして」

「びばりは雲雀だよ！ よろしくね！」

「初めまして柳生さんに雲雀さん、オレは岩田一史いわだかずしです」

「私は福島二葉ふくしまふたばです」

「ボクは福岡三太郎ふくおかさんたろう」

「あたし長野四音ながのしおん」

「僕は新潟五郎にいがたごろう」

「あたしは岐阜六巳ぎぎふろくみ」

自己紹介をしたみんなは、雲雀が「そろそろ店に入る？」と言うとみんなは入ってスイーツを食べる、この時雲雀が頼んだ『超スーパーウルトラハイパーパフェ』を頼んだ時、一史たちは驚くんであつた。

.....

「すごい、浅草と同じだね」

「ああ、しかしどんだけいるんだ」

飛鳥とユウヤは、現在この都市の商店街にるが。本日はお休み日和なのか多くの人があつてきている。

飛鳥とユウヤは浅草に毎日言っているが、桁が違い。思った以上により歩くのに大変。

すると、飛鳥が「あれ？」とある建物を見つける。

その建物は古民家風の建物でどくろマークの上の『WABISABI』と書かれてい

る。

「ワビサビ、なんかの店か？」

「あの様子だとそうだね」

2人は何かと思つて店に入ろうとするが、扉は開かなかつた。扉の前には『閉店』と書かれている。

するとユウヤは「ん、窓があるな」と飛鳥と一緒に窓からのぞくと、そこにいたのは。

.....

「ひい、ふう、みい。これで500万円だ」

「へえ、あんなガラクタ品があんなに儲かるとはね」

「で、でも本当にいいのかな？ あの人、僕……」

「それは大丈夫ですわ！ この円筆子が最高品のメカ作りますわ！」

4人の少女がお札が入っている箱を持ち上げて、奥の部屋に入っていく。不審に思つたのかユウヤは「あいつら、なんだ？」と言つた瞬間。突然。

ドガアアアッ!!!

「っ！ 飛鳥、離れろ！」

「う、うん！」

突然屋敷の一部が爆発するのを見たユウヤは、飛鳥を連れて屋敷から離れる。すると、屋敷はさらに爆発して中からあるメカが現れた。それは。

『ガアアアッ!!! ハアアアアッ!!!』

鎧武者型のメカだが背中にはしっぽと羽、そして兜には鋭い角が付いている。何より大きく目立つのは、竜の様に大きな顔が付いている。

「おい、なんだこのメカ？」

「鎧武者の様だけど………」

「正式には龍型のメカだってば！ てか、そんなのあり?!」

3人の少女がそう言うのと、円が「説明しますわ!」と解説する。

「今回のメカは、日本の伝統を利用した最強・鎧武者と流の威厳とエネルギーを利用した新メカ。名付けて『ドラゴン・武者メカ』ですわ！」

それを聞いた3人は「ほへー」と驚いている、円は「そんじゃー行きますわよ!」とレバーを動かすと、羽が広がると同時にジェットエンジンが出てきて空を飛んだ。

飛鳥とユウヤは、強風に吹き飛ばされない塔にしっかりと捕まっているため被害は少なくて済んだ。

しかし、いきなりのメカに2人は驚いている。

『公安特捜班俊作集』編

『公安特捜班俊作集』北陸殺人事件～プロローグ『事件前日』

プロローグ

『休学ですか……』

勇樹は生徒会長であるココアに質問すると、彼女は「そーだよ」と答える。

「しかし、なんで私ですか？」

「そーだねー……まあ一番の理由は頑張っているところかな？ 最近休んでいないから少しは遠い所で休んだ方が良いと思ってねー」

ココアからの言葉を聞いた勇樹は「はあ、そうですか……」と答える。

「どうせだからこの学園内でなく遠い所に言った方はどうかな？ 例えば……北海道もしくは東北、山陰か九州のどこか？」

ココアはそう言いながら4枚の旅行パンフレットを出すと彼は「そうだな……」とパ

ンフレットを見ている。

「それでしたら山陽にします、行つたことないので」

「ん、じゃあそれでいいよー」

ココアはそう言うと「それじゃあ、休学して楽しい旅行していきます」と言いながら生徒会室から出ていく。しかし、運命はそう簡単に変わらない。

勇樹が選んだその山陽で、ある殺人事件が起きるとは知らずに…………。

……

次の日、勇樹たちは山陽行きの新幹線に乗っているが。彼の恋人兼お友達の百合子も誘う予定だったが風邪のため本日にはなく、明日ごろ勇樹のところについて行く。

「しかしあの百合子さんが風邪とは…………」

勇樹はそう言いながらお茶をグビツと飲む。

ちなみに今いるのは彼の従姉である美樹幹子と薬品の知識が豊富で薬剤師の資格を持つている文・モスキート、幼いが運が高い祝福音、海外から来た日本好きのシャーロット・アレンであった。

「でも大丈夫かい、場所は山陽だから心配するが…………」

「そうだよお兄ちゃん、百合子お姉ちゃんが後から来るって言っても。ふくねたちはも

う刊行していると思うけど?」

「それ大丈夫だよ美樹姉、福音。こんな時になると思ってたね、百合子さんの風邪が治ったら、今いるところと泊まるところをLINKで伝えるよって言ったから」

「ほう、なるほど。それはいい手段だな」

文はそう言うのと、彼は「はは、まあ風はすぐに治ると思うけどね」と言いながら、彼は弁当を食べるのであった。

しかし先ほど言ったことであろう。実は彼らが行くのは山陽ではなくある場所であつたが。そうとは知らずに移動しているのであつた。

……そして、遅れてきた彼女、百合子・ビューティーも、迷うほど大変な事態になることとは知らずに、時は進んでいくのであつた。

次回『毒・第一の被害者発生……そして、鉄道探偵との出会い』



『公安特捜班俊作集』 北陸殺人事件く第一話 『毒・第一の被害者発生……そして、公安特捜班との出会い』

『第一話』

勇樹は現在、珍等師学園都市から大阪駅行きの新幹線に乗って移動し。そこで山陽行きの新幹線に乗り換える……はずだが。

「乗る新幹線、間違えた……」

彼等は山陽行きの新幹線ではなく、京都から北陸行の特急に乗って移動していた。なぜこうなったか、理由は簡単。

「まさか、あそこで間違えるとは……」

そう、乗る路線を間違えてしまったからだ。

大阪からは北陸本線の特急で輪島へ行くには湖西線・北陸本線経由の特急「雷鳥13号」8時10分発新潟行に乗ることになった。

「幸い、会長には話をしてもらったから、問題はないが。どうするんだ？」

文はそう言いながら電話をいじっていると、勇樹は「そうだね……」と悩んでいた。す

「そーだ！ ふくね、ここに行きたいけどいいかな？」

福音はそう言いながら一冊の本を出して彼に見せる、そこに書かれていたのは。

「輪島市？」

それを見て勇樹は言う、福音は「そう、輪島市！」と元氣よく答える。

「そこに行つて、うーん!! と、楽しい思い出を作るの!!」

「へえ、そこですか。たまにはいいね福音君、文君はどうだい？」

「賛成……ただ、旅館があれば別だが」

「確かに、そこに行くのはいいがせめて旅館があれば私も賛成だ」

「よーし、ふくねがちゃんと探すから、みんなは楽しんでいてね！」

福音の言葉に、勇樹は「そんじゃあ、そこに行きますか」と言いながらある人にメールを送信する。

しかし、この時気付かなかった……この行動が、まさか事件に発展するとは。

.....

「これが、急行「能登路」か」

勇樹たちは、現在輪島市まで行くことが出来る急行「能登路」に乗って移動している。

「ふむなかなかいいなこの弁当、ますのすしと言うのは初めて食べるな」

アレンはそう言いながら食べていると、モスキートは「そうだな」と言いながら食べ

ている。

福音は自分で作ったお菓子を持ってきていて、それをパクパクと食べている。

「ふう……（まあ、こういう日も悪くないな）」

勇樹はそう思いながら背景を見て思っていると、前の方から『ざわざわ』と何か声があることに気づく。

それを見た勇樹は「なんだろう？」と思いつながら、奥の方へと行ってみた。

1両前の車両に移動するとそこで目にしたのは……。

初老の男性が倒れていて、その近くにはご当地なのか分からないが弁当が落ちていた。

「お客様、大丈夫ですか!？」

駅員は、男性に意識があるかどうか確かめっていると。勇樹が「触らないで！」と言おうとしたが。突然「触るな！」と声が出たため、何かと見てみる。

彼はそう言いながら、男性の首筋を当てる。そして数秒後、彼は駅員にあることを言うとうと、その人は「わ、わかりました！」と急いで移動する。

その行動を見た勇樹はモスキートたちにメールをした。

『殺人事件が発生した』と。

……  
穴水駅に着いた勇樹たちは、鉄道公安と名乗る男性・高山直人は警察に話をして捜査に協力することになった。一方勇樹は探偵だということを話し『念のためですが、この弁当を調べてくれませんか?』と言って警察に行く事になった(少しは協力になれるかと思つたため)。

福音たちには、警察に少し行つてくるから遅れると言つたため。彼女たちは先に輪島に行く事になった。

「え、弁当じゃなくて、別のところから毒が出たのですか?」

勇樹はこの事件の担当の刑事である石井刑事から話を聞くと、彼は「ええそうです」と答える。

「どうやらこの人が缶コーヒーから中から『青酸カリ』と言う毒物が見つかりました……しかし正確には」

「薬、あの人が飲んでいた薬から出たんだな」

高山はそう言うと、石井は「はい、そうです」と答える。

「にしても、どうしてこいつが……?」

「そうですね、私にも少し……」

高山と勇樹はそう言っていると、1人の刑事が入ってきて「岩井刑事、男性を調べて

みました」と言い出す。

「おお、木山刑事。どうだった？」

「はい、死亡した男性は。木下万代66歳です。東京都内にある不動産の『木下不動産』の社長です」

「木下不動産か、彼がひとりで来るのは不審だ……ん？」

高山がそう言っていると、勇樹は黙って考えていた。それに気付いた彼は「おいどうしたんだ？」と言うと勇樹は「え、はい」と言い出す。

「実は木下万代ですが、私の友達が知っていると思います。少し電話してもいいですか？」

それを聞いた石井は「構いませんよ、何かの手掛かりになると思います」と言うとは「わかりました」と電話を出してある人物に電話した。それは……。

## 『公安特捜班俊作集』北陸殺人事件～第二話『被害者の関係と手掛かり』

勇樹は電話をかけて百合子たちに連絡をする。

「あ、百合子さん。今どこにいますか？」

『勇樹君？ 私たちは今能登半島の奥能登にいます』

百合子の言葉に「奥能登？」と疑問を浮かべる。

「百合子さん、その奥能登はどこに？」

『あ、すみません忘れていました。場所は石川県です。今から地図送ります』

百合子がそう言うと同時に、『ピロン』と着信音が鳴ったため、開いて中を見ると。能登半島の地図が写っている。

「なるほど、今そこにいるんだ……あ、そうだ。ところで百合子さん。アレンは今ですか？」

『あ、アレンちゃんは今お手洗いに行っていますけど。後でもいいですか？』

「そっか、お手洗いなら仕方ないな……わかりました。後でお願いします」

勇樹がそう言うのと向こうから『分かりました』と同時に電話が切れる。

「仕方ないな、すみません。少し疑問がありましたけどいいですか？」

勇樹はそう言うとう高山は「なんだ？」と反応する。

「なんで被害者は、急行「能登路」に乗ったんですか？」

「そうだな、言われてみればそこが気になるな」

「そう言えば、被害者が飲んだ飲み物に毒をどうやって入れて、それをどのようにして渡したのか、気になりますね」

「確かに、石井刑事。不審な客は？」

「はい、乗員乗客から聞きましたが、不審な客は見えていません」

「そうか……まあここで考えても何も発展はない、今は被害者が行くと思われた『能登半島』に行くか」

「わかりました」

「そこに行先は私が案内します」

「それじゃあお願いします」

勇樹と高山は、石井刑事と共に車で能登半島へと移動して行くことにした。

.....

能登半島に付いた勇樹と高山は、百合子たちと出会った。

「あ、百合子さん」

「勇樹君、こちらです」

勇樹たちは百合子と一緒にアレンがいるところへと行くと、彼女はスマホでなにかを探している。

「話は聞いている、その木下万代は。裏で何かしでかしたと聞いたがその実態はいまだ不明だ」

「なるほど、アレン。その被害者は昔何を？」

「ふむ、調べているがまだ分からないから少し大変だ」

それを聞いた高山は「そうか」と答える。

「そう言えば、高山さん。彼はどこから乗ってきたのか分かりましたか」

勇樹は高山に言うのと彼は「今南に連絡して調べているところ」と答えた。

.....

一方、南と小海は金沢駅内で聞き込み捜査をした。

「えっ、金沢から特急に乗った？」

「ええ、恐らく」

「金沢から12時43分発の特急「かがやき7号」に乗るのを確認しました」

駅員はそう言いながら時刻表を見る。日本の駅の時刻表は、非常にきっちりしている。ずれが少ないため目撃情報として有効である。



「そうか、南主任と小海さんは富山へ向かってください」  
「わかりました」

そして、南と小梅は。12時57分発の青森行特急「白鳥」に乗ると、富山へ向かった。

「どうします、南主任」

「……よし、富山県警にも協力しておこう」

そして13時38分。富山駅に到着し、南と小海は下車した。

「よし、富山に着いた」

「あっ、富山県警の人が来ているわ」

富山駅に迎えに来ていたのは富山県警捜査一課の柚木刑事と捜査主任の三船警部補が待っていた。

「富山県警の柚木刑事です」

「同じく、県警の三船警部補です。話は聞いています」

柚木と三船はそう言うのと小梅は「ありがとうございます」と言うのと、車に乗り富山県警に向けて発進した。

.....

「……そうか、わかった。ありがとう」

高山は電話を切ると、勇樹は「何かわかりましたか」と質問する。

すると彼は「わかる範囲で言うが」と言い始める。

「被害者の木下は金沢から乗ったことが分かった、そして小梅からは被害者の事をしる人が富山にいると聞いた」

「富山はここから遠いですね」

百合子はそう言うのと、勇樹は「確かに」と答える。すると美樹が「ま言つて来れば」と言つたため、みんなは「え」と驚く。

「美樹姉、どうしてだ？」

「僕たちはここを観光しながら被害者のことを調べるよ、君一人じゃ大変そうだし」

「そうだそうだ！ ふくねたちに任せろー！」

「助け合うのも重要だぞ」

美樹、福音、アレンはそう言うのと、いつの間にか百合子は「ということですよ」と石井刑事と話していた。

「確かにそうだな、ここは少し手分けして操作するか」

「わ、わかりました。それじゃあ美樹姉はアレンさんたちと一緒に例の被害者のことを」  
「わかった。じゃあ行くよ」

美樹はそう言うのと、勇樹と百合子と高山は富山に行った。

『公安特捜班俊作集』北陸殺人事件〈第三話『富山に発生した殺人事件』』

そして、勇樹と百合子、南と高山と小海は事件の捜査をしていると、第2の事件が起きた。

「えっ、何、殺人」

「ここでも発生したんですか!？」

「全くだ……」

「場所はどこだ」

「金沢市の浅野川大橋の河川敷だな」

「金沢市の浅野川大橋は……ここから近いですね」

「よし」

南と高山、勇樹と百合子は、第2の殺人現場である浅野川大橋へ向かった。

「南主任、高山君」

「小海の来てたのか」

「はい」

そう言っていると、1人の警官が高山達に声を掛けた。

「ご苦労様です…そちらの学生は？」

「今回事件の協力者の勇樹と百合子だ。話は上から伝えておいた」

高山はそう言うのと、勇樹たちは「よろしくお願いします」と頭を下げる。

現場には、被害者がナイフで刺されて死んでいた。

「被害者の身元は」

「被害者は東京の針尾精児さん、30歳です」

「なるほど…それで凶器これか」

「凶器はどうやらこのナイフだな」

「ナイフ、意外と身近な物で殺害しましたね」

「そうだな、ま。犯人の指紋はついていないが、逆に凶器が発見しただけでも手掛かりがわかるかもな」

勇樹はそう言いながら、凶器が入った袋を見る。

そして、金沢の殺人はすぐに特捜班に報告した。

「針尾精児……わかった、早速調査してみる。南達は引き続き捜査を続けてくれ」

「わかりました」

「勇樹は、百合子と一緒に」

「先ほどの事件と関係があるか少し調べてみる。百合子さんは  
針生さんのことも調べます！」

百合子と勇樹はそう言うのと、桜井と水野は被害者の針尾について調べることにした。  
.....

一方、南と小海、アレンと幹子と福音は金沢駅内で聞き込みをした。

「えっ、金沢から特急に乗った」

「ええ、恐らく」

「特急に乗ったってことは…時間とか分かりますか？」

幹子はそう言うのと小海は「それなら」と手帳を出す。

「金沢から12時43分発の特急「かがやき7号」に乗るのを確認しました」

「そうか、南主任と小海さんは富山へ向かってください」

「僕たちも行こう、アレンは福音と」

「わかった」

「わかりました」

そして、12時57分発の青森行特急「白鳥」に乗り富山へ向かった。

「どうします、南主任」

「よし、富山県警にも協力しておこう」

「もうすぐ着きますね」

富山駅に到着したのは13時38分、南と小海と幹子は下車した。

「よし、富山に着いた」

「あっ、富山県警の人が来ているわ」

富山駅に迎えに来ていたのは富山県警捜査一課の柚木刑事と捜査主任の三船警部補が待っていた。

『オリジナルクロスオーバー大ストーリー』編

『オリジナルクロス大ストーリー』編 第1話 忘年会編

## 前編

12月某日、イカ娘たちは大洗に聖グロ、サンダースにアインツォにプラウダ、黒森に知波単に島田愛里寿（彼女は今みほの戦車に乗っている）が集合場所だと思われる場所に来ている。

「栄子、ここであつていでゲソ?」

「そうなんだけどなあ、ここで合つていのか?」

イカ娘の言葉に栄子は答えるが、彼女は地図を真剣に見て答える。

なんせ、手紙の中には地図が入っているが、その地図には砂浜に星のマークが書かれているだけでそれ以外は何も書いていない。

「あたりには何も無いわね」

「不審な物は一つも……おいていないわ」

「どういう意味だ?」

「ダージリン、ケイ、アンチョビは周りを見ながら言うとか「どうなっているだろうねー」とのんきに答える。」

「ふむ、これは一種のたましではありませんか。私たちが陥れるために」

「だとしたら許さないわ！ しゆくせーしてやるっ！」

西の言葉にカチューシャは怒っていると、澤梓が「あ」と何かを見つけたかのように、声を出す。

「どうしたんですか澤さん」

「西住隊長、実はあそこに小さなモグラが」

みほは澤に質問すると、彼女は砂浜に指をさしていったためみんなは砂浜を見ると。

30センチほどの大きさをした小型のモグラ型のメカがたたずんでいた。

「なんだ、これ。モグラ？」

「でも、どうしてここに？」

アンチョビとカルパッチョはそう言うと、モグラは向きを反対方向に向けて、進み始めた。

「あ、追いかけるゲソ!!」

「待てよおい、行くぞ！」

イカ娘の言葉に栄子は戦車で移動すると、みほも「私たちも」と急いでイカ娘の後を



追い始めた。

.....  
20XX年、日本のA草の中心にある場所で、天星たちは集まっていた。

「ここに合っているが、本当か？」

彼は手にしている地図を見ながら言うが、あたりは人だらけ。紅蓮は「おかしいな」と言いながら地図を再び見る。

彼女たちもイカ娘同様、ある人物からの同窓会で地図に乗っている場所を頼りに来ている。

「まあ、あいつは嘘つかないだろうけどなあ」

「どう見てもいたはずだな、だがどうしてだ？」

綺羅とシルバーはそう言っていると、ユウヤは「ん、あれは」とある物を見つけた。

それは小型の雀型のロボットをした機械が彼らの目の前で飛んでいた。

「む……もしかして」

ユウヤは何かに気づいたのか、雀メカを見ていると、メカは向きを変えて移動し始めた。

ユウヤは「紅蓮、シルバー、綺羅。こつちにこい」と言うと、3人は「あ、ああ（えええ）」と目を丸くしながらも、ユウヤと一緒に、雀メカの後を追い始めた。

.....

20XX年、東京都の東京駅前に、名探偵ミューズの穂乃果たちが集まっていた。

彼女たちはいつもの服装と髪型をしているが、なぜかカバンをしていた。

「えっと、ここでもいいかな？」

穂乃果は招待状が入っている手紙を手にあたりを見渡しているが、勇樹たちの姿は見えない。

「もしかして、これは私たちをだますためのですか?！」

「それはいくら何でもないわね……でもどこに?！」

「さあ、私にもわからないわ」

海未は怒っていると絵里が落ち着かせるように言う、真姫はあきれながらあたりを見渡して、陽がいるか確認している。すると。

「おや、あなたたちは」

どこかで聞いたことがある声に穂乃果は振り向くと、銀色のロングヘアに色白の肌をした男性が現れた。

「イーブル……っ!!」

穂乃果はそう言いながら彼をにらみつけるが、イーブルは「おっと、落ち着いてください」と冷静に言い始める。

「今回は私たちも誘われてきました。戦いは一時休止。今回は休みましょう」

それを聞いた真姫は「それ、本当なの？」と言うと、「そーだよー」と黒髪のショートヘアで低身長青年、ウージーが答える。

「しっかしまあ、ここにないって言うとしたら、どこにあるんだ？」

「わ、わからない……でもこの地図に載ってるかもしれない」

オウフルはそう言いながら頭を抱えて言う、デッドがおびえながら冷静に答える。

すると、凜が「あれ？」と何かを見つけた。

「凜ちゃんどうしたの？」

「穂乃果ちゃん、実はあそこに象が」

それを聞いたみんなは一斉に凜が見たほうに向くと、1メートルほどの大きさをした象型のメカが立っている。

すると背中から画面が出てきて『着いてきて』と映し出される。

「もしかして、勇樹君の発明品？」

「だとしたら、このロボットは私たちを連れて行ってくれるようになっていてしょうか」

穂乃果とイーブルはそう言うのと、キルが「それじゃあ行くか」と言うのと、みんなは「そうだね」と答えて、急いで象メカの後を追いつめた。

すると象メカはそのまま穂乃果たちを連れて移動し始めた。

.....

モグラメカが付いた場所は、この鎌倉にある丘で何もなくて数十メートルの壁がたたずんでいた。

「ここ、ここが例の場所でゲソ……？」

「なにも、ないね」

イカ娘とみほは目を丸くして言うのと、カチューシャが「やつぱり騙された！」とご立腹。

「しかし、この土竜メカはどうしてここに」

「そうだな、そこは気になるな」

しかし、西とアンチヨビはモグラメカがどうしてここに連れてきたのか気になってい

ると、モグラメカの目が突然青い光を壁に向けて放った!!

「まあっ」

「何をするんだろう」

「っ！ すげい」

ダージリン、ミカ、愛里寿は驚いていると。壁の一部が突然ゆがむと。そこに異次元の空間が現れた!!

「ワオツ!! これってもしかして」

「タイムホール……意外なところにあつたな」

ケイは驚いた反応をするが、まほは冷静に反応する。

そしてモグラメカの背中から画面が出てきて『ついてこい』と映し出される。

「うーん、西住ちゃん。この土竜ちゃん、どうやらあたしたちをここの空間に入ってきてという反応をしているじゃない？」

「そうですね……。それじゃあ行きましよう!!」

杏は西住にそう言うと、彼女は例の空間に行く事を言うとみんなは「ええっ!？」と驚きの反応をする。

「しかし、これ以外何もありませんね」

「うーん、言われてみたらそうだね」

「それじゃあ! ここに行くか!!」

「そうね、このカチューシャが帰ったらいけないわね!」

「そうだな」

「はいっ、私もそう思います!!」

「それじゃあ、行こうか」

「みほさん、私も」

「行くでゲソ!!」

ダーズリンたちはそう言うのと、みほが「それじゃあ、行きましよう。麻子さん」と言うのと、彼女は「おうよ」と言うのと同時に戦車を例の空間に向けて発信していく。

みほだけでなく、大洗の戦車道のみんなに聖グロ、サンダースにアインツィオ、プラウダに黒森峰に知波単に継続、大学選抜とれもんは、例の空間に向けて発進すると、突然戦車が空間に入ると同時にまるでローラーでつぶされたかのように薄くなっていた。

モグラメカも、早速入ろうとしたが。何かを忘れたのか突然ある場所へと発進していく。それは後程のお楽しみに……? .....

一方、ユウヤたちは雀メカの後を追っていくと。雀メカは土管がたくさん置いている場所に付いた。

「なんだ、土管がたくさんある場所だな」

「しかしなんでここに……わかるか?」

ユウヤと紅蓮は土管を見ながら言うと、シルバーと綺羅は「さあ？」と目を丸くしながら答えたため、2人は「だろうな」とジト目で答える。

すると、雀メカは赤色に時計模様をした土管に止まると、綺羅が「ん、これって」と気付いていくと、ユウヤたちも彼の後を追い始めた。

「綺羅、これってもしかして」

「もしかしなくてもだが……見てみるか」

シルバーは綺羅に向けて言うと、彼は恐る恐る土管の中を覗こうとした。すると。

シユポツ!!

彼は掃除機に吸い込まれたかのように、突然土管に吸い込まれた。それを見たみんなは「げっ!」と驚きの反応をする。

「な、なんだこれは?!」

「土管に吸い込まれた?!」しかしなんで?」

紅蓮とシルバーは驚老していると、ユウヤは「なるほど」と何かに気づいたのか、雀メカを見ると。メカは顔を上下に動かした。

「紅蓮、シルバー。どうやら綺羅が吸い込まれた土管は、勇樹のところにつながる場所か

もしれないぞ」

ユウヤは2人に向けていると、2人は「本当（ですか）か!？」と驚きの反応をする。するとユウヤは「そうだ」とこの土管を開設し始めた。

「この土管だが、周りと違って模様があつて。雀のメカがなぜかここに止まった。そしてこの土管には『勇樹の世界へと行く入り口』と書いてある」

彼の言葉を聞いた紅蓮とシルバーは、急いで土管を見ると、確かに『勇樹の世界へと行く入り口』と書かれている。

「そっか、それじゃあ綺羅はここに入つていったんだ」

「それじゃあ自分たちも」

紅蓮とシルバーの言葉にユウヤは答えると、紅蓮が「それじゃあ、入るか!」と急いで土管に入っていく、シルバーも「そうですね」と入っていく、ユウヤも「それじゃあ」と土管に入つて勇樹がいる世界へと時空移動していく。

そして、雀メカもユウヤの後を追うかのように土管の中に入つていった。

.....

一方穂乃果たちは、象メカの後を追つていきついたところはどこにでもあるコンビニエンスストアの入り口。

希は「ここであつとるん?」と言うと、象メカは顔を上下に動かした。



「なにこれ、意味わかんないわ」

「ちよつと真姫、コンビニっていうのもわからないの？」

「し、知っているわよ！ ただ、なんでここに来たのか気になって」

真姫の言う通り、なんでここに来たのか彼女は分からない。しかしヘイトは「ま、行つてみるか」とコンビニへと入っていく。

しかし数分後、彼女はコンビニから出てこなかった。

「ヘイト……どうしたんだ？」

さすがのオウフルも心配になってきたのか、コンビニへと入っていくが。彼女もヘイト同様、コンビニから出てこなかった。

「ヘイト、オウフル……イーブル、これは」

「ええ、少し心配になってきました」

キルはイーブルに言う、彼は冷や汗をかきながら真剣に考え始める。

すると穂乃果が「私、行つてくる！」と急いでいったため、ことりが「穂乃果ちゃんっ！」と声を出す、彼女はそのままコンビニへと入っていった。

「穂乃果……まったく！ ことり行きましょー！」

「え、海未ちゃん!？」

海未はいきなりことりの腕をつかむと、そのままコンビニの中に入っていく。にこも

「私たちも行くわよー」と言うと、希と絵里は「わかったで!」「ええ、もちろんよ!」と言いい、海末の後を追い始める。

凜も「かよちゃん、真姫ちゃん。凜たちも!」と言うと2人も「う、うん!」「もちろんよ!」と答えて、絵里たちと一緒に急いでコンビニへと入っていく。

イーブルも「ここで考えるより、入っていきましょう」と言うと、キルたちは「おうつ」と答えると、そのままコンビニへと入っていく。

それを見た象メカは、入っていきこうとするが。何かに気づいたのか、突然向きを変えてある場所へと行き始めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

2065年東京都珍等師学園都市のある会場、その中にはいろんな道具や食料にいろんな発明品が置いてあった。

「さて、これで準備は完了」

勇樹はそう言うのと百合子が「勇樹君」と駆けつけてきた。

彼は「なんですか百合子さん」と言うと彼女は「実は」と、パッドを渡してきた。

「何々……なるほど」

勇樹はそれを見て数秒後、突然壁に行くと壁からレバーが出てきて「よいしょ」と一気に引いた。

すると、地面から無数のクッションと天井から大型のパイプと小型のパイプが出てきてクッションとパイプが10 m程来ると、突然停止した。すると。

ビジジツツ!!! バシユンツツ!!

『『『うわああっ!!』』』』

パイプから電気が流れると同時に、無数の戦車とユウヤたちと穂乃果たちが落ちてきて、クッションに着陸する。

「いてててっ」

「な、なんだここは?」

「それにしても広い所だね…っ」と

IV号戦車H型（D型改）から西住みほが出てきて、ユウヤ、そして穂乃果がクッションから立ち上がると。勇樹が「おいつす」と声をかけて数秒後。

3人は「あれ?」とあたりを見渡す。

「ど、どこですかここは?!!」

「会場って、こんなにも広い。いや、広すぎだろ!!」

「勇樹君、説明してっ!!」

3人は勇樹に向けて言うと言は「あ、えつ」と戸惑っていると、百合子が「あ、私  
が説明します」と説明し始める。

「ここは珍等師学園都市と言う学園都市で、今いる場所は勇樹君が用意した秘密道具『ミニドーム』と言うドームにいます」

それを聞いたみんなは「ええつ、てことは大都市?!」と言う反応をする。

イーブルたちと穂乃果たちは冷静、一度この町に来たからだ。

そして数分後、太田たちがやってきた。

.....

「おおつ、これがお前たちの町でゲソか!!」

イカ娘は、戦車から出てドームから外を見て感動している。

「うっへえ、これが勇樹たちが住んでいるところか。考えただけですごいな」

「そうね、でもなんだか賑やかね」

「うん、そうだね」

相沢家のみんなも窓から見て言うと、太田が「そこまでにぎやかじゃないよ」と苦笑

いで答える。

「ここが会場ですか、結構広いわね」

「はい。小さいですが、これでも広さは東京ドームの3倍もあります」

「そうか、しかし大変じゃなかった？」

「そうでもありません、プラモを使って組み立てるかのようにするので少し大変ですが、実際にやると簡単ですよ？」

「ワオ！ それはすごいわね!!」

ダージリン、アンチヨビ、ケイは奈々と一緒にドームの話をしている。

予想外の答えにケイは驚いていた。

「ふんっそれにしても広さは戦車は大丈夫だけど、私たちはちゃんと入れるの?」

「それは大丈夫です、こんな時にもあろうかと1万人ほど座れる専用の席を用意しています」

「おおっ、それはすごいですね!!」

天女はカチューシャの質問に答えると、西は「さすがだ」と言う風に感動する。

「しっかし、あたしたち以外に似たものがあるんだねー」

「そうだねー、そんなじゃあ本日はよろしくー」

杏はココアと一緒に話をして、握手をしている。

ちなみに、河島たちはこの世界にいる勇樹たちの生徒らと話をしている。

中には自分たちと同じ性格（もしくは体つきか趣味など）で意気投合している者がいる。

「つ、雅緋!? どうしてここに!!」

「ん、なんだ?」

「雅緋! なんてお前がここに!!」

「ふむ、そう言われても。私はここにいるのだが?」

「は、どういう意味だ。雅緋、俺様たちは秘立蛇女子学園の雅緋だろ!」

「蛇女子……? なんだそれは。私は忍ヶ丘女学館3年苦無組の黒井雅緋だが?」

「え……そ、そうなのか……?」

綺羅は雅緋と間違えて黒井雅緋と話をしている。綺羅意外に紅蓮とシルバーとユウヤも、雅緋と同じ者がいたため、少し戸惑っている。

「綺羅ちゃん!!」

「穂乃果つ!!」

「久しぶりだね!!」

「はい、本当に久しぶりです!!」

穂乃果は奇跡に新たに入ったメンバーである白夜綺羅と一緒にいる。まだ苦手なところはありますが前よりも明るくなっている。

.....

「それにしても、すごい人数だね」

「そうだな」

幹子は参加したメンバーを見て言っていると勇樹は答えて「さて開始すつか」とカバンからマイクを出そうとした。その時。

『ビビビツビビツ、追加人物が来ます』

「追加人物?」

「追加人物」と言う言葉に勇樹は反応し、例の装置へと行くと。すると。

ビジジジツ!!!  
バシユンツ!!

パイプからモグラメカと象メカが出てきてクッションに着陸した。

「あれ、どうしてモグラメカと象メカが?」

勇樹は目を丸くして見ていると、突然。

ギギツ……ギギギツ!!!

「ん、この音は？」

上から音がしたため、何かと上を向くと……。10mほどある大きな戦車が落ちてきた!!

「ちよちよちよっ!!」

それを見た勇樹は急いで離れると、その戦車はクッションで着陸するが振動が伝わり、勇樹が「おわっ!!」と驚くほどであった。

「なに今の音!？」

「あつちから音がしたでゲソ!!」

当然、この衝撃音にみんなは反応して急いでいく事となった。

それと同時に、モグラメカの背中からある人物を出すとその場から去っていった。

「一体何が……あら？」



千鶴が駆け寄ると、ある人物に彼女は反応する。それは。

「五郎さん、どうしてここに？」

「え、ち。千鶴さん!？」

意外なことに、ライフセーバーである山嵐五郎と磯崎辰雄、そして。

「なんでここにいてゲソ？」

「なんだ、いては悪いのか？」

「いや、そこまではいっていないでゲソ……少しは」

南風の店長も来ていた。さらには。

「いつかちゃん!!」

「っ!?! さ、早苗!?!」

栄子の幼馴染である長月早苗。彼女は真っ先にイカ娘の方に行くが、伊江が「ちよつと待ったー」と早苗を捕まえて気絶させた。

「待ってください。もしかしてこの戦車は」

妙子は何かに気づいたのか、大型の戦車に向けて言うと、キューポラが開くとある人物が現れる。それは。

「あ、イカちゃん！ ここにいたんだ」

「清美！ どうしてここに来たでゲソ？」

「このモグラちゃんが『戦車に乗ってきて』と映し出されたから、みんなと一緒に来たんだよ」

長谷中学でイカ娘の友達である紗倉清美と、彼女が部活をしている女子野球部員のみんなも乗っていた。

「あら、穂乃果さん。お久しぶりね」

「つ、ツバサさん!!? どうしてここに」

「いや、実はこの象のロボットに連れてこられて」

「そしたらここに来たの。あ、あと私たち以外に。千歌ちゃんたちも」

「え、千歌ちゃんたちも!!?」

ツバサたちの言葉に、穂乃果は反応し千歌たちがいる所へと走っていく。

.....  
「えーつと、おっほん。皆さんいいですか？」

スピーカーの声にみんなは反応し、あたりを見渡すと。舞台であろうところに勇樹が立っていた。

「今回、皆さんを集まってもらったのは……えつと確か……あつた。実は忘年会をしようと言う計画で、今日は私のわがままですが……つて、あつているのか？」

「囁んでいるな」

「うん、それも戸惑っているね」

勇樹の行動に麻子はジト目で言うのと、沙織も同意するかのよう to 答える。

それを見たココア会長は「まーまー勇樹ちゃん」と彼の肩をポンポンと叩く。

「か、会長？」

「ま、ここからはあたしに任せてよ」

ココア会長はそう言いながら、マイクを手にすると、「そんじやー」と言い始めた。

「今回は、勇樹ちゃんが突然『みんなを呼んで忘年会でもするか』と言い始めたため。突然だけど勇樹ちゃんのがままと、勇樹ちゃんが用意した豪華なごちそう&景品を受け取ってくれー！」

それを聞いたみんなは、頭にクエスチョンマークを浮かばせて、顔を傾けるが。ミカ

は何か気づいたのか「なるほど」と納得した。

「じゃあ勇樹ちゃん、例の装置を起動して。ウーロンとジャスミンも」

「わかりました!! それじゃあ、お願いしますよ先輩方!!」

勇樹はウーロンとジャスミンに向けて言うと、2人は「わかった!」「任せてねえ」と言いながらレバーを一齐に動かした。

すると、壁から薄い紙が出てきてお札をばらまくかのように投げ始めた。だが、紙は方向を変えながらある場所に着くかのようにゆっくりと落ちていく。

それを見た勇樹は「会長!」と言うと彼女は「ほいさつき!」とリモコンを出してスイッチを押した。

すると、天井から大型の散水版が出てくると、紙が置いてある場所に向けて水を放つた。

「ああつ!! 勇樹殿が用意した紙が!!」

「ちよつと、もつたいないじゃない!!!」

「うわあ、さすがに引くな……」

それを見た優花里とには驚きの反応をするが、ユウヤはジト目で紙を見てつぶやいた。だが。

ムクムク……ムクムクツ

「ん？」

麻子は、微かだが紙が少しづつ膨らんでいることに気づいた。そして紙をじつと見ていると……。

ムクムクムクツ!!! ボンツ!!

「おおっ!？」

紙は突然膨らんで長いテーブルとイス、そして大型の鍋やカラオケ判定装置などと言ったものが出てきた!!

「作戦成功ッ」

それを見た勇樹は、針が付いた装置をカバンに入れながら。にっこりと笑った。

「勇樹ちゃんが用意した豪華な料理は、大洗やサンダースなどの学園艦の各国の故郷料理にー、高級スイーツともつ鍋とキムチに水炊きなどと言った鍋料理と揚げ物とサラダバー、セルフだけどポップコーンと串揚げにドリンクバーなどを用意したよー！」

ココアはそう言うのと、みんなは「え、これ彼が用意したの物？」と驚きの反応をする。それ信じられないよね、だってこれをたった一人で用意したもの。」

「それじゃーみんな、席についてねー。席は予め招待状に書いてあるよー」

ココアはそう言っていると、優花里が「あ、確かに書いていますね」と招待状を見て発見する。

ここで、分からない人がいるため、少し簡潔に解説しよう。

東北方面・赤色の部分には、大洗・知波単・れもん・大学選抜チームとユウヤとA  
R I S Eが座っている。

北西方面・青色の部分には、サンダース・聖グロ・アインツイオと綺羅とμ、s m i c r  
ズが座っている。

西南方面・緑色の部分には、プラウダ・継続・黒森峰とシルバーとA q o u r sが座つ  
ている。

南東方面・黄色の部分には、南風・長谷学校の女子野球部委員・紅蓮とs a i n t  
s n o wが座っている。

「それじゃあ、みんな座ったー？　じゃあ、勇樹ちゃん。おねがーい」

「は、はい。わかりました！　では……っ」

会長は勇樹に向けて言うと、彼は顔を真っ赤にしながら紙を見る。そして……

「そ、それじゃあ。皆さん、今夜は楽しんでください!!　乾杯っ!!」

勇樹の言葉にみんなは「乾杯!!」と反応する。

……でだが、各チームの言葉も少しのぞいてみよう。

「乾杯」

「乾杯っ!!」

黒森峰は、まほが乾杯すると。戦車道履修社が一斉に乾杯する。

「今夜も、素晴らしい祝い事に。乾杯」

「乾杯」

聖グロは、さすがお嬢様学校だろうか。落ち着きながら乾杯する。

「今夜も楽しむわよっ！　チアーズ!!」

「チアーズ!!」

サンダースは、明るさと元気が取り入れなのか、一斉に乾杯をする。ちなみに、チアー

ズは日本語で乾杯。

「こつちも負けないわ! ypa(ウーラ)!!」

「ypa(ウーラ)!!」

プラウダは、小さなながらもカチューシャが乾杯すると、プラウダの生徒も乾杯する。ロシアって非常にややこしいね。

「今夜は楽しめ!! チンチン!!」

「チンチン!!」

アンツイオは、アンチヨビが声を出すとみんなは一斉に答える。ちなみに、チンチンは日本語で乾杯であり、変なことではないので安心してください。

「私たちもだ、乾杯っ!!」

「乾杯!!」

知波単は、西の勢いある言葉にみんなは一斉に反応する。しかしすごい学園であるのか、迫力は誰よりも負けない。

「キピツス」

「キピツス!」

継続は、ミカが冷静に乾杯すると、ミツコとアキが元気よく乾杯する。まほの次に冷静に乾杯するものがあった。



「かんぱーい!!」

戦車道をしている大洗の生徒は、元気が良いところがたくさんある。

「それじゃあ、こっちも」

「かんぱーい(でゲソ)!!」

れもん・南風のみんなも一斉に乾杯する。

「それじゃあ、我が女子野球部も一緒に」

「乾杯!!」

長谷中学の女子野球部も、れもん同様、乾杯をする。青春があつてうらやましい…。

「それじゃあ、私たちもやろうよ!!」

「そうだね穂乃果ちゃん、海未ちゃんも」

「はい、わかりました」

「千歌ちゃんも一緒に!」

「わかりました穂乃果さん!!」

「ふふ、じゃあ私たちも」

「やろつか」

「それじゃあ、乾杯!!」

『乾杯!!』

μ s・A q o u r s と A | R I S E ・ s a i n t s n o w は、みんなと一緒に乾杯をする。こういう時にやることはなかなかない。

「では、私たちも」

「乾杯」

イーブルはあまり騒ぎを立てないように乾杯をした。少し寂しいが、仕方ない。

「ユウヤ、俺らもやるか」

「ふう、そうだな」

「それじゃあ」

「いつせーのーで」

『乾杯っ!!』

ユウヤたちも、一斉に乾杯する。敵味方関係ない瞬間だ。

「それじゃあ、勇樹ちゃん。あたしたちも…」

「そうですね、皆さん!!」

『かんぱーい!!』

勇樹たちも乾杯をするのであった。

## 『オリジナルクロス大ストーリー』編 第2話 忘年会編

## 中編

「おいしいっ!! このもつ鍋、初めて食べるっ!」

「ほんとっ! 鍋もだけど、肉じゃがにとんかつにサバの味噌煮もだよーっ、なんでだろう?」

「フグの刺身もあることに驚きました、ハムハムっ」

「ここカレー、お肉が牛以外に鳥や豚があることに驚きましたっ! 野外ではありませんでしたけど、これはこれでいいですね!」

「ケーキもあることはうれしい」

あんこうチーム基みほたちは、料理驚きながらも淡々と食べている。

「椅子と机がイギリス風、さすがですわね」

「紅茶専用のドリンクバーもあるのは、私も初めてです」

「しかし、どうやってこのようなものを集めたか、少し気になるね」

「はあ、言われてみましたらそうですね」

「ま、ここまでもてなすっことは。相当感謝しているっことだな」

「そうですわっ！ それじゃあわたくしは少し料理を持つてきますわー!!」

「お、おいつ！ 全く、まあ今はいいか」

聖グロがいるところは、椅子と机がイギリス風で。紅茶型のドリンクバーが特設されている。

ペコ同様、アツサムとニルギルもそれを見て驚いている。

ローズヒップは席を立ちあがって料理をとりに行くのをルクリリは止めようとするが、紅茶はこぼしてしまいが、逆に平衡感覚が鋭くすぐれた一面があることを思い出して、いったん野放しにするのであった。

「ワーオツ！ すごいわね!!」

「西部のバーテンダー風の椅子と机、なかなかだな」

「それよりもなんで西部なの？ もっと近未来かと思ったのに」

「でも、アメリカと言ったら西武を思い出すつてもすごいよ!」

「そうだね、それにこのハンバーガーって肉厚でおいしいっ!!」

「ドリンクバーも種類豊富でフレンチフライとバーガーにつけるケチャップやマスタードなどが種類豊富って、サンダースにはなかなかないかもっ……!!」

「あ、このメダル。中がチョコレートだ。細かいところがあるよ」

サンダースがいるところは、椅子と机がアメリカの西部風で。フレンチフライとバー

ガーにつけるソース類に専用の装置も取り付けている。

ケイは、西部風に驚き。ナオミは冷静だが、アリサは「どうして西部」と言う風にジト目で見ている。

「さつすがだ!! ベネチアがモデルはすごいな!!」

「船の上に机とイスがあるのはレアっすね!!」

「固定しているから、揺れが少ないのはいいわね」

「よっしゃー、食べていくか!!」

「覚えてやるぞー!!」

「いただくぞー!!」

アンチヨビがいるところは、イギリスのベネチアとゴンドラがモデルとなった少し立派な船。

アンチヨビも、本場のゴンドラに喜び。ペパロニも豪華な椅子と机に目を光らせている。カルパッチョは大型の水槽の下に船を固定する太い柱があることに気づいている。

「うう、なんで雪なの。てかなんでかまくら!?!」

「しかしプラウダが入るほどの大きなかまくらがあるのはすごいです」

「んだの、それにこの雪は解けねごどに驚いだよ（訳：そうですね、それにこの雪は解けないことに驚きましたよ）」

「んだな」

「ですが、かまくらの中がロシア風っていうのもすごいですね」

カチューシャがいるところは、ロシアのクレムリン宮殿風のかまくらにいる。椅子と机もロシア風で豪華。

カチューシャは不貞腐れながらも椅子に座っている。ノンナは周りを見ながら椅子に座って疑問を浮かんでいる。アリーナとニーナはノンナの言葉に同意するかのよう  
に答える。

ノンナはかまくらの中がロシア風っていうのに興味津々。

「すごい真面目と言ったほうがいいだろうか？」

「てか、自衛隊風じゃなくなんで音楽風なの!? 質問したいわ!!」

「確か、バッハとベートーヴェンなどと言った音楽家は、ドイツ出身ですって、聞いたことがありません」

「本当か!？」

まほがいるところは、ドイツ風の机とイスがあり。机はピアノがモデルとなつてい  
る。

まほは興味津々で見ている。エリカはなんで音楽がモデルなのかイライラしている  
が、なぜかミュンヘンをいただいている。

赤星は、ちよつとした豆知識をすると。コジマは反応する。

「おおつ、これは素晴らしい。まさに和であります!!」

「西隊長、この畳。よく見たら本物畳であります!!」

「こちらも、座布団に染めているのはどうやら藍色であります!!」

「赤飯、炊き込みご飯、銀飯がたくさんあります!!」

「これは、もはや天の市場ではありませんか!?!」

西がいるところは、日本を表すかのように和風になっている。

床が畳で椅子が座布団になっていて、知波単の生徒らは大好評。ちなみに、銀飯は白米のことを言う。

「ソリがモデルって、少しメルヘンチックだね」

「そうかな。これが私たち載せきって少し狭いけど、個性があつていいと思うよ?」

「そうだねー、それに今にも動き出しそうだよ」

ミカたちがいるところは、フィンランドで有名とされているサンタクロースが乗っているソリに座っている。

少し狭いが、戦車と比べて少し広いため窮屈ではない。ちなみに机はちゃぶ台となっている。

「メグミたちも来てたんだ……むう」

「た、隊長！ こ、これには深い事情がありました!!」

「そ、そそうですよ!! 決して怪しいことは決してしていません!!」

「むしろ、私たち来ようかなーっと思ってきたのですよ!!」

愛里寿は……現在ご機嫌斜めで、本当は一人で来るはずだったがメグミたちも後からついてきたことに怒っている。

メグミらは隊長である愛里寿の怒りを鎮めるのに一生懸命であった。

「……ここが少し大洗の生徒たちの行動も見てみよう。」

「おお、これはおいしいねえ。干し芋をスイーツに使うてなかなかないじゃん」

「干し芋のミルクシューと干し芋の甘煮、干し芋サンドウィッチ。食べにくいじゃないか?」

「それでもおいしいそうだよ桃ちゃん」

生徒会は、杏の好物である干し芋を使った料理を食べている。本人は喜んでい

る。それを見た桃は戸惑っている、柚子は訂正するかのように言っている。ちなみに、桃は『桃ちゃん』と言われるのに嫌がっているのか「桃ちゃん言うな!!」と突っ込まれた。

「これは、さすが勇樹さん!! この料理は絶品だ!!」

「キャプテン、そうですね!!」

「男で一つで作ったのは、意外ですね」



「こちらも頑張りましょう!!」

バレー部は、キムチ鍋を真剣に食べているが。あまりの暑さに汗をかいている。

佐々木はバレー部部長の典子に言くと、彼女は「そうだな、よし。今度の冬に作るぞ!!」と決めるのであった。大丈夫だろうか？

「ふむ、これはおいしいな」

「イタリア料理にドイツ料理、高知と宮城の郷土料理がうまいな」

「ことわざで例えるなら、『鞍上人なく鞍下馬なし』だな」

「いや、ここは『快刀乱麻を断つ』だろ?」

「いやいや、そこは『自家薬籠中の物』ぜよ」

「それなら、『伝家の宝刀』だ」

歴女チームは、名前にちなんで場所を世界にして。イタリア料理にドイツ料理、高知と宮城の郷土料理を持ってきている。

勇樹の器用さに彼女たちは話していると、左衛門差が『伝家の宝刀』と言ったため、残りは『それだ!!』と答える。

「ねえねえ、このオムライスってもともと大きいのかな?」

「さらに配っていた状態だから結構すごいね!」

「お米もーから作ったとしたらすごい!」

「おー、この旗よく見ると私たちのマークが描かれている！」

「ほんと桂里奈？ あ、本当だ!!」

「ん……器用」

1年生たちは、オムライスを食べていて。非常に好評。まだ幼さがあるのか懐かしい味なのか、気に入っている者がいる。

桂里奈が見つけた旗には、ウサギさんチームがモデルとなったウサギのマークが描かれている。それを見た紗季は褒める。

「一応、私たちのはあるって勇樹さんから言われたけど……」

「白米に味噌汁、そして焼き鮭と漬物ね」

「なんでこれなのよ!?!」

風紀委員のそど子、ごも代、パゾ美はきちんとした場所で座っている。風紀委員と言うことを考えて用意したのだろうか。

しかし、なぜか朝の朝食ですと言わんばかりの食べ物があったため、そど子はツツコミを入れる。

「へえー、この器って確かソアラだね」

「こっちはフェラーリだ、凄いものだね」

「あ、この器だけど『自動車部の皆様に差し上げます』って書いている！」

「おおうつ、これはいいお土産じゃん！」

自動車部のみんなは、歴代の車がモデルとなった器で食べており。その器は自動車部が使用しているトヨタ・ソアラに世界最速の車・フェラーリなどがモデルとなっている。

この器が持ち帰ることにツチャは言うのと、自動車部のみんなは大喜び。

「おおうつ、これは非常にうまいにゃ！」

「一緒に食べるのはおいしいけど……」

「こういうところで食べるのも、たまにはいいかも!!」

ネットゲ部のみんなは、今まで会う機会がなかったが、戦車道がきっかけで最近会えるようになった。

また、食事もなかなかなく。このような場所で食べるのはめつたにないことに感動している。

「ふう、ここまでうまいのは楽しいが。飛鳥たちを誘えばよかったな」

「ほんとだな。焰たちもくれれば『これで1週間は生きれるぞ!』と大喜びすると思う」

「だが、こんな量の料理をどこから?」

「そんなのは後回しだ!! さっさと食うぞ!!」

ユウヤと紅蓮は、料理のおいしさに喜んでいるが。飛鳥たちを誘って来ればよかったと少し後悔している。

シルバーはどこから作ってきたのか気にしているのか、料理を見ながらつぶやいているが。綺羅はそれを気にせずどんどん食べている。

「おいしいっ！ これはすごいね!!」

「ええ、ほむまんもあることに驚きましたよ」

「チーズケーキもあるから、ことり、幸せえー!」

「ラーメンのセルフもあるから、うれしいにやー!!」

「ご飯もありますから幸せです!!」

「本当にすごいわ。この世界三大珍味も以外ね」

「ほんまやね、うちもうれしいで」

「ええ、本当ね希」

「この味を再現するとしたら、大変ね……むむむっ!」

「*ts* たちも料理を食べていて、メンバー全員で食べるのは久しぶりでいつもより輝いている。」

ただ、にこは味を覚えるのに必死である。

「うわあつ！ 私の旅館で作る料理と同じだ!!」

「うん、そうだね千歌ちゃん!」

「でもどうやってこれを作ったのか気になる」

「ふふふ、この墮天使ヨハネ。この天界をいぎ!!」

「善子ちゃん、うるさいぞら」

「おいしいね、お姉ちゃん!」

「ええ、本当においしいですわね」

「さすがだね、これは」

「うーん、さつすが勇樹ね!! マリーにはまねできないわ!」

A q o u r s たちも料理を食べていて、メンバー全員で食べるのは久しぶりでいつもより輝いている。

ただ、ここは味を覚えるのに必死である。

「さすが勇樹です、これはおいしいですね」

「む、ヘイトよりおいしい」

「これは少し、嫉妬しちゃうなーボク」

「怒るな、ここで騒ぐとややこしい」

「ああそうだ、ここで騒いだらややこしいからな……にしてもうめえな」

「ん、本格的だから少し間違えそうだな」

「え、ええっ!? そ、そうかなあ?」

J J のメンバーも、勇樹の料理を食べて少し褒めるが、根っから悪人。

悪口は多少いうが、意外な一面を見せる。

「ん、本当ね。これってどうやって作ったのか気になるわ」

「そうだな、彼の腕前はプロ並みだな」

「いやプロと言うより五つ星じゃないかな？」

「それだよ！ 料理の教官も驚きだと思っただね!!」

「姉さまったら……もう」

A—RISEとsaint snowも、勇樹の料理を食べると褒めたり驚いたりしている。

正直レストランに出してもおかしくなほどだというほどと言っている者もいる。

「おおーっ!! すごい量のエビでゲソ!!」

「こりゃ驚いた。あいつこういう一面があるんだな」

「すごいわね、アルバイトをしていた結果なのかしら？」

「うん、千鶴姉ちゃんと同じ腕前だね！」

「す、すごいです」

れもんと南風のみんなも、料理を食べていて。イカ娘の好物である大量のエビが用意されている。

アルバイトの結果であろうか、思った以上に料理が用意されている。

.....  
 「さて、そろそろだな」

ココアは何かを囑っていたのか勇樹に「それじゃあ、やる？」と言うと彼は「そうですな」とマイクを手にする。

『全員、ちゅーもーく!!』

勇樹の言葉にみんなは反応して、ステージの方へと向く。

「さて、皆さんが盛り上がっているとありますが。今回はちよつとした定番の者を用意しました!! 少々お待ちください!!!」

勇樹はそう言いながらステージから降りると、何かを探すかのようにガサゴソと音がる。

「みぽりん、定番って何だろうね？」

「うーん、勇樹さんが考えることだから少しわからないかも」

「あいつ、どんなものを出すんだ？」

「結構やばいものだったりして？」

「それはもしかしたら、ガチャじゃないかな！」

「どこが定番ですか、穂乃果」

「あ、わかった!! ゲーム大会かも！」

「千歌ちゃん、何のゲームなのか言わないと」

「ふむ……これは分かりませんね」

「私もだ、彼は何を出すんだ？」

「もしかして、釣りとかでゲソ」

「そんなもん、用意するわけ……ありそうだな」

みんなはなにかとザワザワしていると。勇樹が「あ、あったー」と大型の何かをステージへと出した。それは……。

『『ビンゴマシーン』!!』

大型の画面が付いた装置・ビンゴマシーンを出してきた。

あまりの大きさに、一部からは「でかつ！」と驚くものがいた。

「そんじゃー、ここからは勇樹ちゃんではなく。太田ちゃんと暗山ちゃんが説明するっ





イーブルが言うのと勇樹は「そうですね、簡単に言えばそう言うことになります」と答える。

「そんなじゃあ、カードを配りまーす。ポチっと」

太田はそう言いながらスイッチを押すと、ステージから四角い形をした戦車が出てきて、何かを発射された。

そのなにかは、みんなの前に行くのと形を変えて、ピンゴシートに変身した。

「ふむ、これは少し面白そうだな」

「運と言ったも、当たるかどうかは分かりませんわね」

「面白そうじゃない、私もやってみるわ!!」

「よーし、これは何としても当てて見せる!!」

「プラウダが負けるわけにはいかないわ!!」

「いざ、知波単の名に懸けて!!」

「ふふっ、やってみよう」

「っ、緊張しそう」

「頑張るでゲソ! みほ!」

「え、うん。イカ娘ちゃん、そうだね」

「何が当たるのかなあ?」

「気になっちゃいます！」

「景品か、まあ当てるだけ当ててみるか」

「ふふ、受けてみましょう」

みんなのやる気に、太田は「それじゃあ、配り終わったみたいですし。早速ビンゴ開始だー!!」と同時に、スイッチを押すと。画面にある文字が映し出される。それは……。

『現在の時刻、ただし分の部分がビンゴの番号』

それを見た瞬間、勇樹は「えっと時間は」と確認し始める。

「現在の時刻だが、8時43分。43だ。」

勇樹がそう言うと、一部から「あ、あった！」と反応がしてきた。

「出先がいいわね」

「ふふん、これくらい余裕よ！」

「あ、私もあった」

「む、私もだ」

「見つけたー！」

「えっと…あ、あったわね」

「はっけーんつと」

「おお、見つけたぜよ」

「私もだおりよう」

「お、あのガキンチョのおかげだ」

「あつたにやー！」

「あ、凜ちゃん。私もあつた！」

「見つけたずら！」

「へっ、あたしも見つけたつと」

ダージリン、カチューシャ、愛里寿、麻子、桂里奈、エリカ、杏、おりようと左衛門

佐、綺羅に凜と花陽、花丸とオウフルは見つけた。だが。

「ふむ、初めに見つけるのはなかなかないから仕方ないな」

「Oh、NO…：：難しそうね」

「ありや、あたらねーべ」

「あーなかったあ、ミカは？」

「私もなかったよ」

「むむむっ！ これはインチキか!？」

「桃ちゃん、考えすぎだよ」

「西隊長！ 福田外しました!!」

「何ッ!? あ、私もだ」

「つつたく、なんで外すんだ」

「なかつたわね」

「せやな絵里ち」

「墮天使は、決してくじけない!!」

「あ、外れた」

「ううっ……なんで外れるのですかあ……あうっ」

まほ、ケイ、アリーナ、アキ、ミカ、モモと柚子、福田と西、ユウヤ、絵里と希、善子、聖羅、デッドは外れてシヨックしている者がいる。

「穂乃果はどうでしたか？ 私は当たりましたが」

「うーん、まだなんだ」

「そうですか。千歌は当たったようです」

「え、そうなの!？」

穂乃果は43がないか探していると、海未からの報告に反応する彼女。

.....

「じゃあ、次行くぜー!!」

伊江が言うと同時に、スイッチを押すと。画面にある文字が映し出される。それは……。

『ウサギさんチームの平均身長、ただし下2桁で』

それを見たウサギさんチームは「えつと確か」と考え込む。

「確か、私は151センチほどあったね。あゆみは？」

「160センチ、紗季は？」

「……150……」

「桂里奈は145ー! 優季は？」

「145だよー、あやは？」

「えつと、150だよ」

「それじゃあ、これらを足して6で割ると……約150cmになるね」

梓がそう言うのと、優季が「それじゃあ」と言い始めた。

「私たちは50センチだねー」

そう言うのと、先ほど同様。一部から「あ、あつた！」と反応がしてきた。

「あ、ありましたわー！」

「あ、あつたわ!!」

「つと、こつちもだな」

「こつちもあつたつす!!」

「あつたべー!!」

「む、あつた」

「キャプテン見つけられました!!」

「でかしたぞ近藤!! あ、私もあつた」

「あつたー!!」

「桂里奈凄い!! あ、私もあつた」

「あつたにや、これはいいことありそう」

「私もだつちや!」

「つと、次はあつた」

「あ、あったわー！ にこもあったわ!!!」

「すごいやんにこっち、あ。うちもあった」

「ありましたわ」

「おお、ボクもあった」

ローズヒップ、アリスとナオミ、ペパロニ、ニーナ、まほ、近藤と磯部、桂里奈とあゆみ、ぴよたん、ユウヤ、にこと希、ダイヤとヘイトは見つけた。だが。

「はずれですか、はあ」

「外れた。心配になってきたぞ……」

「む、当たりませんでしたね」

「当たりませんでした」

「あー、だめだあ当たらないよ」

「あ、あった……あ、外れでした」

「うわあ！ 外れた！」

「外したわ、でもまだチャンスはある。落ち着きましょう」

「外れた、早くイカの人よりも先に手に入れないと！」

「外れたずらあ……あう」

「あたりなし、ふう。これは難しいですね」



「むう、外れだ」

「あたりなし……あらら」

「外れか、まあ少し落ち着こう」

オレンジペコ、アンチョビ、クララ、パゾ美、ミッコ、池田、ツチヤ、千鶴、渚、花丸、英玲奈、シルバー、キルは外れてシヨックしている者がいる。

「千歌ちゃんはどう？ 私は当たったけど」

「うーん、まだなんだ」

「そうなんだ。穂乃果さんは当たったよ」

「え、本当!？」

千歌は50がないか探していると、曜からの報告に反応する彼女。

.....

ここからは少し時間がかかるため、ダイジェストに解説しよう←

3：漢数字が入った名前は何名？

1名（アンチョビの本名は、安齋千代美）

4：眼鏡をしている人物は何名？

9名（福田、大野あや、武部沙織、河島桃、猫田、おりよう、ルミ、根倉、紗倉清

美）

5 : あだ名で呼ぶことがある人は？

43名(自動車部とネットゲ部、ローズヒップとオレンジペコ、ダーズリンとアッサムとルクリリ、ニルギル。ケイ、ナオミとアリサ、福田、池田、細見と玉田と寺本と名倉、ノンナ、クララ、カチューシャ、アリーナとニーナ。バミューダトリオとミカとアキとアッコ、アンツイオ高の生徒、そしてシンディーと風紀委員)。

6 : 姉妹、もしくは兄弟がいるの人はいるか？

25名(西住、相沢家、アンチョビ、河島桃、武部沙織、磯部典子、近藤妙子、河島忍、澤梓、山郷あゆみ、大野あや、小山柚子、園みどり子、金春希美、ナカジマ、スズキ、ホシノ、ダーズリンとアッサム、ケイ、ナオミ、逸見エリカ、高坂穂乃果、絢瀬絵里、高海千歌、黒澤、鹿角)

7 : 今夜の最低気温は？

18°C

8 : 勇樹の体重

81キログラム(当時16歳)

9 : A q o u r s の最長―最低の身長差

11センチ(小原鞠莉(163)―国木田花丸(152))

10 : 千鶴さんが料理をした時の時間

2秒（ちなみに作ったのは、チャーハン、カレー、から揚げ定食、かき氷のメロンであった）

11：大洗が優勝したのは、第何回？

63（公式認定です）

と、このように何度もやった結果、当たった者がいれば外れるものがあった。そして…

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『カール自砲臼砲が完成されたのは、19何年？』

文字が浮かび上がったため、秋山が「1937年ですね」と言うと。みんなは「37」を探し始めた。そして……。

「あ、ビンゴだつ!!」

栄子が、ビンゴ画面のマスが斜めに揃ったため『ビンゴ』と言うと、みんなが「ええつ!?」と驚きの反応をする。

「おー、さすが栄子ちゃんねー。勇樹ちゃん」

「はい、喜んで!!」

ココアはそう言うと勇樹は栄子をステージへと連れてきた。

「さーて、初めてのビンゴが揃ったのは相沢栄子ちゃんだけど。正直どう？」

「えっ？ そ、そうだなあ。初めてビンゴをとったのは少しうれしいな、ほんと、うれしいよ」

ココアは栄子の話を聞いていると、千鶴は「すごい運ね」と言葉を漏らす、それを聞いたたけるは「そうだね、千鶴お姉ちゃん」と答える。

「そんなじゃあ、栄子ちゃんはこの機械を」

ココアはそう言いながらステージにある巨大な自動販売機型の装置に向けて言うと、彼女は「つて、いくら何でも」と汗をだらだらと流し始めた。

すると勇樹が現れて「違いますよ」と言い始める。

「この装置は、『欲しいもの販売機』と言う機械でして。この機械についているレバーを

動かせば、その人にとって非常に欲しいものが出てくる道具なんです」

それを聞いた栄子は「本当か？」と言うと彼は平常心を保ちながら「本当です」と答える。

「んー、まあ何が出るか分からないが。やってみるか」

栄子はそう言いながら、自販機についているレバーを動かすと。自販機は『ガダガダガダツ!!』と上下左右に動いて数秒後、取り出し口だと思われる場所が開くとある物が出てきた。それは。

「えっと、何だこの植木鉢は？」

栄子が手にしているのは、植木鉢に小さな木（品種は紅葉）が付いた道具で。植木鉢には赤と緑のライトとスイッチが付いている。

「お、なかなかすごいものが出たね。それ結構いいものだよ」

「え、いいものっ!？」

勇樹の言葉に栄子は目を丸くして驚く。

「そ、この道具は『正じ木』と言って……って、話すより実際にやるか」

勇樹はそう言う。「おーいイカ娘、こつちに来てー」と言うときイカ娘は「わかったでゲソ」とステージへとくる。

「さて、試しにだけど……今日はバイトしたか？」

「ん？ バイトはちゃんとしたでゲソ」

「んー、確かにそうだな」

勇樹の質問に、イカ娘と栄子は答えると。彼は「まあ、普通はそうだね。でもそれが嘘だったら？」と言うと、千鶴が「それもそうね」と答える。

「そこで、この道具に向けて。先ほどのことを言ってみて」

勇樹はそう言うと、栄子は「あ、ああ。わかった」と言いながら、植木鉢をイカ娘に

向ける。

「そしたら、スイッチを押して。さっき俺が言ったことをこの機械に言う」

「ん？　なんでそれを？」

栄子は渋々と、スイッチを押して「イカ娘はバイトをしたか」と言う。すると。

シユシユシユシツツ!!

「な、なんでゲソ!？」

「げっ！　葉っぱが緑色になった!!」

突然、紅葉が緑色になる。それをみた勇樹は「あ、正直だね」と答える。

「このように、葉っぱが緑色になると。正直に答えているってことになる」

それを聞いた千鶴は「じゃあ、嘘をついていたら？」と言うと「そうですね」と言い始める。

「それじゃあ、イカ娘。千鶴に変なことしていなかったか？」

勇樹はそう言いながらスイッチを押すと。今度は……。

シユシユシユシユツ……。

「おわっ!! 枯れた?!」

今度は紅葉が赤色に変身した。それを見て勇樹は「うん、大丈夫だ」と答える。

「このように、紅葉は赤色になって。相手は嘘をついていることになります」

勇樹の言葉に栄子は「お、そう言う事か」と何か思いついたのか、イカ娘に見えないようにニヤリと何か考えた。

.....

「まだ景品はあるからねー、それじゃあ次行こう!」

ココアはそう言うのと、画面にはあるものが映し出される。

『以外だがお金持ちの人は?』



それを見たみんなは「あ、そう言えば」と驚きの反応をする。

「わたくしも、実家は確か。お金持ちではありませんが、稼働をしていました」

「私も、パパが医療をしているからわかるわ」

「わたくしとルビイもですわね、たしか小原さんも」

「そうね、学園長もしているわ」

「ふむ、私とみほもそうだな」

「私も……みほさんと同じ」

「斑鳩もそうだったな」

「あ、叢もだ」

華、真姫、ダイヤとルビイ、鞠莉、まほとみほ、愛里寿、ユウヤとシルバーがそう言う。太田が「えつと合計は10人だね」と数える。

「勇樹君、10だよ」

「あ、ありがとう勇樹。10か……誰か当たった人はいないか？」

勇樹がそう言うのと、ある人物が「あ」と声を出す。それは……。

「あ、あたったにやー!!」

「おっし、こつちもだ!」

「あ、あたった……あたったー!!!」

なんと、次に当たったのは大洗の戦車道をしている『ねこにやー』基『猫田』と、南風の店長とJJの『デッド・アルペリータ』が当たった!

「おお、なんと3名も当たったんだ。すごいじゃん」

「それで勇樹君。3人をここに移動させますか?」

ココアは感心するかのようには言っていると、百合子が心配そうに勇樹に小声で言ってきた。すると勇樹は。

「それは大丈夫、こんな時であろうかと……『それじゃあ、1度に多くビンゴが揃った人は。その画面に手を触れてください』」

勇樹はそう言うと、3人は「どういう意味だ」と思いながら画面に手を触れる。する

と。

ガダガダガダツ!!

突然自販機が上下左右に動いて数秒後、取り出し口だと思われる場所が開くと、3つ物が出てきて当たった人物に向けて発射して、受け取られる。

そして、自販機から出てきた物。それは。

「だ、ダンベル?」

「む、招き猫?」

「目覚まし時計……なんだろう?」

ねこにやーにはダンベル、南風の店長は招き猫、デッドは目覚まし時計を手に入れた。「おー、ねこにやーさんはすごいレアな物ですね。それは『ダンベル型充電器』ですよ。勇樹はねこにやーが持っている道具、ダンベル型充電器を言うと。彼女は「え、えつと。どういう?」と戸惑っている。

「ダンベル型充電器は、動かせば中についている小型の充電発生装置が作動して、電気をため始めることが出来る最新の装置です」

「な、なるほど。しかしそれは数百回やっても十分か一時間ほどしか持たないじゃ？」

「それは大丈夫！ その中には最新の装置が付いていて、わずか10分程度でも1時間分の電気が充電されるようになっていきます」

勇樹の説明を聞いたねこにやーは「おおお。そ、それはすごい！」と感動する。

「これさえあれば、ぴよたん殿とももがー殿と一緒に永遠に…感謝するにやー!!」

「すごいもも!!」

「これは永久に使える発明品だちゃ!!」

猫にやー以外に、ぴよたんとももがーも。勇樹の発明品に感謝することになっていく。

「それはいいが、少年。この道具は何だ？」

南風の店長は、招き猫を見せると。勇樹は「あ、それですか」と言いながら説明を始める。

「それは『カムカムキャットマシン』と言いまして、人口密度基、人を呼ぶことが出来る装置です」

「ふむ、それはいいな。しかしこれは制限があるじゃないか？」

「まあ、そうですね、この道具は範囲は100mから500m以内、時間は8時間しか持

ちませんが。福を呼ぶこともできる装置であり、中には人数設定することが出来ます」  
勇樹の話聞いた店長は「ふむ」と考え込む。そして。

「まあ、ライバル店には負けるが。少し使ってみるか。どうなるか気になるしな」  
「どうなるって……まあ、少しだけなら正直うれしいです」

店長の言葉に勇樹は苦笑いで答える。あと、少しでもうれしいんだ。

「ね、ねえ勇樹。私が受け取ったこの目覚まし時計は、なに？」

デッドは目覚まし時計を勇樹に向けて言うと、彼は「あ、それは」と鈍い反応をしな  
がらも、説明し始めた。

「それは『大音量型・目覚まし時計』と言って、設定した時間帯にすると。目覚まし時計  
が発動する道具です」

「なんだ、普通じゃん。ま、現時刻の1分後に設定してつと」

サスペクトはデッドから目覚まし時計を取ると、時間を設定してどれくらいの音か確  
認する。

それを見た勇樹は「ば、馬鹿ッ!! やめろ!!」と慌てるが、時すでに遅し。長針が設

定した時刻に合わさった瞬間。

ジリリリリリリリリリッ  
!!!!

まるで大音量で音楽を聴いている、もしくは一度に花火を見ていたときに音が激しすぎる。または、大人数が黒板で爪を立てて一氣にひっかく音に近い高い音と大音量が会場に響いた。

「ぎゃあああつ!! み、耳があつ!!」

「頭が痛いにゃー!!!」

「うわっ! メガネがって耳がっ!!」

会場にいたみんなもあまりの音にみんなは耳を抑えるのに必死。勇樹は「用意して正解だった!!」とカバンからリモコンを出してスイッチを押すと、目覚まし時計は止まったのであった。

「ふう……まあこのように音が響くから気をつけてな」

それを聞いたデッドは「わ、わかった」とあまたを動かすと、サスペクトに「……後

でお仕置き」と冷たい目つきで彼をにらみつける。

それを見たサスペクトは「お、お手柔らかに……」と汗をかきながら土下座をするのであった。

※ちなみに、大野のメガネは勇樹が修理し。陶器やコップ類は割れていなかった。

.....

「それじゃあ、ビンゴの続きをしよう!!」

ココアはそう言いながらスイッチを押すと、画面にはある文字が映し出される。

『ダージリンが言う格言を。オレンジペコではなく祝福音がやったら。何秒かかるか？』

それを見た中、ダージリンは「あら、それは気になりますわね」と面白い反応をする。「私の格言を答える人は、だれか少し気になりますわね」

「私じゃなく、福音さんがやるのですか……少し心配です」

ペコはそう言いながらステージにいる福音を見てみると、ダージリンが「では早速」とある格言を言い出す。

「こんな格言を知っている？ 『人生という試合で最も重要なのは、休憩時間の得点である』」

それを言った瞬間、百合子が「タイマー開始！」とストップウォッチで時間を図り始める。福音は「うーん、誰だろう？」と考え始めた。

「確か……フランスだっけ？ えつとジャンヌダルク……じゃない、シャルルマーニュじゃない……だとしたら、誰だろう？」

真剣に考えている福音にみんなは「(お願い、〇〇秒にして)」と真剣に願っている参加者。

すると福音は「そうだ、あれだー！」と何か思い出したのか、ある偉人を言い出した。それは。

「人生と言う試合で最も重要なのは、休憩時間の得点であるを言ったのは、ナポレオンだー!!」



それを聞いたダージリンは「正解」と言ったため、百合子が「停止、タイムは！」とストツプウオッチを見て時間を言った。

「時間は、32秒丁度、32秒丁度です!!」

32と言ったため、みんなは「32はどこだ?!」と急いで確認すると、ある人物が「あと声を出す。それは……。」

「ビンゴだ。横にそろったぞ」

「び、ビンゴです! 当たりましたー!!」

「凜もビンゴにやー!!」

「やっど、このカチューシャが当たったわ!! ビンゴよ!」

麻子、妙子、凜、カチューシャが揃い、勇樹は「お、揃った?」と反応する。

「会長、あなたからお願ひします」

「わかったよ、じゃあ揃ったものは。勇樹ちゃんがさつき行った通りに画面に触れて

ねー」

ココアが言うと、麻子たちは画面に触れると自販機が『ガダガダガダツ!!』と上下左右に動いて数秒後、取り出し口だと思われる場所が開き、4人にある物が放たれて手に入る。それは。

「枕?」

「えつと、バレーボール?」

「カップ麺?」

「何、このカメラ?」

麻子は枕、妙子はバレーボール、凜にはカップ麺。そしてカチューシャはカメラを受け取っている。

それを見た勇樹は「それじゃあ、前回同様、説明します」と言いながら、道具の説明をする。

「まず麻子さんが受け取ったその枕ですが。これは『枕型睡眠圧縮装置』と言いまして、低血圧・ナルコレプシー・シヨートスリーパーなどと言った睡眠障害などを解決するた

めに作った最新の道具です」

難しい用語で言ったため、みんなは「なんだそれ？」と頭を傾ける。

「麻子知っている？ 低血圧は分かるけど、ナルコレプシーっていう言葉」

「確か、一種の睡眠障害で、日中に突然、耐え難い眠気に襲われると聞いたことがある」

麻子の説明に沙織は「そうなんだ」と反応する。

「勇樹、それじゃあこの道具はわずかな睡眠から長い睡眠を解消することが出来るのか？」

「まあそうですね、一種の医療器具型の道具ですから、原因から解決法を教えてくださいます」

それを聞いた麻子は「そうか、それだったら安心できる」とつぶやく、帰ったら早速使うようだ。

「それじゃあ、私はバレーボールですが。なんですか？」

「あ、それは『スパルタロボット・バレーボールバージョン』です」

妙子の質問に勇樹は答えていると、典子が「それは本当ですか?!」と反応する。

「典子さん、本当です。バレー部のために訓練ロボットです。スパルタなので訓練機能

が搭載しています」

勇樹はそう言うのと、典子を含むバレー部は「やったー!!」と大喜び。

「キャプテン！ これで私たちは!!」

「ああ、バレー部復活も目の前かもしれない!!」

「よし、帰ったらやりましょう!!」

「賛成です!!」

張り切るバレー部に桃は「余計なことを」と勇樹をにらみつけるが、本人は悪気はない。

「ねえ、勇樹君。それじゃあ凜が手にしているこのカップ麺は?」

「そのカップ麺は、『インスタントカップラーメンメーカー』と言ってるね。好きな具材を入れてスイッチを押すだけで自動でカップ麺が出てくるのです」

それを聞いた凜は「それ本当?」と言いながら、試しに起動してみることに。

「凜ちゃん、それだったらこのコインとチャージシユーを入れてみたかどうか?」

「あ、それいいねかよちゃん!」

花陽の提案に凜は賛成すると、それを機械に入れてスイッチを入れる。

すると、カップラーメンメーカーは『プシュー!』と蒸気を出しながら作り始め数分

後、ふたが開くと中には『コーンとチャーシューの濃厚豚骨ラーメン』が出来上がっていた。

「わあっ、凄いにやー!!」

「それ、一度に入れるのは10品までだけど。コンピュータと電子機器が自動で食材にある味を計算して作り上げるのです」

勇樹がそう言うのと凜は「ありがとう勇樹君、大事にするね!」と喜ぶのであった。相当気に入ったようだ。

「ねえ、このカメラは何よ?」

カチューシャは不機嫌そうにカメラを手にして言ってきた。よく見ると、カメラにはお菓子のパーツが付いている。

「あ、それは『菓子カメラ』と言う最新の道具です」

勇樹がそう言うのと、プラウダの生徒らは「菓子カメラ?」と一斉に答える。

「えつと原理を説明しますと、例えば雲の成分を綿菓子と同じ成分にしてやるかのよう  
に、カメラがフラッシュするとフラッシュが自動的に綿菓子と同じ成分と含んでいない  
成分を調べて、その含んでいない成分を入れるようにしてくれるようになっていきます」

長い説明にみんなは頭からハテナマークを浮かばせていたため、勇樹が「まあ、実際

にやってみましょう」とカバンからコップを出してカチューシャがいるところまで走っていく。

「じゃあカチューシャさん、早速ですが。このコップをとってください」

勇樹がそう言うのとカチューシャは「入れなくてもわかってるわよ!」とカメラをコップに向けて標準する。

そして、カメラのスイッチを押すと『パシャッ!』と写真を撮る音とフラッシュがあたりを照らした。

「……何も変わらないじゃない」

コップをとったカチューシャは不満そうに言うと、勇樹が「すぐに変わっていますよ」と苦笑いで答える。

それと同時にコップを手にすると、カバンからトンカチを出し始める。

「な、何をするの!?!」

カチューシャはおびえながら言うと、そのまま勇樹はハンマーである物に向けて振り下ろした。それはなんと……。

バガツ!!

なんと勇樹がハンマーで振り下ろしたものは、先ほど菓子カメラで撮ったコップであつた!!

コップは氷のように碎けると、まるで石ころのように様々な大きさであたりに散らばる。

「な、なにをするのよ!! もう、怖かつたわよ……」

カチューシヤはそう言っていると、ニーナが何かに気づいたのか「これは」とガラスの破片を手にして数秒後、それを口に放り込む。

それを見たアリーナは「ニーナ?!」と驚くと、ニーナはある事を言い出す。

「甘え、こいはガラスじゃなくアメさ変わつてらよカチューシヤ様（訳：甘い、これはガラスじゃなくアメに変わっていますよカチューシヤ様）!!」

それを聞いたみんなは「えええっ!」と驚きの反応をする。

「私も試しに……っつ! 本当に甘いですね」

「私も……甘っ!!」

「んだんだ!」

「甘いべ!」

ガラス風のアメを食べていく光景を見たカチューシヤは「ちよつと! 私も食べさせ

なさいよー!」と言っていると勇樹は「あ、説明がまだあります」と説明し始める。

「このカメラで撮った本物はこのカメラで保存して、戻りたいときは赤色のスイッチを押します。するとインスタント用紙が出てきて、お湯をかけるだけで戻るようになっていきます」

それを聞いたカチューシャは「あら、それは便利ね。ありがとう、ユウキーシャ!!」とお礼を言う。

「どうもどうも……ユウキーシャって誰?」

途中、勇樹はカチューシャから与えられたあだ名に戸惑う。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「それじゃあ、ビンゴの続きをしよう!!」

ココアはそう言いながらスイッチを押すと、画面にはある文字が映し出される。

『自動車部が好きな車で、何年ごろはやったの?』

それを見た瞬間、ナカジマは「あーそうだねえ」と考え込む。

「言われてみたら何が好きなんだろう?」

「やっぱここは世界三大レースですべて優勝したグラハム・ヒルが乗っていたレース



カーかな？」

「いやここは、何でも乗りこなせた天才、ジム・クラークかな？」

「いや、コンピューターと言われたニキ・ラウダだよ！」

自動車部がやんややんやと言っていたため、杏は「時間かかりそうだねえ」と苦笑いする。

そして数分後、ナカジマが「決まりました」と言い始めた。

「好きな車はヘネシーヴェノムGT ですよ！」

それを聞いた前田美鈴は「確かそれは2014年ごろだね」と答えると、伊江が「じゃあ14だな」とあっさりと言う。

そして、続いて当たったのは。彼らであった。

「おっしゃー!! ビンゴっす!!」

「玉田!! 開いたマスが揃いました!!」

次に当たったのは、アンツイオ高校のペパロニと知波単の玉田であった。

「おー当たったんだ、じゃあ今度は……」

「私がやろう、それじゃあ揃ったものは。勇樹がさつき行った通りに画面に触れてくれ」  
勇樹の代わりに、今度はアレンは言う、ペパロニと玉田は画面に触れると自販機が『ガダガダガダッ!!』と上下左右に動いて数秒後、取り出し口だと思われる場所が開き、2人にある物が放たれて手に入れる。それは。

「うわでつか!! 何すかこれ?」

「ピンクの箱……なんでありませんか?」

ペパロニには大型の自動販売機、玉田は『Noogyo Setto』と書かれたピンク色の箱を手に入れた。

「じゃあ説明しよう。ペパロニが当たったのは『食材セット販売機』と言う自動販売機で、作りたいモノを言いながらお金を入れてスイッチを押すだけで、必要な食材が出てくる道具です」

「え、なんだ。これ無料じゃないっすねえ。ぶー」

勇樹の説明にペパロニは頬を膨らませて不満を言っているが、勇樹は「しかし」と説明をし始める。

「この道具に使用するお金は低コストなので10円を入れるだけで充分です、さらにセツトなので一度にたくさん出てくるようになっていきます」

それを聞いたペパロニは「本当ですか?」と疑っている。それを見たアンチョビは「それなら、試してみるか」とポケットから財布を出して、試しに10円を入れてみたと。

ガビギビビビイイツ!!!

突然販売機が動き、煙突が『ピーツ!!』と鳴ると、『チーンツ!!』と音鳴り響く。そして扉が開くと同時にあるものが出てきた。

それは緑色の包まれた大きな風呂敷。

「おわっ!! な、なんだ!?!」

「つと、これは……」

驚くアンチョビにペパロニは恐る恐る風呂敷をほどいて開けてみると、そこに入っていたのは。

イタリアでしか売っていない高級パスタの麺とトマトにチーズ、さらには日本で売っている最高級の卵が入っていた。

「うわっ、姐さん。これすごい高級な物ですよ!!」

「何ッ!? それは本当か!!」

ペパロニの驚きにアンチヨビは反応すると、カルパッチョが「本当ですね」と答える。

「おおっ!! これはすごいな、これらが10円でだったら非常に素晴らしい!!」

アンチヨビはそう言うと、ペパロニは「サンキューっす!!」と勇樹に言うと、彼は「どういたしまして」と答えるのであった。

「勇樹殿、この『ノーギョーセット』とは、いったい何でありますか?」

続いては、玉田がピンク色の箱を見せると勇樹は「あ、これ?」と説明をし始める。

「これは『農業セット』と言って。時間がかかる農業作業をわずか1日から1週間程度で出来るんだ」

「そ、そうでありますか」

勇樹の説明に、玉田は驚くかのように言うと。西は「ちよつと待つてください!」と

ある事を言い出す。

「これじゃあ苦勞が泡になるのではありませんか!?　いくらそちらの技術が素晴らしくてもおかしいです!!」

「そ、そうであります!!」

「反論するであります!!」

西の言葉に、福田と池田はそう言うと言つて勇樹は冷静に「まあまあ」とみんなを落ち着かせるかのように言い始める。

「これは楽にしてくれることもありますが、実際の天気季節・そして機構などを再現したり。その農業の人にとつての害虫も含んでいるのです」

それを聞いた西は「そ、そうか」と理解する。

「なお、これは米以外に野菜に菌で育てる納豆に味噌にチーズなどと言つた難しい菌類なども含んでいます」

それを聞いた福田は「おおっ!　これはいい道具でありますね!!」と反応する。

「なお、これは店員5名以上じゃないと使用できませんので、ご注意を」

勇樹の説明に、玉田は「そうでありますか。ありがとうございます!!」と感謝する。当の本人は「そこまで感謝されなくても」と苦笑いする。

.....

「それじゃあ、ビンゴの続きをしよう!!」

ココアはそう言いながらスイッチを押すと、画面にはある文字が映し出される。

『伊江がパンチングマシンで出した力は?』

それを見た瞬間、伊江は「お、それならちよつと待つとけよ」と言いながら、ステージに『パンチングマシン』を持ってきた。

「会長、これにパンチをしてオレが出した力で数字をビンゴの一つにするんですよね?」  
「そーだよー。まあちやっちゃとやってー」

会長の言葉に伊江は「よっしや!! やってみるか!」と起動してパンチングマシンをやり始める。

「そんじゃあ、いっつかああつ!!」

バツガアアアアツ!!

伊江は勢いよく機械にパンチすると、カウンターが2桁を超えて3桁、4桁と徐々に上げていき。停止した時には6桁になっていた。

『結果、今回のパンチ力……153224kg』

「「「「ブーーーーッ!!!」」」」

意外な結果を見たみんなは、あちこちから噴き出して騒然となっている。

「えっと……会長、この場合は？」

「んー、そうだねえ。ウーロン。どうする？」

「ハイ、この場合ハ。最後の2桁が優先だと思いません」

ウーロンの言葉に、ココアは「それじゃー24!」と言うと、続いてに当たったのは彼らで合った。

「あ、やったー!! 当たったよ!!」

「あ、沙織さんが当たりました!!」

みほの言葉に伊江は「お、今度は沙織か!」と反応して、

「さーて、ビンゴが揃った武部沙織。正直どうだ？」

「えっ？ もー、そんな事岩根いでよー！ そうだなえ、麻子の次に当たったからなんというか。ビンゴをとったのはうれしいなあ」

伊江は沙織の話を聞いていると勇樹が「さあ沙織さん！ 早速これを！」と欲しいもの販売機を出すと、彼女は「よーし、やってみるか！」は言いながら、自販機についているレバーを動かす。

すると自販機は『ガダガダガダッ!!』と上下左右に動いて数秒後、取り出し口だと思われる場所が開くとある物が出てきた。それは。

「えっとハート型のポーチ……て、ナニコレ？」

ハート型をしたポーチを見た彼女は、頭にハテナマークを浮かべていると。百合子がやってきて「これは私が説明します！」と説明をし始める。

「これは『流行性・モテカワJKメイクセット』と言いまして、最近流行しているメイクセットを出すことが出来る道具です!!」

「えっ、てことは何でもそろっているってこと。それすごいじゃん!!」

沙織は驚いていると百合子が「そうなんです！」と答える。

「時代設定装置もついているので、過去の流行っていたメイクも取り出すことが出来ま



す!!」

「わあ、それいいね!!」

「はい、凄いですよ!!」

百合子と沙織はそう言っていると、伊江が「はい次があるからー」と言いながら沙織を元の席に戻す。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「それじゃあ、ビンゴの続きをしよう!!」

ココアはそう言いながらスイッチを押すと、画面にはある文字が映し出される。

『太田が持てる戦車の数』

それを見た瞬間、太田は「んー、言われてみたら気になるね」と気についているかのよう  
うに考え始める。

「え、もしかして本物の戦車なの?」

「いや、それはさすがにないでしょ」

「いくら何でも私は無理でゲソ」

「あたりめーだ」

「いや、あいつが持ち上げるとしたらあり得るな」

それを見たアズミ、真姫、イカ娘、栄子、ユウヤはそう言っていると。太田が「じゃあ勇樹君」と言うのと勇樹は「了解」と言いながらレバーを引いた。

すると、戦車がアームで持つて来ると。太田がそれをバーベルで持つかのように「よつと」と持つのであった。

「あ、副隊長。あれは私たちの戦車では!？」

「えっ、それって本当!？」

「おいアリス、あれって確かお前のじゃないか?」

「え、ああつ!! な、なんで!？」

「あー、あの戦車、私たちのー!」

「「「あああつ、本当だ!」「」」

「ナカジマ、あの戦車つてまさか」

「ん? あ、私たちの!!」

なんと戦車は黒森峰のティーガーIIとサンダーズのM4A1シャーマン 76mm砲搭載型に、ウサギさんチームのM3中戦車リーとポルシェティーガーVK4501が太田は持ち上げようとしている!!

「ちよ、大丈夫!？」

「え、何が出すか？」

「何がって、それは危険よ!!」

「姉貴の言うとおりだ、中止しろっ!!」

「大丈夫ですよ。これぐらいの重さは僕は慣れていきますよ」

「いや、わたくしでさえこれは無理ですわ!!」

「いや、やめろよ」

「ふむ、部品を使ってやるのか？ それはそれですごいな」

「隊長、それはやめてください!!」

「オウフル、あなたならこれくらい」

「いや、1両ならともかく4両は……ムズカシイデス」

真姫を初めてみんなは慌ててやめようとするが、太田はそれを無視するかのようによい勇樹に向けて「それじゃあ開始して」と言う。彼は「OK」とスイッチを押すと、戦車は一気に太田におろした。

みんなは「見てられない!」と一斉に目をつぶったが、なぜか崩れる音はせず、無音ばかり響いた。

不審に思い、みんなはそつと目を開けてみると、そこで見かけたのは……。

「つと、少し重いね」

バランスを保ちながら太田が戦車を持っていた。それを見たみんなはポカーンと彼を見ていた。

『太田、あとどれくらいだ?』

「そうだね、CV33が3台が限界かな?」

『そっか、それじゃあ』

勇樹はCV33を持ってこようとするが、アマレットたちが「ちよつと待ったー!!」と一斉に彼を抑える。

「いくら何でもやりすぎっす!!」

「そうだそうだ!!」

「な、7台でお願いします!!」

それを聞いた勇樹は「あ、わかった」と驚きながら戦車を太田から話して元の場所へと置く。

「じゃ、じゃあ。合計は7台か」

ココアはそう言うと、続いてに当たったのは。彼らであった。

「あ、ビンゴだー!!」

「しゃあつ、ついにビンゴしたぞ!!」

「あ、ビンゴしたつ。ビンゴよ!」

「あ、お先に失礼しますダージリン様。ビンゴしました」

「ふふ、ビンゴだ」

最多の人数がビンゴした。ちなみに当たったのは、ツチャと紅蓮、s a i n t s n o wの鹿角聖良とオレンジペコ、そしてA—R I S Eの統堂英玲奈の5名。

「太田、それじゃあお願いな」

「OK勇樹君、じゃあ揃ったものは。勇樹君がさつき行った通りに画面に触れてください」

太田が言うと、ツチャたちは画面に触れると自販機が『ガダガダガダツ!!』と上下左右に動いて数秒後、取り出し口だと思われる場所が開き、5人にある物が放たれて手に入れる。それは。

「ん、ドライバー?」

「眼鏡とスプレー……だな」

「雪だるまだね、可愛いつ」

「ティーポットとカップですね……これはいったい？」

「リモコン、どういう意味だ？」

ツチャはドライバーが4本、紅蓮はゴーグル型のメガネと『毒消しスプレー』と書かれたスプレーと雪だるま型の人形にティーポットとカップ、そして手のひらサイズのリモコンで合った。

「さて、この道具の説明は勇樹が話しますが、少し多いので私、百合子・ビューティーとシャーロック・アレンさんが説明します！」

「さて、早速やるか」

アレンはそう言うと、道具の説明をし始める。

ちなみに、勇樹はオレンジペコ、百合子はツチャと聖良、アレンは統堂と紅蓮のところへ行く。

「さて、ツチャさんが手にしているのは『車用万能修理機能搭載改造ドライバーマシン』と言いまして、これを使うとどんなものでも修理したり改造したりすることが出来るドライバー型の機械です」

それを聞いたツチャは「へえー、凄いねえ」とドライバーを見てるとホシノが「で

も、ドライバーだけじゃない？」と百合子に質問するが、彼女は「そうでもありませんよ」と説明の続きをし始める。

「この道具はドライバー以外にドリルにトンカチに溶接にドライバーなどと言った工具が搭載しているのです!!」

「え、それってすごいじゃん!!」

百合子の言葉を聞いたスズキはそう言うと、彼女は「そうですよ!」と答える。

「さらにこの道具は大きさは関係なく修理することが出来る。これは車用に制作したのです!!」

「お、私たちにぴったりじゃん!」

ナカジマがそう言うと百合子は「それでは、ご自由に」と離れるのであった。

「さて、紅蓮が持っているのは『野草探査グラスと毒消しスプレー』と言う道具だ」

「へえ、この道具がか。役に立つのか?」

アレンは紅蓮が手にしている道具を説明していると、彼は「使い方は簡単か」と言い始める。

「まあ簡単だ、グラスはかけるだけで毒以外は鮮明に見えて。毒消しスプレーはどんな毒でも解毒することが出来る一種の解毒剤だ」

「解毒剤? 大丈夫かそれは?」

「大丈夫だ、勇樹が開発した最新の『ドクナクシバナ』と言う最新の花のエキスを利用して作ったからな」

それを聞いた紅蓮は「焰たち気いるのか」と思いながらカバンに入れていく。

「ちなみに、野草探査グラスは。モドキと言った似た植物やキノコなどを探すこともできて。中には貴重な野草類が見つかるかもしれん」

「本当か!? それはラッキーじゃん!」

アレンの話の聞いた紅蓮は、喜ぶと「早速焰たちに知らせよう!」と張り切るのであった。大丈夫か?

「さて、オレンジペコさんが手に入れたのは『チーポットと温カップ』と言う最新の道具です」

勇樹はオレンジペコが手にしている道具を言うと、彼女は「この道具は、どういう意味ですか?」と質問してきた。

「簡単に言うと、珍味の紅茶を作り出してくれるポット型の道具で、お湯を入れて10分待てば、味わったことのない紅茶を作り出してくれるんです」

「はあ」



勇樹の説明に彼女は目を丸くしていると、アッサムは「可能でしょうか」とつぶやいた。

「あ、ちなみに。どんな紅茶かは、ポットについている赤スイッチを押せばレシピと紅茶の葉や詳しい材料を教えてくださいます」

「それじゃあ、このカップは？」

「温カップは、紅茶を注ぐための専用のカップで。紅茶が入れられるまで一定の温度で温めてくれるため、おいしい紅茶を味わえることが出来ます」

それを聞いたニルギルは「すごいものがありますね」とアッサムに言うとな彼女は「そうですね」と同意する。

「ちなみに、これは実際に買うと30万円もする本格高級型で、今回は聖グロのためにオリジナルデザインにしたんだ」

「そうですか……さ、30万!?!」

値段を聞いたペコは驚くと、勇樹は「ん、そうだけど？」と言うとな彼女は「しゃ、シャレになりませんね」と思いながら道具を机に置く。

「あ、壊れても自動修復機能が搭載しているから安心してね、じゃあなー」

勇樹はそう言いながらその場から去ったため、ペコは道具を見て「どうすればいいですか」とダージリンに向けるが、彼女は顔を青くしながら立ちすくむのであった。

「聖良さんがあてたのは、雪ダルマ型ガードロボット『スノー・ダルマン』です」  
「へえ、これがガードロボットなんだ」

百合子は、聖良が手に入れた雪ダルマ型メカ『スノー・ダルマン』の説明をし始めた。  
「この道具は、小さな姿をしています。水分を大量に含めば含むほど大型の巨人に変身するようになっていきますー！」

「要するに、ガードマンになれるってこと?」

「そうです、強力な力も発揮できるので安心です!」

「それはいいね!!」

聖良と百合子の話に理亜は「私も欲しい」と言う目つきで見ている。

「あ、あとこれはスペアが付いていますので安心を!」

「本当?!」

百合子の言葉に理亜は反応すると、勇樹が「本当だよー」と答える。てか。聞こえるんだ。

「起動方法は簡単、雪中に1時間ほど置いておけばすぐに起動します!」

「ありがとう! じゃあ理亜と一緒に大切にするよ。ね、理亜」

「はい姉さま!!」

聖良は理亜に向けて言うよ、彼女は喜んで答える。

「さて、最後は英玲奈が手に入れた道具だが。それは『逆探知リモコン』と言って、登録している探知機であれば探すことが出来る道具だ」

「ほう、これはすごいな」

最後は、統堂があてたりリモコン型の探知機『逆探知リモコン』を説明している。

「半径100mから1キロ以内であれば、機械から発生する電波を逆探知して、相手はどこにいるか調べたり。何を使っているか調べることが出来るんだ」

「警察にも許可が下りるほどか？」

「ああ、安心するほどの機能が付いているから安心しろ」

アレンの言葉を聞いた英玲奈は「なるほど」と理解する。

「エネルギーは単3電池4つで起動して、継続時間は最長20時間も持つんだ。防塵・防水が付いているから簡単には壊せないぞ」

アレンはそう言うと、英玲奈は「彼の技術はすごいな」と感心するのであった。

「また、これは電話機能が搭載しているから。私用かプライベートのどちらでも使えるぞ」

「ふむ、そんな機能があるのか。驚いたな」

アレンの意外な言葉に、英玲奈は驚く。今後、携帯はこれを使うのではないかと思う。

.....

「そんじゃあ、ビンゴの続きをしようか。時間がないから次で最後ねー」

ココアはそう言いながらスイッチを押すと、画面にはある文字が映し出される。

『栄子の苦手な英語を本物の外国人が聞いたたら何秒で勘違いするか。ただし、100を  
超えたら99より下になる』

それを見た栄子は「あ、あたし?!」と意外なことに驚くのであった。

「栄子でゲソか……あいつはもうだめでゲソ」

「え、どれくらいダメなの?」

「すべてだめでゲソ、外国人が聞いたたら誤解を生むでゲソ」

それをイカ娘の話を聞いた百合子は「どういう意味?」と思いつながら頭を傾げる。

「ふむ、栄子の英語はどれくらいか少し気になるな。かまわないか?」

そう言うのは、外国人であるシャーロック・アレン。彼女は日本語でしゃべっているが、実は外国人で。日本語以外にフランス語に中国語、そしてロシア語をすらすらと話せる。

「会場 みんなにはあらかじめ、この『ほんやく団子』を食べてください」

勇樹はそう言いながら、みんなに団子を配っていく。

「ふむ、どこからどう見ても普通の団子だな」

「そうですね」

「しかし、これが翻訳するとしたら。意外だな」

西と華、そしてナオミはそう言いながら団子を食べていく。もちろん、会場みんな以外に勇樹たちも食べるのであった。

「それじゃあ話をするか」

アレンはそう言いながら、英語を話し始めた。

※ここからは、英語と同時に日本語を入れていきます。

「By the way, Eiko, why are you getting along with the squid girl (訳：ところで栄子、お前は どうしてイカ娘と仲がいいんだ)?」

「え、ええっ!?!」

いきなり英語で話してきたため、彼女は驚いているが、冷静に考え始める。

「(えっと、確かケイからは『なんとかがーる』って言っていたから……こうかな?)」  
 栄子は数秒後アレンに向けてこう言った。

「の、ノウノウ! す、スプリットガール、アンドウ、マイ、イズ、フレンドリー! (訳:  
 No know! Peace, Split Girl, Ando, My, Is,  
 Friendly!)」

※ちなみに外国人には「知らない!ピース、スプリットガール、アンドウ、マイ、イズ、フレンドリー」と聞こえている。

それを聞いたアレンは、「ふむ」と黙り込む。

「(少し難しかったか? 彼女は英語が苦手って言っていたな……そうだ、これならどうだ?)」

何か思いついたのか、アレンは再び栄子に向けてこう言った。

「Tell me what food is recommended at the sea house "Remon" (訳:海の家『れもん』で、おすすめの食べ物は何か教えてくれ)」

それを聞いた栄子は「ん、フード?」と考え始めた。

「(待てよ、今フードって言ったな。そして最後はシーハウスレモンって言ったから……あ、これは分かった!)」

栄子は自信気になつてゐるのか、アレンに向けてこう言った。  
It's u d a , C h i n e s e n o o d l e s !  
 「イツツダ、チャイニーズヌードル!!」

それを聞いた瞬間、アレンを含む会場みんなは「「「「ブーーーーツ!!!」」」」と、再び噴き出して騒然する。

※彼女はラーメンと言いたかつたですが、『Chinese noodles』ではなくこの場合は『ramen』の方が正しいです。

もちろんアレンは、それを聞いた瞬間、顔を真っ赤にして「WHAT!」と驚く。

「E, Eiko! What you are saying is naked Chinese recommended (訳:え、栄子! お前が、言っているのは、裸の中国人がおすすめのなか)!」

それを聞いた栄子は「は?」と疑問に思う。

「(え、そりやそうだろ? だってラーメンは誰でも知っているだろうし。そう言えばなんでアレンさんは顔を赤くしているんだ?)」

栄子は疑問に思いながらも、アレンと話をしていく。

「い、いえあ。イツツア、チャイニーズヌードルイズ、ワールドキーワードアンドインスタント(訳:No, no. Itza, Chinese Noodles, World Keywords and Instant)」

それを聞いたアレンは「WHY!？」と驚く。

会場のみんなも、唾然するものがいれば驚くものがあったり、中には笑っている者がいる。

「ヒイーツヒイーツ!!」

「ま、麻子。大丈夫!？」

「あははッ、これは傑作ね!!」

「笑えないような気がするが」

「何よあれ、言葉のキャッチボールが下手じゃない!!」

「そうだな、カチューシャさん」

「まさか栄子殿がそこまで下手だとは……不覚!!」

「自分も同じであります、西隊長殿!」

「ばらばらやん」

「それ言えるわ希」

「Oh……NO」

「鞠莉、ちよつとおかしいよ」

「下手だな」

「ああ、下手だ」



「百合子さん……あなたもしかして」

「うん、気を失いそうです」

会場のみんなは混乱になっていて、もう破滅的。

勇樹は「これはもうだめだ!!」と思ったのか、カバンから何かないか探していると、カバンからタイマーが出てきたため。勇樹は「あ、これだ」と急いでメガホンを出した。

『時間!! これ以上続けると危険だからしゅうりよー!!!』

勇樹の言葉に、みんなは「ほっ」と安心する。

「ふう……I, m sorry Yukin, this has happened」

「いえ、こちらこそ申し訳ありません。まさかこんな事態になるとは知りませんでしたので(訳: No, this is sorry. I didn't know that this would happen)」

アレンは謝るが勇樹もこんなことになるとは知らずにやったため謝っている。

それを見たみんなは「おおー」と一斉に驚く。特に栄子が一番驚いた。

「(え、なんであいつがすらすらと!? 女性と運動が苦手なのはわかったがなんであいつ

は自アレンさんと。いやその前にあいつ普通に英語喋れたよな!？」

本人は混乱していた。

.....

「え、えつと記録は……1分40秒だから、40!」

勇樹はタイマーを見ながら言うと、最後に当たったのは。彼らであった。

「あ、当たったよー勇樹おにいちゃん!」

「あ、俺もビンゴだ」

「やつと当たったわ!」

「わ、私もビンゴ……ビンゴ!!」

「私もだ、ビンゴ」

「フフツそのようだな」

「あ、当たったー!!」

最後にビンゴしたには、たけるにユウヤと園みどり子、大学選抜の島田愛里寿と黒森峰の西住まほ、そしてサンダースのナオミと継続のミツコの計7名。

「それじゃあ皆さん、画面に触れてください!!」

勇樹が言うのと、たけるたちは画面に触れると自販機が『ガダガダガダツ!!』と上下左右に動いて数秒後、取り出し口だと思われる場所が開き、7人にある物が放たれて手に

入れる。それは。

「うわあ、これなんだろう?」

「つと、なんだこの扉?」

「瓶? 何か入っているけどこれは?」

「わあつ、これは!!」

「カメラとなんだこれは?」

「テープ? いったい何だこれは?」

「うわあ、家だあ……つて、なんで平面図!?!」

たけるはラジコンのコントロールとアンテナ、ユウヤはふすま型の扉、園みどり子は何かチップ見たのがはいつた瓶と、愛里寿は『ボコムイージュアム生涯パスポート』と書かれたカードと、まほはカメラと大型の機械がセットと、ナオミはゼロハン……ではなく7色の虹が縞模様になっているテープ、そしてミツコは平面図の姿をした家で、なぜかバルブが付いている。

「お、これはいいね。それじゃあ道具の説明するよ」

勇樹はそう言いながら道具の説明を始める。

「たける君があてたそのリモコンとアンテナは『なんでもアンテナと操縦機』と言って、

動かすものであればなんでも操縦できるよ」

「へえー、なんでも?」

「そ、動くものであればなんでもだよ」

勇樹の話の聞いたたけるは「それじゃあ」とあたりを見渡すと、ウルトラマンの人形があつたため「あれでも?」と言うと彼は「行けるよ」と答える。

試しにアンテナをウルトラマンにつけて、コントロールを動かしてみようと。

クイツ

「あ、動いた!」

ウルトラマンの足が動いたためたけるは喜んでいると、勇樹は「空は飛ぶこともできるよ」とこっさり教える。

たけるは「ほんと?」と言うと彼は「ほんと、ちよつと貸してみて」とコントロールを手にして動かすと、ウルトラマンは低空飛行だが空を飛んでいる。

「力は通常の3倍で空は低空飛行だが飛べる、そしてコルクの球だったら跳ね返して豆電球程度の光線を放つことが出来るよ」

「すごいすごい!! ありがとう!!」

「ふふん、どうも。あ、コントロール返すよ」

勇樹はそう言いながらコントロールを返すと、たけるは「わーい!」と大喜び。

「さてユウヤさんですが、これは『四次元訓練場』と言いまして、ふすま型をしたからくり屋敷風の訓練施設です」

「訓練施設？ それなら飛鳥たちがいるところと同じじゃないか？」

ユウヤはそう言うと、勇樹は「まあ、飛鳥さんと同じシステムがあると思いますが」と言いながらカバンからある本を出した。

その本には『取扱説明書』と書かれていた。

「この屋敷には、自分に合った訓練内容、時間、場所などをこの装置に読み込ませておけば、自動でその書いた内容通りしてくれるってことになります」

「なるほど、これは便利だな……実際に役立てるか？」

「正直そこまでは分かりませんが、改装中に使うか難しいもしくは苦手な訓練として使うならば行けます」

ユウヤと勇樹は、こそこそと話をしていたためみんなは「何をしているだろう？」と頭を傾げている。

それを見た百合子は「いいなあ」とジト目で見ているのであった。

「それで、そど子さん基みどりさんは、『世話焼機』と言う機械で。この玉が小型のコ

ンピューターが搭載しているので本人の代わりになれます」

「へえ、それじゃあ私の分身もできるの?」

緑子は珍しく、勇樹の発明品に興味があるのか瓶の中をのぞいている。

「さらに言いますと、これは動かない物につけるだけで使用可能なので。ロープや警棒にぬいぐるみなどと言ったものにつけるだけでもOKですよ!!」

「あ、それはいいわね。とくに冷泉さんはね!!」

そど子は勇樹の言葉を聞いて何か気づいたのか、麻子を見ると彼女は「どういうことだ?」と頭を傾げる。

沙織派の中に気づいたのか「麻子」と、何かを伝えるかのようにこういった。

「麻子、勇樹さんがもらった蛙の道具。動かない物につけるだけ使用可能っていったんだよ!」

「それがどうした……まさか!」

沙織の言葉に麻子は気づいたのか、突然青ざめる。

そう、もしかしたら緑子は遅刻常習者の麻子を捕まえるために使うのではないかと。それを見た彼女は、まるで薄着で吹雪にいるかのように震え始めた。

「愛里寿さんはボコミュージアムの生涯パスポートです」

「やった!!」

それを聞いた愛里寿は、子供のように目を光らせている。

「これで、何度もボコモミュージアムに行ける!!」

「そうそう。あ、ちなみにだけどそれ実は中にあるものが入ってるよ」

勇樹の言葉に、彼女は「何?」と言いながら開けてみると、そこ入っていたのは……。

「え、スピア?」

意外なことに、スピアのパスポートが入っていた。

「このパスポートだけど、実はスピアが入っていて。よかつたら友達と一緒に行っておいで」

意外な展開に、愛里寿はボー然としているが。実は心は非常に喜んでいいる。

その後、スピアはボコ仲間であるみほに渡す愛里寿であった。

「まほさんはすごいものですよ、これは『プラモ製造セット』と言いました。そのカメラで撮ったものを専用の機械で大きさを決めると、自動でプラモを作ってくれるんです」

「ふむ、これはそう言う機能があるのか」

まほはそう言いながらカメラを見ると、エリカが「試しに何をとりましようか」と言ってきたため。彼女は「そうだな」と悩んでいる。

「あ、そうだ。まずは試しにですが、マウスの写真を…っと」

勇樹はそう言いながらカバンから『重戦車・マウス』の写真を取り出した。

そして勇樹は「カメラ借ります」と言うと、まほは「わかった」とカメラを渡した。

「ちよつと、いくら何でも写真からプラモ化は出来ないでしょう!」

「いえ、この道具は絵や写真に実物からでも自動でプラモを作ることが出来る便利な機能搭載が付いていますから」

エリカの言葉に勇樹はそう言いながら写真を『パシヤツ!!』と写真を撮る。

そして大型の機械から出ているコードをカメラに接続して、画面をいじり始めた。

「大きさは、この写真の大体5倍でいいだろ」

「え、5倍ですか!？」

「大丈夫ですか!？」

勇樹は画面をいじりながら言っていると、赤星と小島が驚いて言う。本人は「大丈夫です」と答える。

「この機械は、大きさの計算と作る時間はかかるが、再現度は高く、付属の部品を使えば、実際に動くことが出来ますよ」



勇樹はそう言っていると、取り出し口が開くとそこから『重戦車・マウス 20分の1』が出てきた。

「これでプラモが出来上がります。あ、道具とかはこの機械から出てきますから安心してください」

それを見たまほは「ふむ、そういう機能があるんだ」と小さくつぶやく。何か考えているようだ。

「ナオミさんは申し訳ありませんでしたが、バブルテープガムを手に入れることはできませんでした」

勇樹は悲しそうに謝るが、ナオミは「気にしないでくれ」と答える。

「その代わり、ナオミさんには『テープガム』と食べるテープをあげます」

「食べるテープ？」

それを聞いたナオミは、赤色のテープを引っ張ってカッターで切り。それを食べてみた。

「……ん、確かにうまいな」

ナオミはそう言うのと、みんなは「えええつ!？」と驚きの反応をする。

「赤色はイチゴか、甘酸っぱくていいな」

「それじゃあ、この緑色は……ハムツ……って、メロンじゃん!!」

「この黄色って……ンムツ……すっぱっ! レモンね」

ナオミはイチゴ味のテープを食べていると、アリスはメロン味、ケイはレモン味のテープガムを食べている。

「今この世界で人気菓子の一種で、今持っているのですと10種類ぐらひはあります」  
「そうか、それはうれしい」

勇樹の言葉にナオミはフツと息を吐く。

「最後はミッコさんですが、『キャンピングハウス』と言う手持ちハウスです」

「へえ、凄いいじゃん!」

勇樹の話を聞いたミッコは感心した反応をする。

「これはその名の通り家型の手持ち道具で、重さは500グラムもあります」

「おお、それってすごいじゃん!」

ミッコは目を光らせていると、アキが「でも」とこんなことを言い出す。

「これって薄い紙だよ。どうやって私たちが入れるようにするの?」

「そうだね、薄いにもほどがあるよ」

それを言った途端、ミッコは医師のように固まって「そ、そうだね」と答える。しか

し勇樹は「それは大丈夫です」と話を続ける。

「このバルブをいじっておけば……その前に」

勇樹は何か思い出したのか、ミツコに「ステージに来てください」と言うのと彼女は「わかったー」と言いながら道具を持ってやってくる。

「これを置いて、バルブを動かせばと!!」

勇樹はそう言いながら、バルブを勢いよく回した。すると。

ムクムクムクツツ!!! ボンツツ!!

「おおっ!?!」

紙になった家は突然膨らんでいき、気づいたときには大きいっけなんに変身していた!

「このようにすれば、大体は住めます。折りたたむときは外についているバルブを動かせばいいですよ」

「へえー、そんなのあるんだ」

「また、これには冷暖房に水道電気ガスがすべて備えていまして、家電も最新式。食べ物

「は1週間分ありますよ」

それを聞いたミカたちは「本当!?!」と意外な反応をする。それを聞いた勇樹は、驚きながらも「ほ、本当です」と答える。

「やったー!! これなら継続に戻れるぞ!!」

「さすがミッコ!!」

「やるじゃないか」

ミッコのお手柄に、アキト美香は褒めるのであった。

.....

「さて、ビンゴゲームはここまでー!!」

ココア会長の言葉にみんなは「えええー」と声をそろえて言ってきた。

「と、言いたいところだが。実は勇樹ちゃん。もう一つ面白いものを開発したんだよ」

「ん、面白いもの?」

ココアの言葉に、伊江は「どういう意味だ?」と反応する。

「勇樹ちゃん、説明をおねがい」

「わかりました会長」

勇樹はそう言う。「そのもう一つは、これだあ!!」とステージからあるものを出した。

それは……。

「『スーパーすごろくワールド』!!」

面積が軽自動車1台分の大きさをしたジオラマと、4つのバッチと12個のサイコロと画面がセットとなった道具が置いてあった。

『オリジナルクロス大ストーリー』編 第3話 忘年会編

後編

「『スーパーすごろくワールド』!!」

勇樹がそう言いながら出したのは、面積が軽自動車1台分の大きさをしたジオラマと、3つの腕章とタブレットがセット。

「今回のメインディッシュである演目は、この『スーパーすごろくワールド』で対戦してもらいます」

それを聞いたみんなは「ええええっ!」と驚きの反応をする。

「それってありなのー!?!」

「そーだそーだ!!」

「おかしいぞー!!」

優季、桂里奈、あゆみはそう言う。太田が「お、落ち着いてください」と落ち着かせるようにする。

「まあ、こんなことを言うかと思ひまして……実は今回は景品がさらにあります!!」

勇樹の言葉にみんなは頭にハテナマークを浮かばせながら顔を傾ける。こいつ一体何を言っているんだ? と。

「勇樹さん、あなたは言った言葉はどういう意味ですか?」

「簡単です、先ほどのビンゴであてられなかった人がいることを考えて、すぐろくで対決して先に当たったチームがその景品を手にいる方式を考えました」

ダージリンの質問に勇樹は答えると、みんなは納得した。

するとヘイトは何か気づいたのか「ちよつと待って」と言い出した。

「いま、チームって言ったけど。まさかチーム戦だよな?」

ヘイトの言葉に勇樹は「そうだよ」と答えると彼女は「やっぱり!!」とがっかりする。それを聞いたサスペクトは「ど、どういう意味だ」と言うと、彼女はこう答える。

「ようするに、このゲームはみんなでチームを組んで戦うってことだ!」

それを聞いたみんなは「ええええっ!？」と再び驚く。それを聞いた伊江は「するどうな」と苦笑いで答える。

「まあヘイトの言う通り、このゲームはチームを組んで戦うってこと。だれがどのチームになるかはまだ分からないけどな」

伊江はそう言うのと勇樹が「じゃあ早速」とカバンから画面を出して何かをいじっている。するそこから大型のスロットマシンが出てきた。

「今回はこのスロットマシンで、誰とチーム戦にするか設定します!」

「ただし、一度当たった人らは参加することはできないから。気をつけろよ」

伊江と勇樹はそう言うのと、杏が「お、面白そーじゃん」とにやにやする。

「それじゃー、ルーレット開始!!」

勇樹はそう言いながら、レバーを動かすとルーレットは起動して動き始める。

.....

そして、ルーレットの結果、このようになった。

・ ひまわりチーム（西住みほ、アンチヨビ、澤梓、丸山紗季、宇津木優季、高坂穂乃果、高海千歌、イカ娘）

・ たんぽぽチーム（五十鈴華、西絹代、角谷杏、絢瀬絵里、シルバー、松浦果南、斎



藤渚)

・あさがおチーム（秋山優花里、ケイ、カエサル、エルヴィン、園田海未、綺羅、国木田花丸、紗倉清美）

「でことで、参加メンバーはこのようになりました。そろそろ例のすごろくが完成したはずだけど……」

勇樹はそう言いながらジオラマを見てみると「お、完成した」と言いながら、すごろくのジオラマを持ってきた。

そのジオラマは……。

「今回の舞台は、47都道府県がすべてがモデルとなったすごろくゲームである!!」

北海道から沖縄がすべて再現されていて、スタートが『東京都』となっている。

「あ、私たちの学園感も再現している」

「すごい器用ですね」

「勇樹殿ってすごい一面がありますね」

それを見たみほ、海未、優花里は答えると。太田が「あ、ありました」とタブレットとあさがおとひまわりとタンポポの模様が掛かれた腕章を取り出す。

「参加するメンバーはこの腕章を腕に、タブレットを持つてください」

それを聞いたメンバーは急いだと、穂乃果は「出来たよ」よ言うと伊江が「そんなじゃあ」とある物を出した。

「この『ガリバー・ホール』に入って、このスーパーすごろくワールドに行くんだ」彼女の言葉にみんなは「はあ?!」と驚くのであった。

「まあ、そう言うと思って。説明を……勇樹」

「了解、じゃあ説明するぞ。この道具は実際に遊べるが、実は小さくならないと遊べないという欠点があつて。そのためガリバー・ホールで入ることになったよ」

勇樹の説明を聞いた栄子は「どういう意味だ」とジト目で見て言うが、ケイは「面白そうね」と楽しそうな反応をする。

「それだったら安全かな？」

「そうですね、このような体験はなかなかありませんね」

「私も賛成でゲソ！」

「私もよ、面白物を作ってきたわね」

「よーし、絶対勝つぞー!!」

「それじゃあ、みなさんこの中に入ってください」

みんなはそう言うと、勇樹の指示に従うかのようにガリバー・ホールに入っていく。

.....

「ここが、スーパーすごろくワールド……」

みほたちがいるのは『東京』と書かれた看板前にいた。すると画面に勇樹が写りだして『えつと、聞こえていますか？』と応答する。

「あ、聞こえています。勇樹さん」

『ほ、よかった。時々電波障害が出て画面に映りにくいから心配したよ』

「そ、そうなんですか」

勇樹の言葉に苦笑いで反応すると、優花里が「それで、どうやって行動するんですか？」と言うと、勇樹が『それは簡単です』と説明し始める。

『画面に『ダイス』と言うスイッチを押ししてください。そしたら1〜10までのるゝつれと型の数字が出てきて自動でルーレットが起動して、数字が止まるとその数字にしか移動することしかできないんです』

「なるほど、それはすごいね」

それを聞いた果南は理解すると、勇樹が『ついでに』と説明をし続ける。

『このゲームのルールは簡単、青は幸せ・楽しいマスだが赤は不幸・大変マスで緑はなぜなど・イベントマス。黄色は対決（鉄砲撃ちかかけっこなど）をして順位で賞金がもらえます』

「ふむ、ところでこれはもしかしてランキング形式か？」

『あ、鋭いですねエルヴィンさん。その通りです。これは最初に付いた順位式になっています。ちなみに今回のすごろくで一番多く賞金を手にしている者は、一番欲しい商品がもらえますよ？』

勇樹の言葉を聞いたみんなは「それ本当!？」と意外な反応をする。

『は、はいそうです。ちなみにゴールはどこになるかわかりませんし。ゴールしても点数型となっているので、1位は5倍で2位は3倍、3位は1倍になるのでどのチームの

得点が高いのか分かりませんよ』

勇樹はそう言うが、みんなは興奮しているため彼は『まいつか』とあきれるのであった。

.....

「私たちは、わあ！ ボコの戦車だ！」

「わたくしはカメの戦車ですわね」

「私は、おおっカバの戦車であります！」

3チームは、専用の戦車を見て反応すると、急いで乗り込む。

『それじゃあ準備しましたか？ そしたらすぐころくは起動します』

「わかりました」

勇樹の言葉にみほは答えると、伊江が『それじゃあ、ゴールはここだ!!』と画面に映し出す。そのゴール先は……。

『福岡県』

それを見たみんなは「福岡」と普通の反応する。そこは驚いてくれ。

「福岡って、確か私の実家の上だったね」

『はい、九州を代表する一部であります』

『そして、ケイさんの2つ隣ですわね』

みほはそう言うと、優花里と華が言ったためみんなは「そう言えば」と反応する。

「それじゃあ、私から。確か『ダイス』をとつと」

みほはそう言いながら画面の『ダイス』をタツチすると、画面はルーレットに代わり自動で回転し始めた。そして針が止まったのは……。

『4』

すると、ボコの戦車は自動で前に進み始める。

「わっ、本当に動いた」

みほは驚いていると、戦車は青色のマスに停止した。すると。

『ピンポーン』

画面から笑顔のマークが浮かび、『5ポイント+』と映っている。

「む、ポイント加わったでゲソ」

「しかも5ポイント加わったな」

イカ娘とアンチョビはそう言うと、みほが「そうですね」と答える。

すると、画面からシュウマイが出てきてみんなの前に置いた。

『シュウマイが食べられて、幸せです！』

すると画面に映し出されたため、梓は「すごい仕組み」と驚いている。千歌は「なんだかすごい仕組みだね」と答えるのであった。

.....

一方、優花里たちは……。

「それじゃあ、私たちも！」

優花里はそう言いながら画面の『ダイス』をタッチすると、画面はルーレットに代わり自動で回転し始めた。そして針が止まったのは……。

『2』

するとカバの戦車が自動で前に進み始める。

「おおっ、本当に前に進みましたね」

優花里はそう言っていると、戦車は赤色のマスに止まった。すると。

『ブッブーっ!!』

画面から悲しい顔のマークが浮かび、『5ポイント』と映っている。

「え、何ですかこれ?!」

「ポイント減ったわよ!!」

渚と絵里は驚いていると、今度は頭上から大量の海水が出てきて、優花里たちはそれを浴びた。

『サーファーをしていたら、落ちてしまってもう最悪!!』

すると画面に映し出されたため、綺羅は「うわあ、それありか？」と涙目で答える。

.....

一方、華たちは……。

「それじゃあ、わたくしも」

華はそう言いながら画面の『ダイス』をタッチすると、画面はルーレットに代わり自動で回転し始めた。そして針が止まったのは……。

『3』

するとカメの戦車が自動で前に進み始める。

「まあ、凄い乗り物です」

華はそう言っていると、戦車は緑色のマスに止まった。すると。

『どっつちっ』

画面からハテナのマークが浮かび、『決めてね』と映っている。



「これはいつたい?」

「何だ?」

西とシルバーはそう言うのと、戦車の前に切り替えポイントが現れた。

『関西方面に行けば近道だが最悪率が高確率! 東北方面に行けば遠回りだが幸せ率が高確率! あなたはどっちにする?』

画面がそう言うのと、華は「そうですね」と悩んだ末。「安全なことを考えて東北方面で」と答える

すると戦車は東北方面に向いて移動し始める。そしてその場で止まった。

.....

ここからは少し時間がかかるため、ダイジェストに解説しよう←

ひまわり↓8マス進んだ、結果青マスで止まって静岡名物のさわやかを食べた。

あさがお↓1マス進んだ、結果青マスで止まって横浜名物のシューマイを食べた。

たんぽぽ↓3マス進んだ、結果赤マスで止まって風邪を引いた。

ひまわり↓1マス進んだ、結果赤マスで止まって愛知で自動車を学ぶことになった。

あさがお↓5マス進んだ、結果青マスで止まって静岡でお茶スイーツを食べた。

たんぽぽ↓一回休み

ひまわり↓6マス進んだ、結果赤マスで止まってパンダにモフモフされる。

あさがお↓7マス進んだ、結果青マスで止まって三重で三重産のうどんを食べた。

たんぼぼ↓9マス進んだ、結果青マスで止まって青森で林檎スイーツを食べた。

ひまわり↓9マス進んだ、結果赤マスで止まって兵庫で坂道を上ることになった。

あさがお↓7マス進んだ、結果青マスで止まって大阪で博物館で歴史を学んだ。

たんぼぼ↓1マス進んだ、結果青マスで止まってスキーを楽しんだ。

ひまわり↓3マス進んだ、結果赤マスで止まって桃太郎の手伝いをする事になった。

あさがお↓6マス進んだ、結果赤マスで止まって人気スイーツを探す羽目になった。

たんぼぼ↓2マス進んだ、結果緑マスで止まって、一気に沖縄まで飛行移動した。

ひまわり↓一回休み

あさがお↓一回休み

たんぼぼ↓9マス進んだ、結果熊本を通り過ぎる&赤マスに止まってしまい。一気に大阪まで移動した。

.....

「よしー、いきますー!!」

みほはそう言いながら画面の『ダイス』をタッチすると、画面はルーレットに代わり自動で回転し始めた。そして針が止まったのは……。

『2』

そして戦車は進んで黄色のマスに止まった、すると。

『ピッピッピー!!』

画面に剣と剣が重なった画像が現れる。

「な、なに？」

「これはいつたい!!」

突然の事態に穂乃果と千歌は驚いていると、画面には『決闘です!』と声がし始めた。

『このマスに止まった者は、あるチームと戦って。勝った者は相手のポイントを15ポイント奪い、負けた者はポイントを失います』

「それって、ちよつとやばいかも〜!」

優季は慌てっていると、梓が「そうだね、これは少し大変なことになったね」と答える。

『西住みほさん、対戦チームを』

画面がそう言うのと彼女は「え、えつと……どうしよう」と慌てている。そして数分後、彼女は「それじゃあ」と画面をタッチする。

『対戦相手は、あさがおチーム。対戦ゲームは検索中……』

それを聞いた優花里は「わ、私と西住が!？」と驚きの反応をする。

「あ、すみません優花里さん! と、取り消しを」

「い、いえ! これはいい機会です! 仲間同士鍛えるのもなかなかありませんし。憧れの西住殿と戦うのは初めてです!」

優花里の反応にみほは「そ、そうなんですか」と引き気味に答える。そして。

『結果、見つかりました。ゲーム名は、『モノモドリモノススミで何とかして』です』

「はあ、これがモノモドリモノススミですか……」

梓がそう言うのも当たり前、彼女の手には時計模様が掛かれた風呂敷を手にしている。

『ルールは簡単、あるものを出しますからそれを完成させてください。ただし数字を言うと同時に単位、分や時などを言って、最後には前か後を言ってください』

それを聞いた梓は「はあ、そうですか」と戸惑っている。

それは梓だけでなく、あさがおチームである綺羅も「それってなんだ？」と風呂敷をじつと見ている。

『それでは、今回その道具でどうにかしてほしいのは……これです！』

2人の前には、あるものが出された。それは……。

『海の家『れもん』の50分の1スケールのジオラマ、壊れてしまったので直して！』

それを見た2人は「ええっ!?!」と驚く。それもそのはず、そのジオラマはオレ滝のようにところどころ折れている。

ちなみに、これをしたのは梓を除く1年生たちのチームで合った。

「え、えつと。それじゃあ2時間前に!!」

「おまつ、仕方ねえ! 5時間前に!!」

2人はそう言いながら急いでジオラマに風呂敷をかぶせる。すると風呂敷の中から『トントンカンテントントンカンテン』と音だすると同時に風呂敷が膨らみ始める。

そして1分後、風呂敷から『チーン』と音がしたため、2人は「できた!？」と急いで風呂敷を動かした。だが。

梓の方は壁とかは治っているが、肝心の屋根が壊れていた。

綺羅の方は減刑を求めておらず、逆に箱の状態になっていた。

「しまった! もう少し進まない! えっと、30分前で!」

「やばっ、戻しすぎた! 2時間前で!!」

2人は慌てて風呂敷をかぶせると、梓の風呂敷からは組み立てる音がして。綺羅の風呂敷からはプラスチックの音がし始めた。

そして1分後、風呂敷から『チーン』と音がしたため、2人は「今度こそ!」と急いで風呂敷を動かした。結果は……。

「やったー!! 直ったよー!!」

「だあああつ、惜しいってか中途半端すぎる!!」

梓のジオラマは完全に直って、綺羅は組み立て途中になっていた。その結果。

『結果、勝者。澤梓、あさがおチームから15ポイント獲得!!』

それを聞いた綺羅は「そんなああ!!」とショックするのであった。

.....

ここからもだが、前回同様ダイジェストに解説しよう。

※☆があつたらゲームの内容を簡単に説明します。

あさがお↓4マス進んだ結果、緑のマスに止まり、九州に行くはずが誤つて四国へと行くことになった。

たんぼぼ↓10マス進んだ結果、黄色のマスに止まり、ひまわりに戦いを挑んだ結果、負けてしまい、ひまわりにポイントをとり取られてしまった。☆

ひまわり↓6マス進んだ結果、赤色のマスに止まり、山口で鉱物を学ぶことになった。

あさがお↓5マス進んだ結果、青のマスに止まり、愛媛で大量のミカンをもらった。

たんぼぼ↓4マス進んだ結果、赤のマスに止まり、鳥取でそりをする事になった。

ひまわり↓8マス進んだ結果、青のマスに止まり、佐賀で陶器を購入。

あさがお↓7マス進んだ結果、赤のマスに止まり、糖尿病(↑嘘)になってしまい、阿波踊りでダイエット開始。

たんぼぼ↓1回休み

ひまわり↓8マス進んだ結果、緑のマスに止まり、九州をめぐる事になった(ただし2周)。





自動で回転し始めた。そして針が止まったのは……。

『6』

ボコの戦車は前に進み、ある場所へと停止した。その場所とは……。

『パンパカパーン!!』

突然ファンファーレ音がすると同時に『優勝!』と文字が浮かんできた。

それを見たみんなは「え、ええ!」と驚いている。そう、これは……。

『おめでとうございます、あなたたちは優勝しました!!』

それを聞いた穂乃果は「え、それは本当!」と驚きながら言う、タブレットは『本当です』と答える。

そしてみほたちは「やったー!!」と喜ぶのであった。

※ちなみに2位はあさがおチームで3位はたんぽぽチームで合った。

結果、順位はこのようになった←

ひまわりチーム：125ポイント

あさがおチーム：15ポイント

たんぽぽチーム：10ポイント

.....

『それじゃあ、優勝したひまわりチームの皆さんには、私が作った道具をどうぞ!!』

勇樹はそう言いながら道具をみんなに渡した。それを受け取ったみんなは喜ぶも小野がいれば苦笑いで答えるものがあった。

「ちなみに、2位のみんなにはこの学園都市で有名な菓子の『和菓子10品セット』で3位は『七星ホテルの1泊無料券』を渡しとくぜ」

伊江はそう言いながらあさがおチームとたんぽぽチームに渡した。

「すみません勇樹、そろそろ時間が」

海末の言葉に勇樹は「え、時間？」と腕時計を見てみる。すると時刻は11時をさしていた。

「それじゃあ、そろそろお開きですね」

「そうですね。それじゃあ皆さん!!」

百合子の言葉に勇樹はそう言いながらマイクでみんなにあることを言い出した。

「お手を出してください!!」

JJのメンバーは頭にハテナマークを浮かばせているが、みんなが立ち上がったため彼らもたあち上がることになった。

「それでは行きますよー、よーっ!!」

パパン、パパン、パパンパン!!!

「はい、ありがとうございます!!」

勇樹がやった行動、それは三本締めであった。

.....

「あ、そうだ。アンチョビ。お前たちにもう一つのお土産が」

それを聞いたアンチョビは「なんだ？」と言うと、勇樹は「これ」とある物を渡した。それは。

「こ、これは。忘年会に出した料理じゃないか!!」

アンチョビに渡したものの、それはこの忘年会に出てきた料理がタッパーに入っていた。

「なんだか苦勞しそうだから用意したらどうだと……美樹姉が言っていて」

「ほ、本当にいいのか!」

「ま、いいよ。どうするかはアンツイオ高校に任せるし、面白いもの期待しているよ」

それを聞いたアンチョビは「よし、早速みんなに知らせる!!」と張り切るのであった。

.....

追伸

道具の説明&小話←

「みほさんに渡したのは、最新の戦車道が見られる『未来戦車道DVD』です」

みほが手にしているDVDの説明を勇樹はし始める。

「え、これってどういう意味？」

「今までの思い出を集めてこのDVDにしたってことです。もちろん大学選抜の戦いも入っています」

「わあ、凄いものが当たった!! ありがとう!」

それを聞いたみほは喜びながら御礼をするのであった。

「ちなみに、澤さんと丸山さんと宇津木さんは『イタズラオモチヤニナル光線銃』です」  
澤、丸山、宇津木が手にしている銃型の道具に勇樹は説明する。

「え、これってその名の通りなの？」

「はい、光線銃型の道具で、この銃から放たれて当たった物は何でもイタズラおもちゃになるんです」

「なんだか、面白そう」

「ただし、この道具の効果は1度しか効かず時間は1分程度です。子供のおもちや程度なので、驚くことしかできません」

「……安心した」

澤は困るかのようになり、宇津木はいたずらっ子のように喜び、紗季は無表情で答え

る。

「最後に、穂乃果と千歌が手にしているのは、『お話しバント』と言う一種の鉢巻き型の通信機です」

最後に、千歌と穂乃果が手にしている道具を勇樹は説明する。

「え、これが通信機？」

「普通のバンドに見えるけど……？」

「見た目はそうですが、電話と同期すると。携帯電話に出れなくてもこれで電話に出ることが出来るのです！」

勇樹はバンドの説明を、どんどんしていく。

「この道具は1時間充電すれば1日中使用が可能です。使用範囲は電話を持っているだけでも半径3キロまでですのでご安心を！」

それを聞いた2人は「それはすごいね！」と同時に答える。

「じゃあ、これでどこでも話が出来るの!？」

「それだったらすごいね本当に！」

それを聞いた勇樹は「それじゃあ、ごゆっくり」と答えるのであった。

「イカ娘は『豪華海老三昧セット』で、世界中にある貴重な海老をそろえておきました」

勇樹がそう言うのとイカ娘は「これが海老でゲソ!？」と驚きの反応をする。

「はい、結構探すのに苦労しましたから大切に食べてくださいいね」

「わかったでゲソ!! 大切に食べるでゲソ!!」

勇樹の言葉にイカ娘は喜んで答える。それを見た渚は「安全な物で、よかった」と安心するのであった。

.....  
 そして、みんなが帰った後。勇樹たちは清掃&片づけをして、道具をしまったのであった。

FIN

『オリジナルクロス大ストーリー』編 第1話 バーベ  
キュー編 前編

5月某日、イカ娘たちは大洗に聖グロ、サンダースにアインツォにプラウダ、黒森に知波単に大学選抜のみんなは、集合場所である浜辺に集まっている。

「栄子、ここであつていでるでゲソ？」

「そうなんだけどなあ、ここで合つていのか？」

イカ娘の言葉に栄子は答えるが、彼女は地図を真剣に見て答える。

なんせ、手紙の中には地図が入っているが、その地図には砂浜に星のマークが書かれているだけでそれ以外は何も書いていない。

「あたりには何も無いわね」

「不審な物は一つも……おいていないわ」

「どういう意味だ？」

ダージリン、ケイ、アンチョビは周りを見ながら言うとき杏が「どうなつていんだろうね」とのんきに答える。

「ふむ、これは一種のたましではありませんか。私たちが陥れるために」



「だとしたら許さないわ！　しゆくせーしてやるっ！」

西の言葉にカチューシャは怒っていると、澤梓が「あ」と何かを見つけたかのように、声を出す。

「どうしたんですか澤さん」

「西住隊長、実はあそこにマンホールが」

みほは澤に質問すると、彼女は砂浜に指をさしていったためみんなは砂浜を見ると、人が入れるほどの大きさをしたハンドルが付いたマンホールが置いてあった。

「これは、マンホールだな」

「でも、どうしてここに？」

アンチョビとカルパッチョはそう言うと、沙希がマンホールを開くとその中に入っていく。

「あ、丸山さん！」

「お、追いかけるゲソ!!」

「待てよおい、行くぞ！」

みほがマンホールに入っていくのを見たイカ娘は、彼女と一緒にマンホールに入っていく。栄子たちも、急いでイカ娘の後を追うかのようにマンホールに入っていく。

.....

20XX年、日本のA草の中心にある場所で、天星たちと紅蓮たちは集まっていた。

「飛鳥。ここで合っているが、本当か？」

ユウヤは飛鳥に向けて言う、彼が言うのも当たり前。ここは都会の中心であるためあたりは人だらけ。

飛鳥は「おかしいな」と言いながら地図を再び見る。

彼女たちもイカ娘同様、ある人物からの同窓会で地図に乗っている場所を頼りに来ている。

「にしてもどこに行くんだ？ 内容によるとバーベキューだが本当か」

「場所によつては違うが。もし都会でやるとしたらどこに行くんだ？」

焰と紅蓮はそう言っていると、ユウヤは「ん、なんだあれは」とある物を見つけた。

一部の壁に扉が付いていて、そこには「ユウヤさんたちはこつから来てください」と紙が書かれていた。

「も、もしかして。これかな？」

雲雀は何かに気づいたのか、扉を開けてみると、そこには登りの階段が設置していた。しかしそれを見たみんなは「あれ。なんか違和感が」と疑問を抱く。

まで力を見ていると。メカは向きを変えて移動し始めた。

それもそのはず、ここはA草だが1階の建物しかない。

ユウヤは「飛鳥、紅蓮、焔。行くぞ」と言うと、3人は「う、うん（あ、ああ）」と目を丸くしながらも、ユウヤと一緒に、階段を上り始めた。

.....

20XX年、東京都の東京駅前に、名探偵ミューズの穂乃果たちが集まっていた。

彼女たちはいつもの服装と髪型をしているが、なぜかカバンをしていた。

「えっと、ここでもいいかな？」

穂乃果は招待状が入っている手紙を手にあたりを見渡しているが、勇樹たちの姿は見えない。

「もしかして、これは私たちをだますためのですか?！」

「それはいくら何でもないわね……でもどこに?！」

「さあ、私にもわからないわ」

海未は怒っていると絵里が落ち着かせるように言う、真姫はあきれながらあたりを見渡して、陽がいるか確認している。すると。

「おや、あなたたちは」

どこかで聞いたことがある声に穂乃果は振り向くと、銀色のロングヘアーに色白の肌

をした男性が現れた。

「イーブル…っ!!」

穂乃果はそう言いながら彼をにらみつけるが、イーブルは「おっと、落ち着いてください」と冷静に言い始める。

「今回は私たちも誘われてきました。戦いは一時休止。今回は休みましょう」

それを聞いた真姫は「それ、本当なの？」と言うと、「そーだよ」と黒髪のショートヘアで低身長青年、ウージーが答える。

「しっかしまあ、ここにないっていうとしたら、どこにあるんだ？」

「わ、わからない……でもこの地図に載ってるかもしれない」

オウフルはそう言いながら頭を抱えて言う、デッドがおびえながら冷静に答える。  
すると、凜が「あれ？」と何かを見つけた。

「凜ちゃんどうしたの？」

「穂乃果ちゃん、実はあそこに鏡が」

それを聞いたみんなは一齐に凜が見たほうに向くと、4メートルほどの高さをした鏡が置かれていた。

「もしかして、勇樹君の発明品？」

「だとしたら、この鏡はいつたい？」

穂乃果とイーブルはそう言うと、キルが「何だ、このボタン」とスイッチが付いたりモコンを拾った。

そこには「鏡の前にみんな集まってから押してください」と書かれたいた。みんなは固まりながらも鏡の前に並んだ。

「それじゃあ、行くよ」

キルはそう言うと、リモコンをカチツと押した。すると鏡が突然光出すと彼らは鏡に吸い込まれていった。

.....

佐介たちは、現在森の中にいる。理由は簡単、勇樹が掛かれた招待状の場所へと来ている。

「佐介君、本当にここでもいいの?」

「うーん、間違つてはいないけど。本当かどうか」

佐介はそう言いながら紙を見ている。彼がそう言うのも当たり前、紙には地図は書かれていないが肝心の集合場所が書かれていなかった。

光牙は「大丈夫か?」と思いつながら、例の場所だと思われる建物へと行く。すると。

「あれ、佐介さん。あれでは?」

斑鳩の言葉に佐介は反応する、その場所を見ると「佐介さんたちへ」と書かれた紙がつけられている。だが、その場所がなぜか地下鉄につながるエレベーターであった。

「場所は間違っていないですね」

「そうだな、しかしなんでエレベーターだ？」

「ま、今はそこに乗っていくか」

詠、雅緋、光牙はそう言うのと、みんなはエレベーターに乗って移動することにした。すると。

「あれ、これボタンが1つしかないよ」

四季の言葉に紫苑は「え」と驚く、彼女の言う通り。エレベーターは普通う回数の数が掛かれたボタンが設置している。

だがこのエレベーターはなぜかぼたんが1つしかない。

「もしかして、これ勇樹君が用意したのかな」

「可能性は0とは言い切れないが、あり得るな」

「それじゃあ、押すね」



「いててて」

「あ、あれ」

「ここはどこ?!」

「前の会場とは違うな」

佐介、西住みほ、穂乃果、そしてユウヤがクツションから立ち上がると。勇樹が「おいつす」と声をかけて数秒後。

4人は「あれ?」とあたりを見渡しす。

「先に言つとくけど、ここは珍等師学園都市の一部だ」

「そうですか……って、ここ都市の一部?!」

「会場は分かるが、どこの部分だ!?!」

3人は勇樹に向けて言うと言は「あ、えつと」と戸惑っていると、百合子が「あ、私  
が説明します」と説明し始める。

「ここは珍等師学園都市の北部、つまり山の中です。今いる場所は奈々さんの別荘の近くにある河原です」

それを聞いたみんなは「ええつ、てことは大都市?!」と言う反応をする。

イーブルたちと穂乃果たちは冷静、一度この町に来たからだ。



そして数分後、太田たちとアブ引き部のメンバーがやってきた。

『オリジナルクロス大ストーリー』編 第2話 バーベ  
キュー編 中編

「それにしても、自然が豊かなところでゲソ」

イカ娘は、「河原を見て言うのと奈々が「そうですね」と答える。

「ここは都心から離れていて誰も使われていない土地でしたので、そこを利用してわたくしたち専用の別荘を作ったのです」

「うっへえ、ここが勇樹たちの別荘とはな」

「これは少し意外ね」

「でも、自然が豊かなのはすごいね」

相沢家のみんなもあたりを見て言うと、伊江が「そうか」と苦笑いで答える。

「ここが会場ですか、ドームでやるのはいいが、外でやる物良いですね」

「はい、ちなみに植物とかは勇樹君の発明品で作っています」

「そうか、しかし大変じゃなかった？」

「それでもありません、植物のDNAを変えれば枯れにくくしてくれるので、安心ですよ」

「ワオ！ それはすごいわね!!」

ダージリン、まほ、ケイは太田と一緒に別荘の話をしている。

予想外の答えにケイは驚いていた。

「それにしても、すごい人数だね」

「そうだな」

幹子は参加したメンバーを見て言っていると勇樹は答えて「さて開始すつか」とカバンからマイクを出した。

「えーっと、おっほん。皆さんいいですか？」

スピーカーの声にみんなは反応し、あたりを見渡すと。舞台であろうところに勇樹が立っていた。

「今回、皆さんを集まってもらったのは……えつと確か……あつた。実はゴールドデンウイーク記念としてバーベキュー会をやろうと言う計画で、今日は私のわがままですが……つて、あっているのか？」

「囁んでいるな」

「うん、それも戸惑っているね」

勇樹の行動に麻子はジト目で言うど、沙織も同意するかのように答える。

それを見たココア会長は「まーまー勇樹ちゃん」と彼の肩をポンポンと叩く。

「か、会長？」

「ま、ここからはあたしに任せてよ」

ココア会長はそう言いながら、マイクを手にすると、「そんじやー」と言い始めた。

「今回は、勇樹ちゃんやんが突然『ゴールデンウィークがあるから、みんなを呼んでバーベキューでもするか』と言い始めたため。突然だけど勇樹ちゃんのがままと、勇樹ちゃんが用意したごちそうを受け取ってくれー！」

それを聞いたみんなは、頭にクエスチョンマークを浮かばせて、顔を傾けるが。ミカは何か気づいたのか「なるほど」と納得した。

「じゃあ勇樹ちゃん、例の装置を起動して。ウーロンとジャスミンも」

「わ、わかりました!! それじゃあ、お願いしますよ先輩方!!」

勇樹はウーロンとジャスミンに向けて言うと、2人は「わかった!」「任せてねえ」と言いながらレバーを一斉に動かした。

すると、会場に設置していたと思われる機械が突然動き出すと、一カ所へと集まっていく。

その機械部品は、集まっていくとどんどん組み立てていき、何かが出来上がっていく。

「何でしょうか？」

「一カ所に集まっていくな」

「すごい量やな」

それを見た花陽と栄子は道具を見て行っている、日影はジト目で答える。そして、それらはバーベキューのコンロと大型の鳥型のメカと長いテーブル、そして大型の鍋が出来上がっていた。

「これらは勇樹ちゃんが用意した一種の道具で、みんなのために開発したつてき。あ、セルフだけど高級スイーツとドリンクバーもあるよ」

ココアはそう言うと、みんなは「え、これ彼が用意したの物?」と驚きの反応をする。それ信じられないよね、だってこれをたった一人で用意したもの。

「それじゃーみんな、席についてねー。席は予め招待状に書いているよー」

ココアはそう言っていると、優花里が「あ、確かに書いていますね」と招待状を見て発見する。

ここで、分からない人がいるため、少し簡潔に解説しよう。

東北方面・赤色の部分には、大洗・知波単・れもん・大学選抜チームと半蔵学園とミルキーホップと遠野天狗ノ忍衆が座っている。

北西方面・青色の部分には、サンダース・聖グロ・アインツイオと焰紅蓮龍隊と私立舞扇大学付属高校と私立咲芸大付属高校とμ<sub>s</sub>が座っている。

西南方面・緑色の部分には、プラウダ・継続・黒森峰と死塾月閃女学館と都立薄桜女

学院とゾディアック星導会とAquoursが座っている。

南東方面・黄色の部分には、南風・長谷学校の女子野球部委員と秘立蛇女子学園と県立志野塚工業高校とA・R・C・Angelsが座っている。

「それじゃあ、みんな座ったー？　じゃあ、勇樹ちゃん。おねがーい」

「は、はい。わかりました！　では……っ」

会長は勇樹に向けて言うと、彼は顔を真っ赤にしながら紙を見る。そして……。

「そ、それじゃあ。皆さん、今夜は楽しんでください!!　乾杯っ!!」

勇樹の言葉にみんなは「乾杯!!」と反応する。

……

「おいしいっ!!　このあんこう鍋、会長のよりおいしいよー!」

「ほんとだね!　あんこう鍋もだけど、焼きそばもたこ焼きもだよーっ、なんでだろう?」

「お好み焼きもあることに驚きました、はふはふ」

「ここチャールハン、卵とねぎだけのシンプルですが、非常においしいです!」

「ケーキもあることはうれしい」

あんこうチーム基みほたちは、彼女たちが持ってきたあんこう系の料理と勇樹が用意

した鉄板料理驚きながらも淡々と食べている。

「さすが勇樹さんですね、スコーンに合う紅茶がおいしいですわ」

「そうですね」

「イギリス人に合うようにフィッシュ&チップスもあるのね」

「料理の味が最高ですね」

「ん、そうだな。外で食べるのは久しぶりだ」

「そうですわっ！ それじゃあわたくしは少し料理を持ってきますわー!!」

「お、おいつー!」

ダーズリンがいるところは、彼女たちが持ってきたスコーンとイギリスの代表料理であるフィッシュ&チップスをいただいている。

ペコ同様、アツサムとニルギル達もそれを見て驚いている。

「ワーオツ！ すごいわね!!」

「たまには外でバーベキューも悪くないな」

「ええ、でもどうして卵が？」

「ベーコン・エッグでもするのかな」

「それかもしれないね」

「それにこのハンバーガー用のパンズも用意しているよ!」

「さすが、この前の忘年会もいいけど。これも悪くないね！」

「そうだね！」

サンダースがいるところは、彼女たちが持ってきたベーコンとアメリカの代表料理であるソーセージとロブスターとパンケーキを焼いている。

バーガー用のパンズとチーズにレタスやソース類に卵などが置いてある。どうやらバーガーを作るようだ。

ケイは、アメリカ料理のバリエーションに驚き。ナオミは冷静だが、アリサは「なんでここに卵？」と言う風にジト目で見ている。

「さつすがだ!! イタリア料理が満載じゃないか!!」

「これはおいつしいつすね！」

「デザートは冷却装置で冷やしているのも驚いたわ」

「よっしゃー、食べていくか!!」

「腹いっぱい食うぞ！」

「いただくぞー!!」

アンチョビがいるところは、彼女たちが持ってきたパスタを使用したカルボナーラとペペロンチーノにピザとドリアを専用の二重のコンロで焼いている。デザートは冷蔵庫型の機械で冷やしている。



彼女は、自分たちが持ってきたパスタを使用していることに喜び。ペパロニもピザやドリアなどの料理に目を光らせている。カルパッチョはデザートを冷やしている専用の冷蔵庫を見ている。

「何よ、テキーラを持ってきたのに料理じゃなく飲み物になってんじゃん!」

「仕方ありません、お酒を使った料理はあまりありませんから」

「ノンナの言う通りだよ、それにしてもバーベキューさピロスキサボルスチ、ビートって(ノンナの言う通りですよ、それにしてもバーベキューにピロシキにボルスチ、ビートって)」

「カオスだね」

「ええ、ですがそんなに熱くはありませんね」

カチューシャがいるところは、彼女たちが持ってきた(ノンアルコールの)テキーラが飲み物になっていることにカチューシャは怒っているが、アルコールを使用した料理は実際に少ない。

カチューシャは不貞腐れながらもお肉を食べていると、ノンナは野菜をちよくちよくととっている。アリーナとニーナはノンナの言葉に同意するかのようになら、クラーラは料理が厚いことに意外に驚いている。

「ふむ、非常においしいな」

「そうですね。焼くならともかく、ボイルはあまり見ませんからね」

「ノンアルコールビールもありますし、おいしいですね」

「あ、あつちでバームクーヘン焼いているよ！」

まほがいるところは、彼女たちが持ってきたソーセージを鍋に入れてボイルやコンロで焼いたり、ザウアークラフトとノンアルコールをいただいている。向こうではバームクーヘンを作っている。

まほは無表情ながらも料理を食べている。エリカはソーセージの料理法に興味を沸かせていて、赤星は、それを見ていると。小島は向こうでバームクーヘンを作っていることに驚く。

「おおつ、これは素晴らしい。まさに和であります!!」

「そうですね！」

「西隊長！ 私たちが持ってきたお米が焼きおにぎりになっています!!」

「さすが勇樹殿だ！」

「これは、もはや極上の場所ではありませんか!?!」

西がいるところは、彼女たちが持ってきたお米を使用して焼きおにぎりを作っている。

また、お米にあるたくあんと納豆なども用意しており。お肉だけではなくたくあんな

どを食べている。

「サルミアツキがないのは、少し悲しいね」

「仕方ないよ。ミカが持つてきたのは食べてはいけないものだから」

「だけど、リハップラとグリツリ・マツカラおいしいよ」

「ミカたちがいるところは、彼女たちが持つてきたサルミアツキを使用……してない。」

代わりに、フィンランドの料理であるリハップラとグリツリ・マツカラをいただいている。

「ボコのハンバーグ、おいしい」

「ふう、このオランダクロツケおいしいわね」

「うーん、私はこのソースカツ丼がおいしいが？」

「いいえ、この焼きそばがおいしいわよ！」

愛里寿たちは、大学生が持つてきたワインを飲んでる。ただ、アリスはまだ未成年なので福音が用意した『イチゴジュース』を飲んでる。

また、料理は群馬を中心とした料理が多い。

「ふう、まさかここでバーベキューをするのは意外だな」

「うん、そうだねユウヤくん」

「マグロステーキに合う醤油がおいしいです」

「スイカのジュースって、なんで飲み物なんだ？」

「柳生ちゃん！ この綿あめおいしいね」

「ああ、そうだな」

半蔵学園のみんなは、飛鳥たちと一緒にいただいている。

ユウヤと飛鳥は顔を赤くしながらも料理を食べている。斑鳩はマグロステーキに合う醤油に興味津々。

葛城はスイカがジュースになっていないことに、不満を抱きながらも飲んでいいる。柳生は雲雀と一緒に綿あめをいただいている、イカは現在焼いている。

「クー!! 久しぶりのごちそうだ!」

「おおっ!! 肉がいつばいだ、肉がいつばいだ!!!」

「もやしも最高ですわ! 焼きそばにたくさん入って最高ですわ!!」

「ほんまやな」

「フォンデュを作ってみたけど、パンなど合うわね!」

「ふふ、唐辛子を入れたらどうかしら?」

焔紅蓮隊のみんなは、焔たちと一緒にいただいている。

久しぶりのごちそうに焔と紅蓮はバクバクと食べている。詠はもやしよふんだんに

使用した焼き楚辺をいただいている。日影は無表情ながらもわかめのサラダを食べている。

未来は、チーズフォンデュを作り、パンやパプリカなどを付けて食べている。春香の行動に紅蓮らは「それだけはやめろ」と一斉に言う。

「おいしいっ！ これはすごいね!!」

「そうですね、ピーマンを丸ごと焼くのは初めて見ます」

「うーん、本当においしいね！」

「凜もうれしいにゃー!!」

「ご飯もありますから幸せです!!」

「本当にすごいわ。この世界三大珍味も以外ね」

「ほんまやね、うちもうれしいで」

「ええ、本当ね希」

「バーベキューなんて、久しぶりね」

μ s たちも料理を食べていて、メンバー全員で食べるのは久しぶりでいつもより輝いている。

「うわあっ！ 私の旅館で作る料理と同じだ!!」

「うん、そうだね千歌ちゃん！」

「でもどうやってこれを作ったのか気になる」

「ふふふ、この墮天使ヨハネ。この天界をいざ!!」

「善子ちゃん、うるさいぞら」

「おいしいね、お姉ちゃん！」

「ええ、本当においしいですわね」

「さすがだね、これは」

「うーん、さすが勇樹ね！」

Aquorsたちも料理を食べていて、メンバー全員で食べるのは久しぶりでいつもより輝いている。

「さすが勇樹です、これはおいしいですね」

「このチャーハン、カレー意外に天津飯風にチャーシューなどがあつた」

「これはボクも真似したいねえ」

「ホットミルク最高だ……肉もうまい」

「ハンバーグうめえ！ こいつは驚いた……でも、この肉の大きさどうやって作つたんだ？」

「フライドポテト、塩味以外にコンソメもあつた」

「ハム……クロワッサン、おいしいね」

JJのメンバーも、勇樹の料理を食べて少し褒めるが、根っから悪人。悪口は多少いうが、意外な一面を見せる。

「おぉーっ!! すごい量のエビでゲソ!!」

「こりや驚いた。あいつこういう一面があるんだな」

「すごいわね、アルバイトをしていた結果なのかしら?」

「このハンバーグおいしい!」

「海老ピラフもあることもすごいな……千鶴さんの味を再現したのか?」

「イカ抜ききのシーフードミックスピザ、これもおいしいね」

「イカちゃんのカスタミパスタ! 本物じゃないけど本当においしい!」

れもんと南風のみんなも、料理を食べていて。イカ娘の好物である大量のエビが用意されている。

アルバイトの結果であろうか、思った以上に料理が用意されている。

ちなみに、早苗が食べているイカちゃんのカスタミパスタは、ある装置によつて再現している。

「イビルジョーの串焼き、大きすぎて別のところで焼いていますがおいしい!」

「ふむ、オゾン草の焼きそば。なかなかうまいな」

「鮮度が保っていていいですね」

「やっぱ肉はうめえな！」

「「それ、なんだか嫌な予感する」」

佐介たちは、みんなと一緒にお肉や焼きそばを食べている。相馬が持ってきたお肉はみんなは違和感を抱きながらも食べている。

ちなみに、チョコレートを持ってきたメンバーは。それを湯煎してドーナツやイチゴなどを付けてチョコフォンデュ風にしている。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「さて、そろそろだな」

ココアは何かを図っていたのか勇樹に「それじゃあ、やる？」と言うと彼は「そうですね」とマイクを手にする。

『全員、ちゅーもーく!!』

勇樹の言葉にみんなは反応して、ステージの方へと向く。

「さて、皆さんが盛り上がり上がっているところですが。今回はちよつとした道具を用意しました!! 少々お待ちください!!」



勇樹はそう言いながらステージから降りると、何かを探すかのようにガサゴソと音がする。

「みぽりん、勇樹が用意したもので何だろう？」

「うーん、勇樹さんが考えることだから少しわからないかも」

「あいつ、どんなものを出すんだ？」

「結構やばいものだったりして？」

「それはもしかしたら、ガチャじゃないかな！」

「どこが用意したのですか、穂乃果」

「あ、わかった!! ゲーム大会かも！」

「千歌ちゃん、何のゲームじゃないと思うけど」

「ふむ……これは分かりませんね」

「私もだ、彼は何を出すんだ？」

「もしかして、釣りとかでゲソ」

「そんなもん、用意するわけ……ありそうだな」

みんなはなにかとザワザワしていると。勇樹が「あ、あつた！」と大型の何かをステー

ジへと出した。それは……。

『『立体バーチャルタイムマシン』!!』

大型のパソコンにカウンターが付いた装置を舞台裏から出してきた。

.....

「立体バーチャルタイムマシン?」

勇樹が出した道具に、みんなは頭にハテナマークを浮かばした。

中にはあまりの大きさに、一部からは「でかつ!」と驚くものがいた。

「そんじゃー、ここからは勇樹ちゃんではなく。太田ちゃんと暗山ちゃんが説明するつて」

「わかりました。そんじゃあ、お願いな」

ココアの言葉に勇樹は言うど、太田と暗山が現れて「わかりました」と答える。

「この装置は、その名の通り周りにある装置が起動して僕たちを時空移動することが出来る装置です」

「行きたい場所や時代などがあれば、この専用のリモコンで設定し、起動すれば行けるぞ」

太田と暗山の言葉に、みんなは頭にハテナマークをさらに浮かばせる。

「あー、そうだなあ……例えるならば、サファリパークのバスだ」

伊江の例えを聞いたみんなは「あーなるほど」と納得する。

「ちよつと待つてください、確かその道具つて一種の時空移動なのはわかりましたが、もし私たちがその時代に言ったらどうするのですか？」

海末がそう言うのと、みんなは「そう言えば……」と冷静に考え込む。

すると勇樹が「あ、ここからは私が説明します」と言い始めた。

「この装置は時空移動することはできませんが、一種の立体映像。つまり実際に行くがあくまで映像です」

「ふむ、つまり装置によって作り出した時空映像と言ったほうがいいですか？」

イーブルが言うのと勇樹は「そうですね、簡単に言えばそう言うことになります」と答える。

「それじゃあ、機械を起動します。ポチっと」

太田はそう言いながらスイッチを押すと、地面からアンテナが出てくるとあたりを囲むかのように青色の幕が発生した。

「時空移動変換装置起動開始、超電磁波定期機能起動。異常はないよ」

太田はそう言うと、勇樹は「ありがとう」と答える。

「それじゃあ、まずはどの時代から行きますか？」

勇樹はそう言うと、みんなは「うーん」と悩み始めた。すると。

「試しにだが、まずは10年後の東京とかはどうだ。もちろんオレたちの世界で」

ユウヤはそう言うと勇樹は「わかりました」とスイッチをカチカチ押す。

「時間軸X—2294、Y—8153。設定時刻10年後、空間設定東京。これでよし」

設定をし終えた勇樹は「それじゃあ、タイムワープ開始!!」と赤色のスイッチを押す。すると。

ジジジジジツ!! バグュー!!!

勇樹たちがいたところは突然、水色の電気が発生すると。彼らは湯屋たちがいる世界

から10年後の東京へとタイムワープし始めた。

『オリジナルクロス大ストーリー』編 第3話 バーベ  
キュー編 後編

10年後の東京都・浅草、その上空には勇樹たちが用意した『立体バーチャルタイムマシン』が浮かんでいた。

「ここが10年後の東京都の浅草です」

勇樹はそう言っていると、ユウヤは「ここが」と外を見て言う。

彼が言うのも当たり前、今の東京と未来の東京は非常に変わっており。ドローンが配達をされていて楕円形の乗り物が空を浮かんでいて、スカイツリーよりも高いタワーがあるからだ。

今まで見てきたのとは違って、相当驚いているようだ。

「それにしても結構変わっているな」

「あくまで立体映像型だけど、今までの都市発展や人口予測などの計算をした結果。未来の東京はこのようになっていと思うよ」

勇樹はそう言っていると、紅蓮が「実際に降りれないか」とつぶやく。

それを聞いた勇樹は「無理とは言い切れないよ」と答えるとみんなは「え!？」と驚く。「こんな時であろうかと思つて、この道具を用意してよかつたよつと」

勇樹はそう言いながら出したのは、丸型の画面が付いたリモコンで、リモコンにはアンテナが付いている。

『タイムゲートリモコン』を使えば、立体バーチャルタイムマシンにいても使用が出来るよ」

勇樹はそう言いながらスイッチをカチカチつと押しいき、「これでいいだろ」と言いながらリモコンを壁に向けてスイッチを押した。

すると、壁に丸形の穴が出来上がった。

「タイムゲートリモコンは、時間制限はないが。この穴に他の人が入ると警報が鳴るようになっているんだ」

「すごい機能があるつすね」

勇樹の言葉に霊華は答えると、ユウヤが「それじゃあ、行つてみるか」と言い、ゲートから出てきた。

.....

さすが東京と言つたほうがいいだろうか、見たこともないものや食べ物などがたくさんある。

「うわあああつ！ すごいね柳生ちゃん！」

「ああ、そうだな」

いろんなお菓子が並んでいる屋台を見た雲雀は目を光らせて柳生に向けて言うと、彼女はそれにこたえるかのように言う。

斑鳩は貧民街がどうなっているか心配しており、詠と一緒にその場所へと行き、葛城は未来でしか売ってない物があると聞いて急いでいった。

焰と紅蓮は、『21世紀デパート』で今手に入らない格安の商品があると聞いて速攻でその場所へと行き、春香は日影を明るいい性格にするために、怪しい研究所へ言った。

未来は現在、百合子の後を追っている（理由は不明）。

「なあ、飛鳥。少し言いたいことがあるがいいか？」

「うん、それ私も言おうとしたところだよ」

そして、ユウヤと飛鳥は、ある店の前にいた。その店を見た2人は、体から汗を出していた。理由は簡単。なぜなら、このお店は。

「「なんで飛鳥（私）のお店がここに!?!」」



飛鳥の実家兼寿司屋であるお寿司屋がなぜかあつたからだ。もちろん、2人はどうしてここにあるか分からず体から汗が出っぱなし。すると。

「お、お前たちは」

声が出たため、何かと向きを変えると。

飛鳥のような髪形をしたユウヤが立っていた、出前がえりだったのか岡持ち型盛器を手にかけている。

「あ、あの……っ!？」

飛鳥が何かを言おうとしたところ、ユウヤは彼女の口を押えてどこかへと逃げていく。

「っ! どうしたのユウヤ君。なんで」

「飛鳥、これは勇樹から聞いた話だが。これは少し厄介なことだ」

ユウヤの言葉に、飛鳥は「厄介なこと？」と頭を傾げる。

「勇樹からの話によると、『現在の人物が未来の世界に来たら、一種のバタフライ現象。矛盾が起きる。あまり長いしないほうがいいよ』と」

「そ、そうなんだ」

ユウヤの言葉を聞いた彼女は、少しがっかりした。すると。

「おーい、忘れものだ」

未来のユウヤが、飛鳥とユウヤにある物を渡した。

四角いプラスチックケースに入っているが中身は何かわからない。ただ、何かが入っているのか重みがある。

「お代はいいよ。お前たちは過去から来た客だからな。じゃ」

未来のユウヤはそう言うと、店へと走っていった。それを見た2人は「過去とは違つて明るいな」とつぶやいた。

.....

「それで、これを？」

桜はユウヤと飛鳥の話を聞いていると、2人は「そうです」と答える。ユウヤが大人しいことを言うのは珍しいことだ。

「意外だな、未来のお前たちが今のユウヤたちが来ることを知るのは……あむ」

それを聞いた勇樹は驚きながらも焼き肉を食べている。理由は簡単。

タイムマシンで未来の人が過去の世界へと行くのは問題ないが、今の自分が未来の世界に行くのは、グレーゾーン、つまり知っていい事か分からないことの丁度真ん中のこととを表している。

しかし、今回の場合は例外と言ったほうがいいだろうか？

「先輩、ところでなんすが。今度はどこに行くつすか？」

パスタを食べながら霊華は勇樹に向けて言うのと、彼は「そうだな」と言いながらスイツチを押していく。

「それなら、過去はどうゲソ？ 未来以外にも過去と言うのも気になるゲソ」

「お前な……でも確かに気になるな」

イカ娘の言葉に栄子はなぜか同意すると、太田が「それじゃあ」とある時代を言い出した。

「恐竜がいる白亜紀、1億年前はどうかな？ 場所はアメリカの森の中あたりで」

それを聞いた勇樹は「そうだね。それじゃあ」とスイッチをいじって時代と場所を設定する。そして。

「時間軸X—0010、Y—2277。設定時刻1億年前、空間設定アメリカの森の中。これでよし」

設定をし終えた勇樹は「では。過去に向けて タイムワープ!!」と赤色のスイッチを押すと、過去に向けて1億年前のアメリカの森の中に向けてタイムワープした。

.....  
1億年前の白亜紀、浜辺にに勇樹たちが用意した『立体バーチャルタイムマシン』が着陸していた。

「ここが、白亜紀なんだ」

それを見たみほはあたりを見渡す、周りには海と森。ただし森を見ると、ヤシの木や見たことない気がたくさん生えている。

「このあたりで本当にいいのですか!?!」

「ルビイ達、食べられるのかなあ……」

「いや、さすがにないよ」

海未とルビイがおびえているのを見た勇樹は、苦笑いで答える。焰とオウフルは「食べ物が入る」とつぶやいていたが、イーブルと紅蓮に「やめとけ」と停止される。

勇樹は「それじゃあ、ここに」とタイムゲートリモコンのスイッチを押す、壁に穴が開いて森の中につながった。

「おー、なかなか面白そうじゃん勇樹ちゃん」

それを見た杏は言うど、彼は「まあ、当然のことです」と自慢する。そど子は「これ、本当に大丈夫？」と心配される。すると。

「あれ、勇樹君。リモコンは？」

穂乃果の言葉に勇樹は「え」とリモコンを持つていた手を見る、そこにはリモコンが握られていなかった。

それを見た勇樹は、汗が滝のように出てきて「あ、これ本当にやばいかも」と青ざめる。

「統師、勇樹が何か言っているけど。どういう意味ですか？」

「さあ、これはさすがに私もわからん」

「姉貴、これってまさか」

「ええ、私も同じ意見よ」

「勇樹、アンタまさか」

「リモコンを、投げたんじやないよね？」

ペパロニ、アンチョビ、栄子、千鶴、絵里、にこは言うど、勇樹は「そ、そうかも」と小さな声で答える。

「まあ、この状態でもすぐに帰れるから安心したほうがいいでゲソ」

イカ娘はそう言いながら『立体バーチャルタイムマシン』のコントロールパネルを操縦しようとする……前に、勇樹が「それだけはダメ——!!」と急いでイカ娘の触手をつかむ。

「な、なにするゲソ!? 操縦ぐらいなら私もできるゲソ!」

「そう言う問題じやない!! このゲートがしまっていないと時空の歪みが発生する!!」

勇樹の言葉に、みんなは「時空の歪み？」と反応する。

「どういう意味ですか! その時空の歪みが発生するのは!!」

「その名の通りだよ! 一定の空間と時間が安定していればなんも異常は発生しないが、何らかの現象が起きると時空の歪みが発生して、その場所には非常に危険な何かが起きるんだ!」

それを聞いたみんなは「どういう意味？」と頭を傾げるが、同じ人工生命体である連華は「なるほど」と何か理解する。

「つまり勇樹、その環境でなければいけないところで保たない何かがあると、危険な状態になるってことか？」

「あ、まあ簡単に言えばそうだな」

連華の言葉に、勇樹は同意する。

「元に戻る方法としたら、何かあるんだ？」

「先ほどの『タイムゲートリモコン』を探してゲートを閉じないと、元の世界に戻ることが出来ないんだ」

勇樹の言葉を聞いた連華は「ふむなるほど」とつぶやくと、そのまま穂乃果を見る。

「穂乃果、すまないが手伝ってくれないか？」

「え、良いですけど……まさか？」

連華の言葉に穂乃果は何かに気づいたのか、ジト目で見ると彼女は「そうだ、あれだ」と答える。

.....

「えーと、確かここあたりに落としたのかな？」

「こっちじゃないですか？」

「いやこつちと思うっす!」

「広いから見つけにくいね」

「優季さん、急いで探してください」

「はい、私に何か?」

「そつちの勇樹ではありません」

みんなは現在、勇樹の発明品である『モノ探し眼鏡』を使って探している。

実はリモコンをなくした要因が、自慢していたときに誤ってリモコンを投げたまま、その際に落としてしまった。

だが、問題はそこではなく落とした場所だ。場所が森の中なのでどこにあるか分からない。しかもここは白亜紀なのでどこから恐竜が現れるのか分からない。

例えるならば、大量の米粒の中に透明のナノブロックを探すほど難しい。

「時間は問題ないけど、できる限り恐竜に見つからないように探そう」

連華の言葉にみんなは急いで探しているが、リモコンがどこに落ちたかいまだ不明だ。

「そのリモコン、踏まれたりして壊れませんかわよね?」

「そこまで壊れるほどでしたら持っていきませんよ」

詠の言葉に太田は答えると、キルが「確かに」とどういふする。



向こうからは木が『バキバキバキッ!!』と折れる音がする、どうやらオウフルが探し  
ているだろうか？

「あいつもあいつで大変だな」

それを見た伊江はつぶやいた。

.....

「あ、あつたー!! リモコンあつたよ!!」

たけると桂里奈の声がしたため、みんなは「ええっ!!」と驚き、急いで2人がいると  
ころへと走っていく。

すると、卵の中にタイムゲートリモコンが置いてあつた。

「っしやつ!! ついに見つけたぜ!」

「すごいにやー!」

「怪しいと思うが、さすがにこのあたりで恐竜はいないよね」

「イカ娘、とつてこれるか?」

「触手を使えばなんとか行けるゲソ」

ペパロニ、凜、未来は歓喜を上げ、栄子はイカ娘の触手で撮ってくるように頼むと、彼  
女は触手を使ってリモコンをとりにかせた。

「これでゲソ」

そして、職種はリモコンを手にするそのまま戻っていき勇樹に返す。

「やったー！ ついに戻ってこれたよ！」

「たける君、桂里奈ちゃん。出かしました！」

「たく、もうなくすなよ」

「これは栄子の言う通りでゲソ」

「うぐ、それはごめんな」

勇樹はそう言いながら謝ると、美野里が「ねえねえ」と質問してきた。

「恐竜って、2本足で立っているの？」

「ん、まあ、恐竜は4本もあれば2本……両脚だけで立つつすね」

「恐竜って、牙は得ているの？」

「生えてるで、お肉とか食べるしな」

「恐竜って、赤色の肌をしているの？」

「生物によつては赤色に……ん、赤色？」

ペパロニ、キル、希は答えていると、伊江は美野里の言葉に違和感があったのか逆に質問する。

「ちよつと待った、なんで肌の言葉で言うんだ？」

「え？ みんなの後ろにいるんだけど？」

美野里の言葉にみんなは「え？」と一斉に後ろを向く、すると。

グルルルル……

目の前にはよだれを垂らした肉食恐竜のティラノサウルスが立っていた。

それを見た勇樹は「それじゃあ」とリモコンをしまうと、みんなにこう言った。

「立体バーチャルタイムマシンに向けて逃げろおおおおおおおおっ!!」

それを聞いたみんなは、立体バーチャルタイムマシンがある場所へと逃げていく。するとティラノサウルスも、勇樹たちの後を追うかのように走っていく。

・・

『グオオオオオオオオオッ!!』

「うわああっ!! すっげー速いつすよ!？」

走ってくるティラノサウルスに、靈華は答えると。勇樹は「今それどころじゃない!」と慌てて答える。

「勇樹さん、道具があるのでは!？」

「それがどれも修理中で使えるのは先ほどの道具たちだけなんだ!!」

「こんな時に修理中か!？」

佐介の質問に勇樹は答えると、葛城はその事実には驚愕する。

すると紫苑が「他に使える道具は!？」と言うと、彼は「確かどこかに」とカバンから道具を出していく。

「何かないか何かないか何かないか何かないか……」

「うわっ! どんどん来ているぞ!!」

そうしていると、ティラノはどんどん勇樹に使づいていき食べようとしたその時。

「あつた!! 『ウルトラバールンガムDX』!! それっ!!」

チューインガムを出して、それをティラノの口に投げると。ティラノは突然止まり風船のように膨らむとそのまま空中に浮かんでいった。

「ふう、間に合った」

「す、すげえ……なんだ今のは？」

『ウルトラバールンガムDX』と言って、1枚だけでも浮くが全部食べたら体が勢いよく膨らんでアドバールンのように空を飛ぶようになる。効果は1日程度」

勇樹の説明に相馬は「そ、そうか」と答える。佐介たちは勇樹が食べられる前にティラノが空に浮かんだことに驚いている。

.....

ジジジジジツ!! バギュー!!!

そして、数時間後、水色の電気が発生すると。勇樹たちがいたところに戻ってきた。

「ふう、何とか戻ってきたよ」

「あースリルがあつて怖かったつす」

「でもこれも楽しあつたね」

「そうですね……2度としたくありませんが」

勇樹たちはそう言うと、勇樹は「それじゃあ」とカバンから大型の鳥居ドアを出してきた。

「そろそろ遅いし、この『本人お戻り鳥居ドア』で、みんなのものと所へ戻してあげるよ」それを聞いたみんなは「やったー!」と答える。

そして、みんなは『本人お戻り鳥居ドア』で元の世界へと戻ったのであった。

※ちなみに、本日の総費用は（食品は8割減だが）7700万円弱した。